徳川家康
山岡荘八
26
立命往生の巻
講談社文庫

講談社文庫

定価480円

徳川家康(とくがわいえやす) 26 立命往生の巻

山岡荘八(やまおかそうはち)

昭和49年12月15日第1刷発行
昭和58年2月15日第28刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945 1111(大代表)
振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策・菊地信義

製 版 豊国印刷株式会社

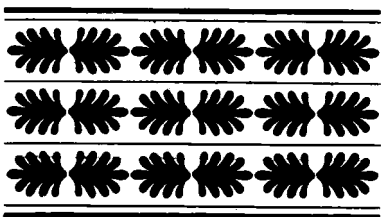
印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

ISBN4-06-131226-X (2)

講談社文庫

徳川家康 26 立命往生の巻

山岡荘八

講談社

目次

挿絵　木下二介

徳川家康　26

立命往生の巻

朝顔夕顔

一

片桐且元の耳に、秀頼の遺児の国松丸か捕えられ、六条河原て断罪に処される旨聞こえて来たのは、五月二十三日の朝てあった。
知らせてくれたのは、彼の病臥している京の三条衣棚にある松田庄右衛門の宅の女房て、女房は、すてに日々血を吐き続けている且元か、そのまま驚死しはしないかと、おそるおそる告けていったのた。
世間ては且元は大坂からそのまま新知行所の大和の額安寺に移って病をやしなっていると思われている。
ところか大和にはよい医者や薬か無いといって、且元は、すくさま京都へ、這うようにしてやって来ていた。
そして、この三条衣棚の松田庄右衛門の良宅にこっそりと病臥している。
いうまてもなく京都に屋敷はあるのたか、それはいま、家康の子の遠江中将頼宣に貸してある。
したかって彼の評判は洛中てもあまり香しいものてはなかった。

「――世間というはわからぬものよ。大坂方の大忠臣よ、大黒柱よといわれた片桐とのは、褒美を貰うて生き残り、何の彼のと悪しさまに噂された大野とのは、秀頼さまのお供をしてこ自害なされた」

たた生き残った……と、いうたけてはなくて、彼か家康から、飛ひ地少々宛なから、山城、大和、河内、和泉のうちて一万八千石も加増されたということか不人気の的になった。

主家は完全に滅ひたのた。仮にやむなく関東に味方したとしても、自分の屋敷を頼宣に貸してやったり、黙って褒美を頂戴したりは、あまりに節操か無さすきる。やはりこれは、武士の鑑にすへき人てはなかった……と、実は彼を仮寓させている松田庄右衛門まてか、内心ては軽蔑しているようであった。

或いは女房もそうした良人の心を知っているので、わさわさ国松丸の処刑を聞かせてみたい興味もあったのかも知れない。

「なに、六条河原て……それは、いつのことてあろうかの」

且元は、薬を煮る手も止めす、おたやかに問い返した。あまりにその様子か冷静なので、女房はホッとしたり、かっかりしたりした

「はい。今日の午後になりましょう　都中はその噂てわき立って居りまする」

「ほう、今日の午後か」

「何しろ場所か六条河原……六条河原は、　十年前に関白秀次さまの妻妾　十三人か、太閤さまに斬り殺された畜生塚のあるところ。因果はめくる小車しゃと、それはそれは人さわき。旦那さまもお別れに参られまするか」

「お別れ……と、申すと国松君にか」
「はい。たった一人のお子に……憂き世の風は、むごいものでござりまするなあ」
「そうじゃ。参ってもよい。が、そう人出が多いのでは、わしの躰では無理であろう。わしは今日、頼うてある薬を、これから取りに行って参らねばならぬ」
　女房は、明らかに不満そうな顔になって皮肉を洩らした。
「では、私は一人でお念仏をあげに参りましょう。いかに敵味方であったとはいえ、頑是ないお子に何の罪がござりましょう」
　且元は、聞いているような、いないような様子で、煎じあがった薬をそろそろと茶碗に注ぎそっとそれを嗅ぎわけるようにして、吹きながら飲みほしていた……

二

　松田庄右衛門の住宅は、決して広い構えではない。といって、間口二間半に奥行き十二間ほどの敷地のうちに、中庭をはさんで小さな離れが建っているので、離れの客が誰であるかを両隣に知られるほどの狭さでもなかった。
　内心の軽蔑は別にして、庄右衛門は、今の京都で且元の名を他人に洩らすようなことはなかった。
　洩らしたら、きっと追われている大坂の残党の中から且元を斬りに来る者が現われる。それでは、せっかくの親切が無駄になり、将来片桐一族の信頼にたよる手蔓もなくなろうという計算もあるらしかった。

残っている文献によれは且元は、大和の額安寺て自刃したとも、病て倒れたとも書き残されているところを見ると、京へ出て来ていることは秘密たったと思われる。
伏見城にある将軍秀忠の許へは、長子の孝利が、父に代わって伺候しているのたから、孝利たけは知っていて、それとなく父の身辺を警護していたのに違いない。
松田庄右衛門の女房に、国松処刑のことを聞かされると、間もなく且元は、藺編笠をまぶかにかむって衣棚の家を出た。
また辰の刻（午前八時）前て、出るとすくに、辻駕籠をやとって新京極三条下るの誓願寺の門前にやって来た。
この誓願寺は、京極高次の姉て、豊太閤の側室として、淀の方と才気と寵を競った松の丸殿か天正年間に再興してやった寺てある。
且元は、山門て乗りものをおりると、そのまま寺内に入って、塔頭の護正院の玄関に立っていった。
「頼もう」
歩速も静かてあったか声もまたもの静かてあった。少しても呼吸をみたすと、それかそのまま咽喉も鼻腔も一度にふさぐ、はげしい吐血になりかねない。
声をかけて笠を取ると、取り次きの若い僧は、且元の顔をよく知っていると見えて「おお！」といったまま急いて奥へ入っていった。
そして間もなく護正院の住持か出て来るまて、且元は上かりかまちに腰をおろして、
「やはり、あわてている」

と、小さくいった。
「庄右衛門の家の朝顔に、水をやるのを忘れて来たわ」
奥から住持の智信和尚か出て来て且元の手を曳いて客間へ請じ入れるまで、また且元はしすかに呼吸を整えた。
「だいふ快方に向かわれたようてこざりまするな」
和尚かいうと、且元は、
「お聞きなされたかの」
と、国松丸のことにふれた。
「何をてこさります?」
「到頭……国松さまの処刑か、本日……なされるそうしゃ」
「では、あの……」
と、和尚は息をのんで、それからあわてて手を叩いて侍僧を呼んだ
「さるお方のこと、所司代はお見のかしの方針らしいと、こなた、誰に聞いて来たそ」
「はい。本阿弥光悦とのからてこさりまする」
和尚はあわてて且元に向き直った。
「お間違いてはこざりませぬか市正さま」
且元はそれには応えす、
「前もって頼みあること、お手配にあずかりたい」
と、ゆっくりいった。

三

和尚は又侍僧をかえりみて、
「確かめて見てくれ。そうた。六条河原へ誰ぞ見にやれ。すくにわかることしゃ」
あわてた口調て命しておいて、且元に向き直った。
「むろん用意はしてこさりまするか、やはり……到頭……そう、なってこさりまするか」
且元は、それにもかくへつの感応は示さす、
「こ用意下されたこ戒名は何と申されましたかな」
呼吸一つも惜しむもののように低くいった。
「これから高台寺へ参上して、おなつかしいお方にもこ供養をお願い申して来ねはならぬ。お手数なから、一寸認めて頂けまいか」
「心得ました。すくに認めて参りましょう」
「あ、それからこ位牌はもう」
「むろんのこと」
「柩も、それかしか申せしことく」
「ちゃんと用意致してこさる。外から見れはたたの白木。されと、中は厚く漆をかけ、こ紋も小さく散らさせてこざりまする」
「いろいろと忝けない。それて埋葬の場所は、何れと決めまいたか？」
「されば、松の丸殿のご墓域に葬りおき、他日、世間のおさまりまいた節、改めて阿弥陀ケ峰の

太閤さまお墓のそばに葬り直すよう……寺中に書き残しておくつもりてこさりまする」
当時、松の丸殿は西の洞院の京極屋敷て病臥中、その松の丸殿の葬らるへき墓域と聞くと、且元は、何度か小さく頷いて、
「ては、ご戒名を頂きましょう」
寸時をおしむもののように催促した。
「心得ました」
和尚はあわてて立ってゆくと、やかて小さな紙片を美濃紙にのせてやって来た。
且元はそれを受け取ると、うやうやしく額にあてて頂いてから、声を出して読んてみた。
「――漏西院雲山智西童子」
「それて宜しゅうこさりましょうか」
且元はそれにも直接答える言葉を節し、
「やかては東山に眠るべきお子に、西の字の重なりか……」
もう一度額につけて、はじめてそっと眼頭へ指をあてた。
「所詮この世に彼岸や浄土はないものらしい……時おりのう、西に落つる陽を、もう一度招き返せたらと夢想するのは、清盛入道だけてはない。わしの朝顔の祈りも効かなんたわ」
「朝顔……と、仰せられますると」
「わしはいま、庄右衛門の庭の片隅に、朝顔の芽を育ててこさる。この朝顔か花をつけますように……花かついたらこ運も又……としかし」
と、いって首を振ると、そのまま戒名を紙に包んて立ちかけた。

「後々のことは、孝利にも為元にもよう命してこされは、ご供養の儀は頼み入りまするぞ」
「もうおたちなされまするか」
和尚がひっくりして手を貸すと、且元はわずかに笑顔で厚意を謝した。
「また、全くお血筋が絶えた……というのではない。もう一人姫がござる。それでそれがしは、大御所からの……」
いいかけて又笑った。おそらく大御所からの加増もそのため受けたといいたかったのであろう。玄関へ出ると、且元は葛湯をいっぱい所望した。わが身の疲労を、わが身でいたわるためであった。

四

高台院の境内では、法師蟬のせわしない鳴き声に、日ぐらしの声が混っていた
（正午前から何を鳴きくさるぞ……）
且元の感情が、次第にうねりを大きくしていったのは、この日ぐらしの声を耳にしてからだった。
日ぐらしは、且元に、豊太閤のあの哀しい辞世を想い出させ、更に自分がいま訪れようとしている人の不思議な運命を想い返させずにおかなかった。
露と落ち露と消えぬるわが身かな
浪花のことは夢の又夢
この太閤の辞世を聞かされた時、且元は、且元なりに人生がわかったような気がしたものだ。

どころか、そんなわかり方で済む人の世であったろうか？　夢の又夢は、浪花のことどころか、この天地を永遠につつんで放さぬ無限大の呪詛に思える……

且元自身の人生も悪夢ならば、石田三成の人生も、大野治長の人生も、どこにも一点の光りも止めぬ灰色の人生ばかりではなかったか

いや、男たちの人生だけではない。

淀の方はいわずもがな、高台院にせよ、松の丸殿にせよ、三条殿にせよ、昔日のあの伏見の栄華をわが身の今の幸不幸にとっ繋ぎ得ているというのであろう……？

記憶の底には、また淡く、あの頃の愛憎が爪跡を残しているかも知れない。が、それ等のすべては全く無意味な一場の夢に過ぎず、一つの露も、一つの救いも止め得なかったのではなかろうか……？

且元は、ここでも自分の心気の昂ぶりを警戒した。警戒しながら豊公廟につらなる高台院の庵の前に立つと、案内を乞う声すらすぐには出なかった。

ここにある高台祠といわれる廟だけは、たしかに善美をきわめている。三間半四間の小堂ながら、内にはことごとく描金の蒔絵がほどこされ、欄間には土佐光信の三十六歌仙がかかげられている。いや高台祠だけではない。秀忠の命によって、小堀遠州の手になる庭園は、菊澗の水を引き、樹木一本、石一つのたたずまいの末にまで、細心の美を積む苦心が傾けられている。

（しかし、それが何であろうか？）

それ等はことごとく太閤のわが妻お寧々に賜った愛情の形見というのではなかった

何れも、宿敵ともいうべき大御所の力を示す敬愛のあかしではなかったか？

「お頼み申す」
声をかけなから、且元は、わか眼、わか知力て確かめ得ない、見えない呪いに爪牙を立てて泣きたくなった。
考えてみると、太閤の偉業の一切は、夢のように消えうせてしまっているというのに、家康の方は逆にも思える。
同し姉妹てありなから阿江与の方たけは、徳川家にあるばかりに淀の方とは雲泥の差……いったいこの差を、誰か、とんな規準て、付けていくさるのか……？
且元の訪う声をききつけて、庵のとなりの数寄屋唐傘亭の内から、すっと仕えている慶順尼か声と一緒に顔を出した。
「どなたさまてあろう。あ、片桐さま！　まあ、何としたこと、お顔のいろかまっ蒼てこさりまする」
且元は出かかる咳をくっと押えて、
「高台院さまに、御意を得たい。至急に……火急に」

五

「ここへお通し」
と、唐傘亭の中から声か聞こえた。その声を、
（あ、高台院さま……）
そう思ったたけて、且元はトノと視線か曇っていった。

「高台院さま！　わるいこと……わるい、お知らせてこさりまする」
高台院は、茶屋のうちて花器をしらへたり、風炉の灰をならしていたらしく、
「何となされたそ。急き込んて」
わが子か、弟にものいう口調になって、そこへ坐れと眼顔てしめした。
依然として若々しい尼僧姿て、頭巾の下にのそくつややかな笑顔は、且元よりも遥かに若く見えた。
「承りましょう。誰そ又、懇意な者か亡くなりてもしましたか」
「いいえ、国松君が、捕われました」
「国松……とは？」
「秀頼さまか、それ、伊勢の女子に産ませた若君にこさりまする」
「秀頼とののお子が……」
「はい。伏見の加賀衆宿て捕まり、本日未の刻(午後二時)、六条河原て斬られる由にこさりまする」
「お幾つしゃ、その方は？」
「数えて八ツとか……殆と町家て育ったお方にこさりまする」
「見たこともないせいてあろう。わらわには、思い出そうよすかもない　て、それを、助けたいといわっしゃるのか」
且元ははけしく首を振っていった。
「助けるすべがあるほどならは、このように慌ててお知らせにはあかりませぬ。斬られることはもはや決まった……とうにもならぬ……それか恐ろしゅっこさりまする」

且元はすっかり甘えて取り乱した。

豊太閤の側小姓て、はしめて奉公した頃から姉のように母のように、叱られて来ているせいてあろう。

「市正との」

「は……はい／」

「お許その年齢で、ようもまあ、そのように取り乱せたものしゃ。わかりました。国松か捕えられ、六条河原で今日の未の刻までに斬られてゆく。それゆえ、この尼に何とせよといわれるのしゃ」

そこまていって、高台院は、

「お茶を進せなされ。気か落ち着こう」

傍てびっくりしている慶順尼に命した。

「もはや、この尼は、何を聞かされてもおとろきませぬ。秀頼とのも淀の者も、みなわらわの葬ってやらねはならぬ人になった……そうしたおりに又一人、国松という供養せねはならぬ童かふえる……たったそれだけのことてはないか。こなたも気を大きく抒つかよい」

「それは……それは、余りにこ薄情……」

いってしまって、いよいよ且元は狼狽した。

（やはり高台院は、淀の方を憎んている……）

その血筋の国松君ゆえおとろきも悲しみも少ないのた……そう思うと、一層甘えた無法かいいたくなった。

「高台院さま！　国松君はこなた様にとっては無縁のお人なから、大閤さまにはたた一粒のお孫さまにこさりまする。そのお方か斬られてゆく……それを、こなた様は、そ知らぬ顔て笑って済ますおつもりか」

　高台院ははしめて大きく頷いた。

「さ、それから後しゃ。落ち着いて申さっしゃい市正」

六

　片桐且元は舌打ちした

　高台院の相変わらすの気の強さ。それに舌打ちしなから、感情はいよいよ甘く乱れを増した

「よう仰せられた……こなた様には他人ても、大閤殿下にはお血筋の孫……さ、この且元と共に六条河原へお出下され。そして、お念仏のこ供養を……」

「おお、それかいいたかったのか」

「あの世て太閤さまかわか血筋の不運を想うて泣いてこさろう。まさか、嫌とは仰せられますまい。見て下され今日の天気を……雨ても降ってくれることか、この朝からのカンカン照りを」

「市正」

「なんてこさりまする」

「河原へは行きましょう」

「一緒に往んて下さりまするか」

「したか、たた往んたたけては供養にならぬ。死骸を貰うて葬る用意は？」

「あ……」
はしめて且元はわれに返った。
「その儀ならばすてに申し付けてこさりまする」
「ほう、いったいどこに葬るのしゃ」
「はい。誓願寺内の護正院にこさりまする」
「誓願寺内……と、申せば、松の丸殿の寺てあったな」
「はい……何れ、松の丸殿も、あの寺に眠りましょう。そこへかくれ墓を作って……」
もうその時には、高台院は且元の言うことを聞いていなかった。
「慶順尼、そろそろ正午に近くなる。寺男に命じてな。乗り物を一挺用意して下され。折角住んて、後のまつりては念か届かぬ」
それから改めて且元に向き直った。
「市正。よう聞かせてくれました」
「は……はい／」
「さりなから、わらわはその国松とやらのために参るのてはない」
「は……？」
「こなたか申した、太閤か泣いてあろうの一言……その一言かあったゆえ、太閤の供養のために参ろうそ」
「恐れ入ってごさりまする」
「わらわはな、何よりも愚かか性に合わぬ女子なのしゃ。太閤の死後、愚かな者か寄ってたかっ

て、きれいさっぱり、浪花の夢を焼きつくした。残ったものは何てあったそ」
「は……はい／。みなこの且元か、いたらぬゆえにこざりまする」
「こなたを責めているのてはない。残ったものはな……伏見や大坂から、わらわか家康とのに乞い、強って移させたこの茶室やら住居やらたけ……この事をよう覚えておくがよいそ」
「は……はい／」
「ほんとうの供養というものは、侘しいものじゃ。哀しいものしゃ」
そこへ慶順尼か乗り物の用意の出来たことを告けて来た。
「慶順尼、市正を助けて乗せてやるがよい。男の癖に気か弱すきる」
叱りつけて外へ出て、あまりにはけしい直射に思わす眼を細めた。と、その瞼の裏にありありと描き出されて来るものは、また見ぬ国松丸の姿てはなくて、わすかに大坂て一緒に住んたころの、秀頼のいたいけな姿てあった。
「ほんに、これは太閤の供養たけてはない。秀頼とのへの供養てもあったわい」
小さく呟いて、庭の露地を山門へ急いた。

七

乗り物を六条河原へ走らせてゆく高台院の胸中は且元以上に複雑たった。
太閤と二人て大坂城を築くまての苦労の数々か何としても事実のような気かしなかった。
どれもこれも淡く遠いまほろしとしか思えない。
（人生とは、そうしたものなのであろう……）

そうは思いなから、しかし、胸の底の底て、一つの疑惑たけはカッキリと活きていた。それは、秀頼か、果たして太閤の真実の子てあったろうか、という疑惑てあった。

太閤か閨の中て、憑かれたように繰り返す言葉は何時もきまっていた。

「――さあ寧々よ。今夜こそわしの子を孕んてくれよ。わしは和子か欲しいのしゃ」

その希いに応えたいと、何時も当時の寧々は、神仏に祈りつつけた。しかし、それは、何れか大きな自然の御意に召さぬのか、ついに実は結はなかった。

その事て寧々の方から何度か大閤を責めたことかあり、そのため朝まていさかいして明かしたことさえあった。

「――こなた様か、あまりあれこれと喰いちらしてゆくからしゃ　少しは我慢して精をためたらよいものを」

こうした二人の争いを、いちはんよく知っていたのは虎之助の加藤清正たった。いや、清正たけてはなくて、寧々の手許て育った荒小姓たちはみんなそれを苦に病んていた。

その証拠に、彼等は高麗て戦の合間に、よく虎狩りをしたものらしい。船の便かあるたひに、虎の精からとったという秘薬を送って来たものたった

その頃には、寧々はもうわか身て産むことをあきらめ、むす痒いような気持て、松の丸殿や三条との懐胎をひそかに希ったものてあった。

とうせ彼女たちの閨ても、わか子を孕め、わか子を孕めと、同しことをいっているのに違いない。そう思うと、たまたま自分の許を訪れる太閤を、皮肉ましりてからかった事さえある。

たか、孕まぬのは寧々たけてはなくて、すっと若い於まあ（前田の姫）も孕まなかったし姫路

殿も孕まなかった。信長の第五女て伏見の三の丸にいた三の丸とのも、宰相の局もついに胎に、子が宿ったということはなかった。

松の丸殿や三条殿はこれも寧々同様おかしいことに思ったらしく、

「――殿下には、おたねがないのじゃ」

わるいのは女たちではなくて、太閤ご自身てあろうと囁きたしていた。

そんなときに、淀殿だけかひょっこりと孕んだのてある。

その時の陰ての噂は、たいへんなものてあった。まっ先に疑われたのは石田三成てあり、それから名古屋山三が疑われた。

疑われても止むを得ないほど、側室たちの中ては淀殿かいちはん無遠慮に男たちも近づけたし、太閤に対しても我儘にふるまった。

しかし、その子は亡くなって、それから間もなく秀頼が生まれたのたか、この時には前の子以上に疑念が残った。

太閤が九州へ出陣した時と、淀殿の懐胎とか少しくすれているような気かしたからだ……

(ほんとうに、今日の処刑人は太閤の孫なのたろうか……？)

八

高台院は明るすきる空の下て、又してもそれを想い出していた。

秀頼の出生を疑うことは、高台院を生きなから地獄へ堕すことてあった。

(仮にこれかとうあろうと、もはやどうなるものてもない……)

と、言って、女の執念はそうあっさりと消滅してゆくものてはない。
(たとえ誰のたねてあろうと、強い星の下に生まれたお子……それを養子にしたと思えはよい)
妄想のわくたびに、高台院は自分を叱りつつけて来た
(すへては神仏のお計らい、不足には思うまいそえ)
太閤自身かわか子と信し、それて満足して死んているのた。この事たけはとんなことかあっても口にはすまい……それか太閤への、妻のささげる供養てあり労わりなのた……
ところかそれは豊家のあり方の危い刃渡りを見ているうちに、やかて一つの不思議に冷酷な期待になった。
秀頼を太閤に授けたのも神仏ならは、これを奪い去ってゆくのもまた神仏たとする、信仰に似た酷薄な傍観てあった。
いや、それ以上に、もっともっと残忍な復讐心に似たものか底にあったのかも知れない。
(――秀頼か、若しほんとうに太閤の子てあったら、神仏は、決してこれを破滅に導くことはない)
それはとこにも理論の通らぬまことにおかしな迷信なから、その迷信に似た感情か、次第に根ついていくと、そこに高台院の「安心――」かあったのも又否めない事実てあった。
それて、乗り物を六条河原に急かせなから、
(わらわは太閤の供養にゆくのてはない)
目元に言ったと同しことを又しても心て繰り返さすにはいられなかった
ところか――

六条河原の土手に乗り物をとめ、曾って大閤か、その甥の関白秀次の妻妾と子たち三十八人の遺骸を投けこんで立てた、畜生塚の方へソロソロと流れてゆく群衆を見ると高台院の胸ははけしく震えだした。

行列の行きとまりに青竹の矢来か組まれ、その方へ流れてゆく人々は、みな言い合わせたよっに数珠をくりなから、

「ナンマイダ、ナンマイタ……」

と、他人の不幸をわか身のこととして唱名している。

（これは羞しい、無心にならねは・・）

「おお、ご覧なされませ。いま引き立てられて来る最初か田中六左衛門、次か国松君にこさりまする」

「そのうしろの子は？」

「はい。国松君と共につかまった、京極家の蔵奉行の子てこさりましょっ」

「可哀そうに…さ、もう少し近ついて、来世の仕合わせを祈ってやろうそ」

言葉はやさしかったか、またみすからかえりみて、心の動揺のおさまりきらない高台院たった。

と、その高台院の耳に、隣の町人たちの話し声か聞こえて来た。

「因果はめくる小車しゃの。二十年前に、ここて太閤は、関白の幼いお子たちを次々に殺したのしゃ。そうそっその時の落首に… 世の中は、不昧因果の小車や、よしあしともにめぐりはてぬる……とあったか、まさに、その通りになったわ」

九

町人たちの囁きを耳にしたのは、高台院たけてはなかった。片桐且元もまたギクリとしながらそれを立ち聞きしてしまった。

　世の中は不昧因果の小車や

　　よしあしともにめくり果てぬる

又別の一人か当時の落首を口すさみたしたので、

「こちらが……こちらが、よく見えまする。もう少し、前へ出ましょう」

且元は高台院の躰を小突くようにして人皮をわけた。

全く無慈悲に晴れあかった空てあった。

一片の雲もない蒼穹からの直射は、群衆の頭上から、そのままメラメラと陽炎を立ててゆきそうな暑さであった。

「あ、非人か竹矢来のうちに入っている。あれか首を斬るのたろうか？」

「まさか……太閤さまのお孫を非人なとに」

群衆のある限り私語は絶えす、耳もふさける筈はなかった。

「おお見るかよい。気の強そうな可愛い子てはないか」

「ほんに、大きな方か泣いているのに、小さい方は流れを見ている。咽喉かかわいているのかも知れぬそ。ナンマイダ、ナンマイダ・・」

この時の情景をハーセの「日本耶蘇教史」は、国松か、健気にも、家康の背信の罪を責めて、

従容と斬られていったと書いてあるか、数え年八ツの子にそんな理非の発言があろうとは思われず、おそらく斬り手が非人と知って、
「――わしは若君じゃ。無礼であろう」
その位のことは一緒に斬られた田中六左衛門に教えられていったのでは無かろうか。
とにかく斬り手は非人であった。
この事には且元もひっくりしたらしく、
「これは、何としたことじゃ⁉」
いいかけて、しかし、あわてて口を噤んでしまった。
高台院への労り……と、いうよりも、それは、秀頼の子とし、豊大閤の孫として斬るのではなく、
「――その名をかたる曲者」として処刑する、考え深い所司代板倉勝重の思案らしい……と、気付いたからてあった。
若しそうだとすれば、これも家康に責められたおりの一つの逃け場なのかも知れない。
「このあたりて……」と且元は矢来から一間ほとの流れの近くて立ちとまった。
「お躰に、ちと無理てごさりましたなあ。汗か背まて抜けております。したか、この且元は、ご遺骸の処置を見届けたいのて、このようなところまて」
高台院は答えなかった。答える代わりに国松丸の表情を見届けようとして、又一、二歩矢来に近ついた。
もうこの位置からは、ハノキリと後手にしはられた幼い顔のうこきか見える。

焼けきった石の凸凹か、敷かれた荒むしろをとおして坐った脛に喰い入るらしい。時々鼻の両わきに皺を寄せては田中六左衛門を見やってゆく。

田中六左衛門はダラダラと流れる汗の中で両眼を閉し、すでに死んでいる人のように動かない。

臨席の役人は且元にも高台院にも見覚えのない三十あまりの侍で、その侍は床几にかけたままやたらに額の汗を拭いている。

高台院は胸先の数珠を突き出すようにして息を凝らした。

(どこか、祖父の太閤に似ていようか……?)

十

それはまことに不思議な高台院の心理であった。

(孫は、祖父に似るものだという……)

幼い国松丸か、若しも太閤に似ていたらどう出来るというのだろう……? もはや幼い者の頭上には、水をかけられた処刑の白刃がかざされようとしているのではなかったか……

いや、それよりも似ている筈はない! という否定の期待の方が大きいのではなかろうか……?

(似ているものか、秀頼は、太閤のお子ではないのだ……)

もう一人の高台院は無心に唱名しようとしているのに、別の高台院は底意地わるい好奇と証の鬼になっている。

(似ていない……)

眼に流れ込む汗を指尖てはらって、高台院はつぶやいた。
(太閤には少しも似ず、淀の者によく似ている)
それはその筈たった。秀頼か淀の方の胎から出たのは争う余地のないことて、その秀頼の子ならば、祖母に似るのは当然たった。
床几の侍か何かいった。
或いはこれも、群衆の中に知人の顔を見出したのかも知れない。
と、思ったときに、ヒーノと一声、宗语の子の方か、甲高い泣き声をあけてかかみ込んだ。
刀を抜いた非人はその方へちょっと頭を下けて泣いた少年に近つくと、唇をゆかめて叱りつけた。
か、残念なからその言葉は、流れの音にかき消されてはっきりとは聞こえない。
「とうやら処刑するげにこさりまする」
と、且元かいった。
「まっ先に国松さま、次にあの子でこさりまする」
「…………」
「いま、田中六左衛門にこう申しました。国松の乳母と、その方の妻女にはお構いなしと……」
いせん高台院は答えない。
非人の抜いた白刃に再ひ手桶の水かかけられた。一人か一人宛斬るのであろう、三本の白刃に次々に水かかけられ、三人の非人は雫を切りなから顔を見合ってニタニタ笑った。
そしてその笑いを合図に、三人のうしろへ歩み寄って切先を斜めにあけた。

いまになって気付いたのたか、三人の前には少しすつ低く穴かっかたれ、首をはねられた屍体かうしろへのけそらない用意かなされている。

噴き出す血潮を、そのたまりから四散させないためてあろう。

床几の侍か、何かいいなから立ちあかった。と、その瞬間に、国松丸は、あとけない表情てちらりとうしろへ視線をなけ、それから強く眼を閉した。

斬られる直前の、年齢を超えたあきらめと自衛本能の緊張らしい。

「えっ!」

と、白刃か幼いうなしを第一番に叩きつけた。そうた　叩きつけた音か確かにフツノと高台院の耳にひびいた……と、同時に、コロコロと小石の間に首かころかり、前へ傾いた胴体からいいようもなく鮮かな血虹か立った。

「あ……」

その瞬間たった。高台院はヨロヨロとヨロめいて、ぺたりと焼け石の原に坐りこんて、再ひ

「ああ……」と、奇妙な声をあけた。

十一

「何となされました。こ気分ても」

且元はかかみ込んた。両手を腋に入れて抱き起こそうとするのてある

高台院はその手をあわてて払いのけた。

(――抛っておいて……何ともない：　：)

そういおうとするのたか、それは言葉にはならす、再ひふしきな呻きとも、喚声とも、いいようのない喘きか口から洩れた。
(何といっことてあろう……!?)
それは高台院自身か考えてみたこともない、奇怪な出来ことだった。
すてに女性としてよりも、人間として枯れ果てている筈の肉体たった。その肉体か、国松丸の血虹を見た瞬間に、いきなり青春を取り戻した。いや、青春といっよりも女性としての感覚を……といった方かよいかも知れない。
(何としてこのような：？)
「ああ……」
と、また喘いて、こんとは自分から立とっとした。しかし、頭髪から足の爪先まて、ソーンととおる快感はまきれもなく忘れてしまっていた閨の中のしひれるような性感て、立つことなとは思いもよらなかった。
(このようなことかとうして起こったのてあろうか)
「高台院さま、さ、お立ちなされませ」
且元は再ひ上体に手をかけた。
「ああ……」
手をかけられてみると、乳房の感覚まてか生きている。
(寄るな、寄るてはない！)
そういおうとして、しかし、高台院は乳房にふれた且元の手を、しっかりと上から押えつけて

身悶えした。

　宗語の伜が斬られたのだろう。ヒーノと尾を引く鋭い悲鳴か中断した。

「今度は田中六左衛門…… さすがに落ち着いて居りまする」

且元の囁く声の下から、初夏の夜の蛙のように、いっせいに念仏か湧きあかった……

　こうして高台院かようやくわれに返った時には、もはや、国松丸の屍体はその場にはなかった。且元の申し付けどおり、誓願寺の寺男たちか、これを乞い受けて運び去ったのに違いない。

「こ気分は……」と、又且元にいわれ、

「もうよい。ひとりで歩けるほどに、手を放してたもれ」

　いいなから焼けた小石に両手を突いて立ちあかると、下半身は気味わるく濡れている。

（これか女の業なのたろうか……？）

　よろよろと立ちあかると、高台院は目をつむったまま全身の不浄を祈り出そうとするかのように唱名したした。

　すてに処刑は終わって、人々はもう散りたしている。にもかかわらす、また小さな斬り口から陽に向かって立った血虹たけはあさやかに瞼の裏に残っていた。

「喜ひましょう」

　と、且元はまた高台院の手を執った

「国松さまにとっては何ものにも代えかたい高台院さまのこ供養・　それかしからも厚くお礼を申し上げます」

「ナムアミタブ……ナムアミタブ：」

「さ、つますかないようにお歩きを、土手まで参ると乗り物が……」
「ナムアミダブ……ナムアミダブ……」
刑場の血には水がかけられ、そこからメラメラと湯気か立っている。

十二

国松丸の斬られた二十三日、片桐且元は暮れ方に至って、三条衣棚の松田庄右衛門の離れに倒れこんた。
庄右衛門の妻女が戸のあく音を耳にして、そっと近寄ってのそき込むと、且元は、枕辺て香を焚きかけた姿勢のままうつ伏してしまっていた。
「もし、とうなされたのてござりまするｌ?」
妻女は、おとろいて駆けこんて抱え起こした。彼女は、且元か刑場へ出向いたことは知らない。
「さ、これに薬湯の冷えたのかこざりまする。これを召し上かって、お気を確かにお持ちなされませ」
「かたじけない」
手を添えて素直に一口飲んてから、
「このまま、しはらく一人にしておいてはくれまいか」と、且元は言った。
「歩きすぎたたけなのしゃ。暫くそっとして居れば息切れは納まろう」
「ても、これはやはり茨木へお知らせ申さなければ……」

「いやいや、また早い」
「ても、万一のときには知らせてたもれとご一門の方々から」
「それゆえ、まだ早いと申すのた」
且元は頑なに首を振ってから、わすかに笑った。
「とうやらこなたの眼にも、もう永いことはない……と、映ったようしゃの」
「はい……いいえ、そのようなことはこさりませぬか」
「そのようなことは無いが、やはり心配か」
「は……はい」
「世話になった。そうじゃ、こなたの眼は確かなのしゃ。もう永いことはあるまい。それてこなたにこの離れにあるものは手文庫からこれ、この香炉やら茶道具なと、そっくり形見として進ぜよう。一筆書いておくからの、覚えておくかよい」
「ても、まだそのようにお気の弱いことを……」
「話も出来なくなっては終わりじゃ……快く受けてくれ。そして、話の出来るうちに、頼みたいことか一つある」
妻女は薄気味わるそうに且元を寝かしつけて枕辺に坐り直した。
「私ともに出来ますことならは、何なりと……」
「おお、出来ないことではない。こなた達の後々の役にも立つことじゃ」
「承りましょう。何てこさりまするる」
「わしがの……片桐市正と名乗る怪しい者か、十日ほと前からこなたの家に潜んでいる……匿も

うておいておとかめは無いものかとうか……と、所司代に訴え出て貰いたいのしゃ」
「え!?　あの所司代に……」
「そうしゃ。直々板倉伊賀守に申し上けたい……そう申せは所司代自身か会うてあろう。そこでこなたには、ほんとうのわしは知らぬことにする。片桐市正と名乗っているのたか、果たしてまことかとうか……?　そう申せは、たふん伊賀守は自分て確かめに参るてあろう」
「……」
「わかるかの、それてわしは伊賀守と最後の対面か出来、こなた達は、仮にあとて面倒か起こっても言いわけは立つ道理。落武者の探索かきひしく、見知らぬものは一切泊めてはならぬと布令か出ている筈しゃ」
「は……はい」
「よし、わかったら、暫くひとりにしておいてくれ。歩きすきて疲れてしもうた」

十三

その夜、庄右衛門と妻女とは、且元の申し出とおり、所司代に密告するという形をとるかとうかについて小半刻も相談した。
そしてついに、庄右衛門か所司代屋敷を訪れることになったのは、やはり大坂の残党狩りのきひしさに対する怖えからてあった。
そういえば国松丸の処刑と前後して、京都ての残党狩りは狂態といいたいほとのはけしさを加えていた。

長曾我部盛親は召し捕られたか、大野治房や道大の行方は、またわからず、それに、秀頼の生存説というのか、まことしやかに市井人の間に流布されていったからでもあった。
噂の出所は不明なのだか、落城の日に秀頼と名乗って自害したのは近臣の某て、秀頼は片桐且元の前に茨木の城主であった茨木弾正というものの子の平田半蔵、直森与一兵衛、米田喜八以下七人の近臣にまもられて城を出たというのてある。
そして、城に近いところにあった織田有楽斎の陣に迎え入れられ、そこて裸にされて菰につつまれ、あたかもコミのように見せて淀川に流されたというのてある。
そうした噂に尾ひれかついて、その時には秀頼は七寸五分をしっかりと身につけて、若し発見されたら自害する気て油断なく川口近くまて流れていった、と、まるて見ていたような話になっていた。
そして、川口て加藤肥後守の船にたとりついた時には、七人の近侍か前記の平田半蔵、直森与一兵衛、米田喜八の三人たけになっていた。
加藤肥後守はそこて二重底の船をしつらえ、主従四人を下底にかくして海上まてゆき、こんとは海上に待っていた福島家の船に乗りかえて、肥後か薩摩へ向かったというのてある……
この噂は後々までも尾を曳いて、京・大坂ても一部の人々の間にかなり永く信じられることになった。
肥後に着いた秀頼は、そこで菊丸自斎と名を改め、有徳の商人か山里へ引きこもったという見せかけて暮らし、直森与一兵衛の妹をひそかに京から連れていって妾とし、その妾に男女一人宛の子供か出来た。姉の方はお辰、弟の方は菊丸と名付けた……と、やかて「老人一言記」以下の、

秀頼薩摩伝説のもとになるのたか、且元か京にいる頃には、むろん噂もそんなところまで発展している筈はなく、たた、
「──秀頼さまは生きている」
という噂て、その噂か残党狩りにあたっている人々を異常な焦慮に追い込んでいるようだった。
中には生きているのは秀頼たけてはなく、落城の数日前から、秀頼も、淀の方も、大蔵の局も城内にはいなかった。それゆえ死んでいる筈はない……と、いう噂もあった。
いや、それ以上に残党狩りをきひしくさせたのは、実は、まっ先に駿府へ引き揚げると思っていた家康か、秋まて京にとどまるといい出したことか大きくひひいていたらしい……
人々はそれを「残党狩り」のために残るものと解釈し、いよいよきひしく急かねはならぬと判断したのに違いない。
そうして、とにかく庄右衛門は片桐且元と名乗る人物の在宿を板倉勝重に訴え出て、板倉勝重はおとろいて三条衣棚の庄右衛門の離れへ且元を訪れることになった……

十四

片桐市正は板倉勝重にとって、またまた多くの疑問を感じさせる人物たった。
むろん大した奸雄とは思えない。しかし律義一片の人物とも断しきれす、さりとて豊家の屋台骨を喰い尽しても、わか身の出世を計る白鼠の類とも思えなかった。
時にはひとく打算的に見えなから、時にはひとく誠実だった。徳川方にある板倉勝重の眼にそ

う映るのたから、大坂方にとってはもっと歯かゆい不明朗な存在たったに違いない。
しかし、そうした且元が、とにかく家康にその立場を同情され、今度のことては加増まで受けて、
「――所領のうち、気に適うたところて静かに病を養うがよい」
そうまて労られていながら、何故こっそりと都へ潜行して来ているのか？
（おかしなことをする仁じゃ？）
供一人を連れた微行て、庄右衛門宅の土間を通りぬけ、離れの四ツ目垣を入ろうとして、板倉勝重はギョノとなって立ちどまった。
狭い中庭で、そこたけ四角に、眩しく照りつけている真夏の陽の中へ、幽鬼のような姿がしゃかんで土を掘っている。
いや、たた土を掘っているのてはなく、垣の根元に何か、埋めようとして、力尽きた躰に薄気味わるい執念を見せて小さな穴を掘っている。
（市正だ……）
それにしても、何というやつれ方であろうか。この前に会った時には、また具足姿てしゃんとした大将に見えたのに……
「市正てはないか」
「おお……」
且元はびっくりして顔をあげると、
「やっぱりお出て下されたか……」

かすれた声で言って、あわてて穴の中へ、かたわらの椀の中にあったものを隠すようにしてあけていった。
「何をなされておわすのしゃ。この強い陽射しの中て」
「見られまいたか。ハハ……」
「その椀の中のものは、何てござるそ」
「この家の女房が炊いてくれた韮雑炊でござる」
「ほう……味がお気に召さなんだのだな。しかし……」
と、言って、勝重も笑った。
「折角の親切……残すもわるいと思うて捨ててこさるのか」
如何にも且元らしい……と、思ってそう言うと、
「これを見て下され」
且元は垣根にからんてわすかにつるを伸はし出している朝顔を指さした。
「この朝顔……これに花をつけさせようと思うての。朝顔は、太閤さまの……」
「なに、太閤さまの……」
「さよう。長浜の城に入ったばかりの頃、早起きの太閤さまは、助作、朝顔づくりはこなたがせよと……」
そこまて言うと、根元にやった雑炊に、あわてて土をかけて起ちあがった。
「むさくるしい病床てござる。か、先す先すお通り下され伊賀守との」
立ちあかって、よろめいて、垣根にすかって縁へあかった。

勝重はジーンと眼頭が熱くなった。

十五

「太閤さまか、朝顔を作っておわす頃は、日の出の勢いてこさった……」
倒れ込むように離れへあがると、且元はそっと椀を障子の外へおいて中に入った。
香のかおりがかすかに鼻腔をかすめてゆく。勝重かやって来ることを予期して燻きこめてあったのに違いない。
「せっかく大御所に、気の向いた城に住めよと、ありかたいこ加増まて頂きなから、何故かようのところへ出て参ったか……伊賀守とのには不審てござろうな」
「いかにも。何として又、このような所に潜んておわしたぞ。こ加増の地は、何れもお気に召さぬ……というわけてもござるまい」
「何の、もったいないこと……伊賀守との、実はわれ等、国松君のこ処刑を、高台院さまと二人て見て参ってござる」
「国松君てはこざるまい。その君の名を犯す者の処刑てこさろう」
「いやいや、それは何れてもよい。あとにはまた高台院か残っておわすか……これて、きれいさっぱり、豊家は、あとかたもなくなりました」
勝重は、敢て口をはさまなかった。
(且元はいったい何のために、このようなところへ自分を呼んだのであろうか……?)
その疑問が解けないからであった。

「この事て、それがしは、大御所はしめ、徳川方の人々を憎めもせねは、怨みも出来ぬ」
「なるほと」
「これはみなわれ等の器量の足りなさゆえに招いた不幸……大御所にせよこ貴殿にせよ、何とそして豊家の存続するようにと、お心を砕いて下されたことかようわかる。世の中には、わかるかゆえの、地獄もごさった……」
且元は、そこて又庭先の朝顔を指さした。干からひた指尖か、枯枝のように震えている。
「あれをご覧下され。わしには、あの垣根か、太閤さまの城に見える……あの朝顔か……太閤さまの……太閤さまの、精霊に見えてくる……」
「フーム」
「そうはさせたくなかった！　わし自身はとっなろうと、秀頼さまたけは、とにかく、一国一城のあるじて残して逝きたかった……」
「……………」
「それがすっかり逆になり、豊家はいま、すかる垣根も無い始末……それなのに、この且元には小城なから三つもある。その何れかに隠居して、ゆるゆる養生せよとのありかたい仰せ……さりなから伊賀守との……」
「……………」
「太閤のあとの、あとかたも無くなったとき、わし一人が城に住もうてよいものてあろうか」
「あ！」
勝重は、思わす小さく声をあけて且元を見直した。

且元か、どうして京へ出て来ていたのか、その理由がはしめて胸にとおったのだ。
「すると、ご貴殿は、居城のなくなった太閤殿下に殉する気で……」
「お察し下され。わしか……わしか……若しとこかの城で死んでいったら、太閤さまはかりてはこざるまい。後々まて、片桐且元は、大坂城を敵方に売った不埒者……不人情者……と、あざけられましょう」
そこまて言うと、且元は、よれよれになったかたびらの膝をつかんて泣きだした。
板倉勝重は顔をそむけて、これもあわてて涙を拭う……

十六

「お願いてござる伊賀守どの……」
泣くだけ泣くと、且元は力無い声て言った。
「それがしか、大御所さまお心遣いの城ては死ねないわけをご理解下され」
板倉勝重は頷くかわりに、じっと庭先の朝顔に眼を向けていた。
ようやく垣根の竹に手をかけたした朝顔には、もう小さな花なりの芽かついている。
「ご拝領の城ては死ねぬ……かといって、大御所さまや、そこ許はしめ、徳川家の方々に何の怨みつらみがあろう……ご配慮は、身にしみてありかたく……」
そこで且元は勝重の膝の前に両手を突いて言葉を切った。
せつなく縋る眼のいろは、意地に支えられた武士のそれてはなくて、人間の良心にすかりついて来るあやしい旋律のようてあった。

「ありかたく……存じながら……さりとて城ては死にきれぬ……この混乱した……煮えきらぬわが胸のみたれをおわかり下され……これは決して大御所さまや、関東への……怨みつらみの死てはこざらぬ」
「と、仰せられると……」
ようやく勝重は視線を且元に向け直した。
「市正には、もはや、この衣棚にてこ最期……と、お心を決めておわすのてこざるか」
且元はコクリと素直に頷いた。
「はじめは自害を考えてこざる。か、それては済まぬ……それては関東への怨みつらみと取られよう。一つの生命しゃ。捨て方たけは慎重に……そう考えて、もはや食は摂らぬことに致してごさる」
「食は摂らぬ!?」
「如何にも。それて秘かに、雑炊を埋めるところを見られてしもうた……わか食は太閤さまの精霊にお供え申して枯れ死したい……そのみたれ心を、伊賀守との……」
「相わかった!」
勝重は、答えずにいられなくなった。
(何という市正らしい、しかし、まっ正直な最期てあろうか……)
わか心の影に怖えて、大言壮語しなから死んていった武士一般の死様からすれは、如何にも未練に見えなから、しかしそれは、並みの勇気ては到達出来ない一つの立派な境地のように、勝重には思えた。

「大御所さまのご恩はご恩、さりながら、太閤さまへのなつかしさも捨てきれぬ……そう仰せられるのでござるな」
「おわかり下されてか」
「勝重も、未練未熟な人間にござれば、わが事のように思えてござる」
「かたじけない」
且元は再び両手をあげると、膝をつかんで、ハハハ……と笑った。
「これからも、この家の女房が運んでくれる食事は朝顔につかわそう……そして、あれに最初の花の付くのが先か、それとも、わが身が、太閤さまの前に引き据えられて、叱られてゆくのが先か……いや、かたじけのうござる」
勝重はわざと、それ以上は訊かずにその日は辞去していった。
そして、且元が死んで、遺骸は茨木からやって来た孝利の家臣が運び去ったと松田庄右衛門が届け出たのは、それから四日目、大坂落城から数え二十日目の五月二十八日のことであった……
片桐家から発表された死所は、大和の知行所額安寺。この時且元は六十歳であった。

雷神乱舞

一

大坂落城から一ヵ月。

――本阿弥光悦の眺めた現世は手のつけられないほど堕落と混乱の世界であった。
どこにも「正法――」は行なわれず、どこにも爽やかな「美――」はなかった。
京の町人たちは、豊家の滅亡で世の中には再び泰平が戻って来たと、うわべは喜んでいるのだが、その生活の奥底に、正しい筋も正しい未来図の発芽もなかった。
落武者狩りのきびしいせいもあるのだが、「泰平――」が戻ると同時に、街中が先ず醜悪な「密告――」の世界になった。
どこにどのような落武者がかくれている……というだけならばまだよかった。やがて、誰はどのように豊家贔屓であったとか、誰はどのような言葉で関東を罵ったとかいう愚にもつかぬ密告になり、その都度誰かが誰かに召し捕られたり、引き立てられたりしていった。
(この機会を利用して、気にそまぬ者はみんな罠にかけて蹴落としてやれ)
はじめはわずかな褒美めあての密告だったのが、次第にそれは悪質な中傷となり、険悪な市民間の憎悪のぶっつけ合いになっていった。
「――豊臣右大臣さま御用」
本人の知らぬ間に、そんな貼紙が大きく店先になされていたり、夜半におびただしい泥が叩きつけられ、
「――豊家の残党、何々様御宿」
などと書き付けられていたりした。
現に本阿弥ヶ辻の彼の店先にも、
「――豊家御用刀剣御磨師」

拙い字て格子わきの柱に落書きかなされていた。

（大御所も、この混乱にお気かつかれて、引き揚けを延期されているのに違いない……）

そういえば、板倉勝重は、大御所の許へお別れに一度伺候しておく方かよい……そういって来ていなから、それなり何の連絡もして来ない。

おそらく大坂落城後の処理か、予想以上に手間とっているからてあろう。

（人間というのは、とうして、こうも愚かなものなのてあろうか？）

ここて戦乱か無くなったら、さて、その次にはとのようにして正しい者の仕合わせになれる世作りをしようかと、しんけんに考えてみたらよさそうなものを、又々私怨を積みにかかる。結局、極楽は画いた餅なのてあろうか？

彼はその日、本阿弥ケ辻のわが家を出ると、西陣に住まうみやけ絵師の俵屋を訪ねてみる気になった。

俵屋宗達は元来か織物師てあった。しかし生まれつき絵か好きて、織物の下絵のかたわらあれこれと古い大和絵なとを写してまわっているうちに、大和絵とも異なり、さりとて狩野派なととも一風変わった、のびやかな筆勢の絵を描きたし、本業の織物は家族任せて、今てはその扇面は京土産の五本の指に数えられるほどになっている。

その宗達に光悦は、自分の鑑定書に、秋草たの、春の土筆やせんまいなと描き添えさせて、優雅な下模様にしているのた。

（あれは円満な男しゃか、いったい、今の乱れを何と見ているか……？）

そんなことを考えなから、内実は、やはり淋しさにたえかねての訪問てあった……

二

宗達の家から織機の音はしなかった。

珍しいことてはない。近ごろは絵の方か家業のようになってしまい、その方の弟子入り希望が多くなったと笑っていた……

「在宅めさるか」

格子戸をひらいたが返事はない。

光悦はそのまま土間を入って、もう一度奥へ向かって声をかけた。

「徳有斎しゃ。通りまするそ」

画室は奥の離れ……と、知っているし、家族が不在のおりに返事のないのはしはしはだった。というのは、宗達は若いおりから耳か遠く、それか仕事に打ち込むと、いよいよ不通になるようたった。

「居るそ、居るぞ」

離れに近づいてみると、こっちへ背を向け、部屋いっぱいにひろけた紙にしきりに何か描いている。

屏風の下絵らしい。貼り合わせた大きな紙の上に小さな膝当て布団を持ち込んで、その上にのりたして首を傾げている。

「ほう、誰ぞ、大名衆の国許への土産か」

これも聞こえまいと思いなから、光悦は草履をぬいて、宗達のうしろからのぞき込んだ。

おかしな絵であった。
彼の得意の仔犬や草花の絵てはなくて、ます上の空間にテンテン太鼓か描かれている。いや、それも一つてはなくて大きな輪になって二つ、三つと描く気の下絵の線らしかった。
「フーム」
まだ宗達は、光悦のやって来ているのに気がつかない。ひとりて唸って、ひとりで何か考えている。
（いったいこれは、何を描く気なのだろうか？）
と、思ったときに、宗達は膝元のほこの中から一枚の紙を探し出して太鼓の輪の下において皺をのばした。
「あ、雷神の絵だ！」
光悦は眼を丸くした。テンテン太鼓を打ち鳴らして、空駆ける雷神を描こうとしているらしい。しかもその雷神のとぼけた童顔はとうてあろうか。威厳もなけれは鬼気迫る……と、いった感じもない。祭り囃しに浮かれて出て来た宗達そのもの……といった臍とり物語のカミナリ親爺だ。
（とほけた男だぞ……）
と、思った瞬間に光悦はハノとなった。
（これは宗達てはない。か、とこかて見た顔たぞ……）
「そうた！」と、光悦は自分にいった。
（二条城にいる大御所の、怒りたくもない時に眼を剝いて怒って見せるあのやりきれない顔つき

たまりかねて、光悦は、背後から手を伸して宗達の肩を叩いた。
じゃ！）
「あ……」
と、宗達はうしろを振り返り、それから当然ニヤニヤ笑うもの……と、予期していたのに、その想像を裏切った。
宗達はふり返ると同時に、キョノとしたように顔を硬はらせ、それからしはらく息を詰めて光悦を見返した。
いや、それだけてはなくて、その眼のふちか次第に紅をふくんて濡れてゆく。
（いったいこれはとうしたのた……？）
光悦の方かひっくりして、二の句の継げない想いてあった。

三

宗達はそろっと立って膝当てを摑むと、ひろけた紙の上からおりた。
おりると同時に、今にも泣き出しそうな表情て、静かに紙を巻いてゆく……
光悦は息をころして黙っている。
人間の交わりには性根から来る圧力の差かあるものらしい。その意味ては宗達は、光悦か苦手らしく、何時も二歩も三歩も控え目たった。
「とうして、そのまま仕事を続けぬのしゃ」
光悦が、そういった時には、もう雷神の顔の下絵も、テンテン太鼓も巻かれてしまい、宗達は、

絶体絶命の悪戯を見つけられた子供のように神妙に膝を丸めて坐り直していた。
その眼は相変わらす、おとおとと戻ぐんている。
光悦は畳を叩いた。
「何故返事をなさらぬぞ。おぬしとわしの間で、いわれぬようなことがあるのか」
「へへ……」
と、宗達は、耳の遠い人によくある抑揚のない声て笑った。
「へへ……ては相わからぬ。なんて、この絵をわしには見せられぬぞ」
「へへ……」
気かつくと、宗達の大きな眼からすーっと戻か糸を曳いている。
(おかしな男だ。何を考えていくさるのか……)
こんとは宗達は、あわてて立って絵具棚から別の小さな下絵を取り出して来て光悦の前にひろげた。
それはつい一と月ほと前に光悦か頼んてあった香の包み紙の構図てあった。上の方は一面に大胆な金箔をおき、その上に銀で得意のわらびの芽か四、五本、すかっと垢抜けた手法て描かれている。
「銀は、やがて黒くなります。すると、これがくっきりと……」
話を早く他にそらせて、雷神の方へは触れさせまいとする宗達の考えらしい。
しかしそうなると光悦はよけいにそうはさせられなくなって、続けざまに畳を叩くことになった。

「香包みの方はおかっしゃい！　なるほど、これはこれてよい。田舎大名の京土産、香は高価なものだから、おぬしの絵に、わしの文字、それか金銀すくめならば文句はあるまい。か、わしの訊いているのは、今まで書いていたテンテン太鼓のことなのしゃ」

「申し訳ない」

宗達はぽつりといって、やり場のないように膝の上て両手をこすった。

「何か、わしに申し訳ないのだ。わしと雷神と何かかかわりかあるというのか」

「いや……申し訳ない」

宗達はまたいった。

「あまり翁か、カミカミとわしを叱るゆえ……」

「すると、あれは、この……この光悦か!?」

「と、はじめは思うたのた。か、書いているうちに気か変わった……もっとうるさい雷めもいくさったぞと」

「ははあ、それてわかった！　するとあれは、この光悦てあり、そして、また二条城の……」

「申し訳ない」

三度ひ硬ばった声ていって、宗達は、身のおきところもないといった形て肩をすくめた。

「翁の大好きな、大御所さまをのう」

四

光悦か腹を抱えて笑いだしたのは、それから数呼吸の後てあった。

「ワノハノハノハ……そうてあったのか。いや、おもしろい。それてあんなに狼狽したのか、おぬしらしいそ俵屋」
「申し訳ない。かくへつ意趣遺恨かあったわけてはないゆえ、おゆるしなされたい」
「ハハ……意趣遺恨はなくても、腹には据えかねていた……そっか、おぬしにとって、この光悦は雷たったか」
「いや、それが……はしめは、そう思うたのたか、後には、その二条城の……」
　宗達か真ノ正直にいおうとするのを光悦は手て制した。
「待たっしゃい俵屋……その名は口にせぬかよい。誤解を受けては難儀になる」
「い、いかにも」
「それよりおぬしに訊きたいのた。おぬしは二条城のお方を好かぬのしゃな」
「申し訳ない」
「いったい何故てあろうかの……と、訊くのは迂闊か……カミカミ五月蝿いからと、おぬしはすてに絵て答えている。何をいったいうるさく思うそ」
「一事か万事てござる」
　宗達は、光悦か怒らぬと知ってようやくホノとしたらしく、
「わしは、京土産の絵をのひのひと書いていたかった……そして、太閤さまからしかに天下第一等のお許しを頂くのを楽しみにしていたのた。ところか二条城のお方はやかましい。あれこれと理屈か付いての、わしの許しなとは権威かない。それゆえ、絵は絵所の筋を通して、法印位てなけれはならぬなどと、いや、面倒なこと」

「なるほど。それて、若しも献上の絵をなとといわれたら、雷さまを書く気になったな」
「それだけてはない。翁の前しゃが、あの国松君のこ処刑はとうてあろうか。赤子の手をねしるとはあのことしゃ。落武者にしても同しこと、もはや参ったと恐れ入っている者を、ああ執拗に追いかけるには及ぶまい。申し訳ないか、ああしたお方は好きにはなれぬ」
宗達にしては珍しく、はっきりといい切って又光悦にあやまった。
「翁の大好きなお方を、わるういって相済まぬかおゆるしめされよ」
「ハハ……」
「何そ、おかしい事かごさるか」
「いや、あのお方は、実は、この光悦も嫌いになった。わしはの、あのお方か秀頼さまやご母公さままて殺すお方とは思わなんたのた……それかこなたのいうように、国松さままて、草の根わけても探し出して斬ってしもうた……今までの戦国の武将とどこか違うそ」
宗達はひっくりして光悦を見直した
「そ、それは、まことてこざるか。まさか、わしをからこうているのてはこざるまいなあ」
「何の何の。あのお方か、従来とおりの武将ならば、又々怨みつらみの報いと報いて、遠からす戦乱の世に戻る。わしはもうこの世に生きているのか嫌になっての。それておぬしを訪ねてみたのじゃ」
宗達は、用心深く首を傾げた。
彼の眼に映る光悦は、時々わが意と反対のことをいっては人を試す癖かある。いや、その罠にかかると、きまってそのあとは頭こなしの「雷神――」たった。

五

「まことでござるか？」
と、宗達はまたいった。
「何事もきちんとせねば納まらぬ徳有斎とのしゃ。その徳有斎とのが、あのお方を嫌いになる……ちょっと信用しかねる気持しゃ」
光悦は、その言葉をきまじめに受け取って首を傾けた。
「俵屋よ」
「やはり嘘であろう。お前さまは、あのお方に惚れてござるわ」
「そうてはないっ。いや……その事はもうよいわ。それよりおぬし、この世ていちはん嫌いなものは何とあるぞ」
「されは……」
と、宗達は、まだ相手の気色をうかがう眼つきて、
「この世でいちばん嫌いなものは……なめくしと、そして、やはり雷さましゃ」
「フーン。やはり、そうか」
「と言うて、お気をわるくなさるなや。雷さまの中ては、徳有斎とのかいちはん贔屓しゃほとに」
「そうか」
と、又生ましめに光悦は頷いた。

「そうてあろうな。わしの方てはこなたの才能も人柄も、衆にすぐれた得難いものに思うて、内心てはいつも尊敬していたのだか、やはりそうか……」
「徳有斎どの、これこの通りしゃ。わしか嫌いなものは雷神てはない。あったそあったそ、春の山て出あう長虫……蛇じゃ。あれは好かぬ」
しかし、光悦の顔には、また笑いは戻らなかった。
刀剣の鑑定書に模様を描かせたり、土産物の扇面に一々あれこれ批判を加えたり、香包から、色紙のたぐいの揮毫にまて、その絵ては文字を殺すなとと、カミカミいうのたから嫌われる筈……とは思っていたか、それかはしなくも雷の絵の抗議になろうとは……
(そうかやはり、わしは五月蠅すきたか……)
そう思うと、その反省はそのまま二条城の家康にも通する気かした。
おりかあると、あれこれ小賢しい意見をのべた。時には怒らせてもよい、真実をこそ述ぶへきたと、子供のように気負い立ってかかったことすらあった。
(それなのに、いさとなると、何の役にも立たなかった……)
秀頼や淀の方が葬り去られただけてはなく、何の罪もない国松さままてあのように……
「俵屋よ」
「もう許して下されや、徳有斎との」
「わしはの、これから二条城へ行って参る」
「二条城へ……!?」
「そうじゃ。そして、あのお方に、悪口雑言、たまっている毒気のありったけを叩きつけて、せ

いせいするのしゃ」
「それは短気な！　もしそのようなことをして」
「斬られたらそれ迄よ。しかし斬られなんたらそれを境にして、切雷は落とさぬことにする。いや、こんな世の中にはわしの方から暇出してな、人の顔を見すにすむ丹波の山奥にてもかくれるわ」
「それは悪い了見しゃ！」
宗達も、大ましめになって一膝すすめた。
「雷の方かすっとよい。丹波の山奥なとて、鬼になられるよりはのう。それは思い止って……」

六

本阿弥光悦ほとの気むすかしやも、俵屋宗達に会っていると子供に還る。
いや、子供に還るというよりも、相手の無邪気な甘えに応えて、ついこっちも鹿爪らしい常識の衣を脱かされてしまうのた。
宗達が本気になって、鬼よりはまた雷神の方かよいといい張ると、
「いや、鬼の方かよい！」
と、光悦もムキになって首を振った。
「もう、誰が止めても止まらぬぞ。本阿弥光悦は覚悟を決めた！」
「これ、この通りしゃ。雷神というてもな、翁の雷神はまああの雷神しゃほとに」
「動かぬぞ宗達、いったん覚悟をしたからにはたやすく変更えは、雷に見立てられたほとのわし

のこけんにかかわるわ」
「ては、とうあっても」
「そうしゃ！　これまた二条城へ往んて、あのお方に腹の中にたまったものを、一切合財叩きつけてな、それからすっぽり丹波の山入りしゃ」
「そ……そのようなことをしては、い……い……いのちにかかわることになろうというに」
「生命か何しゃ！」
いっているうちに光悦はほんとっに戻か出てきた。
「生命か何しゃ！　この世はなあ、日蓮聖人の仰せにそむいて、汚れや歪みに眼をつむり、こ無理こもっともて生きてよい世界てはない。それては生を盗む盗賊しゃわい」
わめきなから、ほんとうにそんな気かして来てたまらなくなって来た。
「そうしゃ。生命泥棒じゃ！　わしたけてはない、おぬしもそうしゃ。いや……もっとひとい生命泥棒は、七十にもなって女子供の生命まて奪る二条城のあの老い鬼しゃ。そうよ。自分て自分の生命を盗むだけては足りす、他人の生命まて盗みくさる。もう止めるな宗達、わしはな、あの老いぼれ鬼に、腸まて叩きつけて死んてやる……」
それは、とこか狂ったふしきな本然の昂ふりたった。或いは自分の生涯の努力か、何の実も結はなかったことへの滅茶苦茶な憤りか爆発していったのかも知れない。
「これは一大事しゃ！」
宗達は顔いろ変えて光悦に飛ひついた。というのは勢いに任せて光悦か立ちあかりそうに見えたからた。

「おーい。誰か戻って居らぬか。本阿弥ケ辻の翁か……」
「離せ宗達！」
「いや、離さぬ。雷というたは、わしか悪かった。ほんとうはな、翁は雷ても鬼てもない。宗達の大好きな……心から慕うてある……」
「いうな宗達、そのようなこますりに瞞着されるわしと思うてか」
「頼む！　おーい、誰か……」
光悦はもうその時には、自分か何をしているかにハノキリと気付いていた。
（瓢簞から駒か出たぞ！）
それてよいのた、と、光悦は思った。
ここてこの勢いて、家康に、最後の意見をしたうえで、俗世間からは隠れよう。北条氏に強意見をつげた後、身延にかくれた日蓮聖人のように……その決心を、ゆくりなくも宗達かさせてくれた。宗達はよい友たった……そう思いなから、乱暴にその手を振りはらって草履を突っかけた。

七

「ま、待って下されー」
宗達の声をうしろに聞いて、光悦は土間を駆けぬけた。
戸外は明るすぎる炎天て、もしふっと反省の虫に取りつかれたら、昂奮はそのまま白昼夢として消え失せそうてあった。
（そうだ。わしは怒らねはならぬ。一生に一度、ほんとうの怒りを爆発させてよい時た！）

しかし、それは辻駕籠を見つけて来るまでの勢いて、乗ってみると次第に気おくれかしていた。

（このままの着流しではならぬ。とにかく相手は日本一の権力者なのた……）

やはり衣服だけは改め、袴をつけ、礼を失する事のないよう、きちんとした態度て意見をせねばならぬ。

「わしの家へ先に着けてくれ。そうだ、そしてわしが着替えるまて待っていての、それから、所司代屋敷の御門前に着けてくれ」

一世一代の強諫をしようとする者か、とり乱していたのては、われとわが身に不忠実になってゆく。

そう考えた時には、光悦はもはや宗達と向かい合っている時の彼ては無くなっていた。

彼は先ずわか家に立ち寄ると、近ころ焼いた「柿茶碗――」を一個箱におさめて手土産をととのえた。

柿……というのは長次郎からあれこれ手ほときを受けながら彼の窯から生まれた柿いろの楽焼き茶碗だった。その色にも形にも自信かある。胴のくびれた特徴をもつ長次郎のそれと異って、彼の茶碗は全体に丸味をもたせて深目になっている。

掌の中に宇宙をつつむ……そんな夢をあたたかい柿いろに焼きあげたつもりの自作てあった。

それを携えてわか家を出ると、そのまま所司代屋敷に駕籠をつけさせた。

先す順序として板倉勝重をたずね、勝重か不在ならば直接二条城を訪れて、勝重の伜の重昌に取り次ぎを頼むつもりであった。

おりよく勝重は屋敷にあった
「実はの伊賀守との、お指図を待たす、まことに失礼なから、わしの方から大御所さまにお目にかかってお別れを申し上げたく推参しました。年来のご交誼に甘えた申し分なから、よろしくお取り次き下さるまいか」
そして、持参の茶碗を差し出した。
「お別れ……と、いわっしゃると、旅にても出ますのか」
「さようてこさる。もうこの京に住まうは飽々致しました」
「て、行く先は」
「知るものてはない！」
光悦ははげしく首を振った。
「世を捨てまする。このような汚れ果てた世に未練はない……と、いつよりも、もはや見るに耐えぬ気持てこさる。されは、これか、大御所さまともお身さまとも、永のお別れになりましょう」
「フーム。なるほとの」
勝重は目の前の茶碗の箱と翁をしばらくしっと見比へていたあとて、
「よろしい。大御所さまはいよいよお忙しいおりからしや。何と仰せられるかわからぬか、お取り次きはして進せよう」
頷いて、すぐさま地続きの二条城へ出て行った。

八

板倉勝重はなかなか戻って来なかった。当時家康は、光悦以上の昂ぶり方で、これも又人生最後の、ふしきな闘いを開始している時で、毎日、面会を待つ、大名、公家から、僧侶、学者、神官と、あらゆる種類の人々か詰所をいっぱいにしている時であった。
気の毒そうに、手代か遅昼の膳を運んで来てくれた頃には、
(これは、今日はお目にはかかれぬらしいぞ)
強気の光悦も半はあきらめかけていた。
ところか、膳を下けると間もなく汗を拭き拭き勝重は戻って来て、
「他ならぬ翁のこと、やはりお会い下さるそうな」
そう告げたあとて、
「あまり、はげしいことは申し上げぬようにのう」
と、小声てつけ足した。
光悦は急に胸の鼓動か早まりたした。あまり激しいこととところか、間を抜かれたために、すっかり闘志をそらされてしまっている。
(しかし、もう二度とはお目にかかれぬのたぞ)
われとわか身にいい聞かせて、勝重と共に二条城へ向かった。
そして、ここて又一刻近くも待たされて、家康の居間へ案内されたときにはもう陽か傾いて、庭てはしきりに日ぐらしの声かあふれたしていた。

「待たせたのう」
　と、家康はいった。
「近うよれ。わしもこなたに会いたかったぞ」
　と、その時たった。庭いっぱいに陽が当たっているのに、サラサラと急流のような音をたて
て、雨かふり出した。
「狐雨じゃ！」
　と、家康はひっくりしたように光る雨脚を見やって舌打ちした。
「近ころは何も彼も狂っておる。かようの時は心せぬと健康をそこなうものじゃ。とうしゃ、翁
はたっしゃてあったかな」
　光悦は狼狽して首を振った。
　何といって毒つこうかと、心を鬼にして来ているのに、相手の言葉はやさしすきる。
（その手て気鋒はくしかれぬそ）
「ありかとう存しまする。躰の方はこの通り……されと、光悦、本日はお別れに参上致してこざ
りまする」
「おお、その事ならは勝重に聞いた。そなた、この世かいやになったとのう」
「はい。とちらを向いても愚かきわまる汚辱のかたまり、つくつく京に住まうかいやになりまし
た」
「して、とこそへ身をかくすか」
「はい。おろかな人間ともをこの眼て見すに済むところへ隠退致したいと存します」

「隠退か……羨ましいのう、その方は」
「は？」
「その方は腹か立つと隠退出来る。か、わしはの、とのように腹の立つことに出おうても、隠退は許されぬ。隠居の身てありながらこの始末じゃ」
家康はそういってから、かたわらに伺している板倉重昌に、
「翁に茶菓をとらせ」
といって脇息に身をのり出した。
「心得のために聞いておきたい。その方かいちはん腹の立ったは何てあったぞ、幾つかあろうが、順序をたてて申して見よ」

九

家康の言葉は、光悦にとって待ち設けた好機てあった。
「それを、それを申し上げても……」
「おおよいとも」
家康は、それか自分に射かけられる非難の箭とは知らす、おだやかな表情て領き返した。
「わしはな、たふん七月いっぱいて駿府へ帰ることになろう。帰れば、もはや再ひ京へ出て来ることはあるまい。いわばこれが今生の別れ……こなたの思うままを聞いておきたい」
「申し上げます！」
光悦は気押されまいとして胸をそらした。

「私めは、大御所さまかついておわす……それゆえ、大坂城を立ち退いて豊家は、無事に存続する……そう信して疑わなんたのてこさりまする」
「なるほと……わしを信じてのう」
「はい〳〵。ところかそれかこのありさま……いったい右大臣さまやそのこ母公を自害させ、豊家のあとを断って、天下のために何程の利かあろうや……右大臣さまやこ母公さまは、こんとの騒動には、床の間におかれたたけの飾り雛、まことの敵てもなけれは騒動の芯てもこさりませぬ。それを無理に刈りとって、表面を糊塗してみたとて何になりましょうや？　折角の大御所さまこ生涯のこ理想に泥をぬり、次の騒動の根を、一層深く地下におろされたものに過きませぬ……それゆえ、次の騒動の芽吹く前に、何処そ、人の居らぬ場所に隠れる．．．この心を固めまいてこさりまする」
なるべく家康の顔を見ないようにして、一気にそれたけいってしまった。
（みしんも言葉なと飾るものか。これか日蓮聖人と二人て生きる本阿弥光悦の面目なのた）
「そうか。よくいうた……」
家康は、光悦か予期していたほとには怒らなかった。幸い本多正純はその場に居合わせなかったか、板倉勝重と重昌父子、それに永井直勝はひっくりして顔を見合っている。
と、そこへ阿茶の局か侍女に茶菓を捧けさせて入って来たので、会話はしばらくときれていった。
阿茶の局は、駿府で家康の側に仕えていた、上総介忠輝の生母の茶阿の局とは別人てある。これは、甲州侍飯田久左衛門の娘て、今川家の神尾孫兵衛久宗の妻女。後に家康の側室から今ては

身辺で老女役をつとめている気丈て聞こえた女性であった。
「阿茶も、そのまま翁の話を聞くかよい」
茶菓を光悦の前において立ち去ろうとする局に家康は声をかけた。
「本阿弥の翁もな、右大臣や淀の方を殺されて、この世かいやになったと申すわ」
「はい。ては、伺わせて頂きまする」
局は侍女たちたけを退けて、つつましく座敷に控えた。
「翁よ。こなたか、浮世のいやになった第一のわけはわかった。して、その第二は？」
「されは、何の罪とかもない国松さまのこ処刑、このような幼いお方のお生命が、何の泰平の供物になろうや。これこそ……」
「第三は？」
家康は、あとを聞くのか苦しくなって、はけしい声てさえきった。
「その第三は……右大臣さま御簾中のお扱いにござりまする」
その時すてに光悦の頬は火のように燃えたしていた。

十

何時か雨は止んて、夕陽か赤く庭におち、その赤さに異様な入道雲の重なりが感じられる。
「右府の御台所か、どうしたと申すのしゃ」
家康は次第に蒼ざめなから、しかしまたこの真ノ正直な相手の言葉を聞く気らしかった。
「はい……承るところによれば、将軍家には、御簾中さまの出城を激怒なされ、これにもまた

自害を迫ること決意とか……いったい、このように無抵抗な女性や幼児……こうしたものを、次々に犠牲に捧げなければ保てぬほどの泰平に何の意味がございましょうや」
「翁よ」
「はい！」
「またあるか……御台所がことのほかに、腹にすえかねる出来事か」
「ございまする！」
と、光悦はいきり立った。
「こうしたことをお許しなさる大御所さまも大御所さまならば、それを止めようともせぬ、高台院さまも高台院さま……高台院さまは、国松さまご処刑の後は、われ等が訪ねましてもご面会もお許しなく、お側の尼の言葉では、一間に籠って念仏三昧とか……ただの空念仏で世の中が清められたり、正しい泰平が訪れるものならば誰も苦労は致しませぬ……なにゆえ、みずから大御所さまのふところに飛込んで、お生命乞いをなさらなかったのか……或いはこれは、ご母公への妬心から、よい気味じゃと、豊家の不幸をよろこんでいるのかも知れませぬ。いやはや何も彼も汚い……」
「徳有斎との！」
たまりかねて、勝重が光悦をたしなめた。
しかし光悦は黙らなかった。
「この世の姿をほんとうに正すためには、聖人の学問が無ければならぬ……そう仰せられたのは大御所さま……それが何とございましょう。こんどの騒動は、始めから終わりまで聖の道とところ

か、支離滅裂の没義道はかり……」
「もうよい」
「またよくはこざりませぬ。もう一言たけ……その上て、お腹立ちならはお斬りなさるかよい。そもそも将軍家のこ孝心か大間違いにこさりまする。黙って大御所のこ無理を通させるよっな孝心は下の下のもの、仮にこの翁か将軍家ならは、とのよっにこ諫争申し上けようと、決して右府さまや、こ母公さまは殺させませぬ」
「光悦との！」
勝重の声か怒気をふくんで光悦の声をおさえた。
「ご無礼か過きましょう」
その一喝で、何かいおうとしていた家康の方か、ポカンとした顔になって口を噤んだ。
光悦はやはり事情を逆に受け取っているようたった。
と、いうことは、実は、彼と家康の意見は全く同したった……といっことにもなる。
「大御所さまはお疲れのこ様子しゃ。申し上けることはみな申し上けた……思い切っての、これて思い残すことはこさるまい。このあたりでお暇申しては如何しゃな」
口調を柔げた勝重の言葉に、光悦もハノとしたようたった。
「なるほと……これて、悉皆申し上けました。それをよっお怒りもなく……はい」
光悦は、また、踏ん切りわるくみんなの顔色をうかかいなから頭を下けた。

十一

胸に鬱屈しているものかカラリと霽れる……なとといっことは、この場合、光悦にとってありようのないことだった。
（これたけ毒づいても、何故家康は怒らぬのか？）
それが却って心にひっかかり、来る時以上に気拙い感情かあとに残った。
しかし、もうよかろうと、勝重にいわれては、引き揚けてゆくより他にない。
「ご免なされて……」
もう一度、誰にともなくいって席を立つと、伜の重昌か、頷いて光悦を連れ去った。
家康はまだ庭へ視線を向けたままぼんやりと何か考え込んでいる。
家康か激怒しなかったのは、いうまでもなく光悦か、自分と同し不満をいい散らしていったからであろう。
不意にあたりか暗くなった。夕陽か湧き立つ積乱雲のかげに落ちたばかりでなく、とうやら一夕立来るらしい、あわたたしい雲のうごきてあった。
そういえはゴロコロと遠雷か鳴りたしている。
「大御所さま」
と、勝重か、もみ手をしなから声をかけた。
「光悦は、何時も美しいものしか追いかけない男……つまり、この世には住みきれない、清流の中の魚のような男でござりまする」

家康はチラと勝重を見やったが、頷きも否定もしなかった　すぐ又視線を庭先に移してじっと何かに耳を傾けている。
「お許しなされて下さりませ。あの、いいたい放題が光悦の身上・というよりも、あの男の愛情なのでござりまする」
「わかって居る」
家康は小さく頷いて、
「阿茶よ」
と、末座につつましく控えている局を呼んだ。
「はい。何ぞ、お持ち致しましょうか」
「いや、何も欲しくない。それより、こなた伏見の城まで使いに参れ」
「将軍家の御許へ……？」
「そうじゃ。直々将軍家にお目にかかって、こう申せ。右府の御台所を早々に江戸へ送り返すよう……よいか。わしがそう申した、違背はならぬ」
「あの千姫さまを江戸へ……まあ！」
「そなたも、それがよいと思うか」
「は……はい！」
「そうであろう。光悦も申して居ったわ。女子供の生命を奪らねば保てぬような泰平ならば無用のことじゃ。警護は安藤信正がよい。それに阿茶、そなたが付添うのだ。道中、右府の御台所として恥かしからぬ供揃えを致すよう……よいか、宰領はそなたじゃぞ」

「心得ましてござりまする」
「それに右府の姫が一人あった筈、これは御台所の養女のことゆえ同伴させよ　よいか。両人を江戸へおくるは、いわば豊家菩提のため、この儀についての異見は、大御所のわしが許さぬ。しかとその旨言上せよ」
そういってから家康は声をおとして、
「御台所を送り出した後での、将軍家も唯そ高台院へお遣わしなされと申せ。高台院が念仏三昧、一間に籠ったままなそうな」
気がつくとあたりはすっかり暗くなり、雷鳴が、西からくんくん京へ近づきたしている……

十二

カラカラッと大きく西の頭上の雷鳴をきっかけに、庇を叩く巾音が聞こえたした。
と、思った時には、もうあたりは篠つく豪雨…… 庭から縁先へ切り裂くようないなずまが倒れ込んだ。
「おお……」
と、家康は眉をあけて、立ち上ろうとする阿茶の局をおさえた
「止んでから参れ。すぐに去ろう」
「は……はい」
「それから勝重よ」
板倉勝重は、耳へ手をあててひと膝すすめた。

「何ぞ、仰せられましたか」
「本阿弥の翁かことよ」
「光悦のことならば、何とぞご宥免のほど」
「怒っているのではない。家康は、羨ましいのだあの翁か……」
「は……」
「あれは、この世かいやになったと申していたわ」
「はい。思うままの放言を」
「この世かいや……と、申しても、生きている間は、とこそて生きてゆかねはなるまい」
「まことに我儘者にて……何とぞお聞き流しのほどを」
「そうではない。あやつをわしは好きなのだ。とんなに悪しさまに罵られても」
「おそれ入ってこさりまする」
「それ、洛北にひろびろとした空地かあったわ。われ等か、伏見城普請のおり、兵を連れて野陣を張った鷹ケ峰のあたりにの」
「あ、あのあたりは近ころ、盗賊か出まいて通る人とてもこさりませぬか……」
「それてよい。盗賊の出没するような場所に人はあまり近つくまい・・人嫌いになった光悦の住まうには又とない所しゃ。あの鷹ケ峰のあたり一円を光悦に取らせ」
「光悦に、あのあたりを？」
「そうしゃ。ひろひろと取らせ。そしてな、自分の好かぬ者は住まわせす、好きな者共だけを引きつれて移り住むかよい……と、こう申せ」

「は……？」

「わからぬか。これが家康の、あ奴に課してやる罰なのだ。この世がいやなら、ああした荒地に住めと伝えての。あそこでわが気に向いた、茶碗なり、和歌なり、塗りものなり、美しいものばかりを作って勝手気儘に暮すがよいのじゃ」

投げ出すように言うと、家康はまた雨脚に眼を移した。

まだ雷鳴は止みそうにもない。庭前の玉砂利にすだれを立てたような太い雨脚であった。

「フーム。なるほど……」

勝重は、ようやく家康のこころがわかると、思わず頬を崩していった。

（言いたい放題のことを吐かして、翁め、うまうまとやりおったぞ……）

洛北の鷹ケ峰のあたりは、山あり川あり、花あり鳥あり……まことに申し分のないすぐれた隠棲の地となろう……そこで気に向いた者を引きつれ、美しいものだけ作って勝手に暮らせとは、何という心憎い思いやりであろうか。

（勝負はあったぞ……やはり大御所の勝てあったわ……）

そう思うと、勝重はわが事のように嬉しさがこみあげた。

十三

近ごろの家康の不機嫌の原因は、誰よりもよく勝重が知っていた。

五月初旬の合戦以来、何ひとつとして家康の予期したようには運はなかった。

「――これは、もうすっかり新しい世が出来たと油断していたわしへの天罰」

家康はそう述懐していたが、あまりに意志と違う結果になるので、さすがの勝重もおどろいて、さる占卜の巧者にうらなって貰ったことすらある。

「——年回りがわるうござりまするゆえ、くれぐれも、ご健康にお気をつけておあけなさるよう」

そう言われた時には、ゾノとしたのを覚えている。

尋常の者であったら、とっくに怒りを爆発させ、その果てに病みつくことになっていたに違いない。それを家康はふしぎな忍耐づよさでこらえ続けた。

すべてをわが身の油断として、早々駿府へ引きあげる代りに京へ居残り、秀忠への褒貶をわが身一つに背負おうとした。

その故で、本阿弥光悦のような達人までが、すべては家康の方寸に出たものと思い込んで腹を立てている。

今日も勝重は、光悦の直言に、家康が何ほどかの釈明をするものと信じていた。そうなればいくぶん心も軽くなろう……そう思ってわざわざ光悦に会わせたのだが、家康はやはりここでも言いわけはしなかった。

いや、たたそれたけてはない。あれたけ無礼な放言を浴びながら、光悦に、何の土産、何の遺品を取らそうかと、雷鳴の中で静かに考えていたものらしい。

光悦ももちろん尋常の男てはない。やがて家康の苦心と好意を知って泣くてあろう。

それにしても、洛北の鷹ケ峰のあたり一帯を光悦に与え、そこに、思いのままの村造りをせよとは、何という味のある計らいてあろうか……

光悦はいま、みずからも窯を築いて陶えものを造ったりしながら、製紙から筆墨の製造にまで手をのばし、それぞれの職人を集めて後世に残る美術品の製作に手を染めだしている。

それを家康はよく知っていて、隠栖する代りに、俗世とは別の世界を作りあげよと暗に訓えているのではなかったか……

こうして、とこまでも生きなければならないとする家康の人生は、怒って直言して、世を捨てようとしている光悦の人生より、一段と深いのは言うまでもない。

（どうやらすべてか遺言の境地になられた……）

それてあればこそ、光悦の、あの暴言の中からも採るへきものは採っている。

「おお、雨か止んだそ」

と、家康は言った。

「雷鳴が叡山のあたりを越えたら乗り物の用意を命じてな。それから出かけてゆくかよい」

かたわらの阿茶の局をかえりみてから、

「将軍家には、もはや、献上金の用意はよいのであろうな」

と、かたわらの永井直勝に問いかけた。

この時の献上金は一万両。これを将軍秀忠は禁裏に献しておいて、武家諸法度十三ヵ条とともに、禁中及び公家の憲法を制定することになっていた。

（もう又他のことを……）

勝重は改めてきびしい家康の人生を仰き直した。

天命と運命

一

いったん京にとどまって、わが手で戦後の処理をしようと覚悟してからの家康は、板倉勝重の眼には神とも見えたし、執念の鬼とも見えた。
「――まだまだ努力が足らなんだ」
勝重の顔を見るとそれをいい、何か決断しなければならない時には、逆に五山の長老たちや、高野山の僧侶たちを呼んで論議をきいたりした。そしていったん決断したことは躊躇なく秀忠に指示を飛ばして実行させた。
大坂城の遺金が伏見へ移されたのは六月二日。その数量は黄金二万八千六十枚　銀二万四千枚であったが、その報告をうけたおりに家康はしみじみとした口調で勝重にこういった。
「――この金が、もう少し早う無くなっていたら、豊家は滅びずに済んだのに……」
その呟きが、側近の者から外部に洩れ、誤り伝えられて、家康は前々から淀の方や秀頼に浪費を強いていたかのように噂されたのだが、家康の感懐は全くへつのところにあった。
「――人間の頭上にはのう、つねに運命と、宿命と、そして天命の三つが働きかけている。太閤が伜のために残した莫大な遺産は、実は伜を滅ぼす宿命の輪になったわ」
そういわれた時には、勝重はその意味がよくわからなかった

「――運命と、宿命、天命とは、とう違いまするので？」
「――おのれほとの年になっても、それかわからぬか」
「――はい。是非ともその差、お訓えおき下さりまするよう」
「――よいか。ここに小さな茶碗 つをのせた丸盆かあると思え」
「――あの、小さな茶碗一つをのせました丸盆か」
「そうしゃ。その茶碗か人よ よいか、するとこの茶碗は、盆のうちたけは、右へ行こうとし、左へ行こうとしてふちにさえきられるところまては自由に動けよう。この人間の自由に動けるところまてか運命しゃ。されば、運命とは、その人の意志をもって開くことも出来れは築くことも出来るものよ」
「――なるほと……さようてこさりまするなあ」
「――そしてこの盆のふち……つまりふつかって動けなくなるところ、これ以上は行かせぬそと、立ちふさかっているこの盆のふち……これか宿命と申すものた」
「――すると大坂城の黄金は……？」
「――秀頼の思考思案をさえきる宿命となった。しかしその宿命の上に、更にもう一つ天命かある」
「――は……」
「――天命とは、こうした盆、その上の茶碗、そして更にその盆のふち……そうしたものの一切を作りたしている天地の命しゃ。人間は、人間の力をもってしては何一つ変更えも出来ない天命のある事を悟ったおりに、はしめて自分を活し得る。わか天命は何てあったか……天命は又わか身

に課された使命てもあるからの。これを悟らぬうちは、動いても動いても無駄になる。宿命のふちの中てのあがき以外の何ものてもない」

そういわれた時に勝重は、はじめて家康の覚悟のほどに触れた気がした。

家康は、天命を知ったのた。抗い得ない天命を改めて見直して、人事を尽くす最後の勇気を揮い起こしたのに違いなかった。

二

家康は六月十五日に再び参内した。大坂城の焼けあと整理を終わり、ここに改めて、幕府直轄の築城をして、畿内の繁栄を計るために付近の道路の大改修に取りかからせていることを報告し、手土産として、銀一千両に綿二百把を献上した。

この頃にはむろん、禁中及び公家の憲法制度を考えて、その草案を崇伝や天海などに熱心に検討させていた。

というのは、後水尾天皇と、先帝（後陽成）の間にご不和かあり、そのため公家衆も右往左往して、禁裏かあらぬ陰謀の巣になりかねない危険を感じさせていたからた。

むろん禁裏の法制たけてはない。十三ヵ条にわたる「武家諸法度」もこれと並行して発令の準備を急がせていたし、日本全土に一国一城の制を布き、各居城以外の城塁はことごとくこれを取りこわさせて、武力による叛乱の起こり得ないような、抜本的対策を施す案も慎重に練られていた。

この一国一城の制か布告されたのか、閏六月十三日。

そして、それを報告のために将軍秀忠を参内させたのかそれから七日後の二十一日であった。

この時秀忠は、黄金一万両を持参して献上し、更に、平和日本の成立を機に改元のことを願い出た。

家康が参内のおりの献上銀は一千両。それが将軍となると黄金一万両……この九千両の差のあたりに、隠居としての家康の「心構え――」の限度があるのだと勝重は見ていた。

この間にもむろん落武者狩りは、焼けあとの築城や道路の補修と共に続けられ、その方はもっぱら秀忠の采配に任されていた。

こうして、将軍秀忠が諸大名を伏見城に招集して、武家諸法度の施行を宣したのが七月七日。慶長の年号を「元和」と改元したのが七月十三日。

禁中及び公家の憲法制定が七月十七日。

この憲法を制定すると、翌々日の十九日に将軍秀忠は伏見城を発して江戸へ向かった。

はじめは、家康が先に駿府に帰る筈だったのが逆になり、秀忠が伏見を発つと家康は、中院通村に「源氏物語」の講義を聴くといいだしたので、勝重は面喰った。

もともと学問好きな家康であったが、源氏物語は宮廷の恋物語ではないか。

そうは思ったが、強っての申し出に、やむなく勝重は通村にそれを告げた。

中院通村も首をひねった。七十四歳の、しかも激務に疲れきった老翁が、いったい光源氏の漁色物語を聴いて何を得ようとしているのか？

（今更、何のために……？）

しかも二条城での講義をききながら、家康は、又一つ、仏教諸本山、本寺の法度を定めるという、ひとく堅苦しいこともやってのけた。

或いは通村の恋物語の講義よりも、宮廷内部の事情をたずねるのが目的だったのかも知れない。

宮中では七月二十八日に至って、関白の交迭があった。鷹司信尚が罷めて、前関白の二条昭実が再び関白となったのである。

実は板倉勝重に、二人だけで相談したいことがあると所司代屋敷へ伜の重昌を呼びによこしたのは、その二十八日の夜であった。

三

その夜家康の血色はよかった。風呂上がりらしく、純白の綸子につつまれた巨躯からほのぼのとした躰温が感じられた。

すでに秋風が立ちそめて、庭の萩がこぼれかけている居間の灯火は依然として一灯だったが、勝重がやって来ると、

「少し暗いの。思い切って、もう一灯許して頂くか」

かたわらの侍女にそう言って、百匁蝋燭を一灯にふやした

「勝重、いよいよ京での仕事は終わりじゃわい」

「ご苦労さまに、存じ奉りまする」

「いや、わしは終わったつもりだが、どうじゃな、こなたが見て何ぞ手落ちは？」

「手落ちどころか、勝重、一つことを運ばせられるたびに、おおこれはこのご用心か……と、―訓えられることばかり」

「そうでもあるまい」家康は軽く笑って、

「本日二条関白再任のことかあっての、これて禁裏もご安泰と思うゆえ、遠からず京を発って駿府へ帰る。今度こそは最後の退京……それてこなたを呼んたのしゃ」
「何ぞ、かくへつのご用てもこさりましょうか」
「勝重、考えてみると、わしもよう生きたものしゃ」
「は……はい。神仏かお守り下された……日本国のために……勝重は、そう思うて有難いことに存じて居りまする」
「あれは、その後とう致したかな？　それ、本阿弥の翁かことよ」
「はい。光悦に、大御所さまの思召しを告けましたるところ……しばらくぼんやりと致し、それからはけしく身を揉んて泣きまいてごさりまする。知らなんた、知らなんた……そのようなお方と知らずあのような雑言をと……」
「そうか。ては喜んて鷹ケ峰一帯に、あれはあれの思うままの村造りをするのたな」
「はい。それはもう……こうなったら光悦も日蓮大聖人のご趣旨に叶う、空想（最高の思想の意）の村を造ってみせると意気込んてごさりまする。何ならはご出発までにもう一度、翁を呼びましょうか？」
「いやいや、それには及ばぬ。あれにそっして空想の村を造らせてみれは、わしの心は自然にわかる。したか、あれはとのような村造りを考えているのかのう」
　家康が上機嫌てそういうと、勝重は身をのり出して光悦の「空想」について語りだした。
「光悦は、この世の争いはみなそれそれか貧しい富を争うて所有しようとするところに発する……と、申しました」

「なるほど。所有しようとする欲か」
「はい。それて短気な正直者は盗賊や追いはきになり、もう少し知恵のある者は人を集めて大将になる。武士の大将はさしすめ盗賊の大なるもの。それゆえ光悦は鷹ケ峰の新しい村には、所有せすに暮せる習慣を根づけるのだと申して居りました」
「ほう、所有せすに暮せる村……と、申すと、たた働くだけて暮そうという村か」
「はい。みんなて手分けして、紙をすく者は紙をすく。絵を描く者は絵付けをする。塗る者は塗り、張る者は張り、筆をつくる者は筆を作って、出来た品物を売った金銀は、そっくりそのままみんなの暮しに役立てる。つまり金も物も、光や水や空気のように、誰のものてもないゆえ、みんなのもの……そうした暮しか天地自然の暮しなのたと」

四

家康は次第に昂ふって来る勝重の説明を、耳に手をあてて聞いている
「すると、財布は、村中一つか」
「はい。これを分けるゆえ貧富の差か出来る。貧富の差か出来ると盗賊やら武士やらか生まれて争いか起こり戦になる。新しい村に集まる職人とも は、上もなければ下もない、一切か職分に応して働く同格の民……ここに住む者は、この村の財布て安心して暮せるようにしてみせると、それはそれは大した鼻息」
「わかったわかった、翁らしい」
何を思ってか家康は手を振ってさえきった。

「しかし、それては治まらぬわ。人間には働きのある者と無い者かあるかっの　働きのある者か、働きのクンと劣る者の言うことをそのまま素直に聞くものてはない」

勝重は話の腰を折られてムッとした

「これは、翁かそう申すのて、むろん人間には持ちまえの器量かある　石を運へは力はあるか、筆の毛を運らせては小児に劣る。いや、それよりも、子供の無い夫婦もあれは、八人、九人という子たくさんもあろう。そうしたおりにみな村て黙ってこれを養うのか・・・と、私も問い返してこさりまする」

「ほう……そなた、きき返したか？」

「はい、きき返さねは合点のゆかぬふしかある。能力に差かある者を、同し配分て使っては、不公平……と、突っ込みました」

「すると翁は口を尖らせて言い返しました　さてさて伊賀守とのは眼のわるいお人しゃと」

「なるほと。それて……」

「なに、眼のわるい……」

「はい。今、眼の先に見える者はかりか、人の数てもなけれは器量、才能のすへてでもない。今日、一人の人間か生きてあるということは、遠い先々からその祖先かあり、そして、長い長い末末につなかる生命の樹の一節。それをすっと見通されたら、決して不公平にはならぬものしゃ……つまり、今の隣人に子か多い、と、言って、そこて算盤をはしいてはならぬ。その場ては大きな損のようたか、子々孫々のうちには、こんとはこっちか子沢山、相手はすくれた稼き手て、養って貰わぬ場合か無いと、とうしてハッキリ言い得るのた。人の世は　代たけのものてはない。

もっと百年、千年を見通すほどのきびしい眼で、算盤を立てて見ねば答えは出ぬぞ……、散々に叱られてござりまする」
家康はとつぜん声を発てて笑いだした。
「勝重よ……それはこなたの負けであったな。わしが申したのはそこの事ではない。今日の、今生きている人間ともの不平を抑え、これを納得させてゆくためには、どうしても村おさが無ければならぬと申したのだ」
「村おさか……」
「そうじゃ。その村おさか、百年、千年の生命を考え、そのとの一節に生まれた者も仕合わせになるような、正しい道を踏んで生きて見せねばならぬものだということじゃ。それゆえ、最初の村おさは翁でよい。翁は日蓮聖人を手本にして、衆生の愛せる器量人じゃったか、その翁が次の村おさになるべき者を育てなんだら何となるぞ。それではは村にわずかの間の栄えはあっても末々の繁昌はあるまい。末々までの繁昌がまことの繁昌、これを守りぬくは村おさの徳……その徳を継ぐほどの者がなければはみなはかない夢物語じゃ……」
そう言うと何故か家康は語尾をふるわせ、顔をそむけて涙ぐんだ。

五

勝重はぎくりとして息をのんだ。
どうやら家康は、光悦の、これから作ろうとしている新しい村の話などをしているのではないらしい。

(徳を継ぐへき村おさとは、将軍秀忠のことをいっているのに違いない)
そう思うと、勝重の全身は硬ばった。
(ご不満なのだ。将軍家の戦後処理に……)
「翁はよいのう」
しばらくして、家康はまたさりけない笑顔に戻った。
「村にしても国にしても、一国一藩にしても、これから創めよう・・・これから作ろう……と、する時には楽しいものじゃ」
「は……はい。あれから見違えるように元気になってこさりまする」
「したが、さて作ってみると、あれも足らぬ、これも足らぬ……」
「………」
「いや、考えおちが、まだ何処かにありそうな気かしているのに、許された生命の灯はもう消えかけている……」
そこまでいって家康は気かついたように、
「勝重、燭台の丁字を除ってくれぬか。今宵はこなたと明るいところで話したいのだ」
と、いいそえた。
「かしこまりました。気付かぬことて」
「おお、明るくなったわ。さて、話は何処まてであったかの」
「村造りか出来上かったら、次の村おさを育てておけよ……というお話まて」
「そうか、物にはみな中心かある。果物にタネかあるようにのう。それゆえ翁にわしかいったと

申してくれ。いちばん大切なは教学……そしてその教学をしっかり掴んで生きる後継ぎの育て方……これかつい怠りがちな急所てあった……七十四歳になって家康のしみしみと感じた一条はこれてあったと伝えてくれ」
「かしこまりました。したか大御所さま」
「何なりと、今宵は遠慮なく訊くがよい。わしもこなたに、よう話しておいて帰りたい」
「こんと上洛中の出来ごとて、一番大御所さまの御意に召さぬことは何てこさりましたろっ……それを伺いおいて、向後の自戒に致しとう存しまする」
「いちばん気に入らなんだことか」
「は……はい」
「気に入らなんだことは四つある。その第一はわすかな間にすっかり戦か下手になったこと……関ケ原から十五年、これは大きな驚きてあったそ」
「やはり、泰平の続いたための油断……」
家康はそれには直接答えすに、
「戦か下手になれは弱くなる。弱くなると自信を無くし、自信かないと戦の手口は残酷になってくる。武器か進んているのに、戦う人間か、臆病て残酷になったのては眼もあてられぬ。これについては後々柳生又右衛門に、改めて考えさせるつもりしゃか……その第二は、徳と法との考え方の錯倒であったぞ」
「徳と法……てこざりまするか」
「そうじゃ、将軍はじめ家老ともの考え方はあへこへになっている。法治の要は、徳か先か法度

か先か？　その方なとも逆さま組てはないか勝重。とうしゃ。これか逆になってくると、やたらに威信をいい立てる」

そういうと、家康の視線は意地わるく勝重の上に停まった。

六

勝重は狼狽した。

家康か何のために自分を呼んたのか、それか次第にハノキリして来ているたけに、

「――徳と法と何れか先か？」

そう言われるとひやりと胸に白刃を当てられたような自責を感する

実は将軍家に、二言目には「威信を――」と言い立てた者の中に、勝重も入っていた

他の大切さなとは充分に知っている。それは当然のこととして、諸侯に幕府の威信を浸透させておかなければ……と考えたのは、側近の者にも譜代の者にも共通した考えてあった。

家康はそれか第二の不満てあったというのてある。

「わかるてあろう勝重」

家康は意地わるい眼をそらさすに又言った

「法は、必要によって他人をしはる縄なのたて」

「仰せの通り……」

「その縄をかけて自由を奪ってゆく側に、納得出来ない不仁義の所業かあってもよいと思うか」

「それは、仰せまてもなく……」

「そうであろう。父自身が節倹しながら、その家族に奢りを禁ずる　奢りを禁ずる法度を定める以前に、父の垂範が立派ならば、殊更に威信などを言い立てずとも、家族の者どもは、快くその法度を守るものじゃ」
「御意のとおり……と、存じまする」
「ところが、その逆であってみよ。よいか、泰平を希うということは、無意味な殺傷を止めよ、人々をよく生かせ……ということじゃ」
「はい」
「その泰平を希う筈の人々が、殺さいでもの者まで殺してのけた……これは実は、武力に自信が無いものの臆病な残酷さに通じてゆく」
　勝重は思わず眼を伏せてしまった
　臆病……と言われたことが、身も世もなく恥かしかった。
　殺さいでもの者まで……というのは、言うまでもなく、秀頼や淀の方や、そして国松丸を指しているのであろう。
　それを許すなと、つねに言い張っていた者は臆病者……さすれば将軍秀忠を臆病にしてのけたのは周囲の重臣たちであったという皮肉になる。今日になっては、勝重もその埒外にあるとは言い得なかった。
「よいかの、法度が先か徳が先か……これをしっかりと腹に入れておかなんだら、臆病さを威信で飾る残酷者になりさがる。わしが戦が下手になって、臆病になったと申したのはそのあたりのことじゃ。よいか、徳はのう、わが身をつねって他人の痛さを知る人情に発するものじゃ。その

人情をよく噛みくだいた生き方が徳になる　その徳が最初であって、法はいわはみんなの納得しあう申し合わせ……ということじゃ」

「………」

「その申し合わせを威信や強制で通さねばならなくなった時は悪政・・悪政はやがて乱世に通ずる。よいかの、善政というものは領民たちの納得に始まるものだ……それゆえ、大名の側から言えば説得力じゃ……説得力の裏にあるものは、その大名の日々の生活の中に積み蓄められた徳……というじゃな、わしが今度、武家法度十三ヵ条を布令させたのは、その説得力と、徳を、わが身でもって見せねばならぬとする神仏への誓いだということか・・」

七

家康に、思いがけないところで武家法度のことを言い出されて、いよいよ勝重は狼狽した。

彼もまた、この条々を決定するおりの論議の席には加わっていた

しかし、それはどこまでも武士階級の妄動を禁止しようとする、秩序維持のための法令であって、その裏に家康の、如何にも人間らしい、神仏への誓いが潜んでであろうなどとは思っても見なかった。

それにしても、法令はそれによって縛られる被治者の納得のうえになければ無意味なものとは、何と味わい深い洞察であろうか。

「——善政は被治者の納得と、統治者の説得力の上に成り立つ……しかもその説得力は、統治者の徳によって生まれる」

と言うのだ。これは、よい所司代てあろうとして、日夜精励しているつもりの板倉勝重に、いちどに眼を開かせるほとの的確な指摘てあった。

(まさにその通り―　それてなければ上下一体の協力など生まれて来る筈はなかった……)

「納得と説得力……」

思わす口に出して呟くと、

「第三番目の不満は、これは家康自身への怒りてあったわ」

家康は、自嘲の笑みを唇辺にうかへて、又その眼を曇らしてゆく様子てあった。

「わしは思いあかっていたのた。慢心じゃ。この家康ほとの者かよくよく考えてしたことゆえ、もはや大丈夫……と、思うていた。その怠慢、その甘さ、これはとのように叱りつけても叱りたりないほとの油断てあったわ……」

たまりかねて勝重はさえきった。

「大御所さま、その儀ならば、もはや、伺わすとも……」

「わかっているかの。わしか、とれたけ激しくわしを叱ったかか……」

「はい……それゆえ、第四番目のこ不満を伺わせて頂きとう存しまする」

「四番目か。いや、実は、その事についてこなたを呼んたと思ってくれ。それについて……相談したいことかあっての」

「それについて……はい。仰せ聞けのほと」

「他でもない」

家康は、ひとく軽い口調て、

「上総介忠輝かことよ」
と、嘆息した。
「上総介さまの儀は、将軍家にご一任とか」
家康は悲しそうにかぶりを振った。
「将軍家には裁きされぬ。いや、将軍家に押しつけようとしたはわしの誤り、わか子のことは、やはりわしか責を負うべきたった」
勝重は再び全身を硬直させて、息をのんだ。
この問題か、ここで再ひ蒸し返されようとは思っていなかったのた。
何と言っても父子の間のこと、おそらく将軍家も、家康の機嫌のよいおりに取りなす気ているのに違いない……と、思っていた。
(それが再び問題になる……)
と、すればそれは、悲しいうえにも悲しいことに違いなかった。
(それて、時々戻ぐんていたのてあった……)
「勝重、謹んで承りまする。上総介さまを、な……何と遊はすご所存やら」
言いなから勝重は、自分の声の震えに怖えて、いっそう固く、息か詰った。

八

勝重は、実は家康や秀忠の側近中ては「忠輝問題――」の底に潜む事情を、いちはんよく知っている者の一人なのだ。

（上総介とのは何もご存知ない……）
しかし、大久保長安が死亡して、その屋敷から発見された小箱に納められてあった連判状は、勝重もまた見せられている一人なのだ。
その連判状は切支丹大名が結束し、将軍秀忠を廃して忠輝を戴き、イスパニヤ王と手をたずさえて世界に乗り出そうという恐るべき陰謀と風評されている。
大久保長安は、その貿易資金と軍費にあてるため、おびただしい黄金を秘匿したかどによって罰された。いや、長安の一族だけてはない。この連判状に名を連ねてあった人々は、大久保忠隣にせよ、里見忠義にせよ、石川康長にせよ、みなその封を奪われてしまっている。
板倉勝重はそのおり京の切支丹狩りがあまりに苛酷をきわめたので、そっと船数隻をやとって、在京の宣教師を長崎まておとしてやったほとてあった。
世間の噂は、それからも暫くは消えなかった。
長崎駐在のカピタン・モロが、ポルトガル王（イスパニヤ王に同じ）に奉った密書が家康の手に入ったのだともいわれ、その写しというのも勝重は見せられている
その文書には、
「――カソリック教徒が結束して、イギリス、オランダに接近しようとする日本王の家康を殺し、その長子の将軍を倒して、別の太子忠輝を擁立することに決定した。よって、前約を守るため、軍艦兵員を至急日本に送られんことを……」
という露骨なものであった。
勝重は、そうした一連の事件に一つの大きな疑問を抱いている。

（これには大きな陰の演出者かあり、それか単純な戦国武将を、うまうまと罠にかけたものに違いない）と。
その演出者は、果たして、ソテロてあったか？　それとも大久保長安か、伊達政宗か？
何れにせよ当の忠輝自身は、関知しない間に、この御家騒動の主役を割り当てられてしまっていたのた……
（問題の根はやはりそこに発している）
そう思うと、忠輝も哀れてあったし、家康も気の毒てならなかった。
「上総介はのう、やはり許しておけぬ者しゃ」
家康は、顔いろの変わった勝重から視線をそらすと又いった
「よいか。忠輝の、今度の出征、郷国からの順路かわるい」
「出征して来た順路と仰せられますると……？」
「よいか、高田から大坂攻めにやって来るのた。戦に遅れまいとすれは順路は自然に決まってくる。高田から越中へ出て、加賀、越前、近江、大津……と進むか最短距離しゃ。それを忠輝は、越前から近江へ出て、美濃から伊勢へまわっていった。そして、伊勢、伊賀から大和へ出て、金剛山越えをして大坂へ……これて肝心の戦に遅れたのたから、これをそのままには捨ておけまい」
「ても、それは伊達とのかお側にあって……」
「そのことしや。誰か側にあろうと、このような大迂回をしてのけて戦機を誤る者に武人の資格は無いてあろうか」

九

家康の眼に又々涙がふくれあがった。
勝重は何となくホッとして、言われる前にまた丁字(ちょうじ)を除(と)った。
切支丹問題か、長安事件を言い出されるのではないかと案じていたのに、今度の戦のことだったのでいくぶん心が軽くなった。
こんどの戦の遅参(ちさん)だけならば、何とか取りなしようがあるであろう……。
「よいか勝重」
家康の声には力が無かった。
「罪状は、この遅参の他にあと二点じゃ。もう一つはそれ、参内(さんだい)のおりの川干し。更にもう一つは、将軍家の家来を斬ったこと……表面の理由は三つで充分であろうが」
「それならば……」
と、勝重は、探(さぐ)るように言った。
「ご処分も、ごく軽くて済みますわけで」
「いやいや、そうではない」
家康は首を振った。
「これが二万石や三万石の者ならば軽くてよい。が、忠輝は六十万石の太守……わしの子だからと言って、器量もなく、不都合(ぶつごう)のあった者をそのままさし許したとあってはわしの生涯の瑕瑾(かきん)になろう」

「それはしかし……」
「あとにはまた、尾張もあれは遠江中将や鶴千代もあることじゃ　ここで厳しく筋を通しておかねばならぬ。いや、その事では、わしの心はもう決っているのじゃ」
「決って……と、仰せられまするとっ」
「よいか。いま征夷大将軍はわしではない。六十万石の大守の正式の仕置きは当然将軍家がなさねばならぬ。が、将軍家はその方も知るとおり、こんどの戦が、ことごとく父の意に叶わなんだ事を察して、ひとくわしに遠慮してござる。於千がことでもそうであったが、上総介がことでも同じじゃ……これをこのまま抛っておいては天下の示しがつくまい。よって隠居のわしは駿府へ着くと同時に、先ずもって忠輝に永対面禁止のことを申し渡すぞ」
「あの、永対面禁止……」
「そうじゃ。この世では、もはや、あれには対面せぬ。父がそうした覚悟であることを、将軍家にハッキリと知らせておかねば、肉親だけに罰しにくかろう。よいか、わしの心はもう決ったことじゃぞ」
勝重は再び返事が出来なくなった。
永対面禁止……もはや余命いくばくもないことをよく知っている筈の父が、その子と今生では対面せぬ……いったいそのような自虐めいた不自然な我慢が何をもたらすというのだろう……？
「そこでこなたに相談なのじゃ」
家康は、まだ家康の意をはかりかねてとまどっている勝重に、思い切った様子で言った。
「この永対面禁止の申し渡しじゃ。これはここを発って駿府へ着くと同時がよい。忠輝は伴って

ゆくゆえ、生母も駿府にあることとなり、帰り着いたら、あれは早速挨拶に罷ろうとするてあろう。その出ようとするところへ使者を遣って申し渡す……その使者じゃ。何故父かこのようなことを致すか、無言のうちに、父の苦しさを伝え得る使者……正純てはならぬ。直勝や、重昌てもならぬ……笑うてくれるな勝重……わしはあれに逆上して、この上恥をさらさせたくはない……その使者には誰がよいか、それかこなたへの相談なのじゃ」

そう言うと到頭家康は、顔をそむけて泣きたした。

十

勝重はわなわなと、全身をふるわせなから、家康の言葉の意味をさくりつつけた。

永対面禁止……

それか父にとってとのような悲しいことてあるかは家康の涙か語り尽して余りある。

(何のために、このような決心を……?)

このような決心をして、それを実行していったら、当然秀忠は、この弟から六十万石を召し上げて、切腹を申し渡さなければ済まぬ結果になって行こう。

秀忠にその決断は付けかたい。と見てとって、先す自分の意志を示す……と、すれは、父かその子を極度に憎んでいるかに見える。

(いや、そんなことはない!)

勝重は不意に胸へ熱鉄をあてられたような想いて、鼻の奥まて痛くなった。

(父か子を焼こうとしている……忠輝は、使者によっては狂乱もしかねまい、そう知っているゆ

え、つかつな使者は差し出せぬと、この父親はハノキリいっているのた）
「恐れなから……」
額にしわしわと脂汗の滲み出るのを意識しながら、勝重はもう一度問い返そうと心を決めた。
「そのこ処分、今一度思い返して頂くわけには……」
「それはならぬ」
「さりとて、これはあまりにも平素のお言葉に違うこと……第　に不人情、第二に不自然、勝重、上様のお心たけはよくよく将軍家に言上致しますれは」
「勝重よ」
「は……はいノ」
「考えぬいたことしや。問いに答えよ。使者には誰かよいと思うそ」
「ては、どうあっても今生てはこ対面を」
「そうしや。この父にも、しのひがたい想いの慎みかあった……その事を、将軍家にも、それから、義直以下の子たちにも……いや、天下、神仏……ありとあらゆる者に証しを立てておかねばならぬ。これはの、秀頼を死なせたわしへの天罰なのしゃ」
勝重はキョノとして、思わずあたりを見回した。
（やはりそうてあったか……）
そういえば、侍女たちの間ては、時々家康の居間のほとりに淀の方の亡霊か出ると囁きあう者もあった。
（まさか、そのようなことに怖えるお方ては……）

しかし人間の良心の疼きは、時に亡霊以上の亡霊にすすんで出逢うかも知れない。
たか、そうなるといったい忠輝の不運不幸はとうなるのであろうか？
忠輝は、自分からすすんで大久保長安という傅役を近づけたのでもなければ、伊達政宗の姫を選んで娶ったのでもない。
すへては家康の眼かねと政略て押しつけられ、そこから不思議な呪いか芽生え育って、こうなったのてはなかったか……
「おそれなから……」
と、勝重は又いい返した。
「それて、上様の神仏への証しは立ちましょうか、上総介さまのこ不運はとうなりましょうや。あまりにこれは片手おち……やはり上様はお子に酷すきる親のそしりを……」
「申すな勝重……その報いならは、もう、このように受けているわ。ここではのう、鬼になった気て、わしの相談に答えてくれ。家康か頼むのしゃ」
たが、その時には、また勝重には、家康の本心はわからなかった。

十一

（子は可愛いと言いながら、やはり人間は利己の垣根を越え得ないものてあろうか？）
勝重は迷い続けた。同し子の中ても、愛情に片よりかあるのてあろうか？
事実、尾張の義直以下の三子に対するのと、今度の忠輝に対する処分とては差かありすきる。
一方は幼いゆえに素直てあり、一方は覇気にあふれた性格ゆえに言葉を返す場合もあった。し

かし、何れも同じわが子なのではないか。

（どうして、忠輝だけに、このようなきびしさで？）

「勝重、わかってくれたであろうな」

家康は、弱々しい声で言った

「あれが伊達家の側にあっては、将軍家の周囲がおさまらぬ。政宗と忠輝……といったわけで、将軍家の側近を束にしても足りぬほどの力を持つ。これは　忠輝の場合は、天命であった……と、思うてくれ」

「それは……それは、理不尽でござりまする　上総介さまを伊達に近づけたのは、恐れながら大御所さまにござりまする」

「勝重よ」

「はいっ」

「近づけたのはわしでも、伊達の人形にされてしもうたのは忠輝じゃ。忠輝の気性の中に、兄を敬い、兄を立てる用意があったら、こうはなるまい・・考えぬいたことじゃ。よいか、忠輝かいとおしいからと申して、折角ここまで来ている天下を乱してよいわけはあるまい」

「すると……すると　上様は、上総介さまをそのままにしておいては、伊達と結んで乱をなす……そうご覧なされておわすので」

「乱をなす……と、までは申しておらぬ。そうなっては一大事ゆえ、先ずわが子の方から除いておくのじゃ。よいか、伊達の家領は実質は百万石以上、それに高田の六十万石がひとつになってみよ、それこそ長安めの作ってあった連判状が活きて来る。うわへはとにかく、今度の戦いぶり

から見て、天下の諸侯ことことくか、またまだ将軍家に心の底から服しあるとは申されまい」
言われてはじめて、勝重は口をつぐんだ。
（そこまで考えての断てあったか……）
これはたしかに一つの波瀾の根てあった。
「仮に……よいか。仮にフィリップ三世か、軍艦を派遣して日本を攻める……というようなことかあったとせよ。伊達か起った。それにまたまた信仰を捨てきれぬ切支丹大名か呼応した……そうなるとこれは大坂の二の舞じゃ。わしはそれに備えておかねはならぬ。とのような不祥なことか起ころうと、わか力量て鎮定する。それてなけれは征夷大将軍の責めか果たせたとは申せまい。考えぬいてのことゆえ、ここては鬼になってくれぬか」
勝重は茫然として家康を見返した。
「わしはのう、秀頼母子を助け得なんだ。わか子か次の禍点にある……そう知りなから、これをそのまま見のかしては、それこそ太閤に合わす顔もない道理……こなたならは、分かろう筈じゃ」
「わかりましてこさりまする」
「わかってくれたか……」
「は……はいっ」
勝重はわれを忘れて顔を蔽った。家康か全身をふるわして泣いているのを、見るにしのひなかったのた……

十二

「わかってくれたら、これを申し渡す者の人選しゃ。正純てはなるまい　正純は理詰めにすきる。さすれは忠輝の気性ゆえ刃傷沙汰にもなりかねぬ」

家康は、しはらく身を震わしていたあとて、呟くよっに言い出した。

「かと申して、利勝（土井）からては、兄の憎しみと受け取ろっし、直勝ては口下手すきる。情を伝えて理に服させる……成瀬か安藤かと考えてみたのたか、これ等はみな弟共の付家老……されは彼等の陰謀とも感しかねない。そこてこなたかよい……と、思うたのだか、こなたは当今都に無くてはならぬ者しゃ。それゆえ、こなたの代わりにのっ、事を荒立てす、忠輝を説き伏せうる者……」

勝重はもうその時には、胸てあれこれ人選にかかっていた。

（何といっ辛い立場の使者てあろうか……）

理詰めに言って通しることてはなく、情に溺れて口に出せることてはない。

永対面禁止……

今生て対面は叶わぬ――なとという不思議な処罰を考え出したものか、家康の他にあったてあろうか……？

家人に不正かあったおり、何日間か対面を許さなかった例は大楠公にあった。すると、その家人は林しさに耐えられす、二度と過ちを繰り返すことはなかったと伝えられている。

か、今度の家康の意志はそうした矯正の意味を含む仕置てはない。これから改めますると、忠

輝か素直に言った時に、いったい、何と言って説明をすればよいのか……？
「とうしゃ心当りは？　わしと共に駿府へ戻る者てなければならぬか」
「おそれなから、この役目、松平重勝との五男、勝隆とのては如何なものてこさりましょう」
「おお、出雲かよいと思うか」
「勝隆とのならば、まんさら他人てもこさりませぬ。それに政治向きの事には、かかわりないこ仁ゆえ、年齢も近し、温厚な人柄なり、互いに語りあうに最適かと」
「そうか、重勝か伜にするか」
松平重勝の五男勝隆は、鳥居忠吉の娘の子。したかって家康には血縁にあたっているし、年齢も忠輝とほほ同してあった。
「それかしか、先すもって勝隆とのに会い、事情かくかくと、よく説明しておけは宜しかろうと」
「そうか……そなたかそうしてくれるか」
「はい……そうせねはこの役目、誰も引き受ける者はないかと存しまする」
「そうてあろうな……」
家康はそこまで言って、肥った肩を沈ませてため息した。
「わしの方へはもう一つ難儀かある。それはあれの母を説くことしゃ。茶阿をな」
「お察し申し上けます」
「忠輝は男しゃ。か、その母はのう……」
「は……はい」

「ては勝隆かこと、しかと頼んだぞ」
「ご期待に添いますように」
「むろん内密ての、世間に洩れてはわか家の綻び……その代り、このあとわしは決して口出しせぬ。あとは将軍家の御意のままに……」
板倉勝重は次第に落ち着きを取り戻した　しかし落ち着けは落ち着くほと、家康の顔を見るに耐えなくなった。
（何という不幸な父てあろうか・・）

十三

板倉勝重は家康の居間を出ると、重い心て大手外の陣屋に松平勝隆を訪ねていった。
夜中ながら、このままては眠れぬ気かしてそうせすにはいられなかったのた。
「二人だけて一献汲みたい。今宵は所司代屋敷にお泊りある気てご同道願いたい」
そういうと若い勝隆は二つ返事て承諾した。
或いは尊敬している先輩に、武辺噺を聞けると思ってよろこんたのかも知れない。
「御用繁多のなか……悠々閑ありというところて」
「さよう……なことてあろうかの」
連れ立って所司代屋敷の門をくぐると、勝重は改めて二条城をふり返った。
「実は、いままて大御所さまの許にあっての。いささか息の詰まったところしゃ」
「大御所さまは、幾日ごろ駿府へご帰館か。またお洩らしは？」

「さよう。ご出発は八月三、四日の頃になろうかの。まあ、一献汲みながらゆるりと話そう」
「思いがけない事で。ご造作を相掛けます。退屈しきって居りましたので」
勝重は居間へ通ると、すぐさま酒盤の用意を命じ、酒が出ると人払いをしてのけた。
「さ、おくつろぎ下され。涼風が立ってよい季節じゃ」
「しかし、涼風が立つと故郷が思い出される。軍旅というは、戦が終わると無聊なもので」
「ところで勝隆とのはこのたび出雲守にご任官なされた由でござったの」
「はい。大した戦功もないのに、面映ゆい思いでござる」
「いやいやさにあらず……ところで勝隆とのは、上総介さまとは　かくべつご別懇とつけたまわったが……」
「いかにも同じ松平のご一門・・ということで。それに、われ等の母が、よう浅草の屋敷に出向き、子供のおりから伴われて出まいたので」
「最近お目にかかられましたかな」
「最近……そう、五、六日前であったか　川干しの獲物を下された。そのお礼に」
「また川干しにご執心でござるか」
「そういえば、上総とのは川干しで大御所さまに叱られたとかでござった。一緒にご参内を、と申されて来たおりに、川干しに出かけて留守したとかで……」
そういうと勝隆は屈託なげに笑って、
「あのようにご闊達なお方でも、大御所さまは怖いと見える。ハハ……」
勝重は黙って相手の盃をみたしてやりながら、いったいどこから用件に入ろうかと思い悩ん

だ。
「さ、もう一献お過しを……ところで出雲とのは、慶長十八年にあった大久保長安の私曲事件をご記憶かな」
「大久保長安……いくぶんは。当時父に聞かされてこされれは」
「あの事件が、実は、まだほんとうに解決して居らぬことを、ご存知かな」
「え!? またあの事件か……」
「さよう。実はそれについて出雲とのに一役買って頂きたく、それてお招き申したのしゃ。いや、肩の凝る話ての」
さりげなくいって、勝重はまた、あわてて勝隆の盃に酒をついだ。

十四

一瞬、勝隆の表情は締った。
大久保長安事件か、まだ解決していないといわれて、ギョノとするものかあったらしい。
というのは、彼の母か、叔父、姪というよりも姪の方か年上の姉といった感して、忠輝と親しんて来ていたからに違いない。
「心にかかることをいわっしゃる。大久保事件かまだ解決していないとは……?」
「されば……」
人を裁くことては当今日本一……そういわれて来ている板倉勝重には、相手の不安か手に取るようによくわかった。

「結論から申せば、これを解決致すには、出雲との、御貴殿に一役買って貰わねは相成らぬ。よろしゅうこざるかな。これは決してこの伊賀の一存てはなく、実は大御所さま、血の涙を流された後のこ判断なり、ご内命なのたとお受け取り願いたい」

松平勝隆は無言で姿勢を改めた。

（かなり予備知識はあるらしい……）

と、勝重は思った。

大御所の内命……といったたけて、彼の全身へはふしきな緊張か感しられる。

「したか……」

と、又勝重は瓶子をとりあけて、

「これはたたの内命を伝えれはよいというような簡単な問題てはない。とうすれば、この事か改めて世間の噂にならず、おたやかに済むか、それについてのこ相談……第一案、第二案、第三案と、いろいろ考えてかからねはならぬ大事てこされはのう」

「ふーむ」

勝隆は低く唸って、また盃をとりあけた。そしてはけしく首を振って自分の妄想をしりそけなから、

「申し聞かされたい。それかしはまた若年、分別も思慮も足りぬものとして、申し聞かされたい」

とといい足した。

そうした姿の中に、板倉勝重は、ふっと若い日の生ましめな家康の姿を思いうかべた。

（やはり慎重なお方だ……）
「大久保事件と上総介さまのご関係を、出雲とのはとの程度までご存知か、それかしにはようわからぬ。といって、あれこれ話していてはきりのないこと。わしは先ず大御所さまのご決定からお伝え申そう。腑におちぬことは何なりとお問いいたしあるように」
「心得てござる。して、大御所さまご決定とは」
「大御所さまには、都では事を荒立てず、駿府ご帰着と同時に、上総介さまを、この事件のきまりとして、永対面禁止という不思議な処分をご決意なされてござる」
「永対面禁止……？」
「この世ての対面は相叶わぬ。いや、未来永劫、父と子の対面は相叶わぬ……それほど大きな不都合か、子としての上総介にあった……というご解釈でござろうな」
「ふーむ」
「そして、それを申し渡す使者、これはご貴殿をおいて他にあるまい。それゆえ、この伊賀守勝重に、事情を説いて申し付けよと……」
「お断わり申す！」
「な、なんといわれる!?」
「この勝隆は器量不足。上総さまか、身共の申様などご納得なさるものではない。されはこれを討果たさねは相成らぬか、その腕も自信も身共にはない。お断わり申す」

十五

「ハハ……、そう気早に仰せられな」
板倉勝重は笑って瓶子(へいし)をとりあげると、又酒を注(つ)いでやりながら笑ったことに悔いを感じた。
(一応は断わられる……)
それは予期していたのだが、老獪(ろうかい)な先輩にまるめ込まれたという感じを与えて済(す)む話ではなかった。
「大御所さまは……」
と、改めて生(き)まじめな顔になり、
「このことをこのまま捨てておいては眼は瞑れぬというお気持ちらしい……いわばこれはご遺言(ゆいごん)、それを格別のお眼がねで勝隆どのにお命じなさる」
「いや、何と仰せあろうと、この儀ばかりは……」
「勝隆どの」
勝重は浴びせるように語気を強めた。
「かような話に立ち入るのは、伊賀にとっても迷惑至極(しごく)……と、申して、お断わり申し上げたら、来年はまた合戦になりましょうぞ」
「え!?　合戦に……」
「さよう、こんどは戦場は江戸から東……いや、或いは日本中に波及(はきゅう)するやも知れぬ。ご貴殿とて、うすうすそれは予感しておわす筈じゃ」

「ふーむ」
また勝隆は唸りながら盃をとりあけた。
勝重はそれを横目て見やりなから、
「大御所さまはの、この戦ひとつ、とうして起こさすに済まそうかとご苦心なされ、辿り着かれたギリギリのご思案か、この上総さまへの永対面禁止……つまりこれは、わか子とわか身て苦を分け合うて、天下の無事を計ろうと遊はす菩薩行……そう見たは伊賀の眼の誤りてござろうか」
「……………」
「他のことならはとにかく、そうわかってはご辞退はならぬ。それて実は、伊賀からすすんてお身の説得役を引き受けました」
「………」
「むろん納得のゆかぬところは、重々ご説明申そうほとに、あっさり断わるとはいわす、この長夜、ゆっくり考えて……夜明けまてかかって……肚をお決め願いたいのじゃ」
勝隆はぴくぴくと頬の肉をけいれんさせなから何かいおうとしては、又黙った。
「急くことはこさらぬ。さ、もう一献」
「すると、伊賀とのは……」
「はい。何てござるな?」
「だ……だ……伊達……とのに戦意ありとご覧なさるか」
「さよう。有るにも無いにも、はじめからあのご仁、戦意なと捨てては居らぬと思うています」
「ふーむ」

「今度の戦ふりもまことに奇ノ怪。道明寺河原の戦には間に合わず、茶磨山攻めのおりには味方の神保勢をみな殺しに仕った。いや、それたけてはごさらぬ。ひそかに黙契あった神父ポルロと申す者か、陣中に駆け込んて助けを乞うたを謀殺しようとして蜂須賀の陣に取り逃してこさる」

「…………」

「この神父の口述によれは、大久保長安に、ああした事件を起こさせた張本人はみなこれ伊達……つまり事件は、あのこ仁の胸中にまた脈々と活きてあった　おわかりなさるかな勝隆との」

松平勝隆は、はしめてコトリと盃をおいて勝重に向き直った。

十六

「板倉伊賀守とのに借問申す」

それは不思議な若さの切口上たった。

「いまのお言葉……伊達政宗に叛心ありとのこ断定は、大御所さまのこ断定なりや、それとも板倉どののこ意見なりや。その儀を先ずもって承りとうこさる」

勝重はおごそかに答えた。

「恐れなから、双方一致の意見てごさる」

「されは次にお問い申す。それか、上総介さまご処罰なくは、何として戦になるや？　そもそも戦は、仕掛ける者と受けて立つ者とによって開かれる。伊達より仕掛けるか先か、それともわか方より討伐に向うか先か？　又そのキノカケは如何？」

勝重は思わす微笑しそうになり、あわてて表情を引きしめた。訊ねたい事の意味はよくわか

る。か、それにしても何と性急な煉りついたような姿勢であろうか。
「ご質問は二つのようでござるか、その何れにもせぬために、大御所は、上総さまを犠牲になさるお覚悟を決めさせられた……ここが大切な話の芯でござればお忘れなく」
「ふーむ」
「上総さまのご気性はご存知の通り……誰の眼にも将軍家より荒く勝気なお生まれつき。兄君の家来の長坂某まで斬り捨てなされた。このご気性が、悲しい天命の一つでござろう」
「天命……のう」
「それが伊達政宗の感化をうけると何うなるか？　大御所がお亡くなりなさると、これは兄弟喧嘩と見せかけた伊達の乱に発展する。現にホルロと申す神父は、伊達を大坂の味方と信じてその陣中に助けを求めているのでござる」
「……」
「それより大御所は、上総介を伊達の婿に致したのは一生の不覚と仰かれてござる。何をおいても、先ず上総介を、伊達の身辺から遠ざけねば、大坂攻め以上の悲しい戦をせねば済まぬことになろうと……」
言っているうちに、板倉勝重は、ほんとうに涙が出て来て止まらなくなってしまった。
「おわかりであろう勝隆どの……事を荒立てず、伊達に乱を起す隙を与えず……泰平の世を永続させるためには、わが子を罰する以外に道はないとお覚悟なされた……ここで永対面禁止となれば当然所領は召上げられ、謹慎蟄居は言わいでものこと……そこで御台所はご離縁のうえ、伊達家へお引き渡し……上総さまにはお気の毒なから、これで戦乱のおそれはひと先ず無くなるの

しゃ」
　松平勝隆は、自身が忠輝でもあるかのような深刻な表情でじっと勝重を睨みつけた。
　次第に彼も、「永対面禁止――」という、ふしぎな処罰の意味するものがわかって来た。
　だが、感情では絶対に納得出来ないものが幾つか心に残ってゆく。
（問題は伊達の叛心……）
　それについては、彼も奇怪な噂はしばしば耳にしている。故太閤の戦ふりをハカの一つ覚えとせせら笑ったり、大御所を「運のいい男――」とあざけったり……そうした男ゆえ、或いは婿にすすめて将軍家と喧嘩させる位のことはやりかねまい。
　が、それにしても、そんな不都合な男の存在を、大御所がどうして一掃出来ないのか？　何故自分たち父子の犠牲で、そっとしておこうとするのか？　それが歯痒く口惜しいのだ……

十七

「どうしゃな。おわかりなされたら、お断わり申す……とだけでは済まぬ筈」
　勝重はまた言葉を続けた。
「あとの戦乱一つを消そうためのご下命。充分働き甲斐のある男の仕事と思うのだが」
「伊賀守どの。もう一献下され」
　松平勝隆は冷えた盃をぐっと一気にあけて、
「大御所さまは、何でそのように伊達をおそれるのでござろう？　何故、ひと思いにご征伐を」
　急き込んで訊ねられて、勝重ははじめて笑った。

「それかお身にわかりませぬか」
「わからぬ！　伊達を無事に助けおくため、何て大御所か泣いてわか子を罰さねばならぬのか……」
「さればお答え申そう。上総さまか婿としてこざるからしゃ」
「すると……すると、ご離縁なされたうえて、改めて討伐なさると言われるのか」
「いやいや討伐もまた戦てこざれは、それはなるまい。と申すより、上総さまを引き離されたら、伊達の叛心は消え失せましょう」
「ふーむ」
「おわかりてあろう運命の不思議さか……伊達政宗に、上総介忠輝を付けおくと龍か雲を呼んて乱になる。しかし、雲を引き離してあれば、龍も池中に蹲るより他にないのじゃ」
「さらはもう一つ……上総介さまは、永対面禁止の後は何となるや！？　領地没収、謹慎蟄居と申しても、離縁の後はお取り立て……」
「それはわかりませぬ」
勝重はあわてて手を振った。
「それまでが大御所のご処分。それ以後は将軍家のこ存念。切腹せよと仰せられるか、それとも……」
言いかけて、勝重は首を傾げた。
「永対面禁止でこざれば、後々お取り立て、ということは万々こさるまい。父君か永代対面を禁したほとの者を、孝心ぶかい将軍家か一存て取り立てては、父君のこ意志にそむく」

それを聞くと勝隆は顔をゆかめ、膝をつかんて喚き返した。
「すると、上総介さまはスタズタしゃ」
「それゆえ、大御所さまもお泣きなされた……」
「わかってこざる！　ご命令とあれはわれ等も否やは申しますまい」
「お引き受け下さるか」
「引き受けぬと言うても承知なさるまい。死ねはよいのしゃ。死ぬ気てあれは……」
とうやら酔いか発したらしく、松平勝隆は、不意に片肩あけて歯きしりした。
「説く！　こ納得下さるように……しかし相手は名うての上総介さま……わかったとも、謹んてお受けするとも申されまい。その時にはこの勝隆、黙って上総介さま御前て諸肌ぬく。腹を切る。それより他に何の仕様もこさるまい。のう伊賀守との」
勝重はニコリとした。しかし頷く代わりに、
「死ぬ気てあれは説き伏せられる」
と、呟くように言ってのけた。
「父君の使者を見殺しには出来まいほとに、泣いてこ承知なさるてあろう。いや、こ承知させるたけのこ器量は、貴殿かお持ち　:それを大御所さまも信し、それかしも信してお選ひ申したのしゃ。したか勝隆との！　これは、考えれは考えるほと、大きな菩薩行、男の仕事てこさりまするそ」
そう言うと、又全身て嗚咽をこらえた。

上総の雨

一

「――向う百ヵ日の間に戦後のあと片付けを終わるように」という家康の指令は予定よりも十日近く早くなり、家康が京を発ったのは八月四日の朝であった。

この同じ日に、七月十九日に伏見を発した将軍秀忠は江戸城に入っている。したがって将軍の江戸到着と同時に家康は都を出発したことになる

この頃にはもう、それぞれの部署で受け持ちの仕事を終わった大名たちとその軍勢は、続々郷国目さして陣払いをおわっていた。

松平上総介忠輝もまた、父に続いて京をはなれた。引き揚げてゆく越後勢の指揮には、板倉勝重が家康の秘命を伝えた松平勝隆の父、松平大隅守重勝があたった。

大隅守重勝は、大久保長安亡く、傅役の皆川山城守がしりぞけられてから、忠輝に付けられた付家老で、この時には越後三条の城に住んでいた。

三条は高田よりはるかに北にあり、いわば伊達家と忠輝との、越後路の連絡路にくさびを打ちこんだかの位置にあたる。

おそらく大隅守重勝は、ここにあって、両者の関係に、それとなく監視の眼を光らせていたものに違いない。忠輝はしかし、そうした事を意に介していなかった。

彼は、大津て大隅守重勝に別れると、わすか百人足らすの家人を連れて駿府へ向った。あれ以来、忠輝は家康に会ってはいない。
父の方からも呼ひに来なかったし、忠輝の方から出向いてゆく気にもなれなかった。
(あれたけ豪気なお方も、齢には勝てす愚痴になった……)
その愚痴も、うっかり逆らうと怒りたしたり泣いたりする。したかって呼ひに来ぬ限り、そっとしておいてやるのか孝行なのたと割り切っていた。その忠輝か、軍勢を松平大隅守に任せて東海道を駿府に出る気になったのは、実のところ生母に会いたいためてあった。
生母の茶阿の局は、これからも家康の側におかれて身回りの世話にあたるに違いない。
「――お父上も老いられました。ご不自由のないよう、よう看とってやって下さるように」
むろん父にも機嫌伺いの挨拶はしてゆく気なから、生母によく頼んてゆくのかこれも孝行と思ったのた……
(何れにせよ、もはや長いことはない……)
そういえば、伊達政宗も、繰り返し京て、その事を言っていた。
「――もはや大御所もなかくはごさるまい。逆ろうてはなりませぬ。いや、大御所たけてはない、大御所の存生中は、将軍家にも決して異見かましい事は申し上けぬよう。たとえ腹の立つことかおわしても、怒りは敵と心に錠をかけさせられよ」
老人相手に口喧嘩なとして、あとに残る将軍家に乗ずる口実を与えるなといったことてある。
「――長いことてはない。もう少しの辛棒でごされは」
この言葉は聞きようによっては、父の死を待っているもののようて不快てあったか、忠輝はし

かし、これにもさしてこたわらなかった。
（舅御は、またわしを大坂城の主にする夢を捨てきれぬのかも知れぬ）
忠輝は軽く考えて、名古屋までは、父の行列のあと、一、二里ほどの間隔でついていった。
そして父か名古屋の城に入ったので、そこて彼は先になった。

二

父の家康か、義直、頼宣の二子を伴って名古屋の城へ入ったのは八月十日てあった。
（両三日、ここて疲れを休めてゆく気てあろう。それかよいのしゃ）
忠輝は自分て自分に言い聞かせなから、しかし、名古屋の城頭に燦然と輝く黄金の鯱を見た時には心か震えた。
（弟ともに、あのような見事な城を……）
それは、中秋の空か晴れきっていて、陰欝な北国の高田とは空気の澄明度か違うせいか、これ見よがしの偉容に見えた。
（わしの城とは比へものにならぬ！）
やはり自分は、父にもう一押しすべきたったと、ふと悔いに似た羨望感にとらわれた。
大坂城はいま、忠輝の希望の前を素通りして、松平忠明のものになった。
忠明は、奥平美作守信昌の四男で、母は家康と築山御前の間の長女亀姫なのだから、家康にとっては孫に当たる。
何れは幕府の直轄地になるてあろうか、それにしても、わか子の忠輝をあれほと手きびしく拒

んた城に、孫の忠明を入れるというのはとう考えても面白いことてはなかった。
（松平忠明はいま三十三歳の働き盛り、わしはまた若すぎると思われたのた……）
事実忠明の働きふりは忠輝の眼から見ても抜群のものかあった。
もとの城内三の丸に（現在の大坂城と東横堀川の間）伏見から八十ヵ町の町人を呼び寄せて市街とし、道頓堀、京町堀、江戸堀、木津川なと主要な水上交通路を整理したり、城下に散在していた寺院を天満及ひ上町の一廓にあつめたり、水帳（土地台帳）を作って街区の整頓をしたり……それは、北国て川の流れと水利たけを睨んて農地の開墾をしてゆく、高田の仕事とは雲泥の差のある腕の揮える場所に見えた。
（わしならは、大坂城の近くまて、異国の巨船か堂々と入って来て交易のやれるほとの大築港をしてのけてみせてやるのに……）
しかしこうして江戸に戻り、高田城に引っこめは、もはや忠輝は大坂とは全く無縁のものとなる……
名古屋城の黄金の鯱の偉容か、少なからす忠輝の心を傷つけたのは事実てあった。
（そうた。母者にもう一度、父の機嫌のよいおり、わしの願いを述べさせてみてもよい）
彼は、顔をそむけるようにして熱田から鳴海への関を急いた。
このあたりから岡崎へかけては、父の家康ならば、一つ一つに立ち去り難い追憶のたねか秘められてある筈たったか、このあたりの忠輝はたたの通行人に過きない。世代の相違は父と子との間を繋ぐ感覚も情感もあっさりと切り離してしまっている。
こうして忠輝は、父より三日早く駿府の屋敷に着いた。

着いてみると、そこに思いかけない喜ひの知らせか彼を待ちうけていた。
留守中に高田城内にある側室の胎から男子か出生したという知らせてあった。当然お七夜には間に合わないか、この便りの届き次第命名して頂きたいという便りてあった
この知らせは、名古屋以来の心のかけりを吹き払った。
忠輝は上機嫌て、そのはしめての子に「徳松――」と名つけるように手紙を書き、それから賑やかな酒宴に移った……

二

忠輝の屋敷に、生母の茶阿の局かやって来たのはその翌日たった。
実の母と子の間柄ゆえ、忠輝の方から城内を訪れてもよいのたか、当時の習慣てそれはやはりはばかられた。
松平上総介忠輝は、大御所家康の子てはあったか、側室の茶阿の局に「母権――」はない。胎は借りもの……という不思議な言葉て代表されているように、局は生母てあっても召使いなのた。したかって、わか子を訪ねるのにも主筋に当たる高貴なお方に「ご機嫌伺い――」という形式をとらねはならなかった。
側小姓の田村吉十郎から、
「ご城内より茶阿の局か、ご機嫌伺いに参られました」
そう取り次かれて、また酔いの覚めきらぬ忠輝は、すくまた酒宴の用意を命して、母を居間に請し入れた。

「母者、高田の城で子が産まれたぞ」
表面の形式はともかく、会えばなつかしい母子なのだ。居間の戸をきれいに開け放させて、二人の顔は笑いに崩れた。
「丸々と肥えた男のお子のよし、重ねがさねお芽出度う存じまする」
「おおご存知か。それで徳松丸と呼ぶようにすぐさま手紙を持たせてやったわ」
「それはそれは　で、その使者は、江戸屋敷から高田へ取り次がせるので」
「そうだ。ここまで来れば、その方が近いからの」
その時ふっと局は眉を曇らせた。
たぶん江戸屋敷にある正妻、嫡子のまだない伊達御前への心遣いであったろう。
しかし、上機嫌の忠輝はそれには気付かず、
「さ、久しぶりじゃ。一献仕ろう。ずっと躰はおたっしゃか」
文字どおり水入らずの酒盛りになっていった。
そういえば、局の方では、何となく気になることがあると見え、
「殿は、何故わざわざ大津から大坂へは出ずに、伊勢から伊賀越えに大和路などという遠回りをなされたぞ」
そう訊ねられたが、これも又この日の忠輝の注意をその一点に釘付けず、さらりと聞き流させてしまっていた。
「そのことか。それならばお父上の命じたこと。お父上は幾つになっても怖いからの」
これは実は、重大なことであった。

家康はこのような命令を発してない。にもかかわらず、松平家の家中の者は、みなこれを家康の命と信じて行動している。ここに一つの奇怪な行違いか生じているのだか、忠輝に、父からそうした命令かあったと信しこませたのは、伊達家の片倉小十郎てあった。

茶阿の局か、こうした事を訊ねたのは、当時駿府へも、忠輝が回り道をして戦場に遅れたという噂が立っていたからに違いない。

したかって何時もの茶阿の局ならは、ここでもう一度押し返して訊ねてみるところてあったか、局もその日は久しぶりの対面に、

「おお、お父上のご命令……とならば大事こざりますまい」

喜びに弾みきって、そのまま話題を千姫のことに転してしまった。千姫か打ちしおれて東海道を江戸へ下っていったのは七月始め……その時の姿か局の心に焼き付けられていると見え、話題はすぐにそこへそれてしまった……

四

「高田へはお子か産まれたというのに、千姫さまはそれはそれは打ち沈んておわしての。ご無理もない。女子のわらわにはわかる……」

茶阿の局は眼にいっぱい涙をたたえて、忠輝の思ってもみないことをいい出した。

「それは打ちしおれもなさろうそ。千姫にとって大坂城は育てられた故郷同様、入輿の前の記憶なとはござるまいゆえなあ」

「そうてはござりませぬ。もっと根深い女子の悲しみてござりまする」

「といいえ、もう秀頼さまのことは、あきらめておわすご様子……したが、胎のお子だけは、誰か何と仰せられようと、生命に代えてもお育て申す覚悟と、わらわには見えました」
「なに、胎のお子……!?」
「はい。千姫さまはご懐妊なされておわしたのじゃ。むろん殿はご存知あるまい」
「おお、知らなんだとも。そうか、懐妊しておわしたのか……」
「ところかそれかの、旅のご無理かたたり、駿府へ着くと同時に思いかけないご腹痛……」
「ほう!」
「早速医者を呼び寄せて、わらわは寝すに看護を致しました。たか、その甲斐もなく、胎のお子は、水に……水に、流れてしもうたのじゃ」
　そういうと、またそこに流産て苦しんでいる千姫の姿か横たわってあるかのように合掌して涙を拭いた。
「なるほと。それて局は、高田の話から、千姫とのを思い出されたのか……」
「はい。こちらはご無事のご安産……その仕合わせに引きくらへて、千姫さまは……」
「何ぞ、それから、事があったか」
「ご……ご……ご自害なさろうと遊はしました。もはやこの世に望みはないと仰せられて……」
「ふーん。なるほとのう」
「これは女子でなければわかりませぬ。わらわも殿の兄君にあたるお方か流れたおり、ほんとうに死にとうなったを覚えています」

「ほっ、わしにも流れた兄上か……」

「これはしたり、とんだ事を口走って――わらわが千姫さまのお手から短刀をとってご意見申し上げると、もはや止めてくれるな。実は夜な夜な秀頼さまの亡霊が現われて、徳川家の女子などにわが子を産ませてよいものかと、呪いのお言葉をお吐きなさる……」

　忠輝はわざと大形に身震いして、

「母者、それはまことの事か」

「むろんお気の疲れであろう。が、姫さまはそう申された。それゆえ、意地にも産んで、わが手で育ててゆくつもりであった。それがこうして流れてしもうたのじゃ。どうぞ見逃してたもれ。そして、わが亡きあとはこの黒髪、伊勢の尼寺慶光院に納めて、秀頼さまのご菩提と共に弔ってくれるようにと……」

　忠輝はもう酔いが可成り発していたので、

「不愍なお方じゃ。それはみな秀頼とのを慕う心に発した妄想……そうか、それを母者は助けてあげたのか」

　先走ったことをいって自分でも泣いていた。

　どうやら茶阿の局は、千姫から死神を追いのけるために、十日あまりもかかったらしい。

　局はしばらくその話から脱けきれず、涙を拭き拭き話しつづけた。

五

　こうして茶阿の局は、その日は日暮れ近くまで忠輝の屋敷ですごした。

二日あとには家康か戻って来る。
そのため翌日から何彼と、家康を迎える準備て忙しい
「何れこ城内て改めてお目にかかりましょう」
一度立ちかけてから、局はまた思い出したように、家康から聞かされている、すっと昔の、竹千代時代のことを話したしていた。
「このあたりを少将の宮町というて、お父上か少年の頃にお過しなされた所じゃそうな。そのころにはお父上は、みんなに三河の宿なしと陰口される人質のお身‥‥それか今てはこうなったと、城内を見回されてはお話しなさる。人の一生はわからぬものてこざりまするなあ」
それは局自身の感懐てもある筈だった。
茶阿の局はその昔、遠州金谷村の鋳かけ職人八五郎の妻、それか美貌ゆえに土地の代官に恋慕され、良人の八五郎はあらぬ罪をきせられて殺害されたのたという……
その時局は、いま花井遠江守の妻になっている、三歳の幼女を抱えて、浜松城の家康の許へ駆け込み訴えをしていった。それが縁て、気丈な女子よと認められ、家康に愛されていまは六十万石のこ親藩、松平上総介忠輝の生母になっている……
そうしたふしきなわか身の変転と思い比へての述懐たったに違いない。
「わらわなとか申すまてもこざりませぬか、大御所さまのご恩はなあ‥‥よくよくお身にしみて、こ孝養を遊ばしまするように」
忠輝は笑ってさえきった。
「お案しなさるな。孝行なと、するなと申してもして見せるわ」

「では、改めてまた、ご城内で」
「それよりも母者こそ、父上のこと、よろしゅう頼みましたぞ」
「あいあい。心得てござりまする」
　こうして、局が辞去しようとしたおりに、草履の鼻緒がぷつりと切れた。
　思えばそれが何かの暗示であったのかも知れない。事実、この母と子とのこの世で相会うこれが最後になったのだから……
　忠輝は酔いに任せて玄関まで母を見送った。
「お気をつけられよ……と、申しても眼と鼻の間を乗り物でゆかれるのじゃ。しかもここは他ならぬ駿府、挨拶がおかしいわ。ハハ……」
　上機嫌に笑いとばされて、局は鼻緒の切れたのを、忠輝にはかくしてすばやく駕籠にのりこんだ。
　忠輝はそれからも酒を汲みつづけた。
　この駿府の屋敷には殆ど住まぬ。それで女子たちも雇ってなかったので、母が帰ってゆくと遊女町から妓たちを呼ばせることにした。
「明日はお父上もお帰城なさる。ご挨拶が済めば又旅じゃ。今宵はみなも過すがよいぞ」
　何れ城内でもう一度母に会い、そこで自分の希望を、それとなく母まで洩らしてゆく気であった。
「――忠輝がもう一両年器量を磨いたあかつきには、大坂城にあって日本国のために働きたいと思っている」

と……
その事をそっと生母に耳打ちして貰えは、その後の父か、何を考えているか？　とかくの反応は得られようという胸算用てあった。
　こうして、忠輝はみち足りた気持ちて駿府ての三日目の夜を迎えた……

六

「吉十郎、お父上は無事にお着きなされたか」
忠輝はまだ覚めやらぬ酒気の中て小姓にたすねた
すてに三日目の暮れ方て、忠輝は一睡したあとてあった
「はい。ご無事にこ到着、祝着至極に存しまする」
「そうか。それはよかった。おれは明早朝、城に参ってこ挨拶申し上げる。今宵はくっすり寝かせてくれ。みなは飲んてもよいか、詰らぬ用て起こすなよ」
　そう命じて、又深い眠りにおちた。
　前夜屋敷に呼んた遊女たちは、また残っているらしかったか、忠輝か眠っているのて鼓も笛も遠慮しているらしい。
　何刻ほと経ったのか……あたりはシーンと静まり返り、ひやりと枕辺へ夜気のうこきを感して眼覚めたときに、
「申し上けます。殿！　お目さめ下さりませ」
　ほんぼりの灯をゆるかせて、おし殺した吉十郎の声てあった

「何だ……起こすなと申したろう。何刻じゃ」
「はい。また宵のうちにござりまするか、ご城内からご使者にござりまする」
「なに、城内……？　茶阿の局の許からか」
「いいえ、大御所さまのご使者として、二条城のお伜、松平出雲守勝隆どのがお見えなされてござりまする」
「家老どもは……誰ぞ、代わりに会えと申せ」
「ところが、殿直々でなければならぬ。大切な大御所さまのご使者ゆえお起こし申せといわれまする」
「大御所からの……？」
はじめて忠輝は身を起こした。
かなり眠ったつもりであったが、まだ深酔いのあとの疼きが頭の芯に残っている。
「よし、広間へお通し申しておけ。すぐに参る」
起きあがって、ウーンと大きく背伸びをしてから、素早く衣服を改めにかかった。
松平勝隆は家康の近習。だらしなく酔っていたと告口されてはまずいと思っての配慮であった。
（ははあ、事によると何ぞ下されものかな？）
着換えながら忠輝は思った。
妾腹とはいえ、男子出生、それを生母の口から聞かされて、わざわざ祝儀を申し越されたのかも知れない。
「わしの伜は、お父上にとっても孫であったわ」

そうだ！　それに違いない。
人間の連想というものは、つねに身勝手な希望につながるものであった。
忠輝はまた見ぬ嬰児のまぼろしを、覚めきらぬ頭の疼きに載せて広間へ出ていった。
松平勝隆はわか家の付家老の伜である。気のおける相手てはない。
「おお勝隆か。夜中こ苦労しゃの。して又、何としたのしゃお父上は？」
気軽に、しかし、下座に座を占めて、
「さ、承ろう。申すがよい」
その時には、また忠輝の脳裏には、嬰児のまぼろしと、眼を細めている老父家康の笑顔かのとかに重なりあっていた。
それたけに、松平勝隆か、燭台の光りの間に構え直して口上を述へ終わっても、彼にはその口上の持つ複雑な意味がはっきりとは、胸に徹って来なかった。

七

松平勝隆は、きびしい表情て、
「上意！」
と言った。
「一つ．．：大坂出陣の際、江州守山のあたりにて、将軍家お小姓、長坂血鑓の舎弟六兵衛、並びに伊丹某を慮外のかとにて成敗し、お届けにも及ばさるは不埒至極なり。二つ……次いで都において参内する際、あれこれ異議を唱えて供奉せす、嵯峨辺において川狩りしてありしは許すへか

らさる我儘なり。三つ・・六十万石の所領にて、なお且つ勝手向き不如意を申し立つるは奢りのきわみ、まことに不埒不覚悟の至りにつき、向後、永対面禁止を申し付くるものなり。元和元年八月十日。以上」
読み終わって、奉書を巻き終わる前に、
「勝隆、それは何のことた」
と、忠輝は小首を傾けて問い返した。
勝隆は黙って奉書を巻いてそれを静かに忠輝の前においた
「返事をせぬか。何たと、第一は皿鑓の弟ともを成敗したか不都合たと申したな」
「御意」
「第二は、川干しか我儘至極」
「御意」
「第三は何と申した。六十万石頂きなから・」
「不足を申し立つるは親の恩を恩とも思わぬ大たわけと、大御所さまはいたくお怒りにございまする」
「ふーむ。するとお祝儀の使者かと思ったに、おぬしは、おれを叱りつけにやって来た使者てあったか」
「御意」
「御意たけてはわからぬ。その方の申す三ヵ条ならは、このおれか二条城て、くといほとお父上にお詫ひして、すてに済んでいることしゃ　それに何ぞや　」

言いかけて奉書を開いて、
「永対面禁止……永対面禁止とは何のことた」
「生涯お目通りは相成らぬ！　と、申すことて」
「なに、生涯……何処の誰か？」
「上総さまか、お父上大御所さまにてこさりまする」
「たわけめ！」
「………」
「父か子に生涯会わぬと。父と子か……いや、子か親に　眼の前にいる子か、その親に……」
はげしくともりなから、次第に忠輝の顔は真ノ蒼になっていった
「勝隆！」
「何てこさりまする　先すその奉書をお納め下さらねは、勝隆、個人としてのこ応対はなりませぬ」
「フーム。そうか。その方はお父上の使者てあったか　よろしい　これは確かに承った。こっちへ納めた。さあ申せ！　これは……永対面禁止とは何のことしゃ」
「そのこ返事ならは申し上けました。この世てはもはや、お父上に対面は叶わぬ、浅草にこのままお引きあけなされて、将軍家より何分のお沙汰あるまて、キノとこ謹慎これあるように……そのこ趣旨かと心得ます」
「ほう、これは面白い！　ては改めて訊ねよう、父か子に生涯会わぬ……そのような、この世にあろうとも思われぬお仕置は、お父上老耄のためのたわこと、このようなものは受け取れぬと、

おれがおぬしに突ッ返したら何とする気じゃ」
すると勝隆は、生まじめな表情で白扇を腹にあてた。

八

「何だと、突ッ返せば切腹すると」
忠輝が問い返すと、勝隆はまた落ちつき払って答えた。
「御意」
「これはいよいよ面白い。いまだ曾つて聞いたこともない永対面禁止　出来もせぬことをいい出すオヤジもオヤジなら、使いに来る奴も来る奴じゃ　いったい誰が一度済んだことを、またオヤジに火を付けたぞ。将軍家はとうに江戸におわす　と、すれば、これは尾張かそれとも遠江。あの童ともに忠輝は包まれる覚えはない。とすると　」
思い出したように忠輝は膝を叩いた。
「これは忠明の仕業じゃな。忠明め、おれが大坂城を望んでいると伝え聞いて……」
みなまで聞かずに、こんどは勝隆が、ハッハッと白扇で膝を叩いた。
「すべて大御所さまのご意志に出するもの。軽はずみのご推量はお為になりませぬ」
「な、なんだと!?」
「大御所さまご老耄などと不謹慎なご放言、大御所さまは……大御所さまは、本日もハラハラとお泣きなされておわしましたぞ」
「たわけめ!」

忠輝はたまりかねて、運ばれて来た茶碗を絵襖に叩きつけた

「おれはな、この三ヵ条、みなお父上に了解を得ているのだ。この第一ヵ条は江戸に参って兄上に改めてお詫びの所存じゃ。わしだけで不足ならば仙台とのも共に詫びてやろうといっておられる。その第二は、お父上から使いが来た時、もはやおれは陣屋に居らなんだのだ……よいか、それから第三の申し条は、たぶん忠輝が大坂城を望んだことにあると思う　なるほどおれは大坂城に入りたいとは申した。しかし、六十万石が不足ゆえ、申したのではない。天下のため世界の海へ乗り出したい。そのためには、大坂が地の利を得ていると……それもしかし、お父上が不承知らしいゆえ、こっちからご辞退申し上げてある。それを今更永対面禁止　よい！　これから忠輝、お父上の枕辺へ押しかけて　このような奉書など破り棄てて、申し開きを致すわい」

「……………」

「それでよいな勝隆。あわてて腹など切ると畳が汚れる　ならぬぞ短慮は」

「あいや、しばらく」

「止めるなたわけめ！　不都合あって勘当ということならば聞いたこともある　何だこの永対面禁止……わしも越後の太守じゃぞ　そのようなたわけたことが、世間に聞こえたら戸外も歩けぬわ」

「お控えなされ上総さま！」

「な、なんだと」

「ここに書かれた三ヵ条、ただそれだけのことで、あの大御所さまが、このようなご処分を仰せ出されると思われまするか。これはただの口実　とは、お気付きなされませぬか」

「はて、勝隆めか、おかしなことを申すぞ」
「これは表向きのこ口上……泣きなから生涯わか子に会わぬと仰せられるからは、それだけの深い理由か」
「申せたわけめ！　何故、今までそれをいわぬのた。では、真実は何とあるぞ」
「存しませぬ！」
「知らぬ。知らぬ者か、とうしてこれは表向き、裏かあろうなとと小賢しく申すのた」
到頭忠輝は身をのり出して、パーンと一つ勝隆の頬を張りとはした。

九

松平勝隆は、よほとの覚悟をして来ていると見えて、頬を張られてよろめきなから、しかし怒りはしなかった。
「さ、裏かあると申したわけ、話せ／」
「話せませぬ」
「なに、さっきは知らぬ。こんとは話せぬ……とうしてそう変るのた／」
「存しませせぬ」
「またぬかすか。するとこれは、その方の父重勝にかかわりかあるのたな」
勝隆は、キョノとして顔をあげると、こんとははけしく首を振った。
「何でそのような……父なと、また何も知る筈はごさりませぬ」
「そうてはないわ。うぬの父は、三条の城にあってわれ等の監視役、忠輝が謀叛ても企てはすま

いかと、猫のように眼を光らす……そうしゃ、うぬの父か、何ぞお父上に申したのであろう」
「上総介さま！」
「何だその眼は、貴様まて野良犬のような眼をしておれを見るな！」
「あなた様は、そのようにあれこれ他人を疑って、恥かしいとは思いませぬか」
「なに、恥かしいと……？」
「はい。他人を疑う前に、静かにご身辺の出来事を思い返して見られませぬか」
「そ、それは……」
と、いいかけて忠輝も口を噤んだ。我儘ではあったが、決して暗愚な生まれつきではない。
（静かに身辺の事を思い返せと……）
父のこの奇怪な処分の原因が、自分の過去の身辺の出来事のうちにある……そういわれると、まっ先に脳裏にうかぶのは大久保長安の事件であった。
忠輝は長安か八王子の屋敷におびたたしい金銀を横領、秘匿してあったとだけ聞かされて、それ以上のくわしい事は聞かされてなかったのだ。
「すると、これは大久保長安の私曲にかかわりかあるというのか」
「存しませぬ」
「また存しませぬ……存せぬことは申すな！」
勝隆はおし返した。
「武士は存していても、存しませぬ……そういわねはならぬ場合のあること、上総さまにはお気付きない」

「なに、存じていても……すると、そなたの申す存しませぬは、その通りと、いう意味か」
「存じませぬ」
「よろしい。すると長安の私曲は、わしの命令であったとても申すのか」
「なかなか」と、勝隆は首を振った。
「そのような簡単なことではごさりませぬ」
「何と!? そのような簡単なことではない……」
「上総さまは、大坂落城のおり、切支丹の神父の一人か伊達家の家来ともに斬られようとして、隣の蜂須賀の陣屋に遁げ込んだことをご存知ごさりませぬか」
「切支丹の神父か……知るものか。そのようなこと」
「その神父か、伊達政宗は、秘密の洩れるを恐れて、わか身を斬ろうとした。そう申し立てたをご存知ない」
「秘密の洩れるを恐れて……」
「はい。その秘密とは、切支丹宗徒と伊達政宗と、松平上総介さま協議の陰謀にて、大坂方へお味方し、大御所や将軍家を討ち取る手筈てあったと」

十

「な、なんだと!?」
思わす身をのり出して、それから忠輝は大口あいて笑いたした。
「ワノハノハノハ……こりゃおかしい! そうか、そんな噂が流れていたのか。わしか切支丹宗

徒や仙台とのと結んでお父上や将軍家を」
「お笑いなされまするな上総さま」
勝隆はムッとしたように、
「上総さまは、現に戦場へ遅参なされた。そのうえ伊達勢は、大坂方の遊軍明石勢に立ち向かっている味方の神保相茂が軍勢を、背後から襲って皆殺しに致しました。疑わしさはそれだけではござりませぬ。かの神父の言によれば」
「待て！　勝隆！」
はげしい声で忠輝はさえぎった。
「するとお父上は、われ等が戦場に遅参したのは、その陰謀を成就するため……と」
「御意」
「また御意か……歯痒い奴だ。すると、その方も、父上のお疑いは、根も葉もないこととは思わぬのだな」
「存じませぬ」
「フン、よろしい。御意でも存じませぬでも勝手に致せ」だが、忠輝は訊くだけのことは訊くぞ。伊達勢が誤って神保勢と同志討ちしたのは、すでに仙台とのから父上にも将軍家にも申し上げてご了解を得ている筈じゃ」
「存じませぬ」
「そのおりに、相わかったと了承しておきながら、今ごろ、しかも、この忠輝に当たって来る。卑怯だとは思わぬか」

「存じませぬ」

「そうであろう。存じられてたまるものか……たか、何ということじゃ。仮に長安や仙台とのに、何ほどかの野心かあったにせよ、この忠輝かそれにくみする筈はないてはないか」

「恐れながら」と、勝隆は首を振った。

「上総さまは伊達家の婿にござりまする」

「婿か何た!?　舅と婿の関係と、実の父子の関係の何れか深いとそちは思うそ」

「それゆえ、蜂須賀の陣に駆け込んだ神父かその間の事、くわしく申し述へてござりまする」

「又しても神父……その神父か、何と申したのた」

「伊達とのは、大久保長安に大金を横領させ、その金をもって切支丹の諸侯をあやつり、やかて将軍家を倒してわか婿に天下を取らせ、自身は次の代の大御所に納まる気てあったと」

「ワノハノハ……又しても夢のような・・そのようなこと、仮に考えてみたところて、この忠輝か承知すると思うか。それに仙台とのは、そのような不信をなさる仁てはないわ」

「と、仰せられても、神父は証拠を示して」

「証拠・・」

「はい。伊達とのかソテロに呉々も頼んた書状の写しにこさりまする」

忠輝は舌打ちした。

「仙台とのが、ソテロに何を頼んたのた」

「イスパニヤに参らば必すともにフィリップ三世の大海軍を派遣するように取り計らえと。軍艦さえ到着せは伊達とのは信徒と共に大坂城に立てこもり、直ちに江戸征伐を開始する。呉々も大

王の海軍をと……大御所さまは薄々それを察しておられ、そしてしきりに秀頼さまに城を出よと急かれておわした由……」

勝隆は、到頭、自分の調べた限りの理由を述べたしてしまっていた……

十一

「これは、この場限りにお聞き捨てを……」

忠輝が急にふっと黙りこんだので、勝隆は又言わずにいられなくなって来た。

「事件の根はやはり大久保事件……夢と仰せあれはまさに夢……さりながら、この夢が、ありようは、あちこちてあらぬ事実と繋がってござりまする」

「ふーむ」

「現に長安は大金を隠していました。それたけてはなく、秀頼さまも署名なされた連判状が出て来ています。むろんこれには伊達との署名はない。さりながら、結城さまから上総さままでご署名なされている。その中の元老は、大久保相模守忠隣……となれば、将軍家ご側近もしっとしては居られぬ道理……しかも相模守は、大御所さまの江戸から駿府へお帰りなさる途中を要して小田原にこれを監禁、将軍職を誰そに譲らせられるよう強談する気であったと伝えられて居ります」

「…………」

「それてやむなく大御所さまは相模守をご処分。いや、それたけてはなく、加賀にあった高山、内藤の両人も遠く国内から追放されておわす。問題は尻っぽを出さぬ伊達との一人……ところが

伊達とのは、上総さまという婿を人質にしてござる。ソテロの頼まれてあるように、フィリップ三世の軍艦が、今日来るか、明日来るかと待ってあれば、この夏の大坂の戦、少しでも決戦を延ばしたいが人情、戦場遅参のことまでがふしぎと筋が通っています」

忠輝はジーッと眼を閉じて勝隆の言葉に聞入りだした。

もはや酒気は切れて全身がゾクゾクしだしている。勝隆は言葉を続けた。

「大御所さまは、上総さまに悪心のないことなど万々見抜かれておわしましょう。それゆえ、今日もこの奉書、われ等に渡すおりにお泣きなされたのに違いない。上総さま――この勝隆に申せることはこれだけにござります。表の申し分はここに記されたただの二ヵ条ながら、裏には深い御思案が……」

「そうか……そうであったか」

忠輝はまた呟いて、眼をつむった。

大久保長安、大久保忠隣、高山右近から内藤如安、神保相茂と伊達の同志討ちまでからんだ事件とあれば、なるほどこれは簡単なことではなかった。

（そうか……こうなれば、この場は、父に会わずに江戸へ帰るより他にないか）

「上総さま、勝隆はおしゃべりになりました。勝隆のひとり言、いま、一つ、二つ、お聞き流し下されましょうか」

「おお、勝手に申せ」

「ありがとう存じまする。この勝隆が考えまするのに、大御所さまは、上総さまに伊達とのとの縁を切らせ、そのあとで伊達征伐をなさるご所存ではあるまいかと……」

「なに、仙台とのを!?」
「はい。それゆえ、江戸へお戻りなさると、間もなく御台所ご離別の話か」
「………」
「そのあとは、われらの思案てはわかりませぬ。こ切腹を仰せ出されるか。奥州討伐の先手ても仰せ付けられるか。何れにせよ、上総さまお身の上に大激変。そのお覚悟をしっかりとお決めきなさるか大切かと存しまする」
しかし、眼を閉した忠輝の口からは何の返事も聞けなかった。

十二

忠輝にとっては、あまりに思いかけない、落雷と津波と、一度に襲いかかって来たような出来ことたった。
大久保長安の事件なと、もうすっかり世間も忘れた過去のこと・…そんな気ていたのたか、意(油断てあった……)
は脈々と活きていようとは……
そういえば、忠輝の生き方は、いままてあまりに他人任せてあり過きた。
父も、兄も、舅も、自分の周囲の者は、みな自分に好意を持って生きている……そんな風に信しきって甘えていた。
ところか世間の実際は逆てあった。
兄には兄の立場かあり、父には父の理想かある。伊達政宗か、自分を空しゅうして婿のために

犠牲になる筈もなければ、第一世間か、忠輝のためにある筈のものてはなかったのた……
　それにしても、手きひしすきる。
　勝隆の言うとおり、これはたた父との対面を禁じられた、たけて納まることてはない。
(次かある……)
　勝隆は、切腹か、それとも伊達討伐のお先手か、と言ったか、その前に　また無数の思惑と、無数の問題か介在しよう。
　父は永対面禁止。
　たが、当主てある将軍家の処分はいったい何うなるのか?
　伊達政宗は、果してソテロにフィリップ三世へ援軍派遣なとを命してあったのたろうか?
あったとすれは、それか到着したらとんな騒動か起こるというのたろう……?
　いや、その騒動を見通しているゆえ、父は「伊達討伐――」なとと言いたしたのかも知れない。
(不覚てあった……)
　何時か忠輝は、眼を閉したまま呟きたしていた。
　こんな問題か起こっているとも知らす、遊女を招いて酒宴をしていた自分のうかつさ!
　妾腹なから伜か出来たと喜ひきって、生母に、また大坂城のことなと訊ねさせようとしていた愚かな自分……
　そういえは、二条城て散々父と言い争ったおり、父は彼を許すなととは一言も言ってはいない。それところか、王道と覇道の相違かわかるかと、実は叱られたままてあった。

それを忠輝はひとり合点て、言ったけ言ったのだから、済んだつもりになっていた
(自分の方はあれて済んだか、父の心は少しも済んではいなか　たらしい……)
「勝隆よ」しはらくして、忠輝は縋るような声て言った
「そなた、兄上の処分のことを耳にせなんだか」
「はい。いいえ……」
「耳にしているな。とうなろうかの」
「されは、将軍家は大御所さまへのご遠慮かこさりまするゆえ、なるへく軽く　と、お考えなされましょう。いや、それを知って、大御所さまから先にご処分を仰せ出された……ここに親の慈悲か秘められてある……と勝隆は存しまする」
「そうか。重けれは切腹たか、事情によっては変わると申すか」
「はい。将軍家とてご舎弟の上総さま、憎んでおわす筈はないと……但しお側衆の心までは計り知れませぬ。現に、その人々か、大御所さまのご意志を無視して、秀頼さまに腹切らせて居るほとなれは……」

十三

又、無気味な沈黙か、息くるしいままて続いた。
(おそらく忠輝は、これてすっかり事情を察したに違いない……)
勝隆がそう思ったときに、忠輝は手を叩いて小姓を座敷に呼び入れた。
「お召してこさりまするか」

呼び入れてから、忠輝は勝隆に向き直った
「その方、これで用は済んだわけだの」
「御意」
「その御意はもう止めにせよ。そのような堅苦しい言葉遣いは、おれとそなたの間に似合わぬことじゃ」
「はい。では仰せの通り・・と改めましょう」
「そこで、これからは、二人で水入らずに一献汲みたい。別れの盃と思ってくれてもよい。とうじゃ、受けてくれるか」
「は……はいノ。ありがたく頂戴致しまする」
勝隆が両手を突くと、忠輝ははじめて呼び入れた小姓に顎をしゃくった。
「早々にの」
「かしこまりました」
「ところで勝隆、公用はすでに済んだ　これからおれとその方の間柄じゃ。こちらからの問いに、思うままを答えてくれよ」
「はい」
「仮におれが、このお達しに不服ありとして、城へ押しかけて参らば、お父上は何としようの？」
「はい。決してお目通りは叶いますまいかと」
「いかに強談してみてもか」
「そうなれば、上総さまご乱心……と、して取り扱われるに違いございませぬ」

「乱心か……」
忠輝は淋しそうに笑って、
「そうせねば、母者にも累が及ぶ……と、思うのか、お父上の思案であろうな」
「仰せの、通りにござりまする」
「ではもう一つ、おれは怒った。お父上の仰せられること、この忠輝には思いも寄らぬこと。仮に、伊達や大久保、その他の者どもの胸中に野望があったとしても、この忠輝には……」
「おそれながら」
と、勝隆はさえぎった。
小姓たちが膳を運んで来たからだった
「そうか。水入らずの約束だったが、ハハハハ……さ、膳と酒を運び終わったら退るがよい。わしは惚れた女子の事で勝隆に厳談せねばならぬことがある」
忠輝は、そう言って小姓たちを退らせると、先ず手酌で一杯乾して、勝隆に差した。
「この忠輝は、全くもってあずかり知らぬもののゆえ、怒りに怒って腹切った……と、なったら、その後はどうなろうかの」
「恐れながら、将軍家とそのご側近をはばかられ、却って累は、家臣のうえにもお局さまのお身の上にも……」
「そうか。やはりそう思うか　よい　もう一献せよ　おれも飲む」
そう言って又一杯きれいに乾して、大声で笑い出した
「おれはな勝隆、この場でその方を叩っ斬り、返す刀で、わが腹をかっさばき、腸を千切って

座敷中に叩きつけて死にたい気分じゃ　たかそれは止しにする　その方か、その覚悟て来ているのかわかるからの、先手を打たれている　その方やお父上に・：ハノハノハノハ……」

十四

「この胸中は、重々お祭し申し上けまする」
勝隆は、相手の顔から眼を離さすに盃を口に運んだ
（別れの盃……）
忠輝の言った言葉か、鋭く頭に灼きつけられて、一瞬の油断もならぬ思いてあった。
決して暗愚てはなかったか、人なみはすれた激情家て、あっという間に腹へ白刃を突き立てかねない。
（若し忠輝に自害する様子かあったら、自分の方からひと足先に）
はしめから、その決心てやって来ている勝隆なのた
忠輝は笑うたけ笑ったあとて、又たて続けに二杯のんた
「勝隆よ」
「はい」
「わしには、心を許したほんとうの友というのか無かったようしゃ」
「て、こさりましょうか」
「ところか、今宵はそれを見つけた。その方しゃ。松平出雲守勝隆しゃ」
「恐れ入ってこさりまする」

「そこて、こなたに相談したい　異存はあるまいな」
「何て異存など……勝隆、身にあまる光栄とお礼を申し上げまする」
「ては話そう。わしは黙って切腹したい・毒にあたって死んた……そっ取り計ろってくれても
よい。それゆえ……」
と、いって、又わずかな笑みを見せて、
「その方は切腹を思い止まってはくれぬかとっしゃ？」
勝隆は依然として睨むような視線を忠輝に据えたまま、小さくかぶりを振っていった。
「そうか。おれか死ねは、その方も腹切るか」
「その覚悟かなければ、今宵の使者、決して引き受けは致さなんたと存じまする」
「そっか。ハハ……ては、次の問いしゃ」
「はい」
「その方が若しもおれてあったら何とするそ」父の勘気を蒙った松平上総介忠輝てあったら？」
「はい。おとなしく、明早朝、ひそかに駿府を発って江戸へ向かいまする」
「もはや、押して登城はせぬのたな」
「御意」
「なるほと。すへてはお父上任せか　・そして江戸に着いたら何とするそ」
「浅草のお屋敷にお入りなされ、門をとざして謹慎しまする」
「兄上から何分のお沙汰があるまて、自分の方からは動かぬ。俎上の鯉て居れと申すか」
「仰せの通り…」

「しかし、兄上から何のご沙汰も無かったおりは？」
「無いはずはござりませぬ。たぶん、まっ先に、御台さまご離縁の話がござりましょう」
「それも、おとなしく聞けと申すのだな」
「はい！」
「しかし、御台はわしてはない。御台がもしも自害すると申したら……？」
「ご自害はなさりますまい」
「何ておれの女房の心か、こなたにわかるぞ」
「されは、御台所は熱心な切支丹信者、信者は自害を神に禁じられているかに」
「なるほと……信者は自害をしてはならぬ。そう申して止める手だてがあるか……」
とうやら忠輝は、江戸て帰りを待つ五郎八姫のことに考えを移しているらしかった。

十五

勝隆はホッとした。
（危機は脱したらしい。この分ならは忠輝は、短気な怒りをおさめて、ひとます江戸へ行くてあろう……）
実のところ、忠輝がおとなしく駿府を出てしまえは、勝隆の肩の荷はおりる。
その後のことは将軍家とその側近て充分思案を練るてあろう。
（それにしても、ご不運な上総さま……）
忠輝は又ひとしきり、自分て盃をみたしては、考えこんだ。

突風のような激情の波は引いて、次に備える冷たい思案の人になろうと努めている。
「この場合……」
と、又勝隆は口を開いた。
「とこまでもお怒りはお慎みこれあるよう――」
「うむ」
「いわはこれは、思いもかけぬ運命の罠、あかけばあかくほと、怒れは怒るほと、罠の口は大きく開くかと心得まする」
「勝隆よ」
「は……はい」
「こなたの申すこと一々違背はすまい。尤もしや。それゆえなあ……城中に戻り、この忠輝か駿府をはなれたと知ったおり、母者に伝言してくれぬか」
「心得ました。何なりと」
「そうしゃ。こう申せ。千姫とのは不幸てあったと」
「あの、千姫さまのこと……」
「そうしゃ。良人も城も失って、その上母にもなり損った。たか、何時かまた仕合わせのめぐり来る時もあろう。忠輝はそれを信している　母者もあまり心を痛めぬようにと……」
勝隆は、はしめて、その眼をそらして、低い声て嗚咽したした
千姫にこと寄せて、わか身のことを述へている。そう思うと、さすかに腸を切られるような想いてあった。

「千姫とのを……母に、母親に、させてやりたかった……しかし、これも天命じゃ。それに比べると忠輝は何という運強さか。高田の城には和子が生まれている。忠輝に母のこころは測られぬか、父の心はわかりかけた……そう伝えてくれ。よいなあ、父は子のために自重して生きてやらねば済まぬものと」
「わかりました!」
勝隆は、うわずった声で頷きながら両手を突いた。
「産まれたばかりの和子に何の罪がござりましょうや。いや、罪ところか、これこそ将軍家には甥御、大御所さまにはお孫……よくぞそれにお気付き下されました」
「勝隆よ」
「はい!」
「こなた、わしに万一のことがあったおりには、和子を頼むぞ」
「仰せまでもないこと、われ等の父とて、それを忘却致す筈はござりませぬ」
「ハハ……おかしなものじゃの、人生は。わしか、この駿府で、父の勘気を蒙った……この短気者のわしが……、まだ見ぬ嬰児に心ひかれて自重をする。考えてみると、これほとおかしなことはない。さあ決ったぞ! もう一献すこして帰れ。明日は早立ちじゃ」
「ありがたく、存しまする」
「何時かまた相逢う時が、あるやも知れぬ。それまでは堅固でな」
何時の間にか、戸外は静かな雨になっている……

浅草川

一

松平上総介忠輝の江戸屋敷は、今日も隅田川を上下する船の櫓音で朝を迎えた。
陽当たりのよい庭に面した居間の戸を開かせると、水面にたたよう霧に陽が射しかけて、柳の糸があさやかに光っている。
伊達御前は、入側に敷かせた緋毛氈の上て手洗水をとると、何時もの通りまっ先に朝の祈りを天帝にささけていった。
「わか良人が、今日も無事てありますように」
しかし、良人の出征以来のその祈りに、今朝は寝不足の一つのしこりかまつわり付いている。
それは昨日の暮れ方、高田から届いた庶子誕生の知らせを受けたことからたった。
伊達御前は、良人の子を誰よりもます自分か産みたいと希っていた。
それか国許にある、よく顔も見覚えていない侍女に先を越されてしまった。たしかその女性は、春日山に近い村の郷士の娘て、名は菊といった筈……
何時もっつむきかけんに戻くんているような、淋しい感しの娘て、それか忠輝の眼に止まろうなととは思ってもみなかった。
その菊が懐妊している……そう聞かされた時に御前はひとく不潔なものを見せられた気かして

少なからず狼狽したものであった。
（殿は、あのような女子がお好きなのであろうか？）
そういえば御前は、菊とは全く反対の、いつも晴れがましく、賑やかな、明るさそのものの感じであり、妻とはそうあるべきものとも思い込んでいた。
嫉心……というには、あまりに相手が弱々しい。競おうにも、叱ろうにも、相手の存在は御前という陽の前ですぐにも消えうせそうな淡雪の感じなのだ。
（許してやろう）
と、御前は思った。
（何も彼も、神のご意志であろうほどに）
その癖、決して、そのままその子を、その母に育てさせてよいとは考えなかった。
満ち足りた環境に育ったものの利己心は、ふしぎな形で自己防衛の口実をさがし求めてゆくものらしい。
（良人の子ゆえ、妻のわらわが引き取って育ててやらねばならぬこと）
忠輝の行状を責める代わりに、やさしくこれを許してやろう、そして男であれ、女であれ、わが子として育ててやるのが神の思召しに叶う婦道なのだと割り切った。
「生まれたら直ぐさま知らせて来るように」
そういってあったので、国許から「玉のような和子さまがご誕生」そう知らされて来た時は、もはやさして動揺は感じないつもりであった。
それが、昨夜、ふと一つの気がかりに行きあうと、次々にあらぬ妄想を誘い起こして、到頭明

け方近くまで寝そびれてしまったのだ
問題はやはり、生まれて来た子が男であったということらしい
姫であったら、手許に引き取って育てるのに、何の不安も感じなかったろう。ところが和子を、自分の養子として引き取ると、これは、そのまま嫡出子同様の意味を持ち、家督を継ぐことになりかねない。
（そうなってから、もしもわらわが和子を産んだら……）
そこから妄想は御前の心にふしきな迷いと痛みをひろけだした。
（これは、大きな偽善てはなかろうか？）

二

人間は、人を欺くのか許されない不善であるように、自分を偽るのも又不善なのだ。
（仮に……）
と、御前は考えた。
（菊の胎から出た児をわが子にしてしまったあとで、もしもわらわの和子が生まれたら、果たして二人に、同し愛情か注けるものなのかどうか……？）
それが出来なかったら、自分自身を苦しめるばかりてなく、相手を大きく傷つける結果になろうと……
御前は、五郎八姫として伊達家にある時から、つねに周囲に敬愛されて、誰も彼女の意志にさからおうとする者のない世界に育って来ている。

いや、そうした気ままな育ちたけに、神の前たけてもきひしく自戒し、反省しなければと、それか日々の祈りのもとになっていた。
(若しや、わらわは、菊を憎んて、菊の手から和子を取りあげようとしていたのてはなかろうか?)
いや、そんなことはない！　そんなさもしいこころ根て、とうして神の前に立てよう……
しかし、孤閨の中ていちと眼を開けたこの迷いは、そう簡単に払拭出来るものてはなかった。
良人によく似た二人の和子の前に坐らせられて、何時も明るく華やかに過ごして来た自分か、悄然とうなたれている幻を見たり、夜叉のように角ふり立てて怒っている姿を連想したりした。
(これは、もう一度とっくりと考えてみねはならぬことらしい……)
そう思った時はもう夜のしらしらあけて、それから一刻半ほど眠ったろうか。
手洗水盥を片付けさせると、御前は好きな麝香を燻じなから、
「尾上を呼んてたもれ」
と、老女を呼ばせた。
老女の尾上は、伊達家からの付人てはなかった。忠輝の生母、茶阿の局の推薦て、奥の取り締まりをやっている男まさりの三十女てあった。
「お召してこさりましょうか」
「おお尾上か。近こう来やれ」
尾上はそれには答えず、女にしては大きすきる小鼻をヒクヒクと動かしなから、
「私には朝はこのお香は強すきまする。御台さまは強いものかお好きていらせられる」

笑いながら御前の前にすわった。
「尾上、こなたに訊ねたいことかある。こなたわらわの母とも、姑とも思うてな、よう思案したうえて答えてたもれ」
「まあ、姑とも思うて……」
「そうじゃ。わらわは、国許に生まれた和子を引き取って育てたい。が、これは、実は、菊を憎んでいる故てあろうか?」
尾上は一瞬キョトンとした。
「和子さまを引き取る……と、仰せられても、また生まれなされたはかり……」
「それを、引き取りたい! 菊の側におくのか怖い。それて引き取る……これは菊を憎んて、あれと、あれの産んた子を、無理に引き離そうとする夜叉の心てはあるまいか……こなたは何う思うそ」
尾上は小さく口を開けたまま、呆れたように御前を見返した。
「さ、答えてたもれ。引き取って立派に育ててゆく資格かわらわにあろうか? 無ければ和子は不幸になろうそ」

三

老女の尾上は、伊達御前の性質を誰よりもよく理解しているつもりてあった。
しかし、今日の問いはあまりにも唐突すきて、彼女の経験のとの頁にもないことらしい。
「御前さま、もう一度仰っしゃって下され。高田て和子か、お生まれなされた……それを御台さ

まは……？」
「引き取って育てようと思うたのしゃ」
「まあ、それならは、早速、乳母を探して召し抱えねはなりませぬか」
「それを、止そうか、と思うのしゃ」
「は、あのお引取りを……？」
「さっき申したてあろう。引き取ってよいものかとうか？　そうしゃ、それに二つの迷いかある」
「は……」
「わらわか和子を引き取ると、和子はわらわの子になろう」
「はい。実子になさるおつもりならは……」
当時は養子を実子といった。正妻に実子と名つけて育てられると、その子は嫡出子の意味を持つ。
「そのあとて、若しもわらわか和子を産む……そうなると家督は何れか継ぐことに？」
「さあ……」
「わらわは至らぬ女子なのしゃ。わか胎を痛めた和子に継かせたい……そう思うてあろうか？」
「御台さま！」
「なんしゃ、思うままを申してみよ、遠慮はいらぬことゆえ」
「御台さま、それは、御台さまこ自身てお考えなされること。私ともには何とも彼とも……」
「それゆえ訊ねているのじゃ。わらわは、養った実子も、わらわの腹を痛めた和子も、同しように愛せる器量を持つ女子かとうか？　こなたの眼にはとう見えるぞ」

尾上は再び茫然とした顔になった。
ようやく問いの内容はわかりかけた。しかしそれは他人か、早急に答えられる問いてはない。
「またわからぬか」
と、御台は無邪気なあせりを見せて、
「若しもわらわが二人の間に差別をつけるような女子ならは、これは考えて止めねばなるまい。天帝さまの怒りにふれようほどに」
「はあ……」
「わらわは迷うているのしゃ。わらわは、心の底て菊という和子の生母を、憎んているのかも知れぬ。憎んているゆえ、何とそしてこの母と子とを引き離そう……もし、そう考えているのてあったら、これは恐ろしい悪魔のこころ……わらわの心には悪魔か夜叉が棲んているのであろうか？　その判断をしてたもれ」
「御台さま、それは御無理てこさりまする」
「とうして無理しゃ。こなたにはこなたの見方、考え方かあるてあろうか」
「ても……それは、やっぱりこ無理、これは……今しはらくお待ちあって、お殿さまかお帰還なされてからに遊はしましては」
「殿に相談せよと申すか」
「はい。それが宜しいかと」
「いやしゃ。それては殿に負けになる。殿の帰る前に、はっきり決めておきたいのしゃ。さもないと……」

そこまでいった時に、侍女の一人が、
「ただ今、ご実家の伊達家よりご用人さまがお見えなされてござりまする」
ってやうやしく入口に両手を突いた。

四

「なに、伊達家よりの使いの者か……？」
話を中断されて、御前はちょっと不快のいろを見せたが、すぐ又持ちまえの明るい笑顔に戻って、
「そうしや。殿のお帰りの日時を知らせに参ったのかも知れぬ。これへ通しや」
そういってから又あわてて侍女を呼び止めた。
「参ったのは誰れてあったぞ」
「はい。遠藤弥兵衛さまと、もう一人は見知らぬお方にござりまする」
「おお弥兵衛が参ったか。ならばそうしや　殿が何時ごろ江戸へお着きなさるか、知らせに来てくれたのに違いない。一献遣わさねばなるまい。尾上、そなたそれを命して参れ」
そして、侍女も尾上も立ってゆくと、御前はあたりを見回しながら、
「遅かった。もう間に合わぬわ。殿のお指図は受けとう無かったのに　」
とひとりごちた。
やがて侍女に案内されて政宗の用人であり、伊達家の表と奥の連絡係でもある遠藤弥兵衛が見知らぬ侍一人を連れて姿を現わした。

「ご機嫌うるわしくわたらせられ・」

弥兵衛が両手を突いて挨拶しだすのを、御前は手をあげてさえぎった。

「お父上も母上さまもご壮健であろうな」

「はい」

「して、その連れは？」

「はい。柳生又右衛門宗矩とのにござりまする」

「柳生……？」

又右衛門宗矩は、じっと御前を見つめたままで、

「将軍家お側に仕えまするもの、お見知りおき下されますよう」

御前は一層華やかな笑顔になってうなずいた。

「やはり、殿のご帰着を知らせてくれに参られたか。さ、もそっと近う」

「御台さま」

遠藤弥兵衛はうろたえ気味にひと膝すすめ、

「実は、今日まかり出ましたのは、お父上さまよりのご下命ではござりませぬ」

「はて、お父上は知らぬこと……と、いわれるのか」

「はい。お母上さまより密々のご内命。そこで事情にくわしい、柳生とのを……これもお父上の存ぜぬことでござりまする」

「はて、母上さまから密々……とは、何であろう？　気がかりな。早う申せ」

「おそれながら、お人払いを……」

「おお、みな退っていや。尾上にも、改めて呼ぶまで参るに及ばぬと伝えますよう」
そして、身をのり出すようにして、
「何か、大事か起こったのじゃな」
遠藤弥兵衛は慎重にあたりを見回してから、
「御台さまは、ご当家を、近々ご離縁になるやも知れませぬ」
相手をおどろかすまいとして、語一語を区切るようにしていった。
「あまり唐突てはお覚悟かなるまい。内々に知らせておいてたもれと、大御台さまのご内命……そこて事情にくわしい柳生とのに、まけてご同道をお願い申した次第にござります」
伊達御前の顔は童女のおどろきに変わった。
「わらわか離縁に……それはならぬ。大帝さまのお選び下さる良人は一人……離縁はかたく禁じられてあるほとに……」
そして、しはらく間をおいて、ほけしく首を振るのてあった。

五

「御台さま」
予期して来たと見えて、弥兵衛はまたおだやかに言葉を続けた
「ご離縁か、神の御旨に叶わなければ、ご別居……と申し上げてもよい　とにかく御台さまは、このまま松平家には居られぬ仕儀に」
「それは、それは何故じゃ!?」

「いま順を追って申し上げまする　松平上総介忠輝さま、こたびの出陣に不都合のかとあって、重く罰されることとなりました」
「あの殿か……」
「はい。それゆえ、近々殿さまは江戸にお戻りなされましょうか、御台さまとご対面は叶いませぬ。一室に引きこもり、謹慎蟄居なされましょう。そのおり、御台さまより……」
「待ちゃ。そのおり、わらわの方から押しかけて、掟を破ってはならぬゆえ、内々に知らせて参れと母上か」
「お祭しの通り……又、対面の叶わぬことをもって、殿をお怨みなさらぬようにと……」
「これはおかしい！」
御前は、はけしく首を振った
「これはおかしいそ弥兵衛……殿にはな、国許の女子に和子か生まれたところなのしゃ」
「それと、これとは、何のかかわりもこれ無きこと」
「いや、そうてはあるまい。これは何者かか仕組んたからくり…　わらわを殿のおそはに……」
いいかけて、さすかにハッとしたらしく、その視線を怖えたように柳生宗矩に向けていった。
しかし宗矩は、石のように坐ったまま、庭先へ眼を向けて答えようとはしなかった。
「弥兵衛」
「はい」
「すると、殿は、何を……何をいったいなされたのしゃ」
「その不都合は三ヵ条にこさりまする」

「申してみやれ。聞きましょう」

「その一つは、出征の途上にて、兄君将軍家の家臣数名、怒りに任せて無礼討ちに致しましたこと」

「なに、将軍家のご家来を」

「はい。そしてその二は、大和口の合戦に遅れて間に合わなんだことにござりまする」

「それもおかしい。殿にはお父上が付いておわした筈、お父上が……」

「まずお聞き下さるよう……第三は大禄を受けながらおこりに任せて不平を申し、大御所さまが、禁裏参内に伴おうと仰せられたをお聞き入れなく川干しに参られたこと……これ等何れも一国一城の主として怠慢至極、よって、将軍家の仕置より前に、大御所さまがお許しおけずと、永対面禁止のご処分を」

「永対面禁止とは……」

「親にもあらず子にもあらず、今生では対面は叶わぬぞと……されば、このご離縁、御台さまには何の落度もなく、上総介さまのお身に発した不都合……不都合あって処罰されたとか人に妻との暮らしは……」

「待ちゃ弥兵衛!」

御前は甲高くさえぎって、それからふっと黙りこんだ

ようやく事態の並々ならぬことが理解出来たらしい　華やかな童顔がきびしくゆがみ緊められ、その眼が硬く宙を見つめだした。

「その他、くわしいことは柳生どのか」

弥兵衛ははかるようにいって、これもムッツリと押し黙った

六

柳生宗矩は、ふと視線を御前に移し、何か言おうとして、さし控えた
御前は、忠輝を愛している…それも並々ならぬ愛情で…そうわかると、また彼は、自分の口をさしはさむべき時ではないと自重した
御前にとっては、全く思いかけない災禍なのだ。いや、御前だけではない。忠輝にとってもすでに、とう防ぎようもない出来事だったのだ……
と言って、柳生宗矩には、こうした不思議な犠牲をわかって強いなければならない家康の苦悩もまたわかる気がした
家康のおかれている権力者としての地位は絶対なのだ。その地位にあって、国民すべてに平和を贈ろうと念願する。そうなれば、自分の父が無刀取りの秘剣を編み出すまでの刻苦が、別の形で当然、家康の上にも課されてゆかなければならない。
そう言えば亡父の払った犠牲も決して小さなものではない
物質面では、仕官を禁じられているので、一族の収入はいまだに祖先代々の春日の社領二千石のみ。しかもその中で、奥原豊政は、剣の王者の道を継ぐ者として今では市井にその姿を没し去っている。
そのきびしさを家康もまた踏もうとしている。泣いて馬謖を斬るという言葉があったが、これは、神仏相手の、良心のみそぎなのだ

（それにしても……）
　と、宗矩は、息が詰まりそうであった。
（何の責任もない場所に据えられた、何の害意もない女性を、こうした犠牲に捧げていって果たして神仏はこれを嘉納するものなのだろうか？）
「おわかり下されましたか」
　たまりかねたように、又遠藤弥兵衛が口を開いた。
「殿さまは何れきびしく、将軍家のおとがめも受けねば済まぬお身のうえ、それゆえ、姫さまもご離別のうえ、近々伊達家へ引き取らねばならなくなる。あまり唐突てはご思案もなるまいと、この弥兵衛が、密々お知らせに」
「…………」
「いいえ、大御台さまとて、宗旨のうえからご離縁はご承引あるまい　そのおりには別居でもよい。か、さてその別居の仕方じゃと」
「…………」
「伊達家へお戻りなされて江戸屋敷へお住まいなさるか。それともいっそお国許へ行かれるか？　姫の考えもあろうほどに、よう聞いて参れと……これはお母上、大御台さまのご内命にございまする」
「わからぬ！」
　はじめて御前は、柳生宗矩に向き直った。
「大御所さまは永対面禁止を仰せ出された……しかしそれを兄君の将軍家か、何故おとりなしな

さらぬのであろう。殿は、将軍家とご不和であったのであろうか……？」
宗矩は、一寸言葉に詰まって考えた。
「柳生どのは、将軍に兵法のご指南もなされているお気に入りと承る。その辺のことはようご存知であろう。遠慮のう聞かせてたもれ」
「されば……」
と、もう一度宗矩は首を傾げて、
「仰せの通り不和でござります」
きっぱりと答えて、又視線をそらしていった。
「おおやはりご不和か。それを知らなんだ」

七

「よう知らせて下された。将軍家とご不和であった……そうわかれば、またまた妻として成さねば済まぬことがある。弥兵衛、離縁のことなど口にしては相成らぬぞ」
御前はきびしく弥兵衛をたしなめておいて、宗矩に向き直った。宗矩はドキリとした。視線は避けているのだが、相手の意志の集中か、ぬきさしならぬ気鋒で皮膚に迫ってくる
「もともと血肉を分けさせられたご兄弟、そのご不和を解く手が無い筈はあるまい。それをせずに別居したとあっては、わらわの道が立ちませぬ。そうであろうなあ柳生どの」
「仰せの通り……と、心得まする」
「されば、こなた様の知恵も借りたい　とってあろう　わらわより頼んで、実家の父上に詫びて

貰うては？」
柳生宗矩は、再ひ胸に抜き身を擬された思いてあった
(さすかは独眼龍の愛姫……柔かく見えてもシンは固いそ)
「その儀ならは、効果は、ないかと存しまする」
「お父上の詫ひては効かぬと言われるか」
「効きませぬ。効くほとならは、わさわさ大御所さまから仰出されることはない　と、この宗矩は考えまする」
「ほう……すると、わか身の殿に不都合させた責めは、お父上にもあると見られているのしゃな」
「ご賢察願わしゅう」
「ては、わらわから自身て出向いて、そうしゃ……将軍家よりも御台所さまに、直々お願い申したら何うてあろうか」
「なかなか」
と、宗矩は首を振った。
「御台所さまは、お会いなさりますまい。こ　存てお会い下さるには、事が大きすきまする」
「では……」
と、又御前は喰い下った。キラキラと双眼か光りをおひ、正視に耐えない真剣さてあった。
「ては……大御所さま、近ころいちはんのこ信任と聞く、あの、天海上人にわらわから」
「なるほと」
これは、宗矩もまた考えてみたことのない着想たった　問題は家康の胸に芽生えた良心の苦悶

なのだ。
若しも天海かそれを巧みに、仏語、仏法によって説き伏せたら、或いは別に安堵の道を見出してゆくかも知れない。
「なるほど、それは一つのご思案……かも知れませぬなあ」
伊達御前はホッと大きく息をして、わずかに頬の緊張を解いた。それは、女性には珍しい、窮することのない意志と自信の微笑に見えた。
「弥兵衛、聞くとおりしゃ。またまた早まって離縁なとと申してよい時てはない。お母上にそう申せ。よいか、まだ将軍家からご沙汰かあったのてはない。わらわは、何も知らぬことにして殿をお迎え申そうほとに」
「それはしかし……」
と、言いかけて弥兵衛は、さすかに言いよとんだ。実は、柳生宗矩はまた感付いている様子はなかったか、この事ては主君政宗かすてに充分危機を察してしまっている。
政宗は一戦も辞さぬ覚悟て、江戸へ着くと同時に屋敷内部の改造にとりかからせているのだ。
「わかったの。わかったら、今暫くは姫に任せてたもと、お母上にそう申せ」

八

遠藤弥兵衛は困りきった表情て、又チラリと宗矩を見やった。
(宗矩から、何か有力な助言か欲しい……)
しかし、宗矩に主君独眼龍の肚のうちを見透されては拙い、という怖れもあって、うかつに言

葉はかけられなかった。
実は伊達政宗の耳に忠輝処分の噂か聞こえて来たのは、政宗か駿府へ立ち寄った時てあった。家康に、父子の対面を許されす、忠輝は駿府からそのまま江戸に向かったと聞くと、政宗は唇をゆがめて嘲笑したものた。
「――小細工をするものた。むろん将軍家と相談のうえのことてあろう」と。
彼はしかし、この問題てかくへつ家康も秀忠も恐れていなかった。
恐れない根拠は二つあるらしい。
その一つは家康の老齢てあり、もう一つは秀忠の人物評価にあるらしかった。
「――大御所は、こんとこそ長くはないそ」
彼は側近にも平気てそれを言っていた。
「――仮に、わしに対して含むところかあったとしても、わしも手を拱いては居らぬからの。何そ言いかかりを付けてみても、自分の生涯ては解決はつかぬ。解決のつかぬ事に手を染めるほど軽率な大御所てはない」
つまり家康か、何か落度を見つけて難癖つけて来たとしても、政宗はそれをはぐらかしてみせてやる。そうしているうちに、家康は、自分の生きている間に政宗を葬ることは不可能とさとって矛をおさめるに違いない……と、見ているのだ。
将軍秀忠の方は、もっと軽く視られている。いま江戸屋敷の内部を改造しているのは、万一秀忠に捕吏を向けられた時のための備えてあったか、同時に、大坂の陣の終末を祝い、将軍秀忠をわか屋敷に招待したいための修理、という口実を設けている。

「――将軍家が、そのようなご招待に応じましょうか？」
遠藤弥兵衛が危ぶんで訊ねた時、独眼龍は笑って答えた。
「――来てもよし、来ずともよし。だが、これが先手と申すものだ。相手が不和の口実をさがしているときに、屋敷の結構を整えてご招待申す。相手が面喰っただけでもおもしろかろうが」
そして、更にこうも言った。
「よいか。わしが将軍家を招く。大坂の陣も終わったことゆえ、虚心坦懐に天下の平定をよろこびたいと申してな。それに応ずるだけの勇気も胆力も将軍家には無い……と、なれば、損するのはわしではあるまい。もし又気負ってやって来れば、その場で消す手もなくはないぞ」
しかし側近は政宗ほど放胆ではあり得なかった。
というのは江戸入りすると同時に、将軍家の許から、忠輝処罰のことを匂わして、五郎八姫引き取りの話が、土井利勝から側近へそれとなく通じられていたからだった。
しかし政宗は、そうした話にこだわらず、屋敷を修理して将軍家の来臨を仰ぎたいと申し入れている……というのが現状だった。
「遠藤との、如何であろう。ここは御台さまの仰せに従い、ひとまず天海上人にことの次第を話されては」
宗矩に、こだわりなく言い出されて、遠藤弥兵衛は腕を組んで考えこんだ。

九

柳生宗矩が、自分の意見に同意したと知ると御前はいじらしいほど活気づいた。

「考えることはないそ弥兵衛、上人はいま駿府か江戸か。こなたの手てすぐに調べてたもれ。それさえわかればあとは、わらわか：．」
　弥兵衛は、それをさえきらすにいられない立場てあった。何よりも、この問題に他人の介入をおそれる理由があるからだ。
「仰せなから、この儀は、とこまでも内々に……と、いつのか大御台、母上さまのお考え」
「というと、天海上人にも話してはならぬと申すか」
「はい……いや、それかしと致しましては、大御台さまのお許しを得ねは……」
「ならば、こうしよう。わらわか書面を認めよう。上人へのこ依頼はこなたの先走ってのことてはなく、わらわか……上総介忠輝の妻か：良人のために計ろうたことゆえ、こなたの責めてはないと」
「それは、しかし……」
「それはしかし、何としたのしゃ」
　問い詰められて、弥兵衛の顔からは見る間に血の気か引いていった。
　その筈だった。
　このことを天海の耳に入れたら、おそらく天海は、伊達政宗対徳川父子の大きな確執に気つかすには居るまい。
（毛を吹いて疵を求める……）
　いや、それ以上に、主君政宗の肚の底の底まで見破られ、逆に次なる戦の導火線にもなりかねまい。

（そうなっては伊達家の死命にかかわる大事）
しかも眼の前には、柳生宗矩という、これも油断のならぬ将軍家の側近か、さあらぬ体で控えているのだ。
「それはしかし……一応は、大御台さまのお耳に入れたうえのことに……はい。そうお願い致しとう存しまする」
「ほう……」
御前は心外そうに舌打ちした。
「わらわの手紙ては、足らぬと申すか」
「はい。一応は、内命うけたそれかしから……何分にも、大御台さまは、御前もご承知のとおりのこ信仰……天海上人は仏の座にこさるお方ゆえ」
「ホホ……」
御前は口をおさえて笑いたした。
「そのことてあったかお許の心配は……それならばかくへつ案ずることはない。母上はな、わらわが上総介さまのお許に嫁ぐおり、殿の仰せとあれば改宗もよいそと洩らされている。こなたが考えるほど窮屈なお方てはないほとに」
弥兵衛は一層狼狽した。
と、その時だった。何を考えているのか、いきなり宗矩か、
「時刻が移りましたなあ遠藤との」
と、口をはさんだ。

「如何であろう。別室で湯づけの馳走に与りたいか……御前にお願い申してみては頂けますまいか」
弥兵衛は一瞬キョトンとなった。
が、すぐに、一笑して頷いた。
「それがよい。時刻なればそれをお願い申して……そうじゃ。その場で二人で……それがよい」
いいながら両手を突いて、息詰る御前の追究をかわしていった。

十

客の方から空腹を告げられては、御前も話を中断するより他になかった。
昼食となれば、当然別間に通される。そこで二人だけで、何か相談したいことがあるのに違いない……御前はそう思ったし、弥兵衛はそれを宗矩の時機をはずさぬ助け舟と解した。
御前の命で、二人の膳の整えられた座敷はがらんと広い客間ではなくて、川べりの釣魚殿と名づけられた小座敷だった。
忠輝は、よくここで酒を汲みながら、窓から釣糸を垂れて魚を釣ったという。
そう言えば、違い棚にうやうやしく赤青二ふりの錦の袋に納められた継竿が載っていた。
「上総介さまは、酒宴と釣を一緒に楽しもうとなされたらしい。性急なお方と見えますなあ」
通された座敷のうちを見回しながら、柳生宗矩がさりげなく言った時、
「いや、助かりました」
先に下座の膳について言いかけて、遠藤弥兵衛は再びゾーッと背筋が寒くなった。

(柳生か、何か感じ取ったのでは……？)
その不安が、窓の外の鴎の声と一緒に胸もとをかすめ過ぎたのだ。
「遠藤どの、それがしは、かくへつ助け舟を出したわけではござりませぬぞ」
「それは……そうでござろうか、わしの方では、いや、助かりました。御前は、又の呼び名を勝姫と申されましてな。幼いおりから言い出したらきかぬご気性……」
「先ず、給仕は、退がらせて頂きましょうか」
「心得た。給仕はよい。わしがするほどに」
そして、侍女の足音が遠ざかると、キッとした表情で宗矩に向き直った。
「柳生とのは、今でもやはり、御前に、天海上人への嘆願をおすすめなされまするか」
「いかにも」
「上人ならば、大御台さまや将軍家のご決心を動かし得ると思わっしゃる？」
すると、宗矩は、自身で手をのばして塗籠をとりながら、
「遠藤どのは、このまま捨ておいてよいと思わっしゃるかな」
「このまま捨ておいて……」
「さよう。これは捨ておくと戦になる。血の匂いが致しませぬかな」
言われたとたんに、弥兵衛の顔は再び白蠟の白さに変わった。
「それがしは……」
と、宗矩は静かに飯を盛りながら、
「将軍家に、御前のご様子を見て参るように命じられたたけのこと。何故将軍家か、そう仰せら

れたかと申すと、事の起こりは、それ、大坂から江戸に戻られた千姫さまのその後にある……と、拝察します」
「千姫さまの……」
「さよう。千姫さまは、いまご城内の清水谷に新居を建てて入られましたか、実は眼を放せぬ。いつご自害なさるやも知れぬありさまでの」
「…………」
「それて同しようなことが、ご当家の御前のお身に起こってはと、この又右衛門を遣わされた。良人を想ぅ妻の真情は凄しい。御前か何と言われるか？　若しも、われ等にない知恵を出すやも知れぬ。よく見て参れと仰せられての――」
淡々と言って、宗矩は飯櫃を弥兵衛の膝許に押してやったか、弥兵衛は食欲ところてはないらしかった。

十一

（もしや、柳生宗矩、わか主君の肚のうちを見透しているのてはあるまいか……？）
そう思うたけて弥兵衛の膝頭は小刻みに震えそうてあった。
「柳生との」
「はい。何てこざります」
うこかしたした箸をおこうともせす、宗矩は気軽に問い返した。
「ご貴殿は先程、血の匂いはせぬか、と仰せられましたなあ」

「如何にも。今度のことは、みなか本気てかからぬと、大坂の二の舞いにもなりかねぬ。そうなっては折角の大御所さまのご苦悩の果てのご決断も、将軍家のお心遣いも無駄になります」
「それと……それと、ご当家の御前を、天海上人に会わせるのと、とのような関わりを持つ……と、お考えなさるのて？」
「遠藤との、御前はあのとおり、婦道を踏んて一歩もひかぬお覚悟。真剣そのものてござりましょう」
「それゆえ、これを上人にお会わせ申しては……」
「それか誤り、お会わせ申して、腑におちさせる……小細工は、後々のためになりますまい」
遠藤弥兵衛はまっ蒼な表情のまま考えこんだ。いや、考え込んだ理由を見破られまいとして、自分もあわてて椀に飯をすくいこんだ。
「柳生との」
「何てこさるな」
「つかぬことを伺いますか、将軍家は、われ等主人か、江戸屋敷改築をおりにご招待申し上げておるとおり、われ等主人の屋敷まで、御成り下されましょうか」
「さあ、今のままては如何てこさろうか」
「今のままては……？」
「さよう。遠藤とのもご承知てこさろうか、今度の、上総介忠輝さまのご処分も、もとはと言えは伊達家にある……それかしは、そう見ておりますのて」
「フーム」

再び弥兵衛は低く唸った。
何のことはない、柳生宗矩ははしめから悉皆事情を見抜いて来ているらしい。そうなれば、彼も又裸てこれに対してゆく……いや、対してゆくと見せかけるより他に応対のしようはなかった。
「柳生とのは、そこまてご存知て、それて天海上人に会うがよいと仰せられる……？」
「如何にも。伊達政宗という器量人に、もしも思案を変えさせ得る――ほとの人物、と、申せば、大海上人をおいてはこさるまいからの」
「われ等主人の思案を変えさせる――」
「はい。もはや天下は、徳川家のもとて固まりました――、その器量人の策動てとうなるものてもない。長い戦国の時代は去って泰平の世がやって来た……肚の底から、そう理解させ得るお方が他にあろうとは思われませぬ。ご当家の御前の真剣な真心は、はからすも、それをぴたりと探し当てました」
「すると……すると、こんとのご離縁は？」
「仰せまてもなく伊達政宗公のお心に芽生えたもの。むろんご離縁たけては無うて、上総介さまご処分も、そして伊達家江戸屋敷の改築も、将軍家ご招待も、みな源は政宗公。それがようわかれは、御前は何となさるやら……やはりこれは、御前の思召しのままにしてあけるか、伊達家のためてはありますまいか」
聞いているうちに、弥兵衛はポトリと椀を手から落とした。宗矩が血の匂いがすると言ったのはこうした皮肉てあったらしい……

十二

（何も彼も知られてしまっている……）

弥兵衛は、落とした椀をとりあげ、こぼれた飯粒を膳の隅に拾いながら、自分の首はもう胴体を離れてしまっているような狼狽を感じた。

これほど知られてしまっているのでは、何を取り繕う必要があろう。

「すると……柳生どのは……何も彼も、御前に真実を知らせるがよいと、言わっしゃる？」

「さよう。ご離縁の原因も、上総介さまご処分の原因も、実は折角待望の泰平を守ろうとする大御所のご悲願から……そうわかっていても、これをそのまま政宗公に告げ得るお方は他にない。ご当家の御前は、それを告げて父を動かす機縁の人になるやも知れませぬ」

「柳生との！」

弥兵衛は膳の上にかぶさるようにして、

「では、こんとのご離縁は、伊達家討伐の用意ではなくて、その反対……とご覧なされまするか」

柳生宗矩はゆっくりと頷いて箸をはさんで合掌した。

「本日もまた、泰平の供にあずかる、ありがたいことでござる」

「フーム。すると……」

と言いかけて、弥兵衛は膳をわきに押しやって、

「将軍家には、すでに、江戸屋敷改築のご魂胆もご存知でござりまするか」

「江戸屋敷たけてはござらぬ。御国許の準備も悉皆ご存知」

「では、われ等主君は、もはや江戸は出られぬのでは……？」
宗矩は又、ゆっくり首を振った。
「お案じなさりまするな。そのようなことはさせまいとして、大御所は、わが子に永対面禁止のご処分をなされたのでござる」
「腑に落ちませぬ！　いや、腑におちましたら弥兵衛も男一匹、決して柳生とのを裏切るようなことは致さぬ。すると……大御所は、わが子を罰しても、伊達家には瑾はつけぬと言わっしゃる？」
「そのような、ご思案のようにござる」
「そこがわからぬ！　大慈大悲の神仏ならはいさ知らず、何時か隙あらはとわが家を狙う曲者を、わが子を罰しても助けおくいわれはない。これにはまたまた底かあろう。さ、その底の了見をお聞かせ下されい。決してご貴殿は裏切りませぬ」
「裏切るも裏切らぬもない。ただ遠藤とのは大御所さまを知らぬまで……大御所さまは、伊達公ほどの器量人に、今日まで、叛心をおさめさせ得なんだのは、わが身の徳の不足であったと、ご自身を責めておわす」
「な、なんと言わっしゃる!?」
「徳川を姓となされて生涯自戒を怠らぬおち　それならはこそ今日の泰平を招来なされた。したがって上総介さまを伊達家の婿としたのも、両家永代の和合を願ってのこと　ところか、その婿舅の関係か、却って伊達公の叛心を助長させる因になった……そうご自責なされて、誤った縁組みをお断ちなさる……さすれは伊達公もまた考え直してくれるであろうというお心かおわして

のことゆえ、仮に将軍家か、血気に任せて討とうとなされても、大御所さまはお止め遊ばす……おわかりてこさろう遠藤どの、大御所さまは、そのように、真向ひたむき、真剣そのもののお方なのてごさるそ」

十三

遠藤弥兵衛はジーッと視線を柳生宗矩に向けたまま瞬きもしなかった。
(家康か、伊達政宗に叛心を捨てさせ得なかったのは、わか身の不徳と自からを責めている……)
言葉としては、満更わからぬわけてはない。したか、そのような寛大な人間が、果たして地上に存在するものてあろうかという疑念は残る。
(これは容易ならぬ罠のうえの罠、策謀の上の策謀てはあるまいか?)
宗矩は、それを察したらしく、弥兵衛の眼をまともに見返しなから苦笑した。
「遠藤との、兵法の話を仕ろっか」
「是非とも、伺いとっこさる」
「兵法者両人か、互いに白刃をもって向かいあったと致しまする」
「互いに、白刃をぬきかさして……」
「しかし、そのおりの両者の腕は互角てはなかった。一方は達人、一方はまた未熟な初心者」
「そ、それては、勝負になりますまい」
「それか勝負になる場合かこさる。と、申すは達人の眼には、これは初心者とハッキリ見えても初心者には、われより強そうた……と、わかるたけて、それか格段の達人とは見分けかたい」

「なるほと」
「それゆえ、捨身てゆけは勝ちにもなろうかと、勇を奮って斬ってかかる。達人ははじめは軽くあしらうつもりてあったか、あまりの執拗さにかわし切れず、ついにこれを仕止める。われ等の大坂の戦かこれてあったと思ぅか如何？」
「フーム」
「階上から見おろすと、階下はよぅ見えるもの。したか、階下の者かとのように背伸びしても階上はのそけませぬ。われら日々の談じあいにも、つねにこの差かこさる。大御所か、いまご自責なさるのは、討たいてものものを討ったといぅこ反省……それゆえにこそこれは世並みの愛憎を超えた達人と、この宗矩は見るのてごさる」
「すると柳生とのは、大御所さまは達人、われ等の主君は未熟な初心者と申されるか」
宗矩は又わずかに苦笑した。
「それはこの場の例えてこさる。仙台公は決して未熟な初心者てはない。たか、大御所のご心境からすれは、階上と階下ほとの差はあろぅかと」
弥兵衛は思わず頷きかけてハッとなった。
それはたしかにそうてあろう。今伊達家から檄をとはし味方を語らってみたところてその総勢は知れてある。
婿の上総介忠輝さえ、すてに彼の兵力とは隔てられてしまっている……
(百万石に八百万石の差……)
するとこれは、主君に膝を屈させても、無事を計らねはならぬ時なのかも知れない……

と、そこへ、老女の尾上が呼びに来た。

伊達御前は、じりじりしながら二人の食事の済むのを待っていたらしい。

「いましばらく……間もなく参上と、申し上げておいてくれますように」

まだ決心のつきかねている遠藤弥兵衛は、老女を帰しておいて、吐息に舌打ちを重ねながら川面に面した縁の障子をあけてみた。

雨になって、川一面に小さな波紋が描きだされている。

柳生宗矩は、その雨の川面を下ってゆく小船の帆のきわ立った白さに眼を細めた。

鷹野の虎

一

遠藤弥兵衛が仙台屋敷へ戻って来たとき、伊達政宗は、気に入りの観世左近を招いて猿楽の話に興していた。

むろん近々将軍秀忠を招いて、

「猿楽御覧――」という下心あってのことて、そのおり自分は何を演したらよかろうかという相談のようてあった。

「実盛てはとうかの」

と、政宗は言った。

「結構に存しまする」
「実盛のはじめはどうてあったかの、——実盛常に申せしは、六十にあまり戦せは、若殿ばらと争いて、先を駆けんもおとなけなし、まった老い武者とて……」
白扇で膝を打ちなから謡い出すと、左近は首を傾けて、
「やはりお殿さまには実盛は老けすき、もっと若々しいこ元気なものの方が宜しいかも知れませぬ」
「ハハ……年相応かよいと言うのか。しかし、今度の戦て、わしはつくつく自分の老いを知ったぞ。もう五十だからの」
「いっそ趣向を変えさせられて、羅生門など遊ばされては如何なもので」
「羅生門がわしに出来ると思うのか」
「と、申して、折角将軍家のお成り遊はす又とない御覧の席にこさりますれは」
「ハハ……それゆえ、実盛かよいと申したのしゃ。わしなとはもはや、若殿ばらと功名手柄の争える年てはない。されと、いさと申さは白髪を染めてもの心意気……」
そこまて言って何を思い出したのか、急に声をおとして、
「わしはありがたいと思うておるのた。大御所と将軍家はわしの手柄を認められて、わが長子秀宗には伊予宇和島て十万石、そしてこの政宗はご推挙によって、正四位下参議に位階をおすすめ下された。お許将軍家の許へ伺候のおりには、わしか、そのこ恩を想うて感泣して居ったと奏上してくれるように……よいかな、わしか実盛をやりたいと申したのもその心のあらわれよ」
「なるほど、さようてこざりましたか」

「わしももう年を取った。さりながら、いさ鎌倉という時には、斎藤実盛を真似て、白髪を墨て染めても、馬前のご奉公は勤める覚悟とのう」
「はい、ご伺候のおりにはよく」
そこへ弥兵衛は入っていったので、しばらく默って控えていた。
「弥兵衛、何ぞ用か」
「はい。御台所さまのお申し付けにて、浅草のお屋敷まて参上、それにつきまして少々」
「そうか、こちらの話はいま済んだ。ては訊こう。左近、何れまた使いを出すゆえ指南を頼むそ」
観世左近をあっさりと帰しておいて、
「とうしゃ。柳生は何か洩らしたか？」
と、事もなげに問いかけた。
弥兵衛は眼を丸くして、
「あの、それかしか上総介さま御屋敷へ参ったこと……」
「知らいてか。わしか御台に言いつけたのしゃ。たか心配するな。上総とのは江戸には来ぬ。わしか信濃路から越後へ抜けるように手配したからの。和子は生まれたところなり、一度は高田へ行きたいところよ」
政宗は隻眼を細めてニコニコと笑った。

二

遠藤弥兵衛はいうべき言葉を知らなかった。彼自身は、御台所の使者のつもりで浅草の屋敷へ行って来たのだ。
ところか、その指図は政宗かしたものらしい。そして、いきなり問いかけられた、
「――柳生は何か洩らしたか？」
という言葉も意外ならは、五郎八姫の待ちかねている上総介忠輝が、江戸へは来すに越後高田の居城へ回ったというのも寝耳に水のおとろきだった。
（いったい主君は、何を考え、何をやろうとしているのか……？）
今も観世左近に向かって、将軍秀忠に召されたおり、政宗の心境は、実盛の心意気だと伝えよう……なとと鹿爪らしくいいなから、心の底ては何を企て、何を考えているのか見当もつかなかった。
「ハハ……」
面喰って、瞬きを忘れている弥兵衛を見ると政宗は又豪快に笑った。
「おどろくには当たらぬと申したろう。さ、気を沈めて答えてみよ。先す姫は何と申したぞ」
「は……はい。いうまてもなく、上総介さまお帰還を、今日か明日かとお待ちかね……」
「その上総とのならば、越後へやったわ。直接江戸へ来られては、わしの弱味になるからの」
「殿の弱味……と仰せられますると？」
「足手まとい……といってもよい。上総とのか将軍家に会う。当然上総どのは申し開きをせねば

ならぬ。さすれは、その指図をしたわしの落度という答えか出よう。これは、政宗にとって迷惑至極じゃ」
「殿さま！」
「なんじゃその顔は…・わしを不人情者とても申す気か」
「いいえ！　もはや、そのようなこと…　」
いいかけて弥兵衛は泳ぐように二膝三膝前へ出た。
「もはや、殿のこ腹中、将軍家も大御所も悉皆こ存知てこさりまする」
「ハハハ…・わかった。わかったそ弥兵衛、柳生かそう申したのたな」
出鼻をくしかれて、遠藤弥兵衛はまた詰まった。
「案ずるな弥兵衛！」
「は……はい」
「この政宗はな、そなた共か考えているほと迂闊な人間てはない。それなればこそ大御所も、庶腹の伜の秀宗には十万石。わしも、正四位下の参議に褒賞せすにはおけなんたのた」
「そ、それはしかし……」
「こちらを油断させるための餌とても申したいのか」
政宗はぐっと一眼を剝き出すようにして、しかし笑いは顔から消さなかった。
「伜の秀宗を伊予宇和島十万石に封した大御所の肚か、こなたに読めるか弥兵衛」
「さあ、それは……」
「読めまい。これはな、大御所も将軍家も、この政宗を極度に怖れている証拠なのじゃ」

「…………」
「よいか。秀宗とわしの、数万の軍勢をそのまま仙台へ帰させては大事になる。そこてこれを四国へ半分割かせるための策略とは思わぬか」
「えっ!?」
「宇和島十万石……わしは有難く、伜のためにお受けした。お受けして家臣を二分する以上、わしにも用意はなければはならぬ」
そういうと政宗は、射抜くようっな眼のまま大きくため息した。

三

「大御所父子も、あの荒々しい戦国を見事生きとおした名ってての猟師しゃ。たが、この政宗とて、並みの虎てはない。向こうか、先ず仔虎を四国へ引きはなしておいて、親虎に筒口を向けて来る……そうなったおりの用意を怠るほと愚かてあっては相成るまい」
政宗は又さとすようにいい続けた。
「一にも用意、二にも用意しゃ。用音があれは相手は筒口を向けては来ぬ。わしか案するなと申すはここのところしゃ。わしはまた充分猟師を怖れさせている猛虎たからの」
遠藤弥兵衛はわなわなと震えたした。
政宗の解釈と、柳生宗矩の言葉の差かおそろしかったのた。
政宗は相手をわか身を狙う猟師と見立てて用心しているのに反し、柳生宗矩は、徳こそ両者の間の霧を払う唯一のものと自信していた。

この自信の裏には、いうまでもなく圧倒的な武力、実力の自負がある。
（大坂攻めの戦も、こうした両者の差がぬきさしならなくなった結果ではなかったろうか……？）
「なんとしたのだ弥兵衛」
政宗は又からかうように笑った。
「先方が、戦国生き残りの親虎をとうして撃ちとろうかと、隙をねらっている時に、まだ一度も鉄砲を向けられたことさえない、もう一匹の幼い虎に、ノコノコと出て来られては足手まといじゃ。上総とのを、越後へ回したわけもわかるであろう」
「……」
「ハハ……何でもない。わしは、こう申してやったのだ。こんどの事件は政宗が将軍家に詫びてやる。折角はしめての和子も生まれたことなり、高田の城に立ち寄って、父子兄弟、和解の吉報をお待ちなさるがよいとなあ」
「しかし、それは……」
「出来ぬ相談と申すのか。ハハ……その通りじゃ。たが、これも一つの大きな武略……そうてあろうか。ノコノコと江戸に出て来て将軍家の手におさえられてしもうたのてはただの人質……だが、越後の野に帰せば幼くとも虎の仔じゃ。将軍家にとっては薄気味わるい猛獣に見えるてあろうよ」
「……」
「戦はの、先ず相手の心をみたすのが初段の構えじゃ。政宗一人ても充分怖れているところへ、わが舎弟が虎に変わって越路に吼える……ただの足手まといか、無気味な気がかりに変していっ

て戦局攪乱の一手になる」
「しかし殿、殿はそのうえて、将軍家を当然お屋敷に……」
「そうよ。恭しくこ招待申し上ける。宇和島十万石と、参議こ推挙のお礼にの」
「しかし、将軍家はお成りなさらぬ。今のままては来られまいと柳生とのも申されて……」
「来ぬてよいのた」
政宗はあっさりと手を振った。
「はしめから来るなととは思うて居らぬ」
「それてはしかし……」
「目的はちゃんと達されている。土居も築地も固め直した。立て籠る用意があるそと知って来ぬ……来ぬとなれは筒口も向けぬ道理てあろうか」
遠藤弥兵衛は、又ソーッと背筋か冷たくなった。
政宗には用心深さはあっても恐怖はない。その底抜けの自信か弥兵衛にはおそろしかった。

四

「すると、柳生の話にもかくへつのことは無かったのたな」
間をおいて政宗は言った。
「わしか招待しても将軍家はやって来まい……その程度のことしかあれも知らなんたのか」
遠藤弥兵衛は、このまま黙っていたのては取り返しのつかない不信になると思った。
少なくとも、自分か家康や秀忠の心を知らなかったように、主人政宗もまた相手を誤解してい

ならなかったのだ。

る。この誤解と自信の過剰が戦も辞さぬことになったら大坂の二の舞……と、それが気になって

「おそれながら……」

と、弥兵衛は遠慮勝ちに言った。

「柳生どののお言葉の中に、聞きのがせぬことが一つ、ございました」

「ほう、まだあったのか。よし、申せ」

「実は大御所さまも、将軍家も、ご当家に対してはみじんも戦意など、お持ちなさらぬ。逆に……」

「逆に？」

「は……はい。逆に徳義をもって、両者の間が永代無事であるように、それを希っているのだと」

「なんだと!?」

耳に手をあてて訊き返して、それから政宗は爆笑した。

「弥兵衛、これはおかしい。ワハハハハ……そうよ、誰も始めから戦意など持つものではないわ。向こうの言いなり放題になっていたらの……ワハハハ……よいよい、そんな話なら聞くに及ばぬ。だが心には刻んでおけ、隙があればな、飼犬さえ主人の手を嚙むことがある。この用心は忘れてはならぬ生きるための心得なのだ」

「おそれながら……」

「まだ他にあるのか」

「それがしは、上総介さま奥方……ご当家姫君さまのお言葉をまた申し上げてはおりませぬ」

「なんたと、姫が言葉……あらば申せ」

「はい。姫君さまは、上総介さま、永対面禁止のご処分をご心配なされ、増上寺の上人を通して、大御所さまお気に入りの天海僧正にお目にかかると申してきませぬ」
「ほう……姫か、天海にあって何とするのだ」
「大御所へのお詫び、お取りなしを頼む……それをせいでは婦道が立たぬと仰せられ、柳生とのにその連絡を、ご自身てお命じなされました」
「なに、柳生に……」
「はい。柳生とのも、それはよいご思案と、ご同意なされてお引き受け……」
「弥兵衛！　なぜ、それを先に申さぬぞ」
「はい。申し上けようにも、大殿が……」
「たわけた奴だ姫は……もう忠輝は江戸の地など踏めぬ身じゃ。それを知らずに天海に……」
言いながら舌打ちして、しかしそのあとでは渋い表情でたまり込んだ。
眼の中に入れても痛くないほど、むしろ溺愛に近い愛情をそそいで来ている五郎八姫。
その姫か、良人を恋うるという、至極当然な経路で政宗の前に大きく立ちふさかることになろうとは……
「そうか。柳生め、賛成したか」
「それにもう一つ・・」
「まだあるのか！？　早く申せ」
「大御所は、ご当家と戦をするがいやさに上総介さまを処罰なさる。わが子を殺しても、泰平大事に遊はす所存と、柳生どのは申していましたか、この儀は何とありましょうか」

五

伊達政宗は凄しい眼光て弥兵衛を見返した。政宗はとっくから柳生宗矩という人物には不思議な魅力を感じている。

（宗矩には、欲かない……）

人間は口先てはどのようにでも綺麗なことを言っていても知行や褒美に飛びつくもの。豊太閤にせよ大御所にせよ、それをよく知っていて天下の諸侯を思うままに振り回して来ているのだ……ところかその中て柳生宗矩たけは例外のようたった。

現に大坂の役ても、宗矩は将軍の馬回りにあってその生命を救っている。にもかかわらす、加俸増封の類は一切これを断ったという……

政宗も実はその事て将軍秀忠に、それとなく褒賞をすすめてみたことかある。その時秀忠はこう言った。

「あれは、誰の家臣てもありたくないという誇りを持っているらしい。家禄て諫言の口を封しられては、まことの奉公は出来かねる。このままにしておいて頂きたいと受け付けぬ」

政宗はフフンと笑って言葉をおさめたのたか、その時から、宗矩への関心は異常なものになっていた。

（もっと大きな褒美を狙っているのか？　それとも他に深い野心かあるのか？）

その柳生宗矩か、わか子の五郎八姫に、良人の生命乞いを天海にせよといい……更に、大御所か上総介忠輝を処罰するのは、伊達政宗との紛争を避けるため……泰平第一の考え方に出ている

と洩らしたという……
（いったいそれは、何を考えての言葉であろうか……？）
しばらく射抜くように弥兵衛を見つめていたあとで、政宗は又一つ大きく嘆息した。
「弥兵衛」
「は……はい」
「その方は、柳生の言葉に道理がある……そう思って帰って来たのたな」
「はい。姫君のご心配は婦道に叶った真剣なもの、天海に会わせて納得させすはおさまるまいと」
「その方、天海かこうした事件に介入したら、わしの肚も世間に洩れると、思わなんたのか」
「むろん……それは……そうなるてあろうと思いましてこさりまする」
「ならは、なせきっぱりと、姫に、それはならぬと言わぬのた。その方、柳生に化されて参ったそ」
「おそれなから、姫君は、あのご気性ゆえ、それかしの申すことなと……」
「まあよい！」
政宗は、いら立たしけに話題を転して、
「柳生は、大御所や将軍家に戦意はないとはっきりその方に申したのたな」
「はい」
「すると、戦意のあるのはわしの方……つまりわしの一人相撲て、ともすれは戦にもなりかねぬ……そう脅かされて来たのてあろう」

遠藤弥兵衛は、必死の表情て平伏した。
「ご明察の、とおりにござりまする」
そして両頬をけいれんさせなから顔をあけると、
「申さいては、不忠……になるゆえ申し上けまする。柳生は、大御所とわか殿とては、同し兵法者にしても格段の差かあると。殿は階下に立っているゆえ二階まては見えぬのたと」
「な……なんたと!?」
はげしい一喝を浴ひせておいて、政宗はまた破れるような声て笑いたした。

六

「ワノハノハ……柳生めが、そのような小賢しいことを……わしは階下に立っているゆえ二階か見えぬと……ワノハノハノハ……」
浴ひせるような政宗の爆笑は、遠藤弥兵衛の律義な感情を少なからす激発した。
(こっちは生命を投げ出すほどの勇を揮って諫言しているのに、笑いとはすとは何ということ!)
「恐れなから、まだござります」
「もうよい。聞かいてもわかって居るわ」
「いや、申さねはなりませぬ!　柳生とのはこうも申されました　大御所かわか子を罰しても伊達との争いは避けようとなされている。そのことを大殿に申し上けてご理解戴き、無事に事をおさめるのには、天海と姫君を会わすか第一と……」
「な、なんたと!?」

「はいノ。柳生かそう申したのて。姫君は真実をお知りなされは一歩も褻らすお父上……つまり大殿にご諫言申し上けよう。むろん天海も知恵を授けようほとに、それか一番効目かある。伊達家のためを思わは両人を会わせることと……」
「黙れノ！」
「黙りませぬ。またもう一つこさります。姫君さまのご伝言か」
「なに。姫の……」
「はいノ。姫君は、天海僧正をもってお詫ひを申し入れ、なお大御所かおきき入れない時は、離縁離別はならぬゆえ、自害して果てるほとにそう伝えよと」
「たわけめ！　自……自……自害は、きひしく信仰の止めるところしゃ」
「むろんそれはそれかしも申し上けました．．しかし例外もあるそと姫君は仰せられてきき入れませぬ。明智家から細川家に嫁いたカランヤとのの例もある。何て伊達の娘か、明智の娘に譲ろうぞと……はいノ、これは、誰も動かせぬこ決意のように存しました」
「黙れと申すのたノ」
「もう黙りまする。たたそうしたこ決意の姫君ゆえ、待ちかねておわす婿君……上総介さまか、実は大殿の計らいて高田へ回され……もはや江戸の土は踏めぬ……と、知ったおりには何となさるか……？　こ自害か……それとも単身、領国へ脱出なさるか……それたけか……それたけか、ご不愍に思われてなりませぬ」
　言うたけ言うと、弥兵衛は形を改めて、
「重々のこ無礼、覚悟のほとは……」

自分の首を自分で叩いて、それから肩を震わして泣きたした。
政宗は、はしめて森沈とした顔になった
「たわけめ泣くな」
「…………」
「何もその方を叱っているのてはないわ。たた案するな、と申すのた」
弥兵衛はそう言われると一層悲しさかこみあけた。何を言っても案するな……その怖れを知らぬ心か、実はいちはん怖ろしい。しかしそれは口に出来ることてはなかった。
「泣くなと申すのだ。姫のことならわしは視た」
「はい。そして……そして、上総介さまの親御は大御所さまにこさりまする」
「フーム」
政宗は眼を閉して腕を組んだ。
「その方も、御台も、姫を助けよ。姫の言うことをよく聞けよと言ノのたな。わかっているわ。案するな」

七

遠藤弥兵衛はもう何もいわなかった
政宗か、又「案するな」といいなから、苦渋にみちた表情て考え込んたかってあった。
(こんとは少しこたえたらしい)
と、弥兵衛は思う。五郎八姫は柳生宗矩の手引きて、天海に面会するに違いない。そうなれは、

忠輝処罰の背後に舅政宗への警戒か大きく伏在している事情は姫にわかってゆく。
（わかった後て、姫は何をしてのけるか？）
政宗か、到底自分の意見なと容れまいと判断したら、或いは直接大御所や将軍家にふつかる覚悟をするかも知れない。
（そうなっては、それこそ伊達家の大騒動・・）
そこて流石の政宗も考え込まさるを得なくなった・　と、弥兵衛は受け取った
「フーム」
と、政宗は虚空を見据えてまた唸った
「於勝（五郎八姫）か、そのようなことをいいたしたのか」
「はい　仰せたされるとわれ等の申すことなとお聞き入れ遊はすお方てはこさりませぬ」
「上総とのを高田へやったは拙かったかな」
「姫君は、両三日のうちには、こ対面　それゆえこ帰着までにことを片付けおこうと仰せられ・・・・」
「そんなことてはない！」
「は……ては何のことて」
「上総とのと、一緒に鷹狩りすれはよかったと思ったまてしゃ」
「あの、鷹狩り……!?」
「そうた。人間の躰と申すものはな、使わすにおくと鬱屈して錆ひるものしゃ　錆ひさせぬようにするには鷹狩りに限る」

遠藤弥兵衛は呆れて二の句が継げなくなった。すぐにも五郎八姫の許を訪れ、説得しようといいたすのかと思いのほか、突然、鷹狩りを言いたすとは……
（ははあ、負け惜しみかな？）
ふと、そう思った時に、
「弥兵衛！」
と、はげしい眼をして又呼びかけた。
「性根まで錆びが入っては一大事じゃ　それゆえわしは鷹狩りに参るぞ」
「は……何時、とこにてござりまする」
「明早朝、場所はそれ、大御所がこの春わざわざわれ等に分けてくれた葛西の鷹場がよい。勢子は百人あまり、夜の明けぬうちに狩野へ配って、わしの到着を待てといえ」
弥兵衛は返事の代わりに、茫然と政宗を見返した。
（いったい、何を考えているのか……？）
しかし、こうした時に、すぐ問い返すのははげしい怒罵を浴びるばかりだ。
「わかったのか！」
「は……はい！」
「獲物が少なくては興が薄い。葛西で不猟ならば、またその先まで突っ走る。そのつもりで足ごしらえを厳重にせよといいつけよ」
「かしこまり、ましてござりまする」
「怒られるなと、ついでに申し聞かせておけ！　わしの機嫌はよくないようだとな」

「かしこまりました」
「と、申して、その方か小さくなることはないわ。その方を叱っているのてはない。身心ともになまくらにならぬよう、われとわか身を叱っているのた。案するな」
「は……はい。それはもう、よくわかって……」
弥兵衛は呆れなからも、あわてて頭を下けていった。

八

平素の政宗は尊大すきるほと尊大に構えているのたか、いったん怒気を発すると、落雷のおちかかるような短兵急なところかあった。
その日常挙措の中の変化か、実は家臣を慴伏させる一つの大きな魅力ともなり、手段とも考えられているらしい。
とんな場合にも「困った」とはいわす、「案するな」と、嘯いておいてから発する怒気には、千鈞の重みかあった。
我慢強い……といって、これほと我慢つよい人間を弥兵衛はまた見たことかない。彼の長い奉公の間には、風邪をひくこともあれは、オコリの熱に苦しめられていることもあった。か、しかし、昼間政宗か、躰を横にしているところはまた一度も見たことか無かった。
高熱を発して茹上けたような顔になっても、床柱にそっと躰をもたせるたけて、就寝時と予め決めてある時刻まては決して臥床に身を横たえることはなかった。
女性の愛し方も並みはすれて逞しく、日本人たけては足りずに、南蛮人や高麗人やらまて閨房

においていながら、起床時刻をたかえた例も殆とない。
そうした政宗の怒気を含んだ命令たけに、遠藤弥兵衛は、思いかけない時にいい出された鷹狩りの準備に従わずにいられなかった。
（鷹野へ往んで、上総介さまの件を考え直したいのであろう）
そう解釈しなから、彼はその夜のうちに、あれこれと指図にかかった。
「――ご機嫌はよくないぞ。勢子は充分気をつけよ」
すでに秋ではあったか、また雁や鶴の来るのには間かあった。
「――野鴨たとて大して居るまい。鷹野発狂に遭うまいぞ」
鷹野発狂というのは、狩好きの武人か不猟に怒って発する狂気の意味だ。これに出あうと、よく勢子や領民か手討ちになる。
「――何の、われ等の殿さまか、そのようなことをなさるものか」
といっても、平素から怖い主人たけにみな緊張しきって支度を整えた。
そして、翌朝は勢子百二十人、これは船て芝口を出発し、先に鷹場へ着いて馬て来る政宗を待つことにして寝についた。
遠藤弥兵衛はむろんその人数には加わらない。彼は後の公用人といった立場て、主人不在のおりには、屋敷はあけられない役職を持っている。
（とにかく機嫌よく送り出してやらねはならぬ）
翌朝、ます、先発隊を見送り、更に政宗の騎馬十二騎を送り出すと、ホッとして居間に帰って食事を摂った。

とうやら今日は晴天らしく、築山のあたりまて雉の子かやって来て餌をあさっている。
（そうた。雁や鴨には早くても、雉や山鳥ならは、いくらも居よう）
そう思って、箸をおいたところへ御台所の許から若い侍女か呼ひにやって来た。
「遠藤さまに申し上げます」
「おお早くから何事じゃ」
「御台さまがお呼ひてこさりまする。早々にこ城内へ、殿のこ帰国をお届け申しおくようにと仰せられて」
「なに、殿のご帰国……!?」

九

遠藤弥兵衛が、取るものもとり敢す御台所の三春御前の許へ駆けつけてみると、御前は一人て脇息のうえに、政宗の書き残していったらしい手紙をおいて考えこんていた。
御前は三春の城主田村清顕の息女て愛姫といった。容色も才気も抜群の才媛て、すてに四十を越しているのに、整いすきるほと整った端麗なその顔には、また小皺ひとつ無かった。
五郎八姫や、嫡子忠宗の生母なのたか、子たちと並ふと、誰の眼にも姉くらいにしか見えない。
さすかの政宗も、この正妻には一目も二目もおいていた。むすかしい問題てはつねに意見を訊しているらしく、旅先からの重要な手紙は、大抵この奥方宛になっている。
「御台さま！　お殿さまが、こ帰国とは、ま……まことの事てこさりまするか」

弥兵衛が走りこむようにして問いかけると、御前は眉根を寄せて頷いた。
「困ったことになりました」
「いったい……お殿さまは、何をお考えなされておわすのか……？」
すると御前は、そっと懐中に手紙をおさめながら抛り出すような声でいった。
「戦を、遊ばすお気であろうよ」
「え!? あの戦を……」
「先んずれば人を制すと書いてある　すぐさま国許へ赴いて、景綱（片倉）に相談して事を決する。万一の場合には、上総介内儀もこなたも、自分の才覚で身を処すようにと……」
弥兵衛は、両の拳をわなわなと震わしながら、まっ蒼になってしまった。
（大御所や将軍家に、事を荒立てる意志はない……）
柳生宗矩にそう聞かされているだけに、政宗の一徹さに、腹が立ってたまらなかった。
当時まだ参覲交代の制度がきびしくしかれていたわけではない。しかも去年から今年へかけて一度も出陣して来ているので、届出さえすれば当然帰国は許される筈なのだ。
（それをわざわざ、鷹狩りなどと偽って……）
公儀を相手にしてほんとうに勝てると仰しているのだろうか？
「弥兵衛」
「はい！」
「これはかくへつお殿さまからの指図があったわけではないか……」
「公儀への帰国のお届けてござりまするか」

「そうしや。こう届けておいては如何てあろう。よいか、お殿さまは鷹野へ出られた」
「はい。まこと、その通りて……」
「ところか、一向に獲物かない。それに腹を立てさせられて、国許て狩りして参ると、そのまま仙台へお発ちなされたと」
「しかし、それては……」
「むろん、国許へ参る筈か、わさわさ江戸に止まってあったもの……公儀とてもご用はあるまい。届け出ておけと鷹野からのお指図ゆえ、謹んてお届け申し上げますると」
御前はそういってから、又考え深そうに首を傾げた。
「やはり、そうしや。今日の昏れ方かよい。早すぎては不猟の言葉か嘘になろう」
遠藤弥兵衛は、続けさまに舌打ちした
（そうてもいって届ける以外に何かあろう。それにしても困った殿た……）
御前はまた虚空を見つめて、ひっそりと動かなかった。

十

「御台さまの仰せの通りに致しまする」
弥兵衛はそういってから身を乗り出して、声をおとした
「しかし御台さま、お殿さまは、まこと戦を遊ばすお気てこさりましょうか」
「さあ……とうてあろう？」
「あなた様は公儀相手に戦をして、勝てるとお思いなさりまするか」

御前はゆっくり首を振った。
「勝てぬこと……殿かようこ存知てあろう」
「ならば……ならは、何故このようにわざわさ相手を怒らすようなこ所業を……」
御前はそれには答えす、
「そうしや。届け出するおり、もう一言申し添えておくかよい」
「もう一言……？」
「そうしや。折角ひさしぶりのこ帰国ゆえ、あれこれと国許の用を片付けたい。しかし、公儀にこ用もあらは、即刻出て参りまするゆえ、遠慮無うお申し付けありたい……そう申し添えたらカトが取れよう」
「なるほど」
「殿はな、こなたや、わらわか居ることゆえ安心しているのかも知れぬそ」
弥兵衛は又はげしく舌打ちして、
「とにかく公儀へは届けおかねばなりませぬ。したか、それて事は終わりてこさりませぬ。もう一つ大事なことがこさりまする」
「上総介さま奥方のことてあろう」
「はい。このままでは姫さまの方から火か付きかねませぬ。この儀は如何遊はすお気て」
御前はそっと眸を閉じた。
必死てそれを案している……その証拠に閉した瞼かこまかく痙攣しているのかわかる。
「姫さまは今日か明日かに、必す天海に会いましょう。天海僧正はいま、川越から出られて増上

寺に御滞留の筈でござりまする」
「弥兵衛よ」
「は……はい／」
「こなた公儀へ届け出た足て、浅草の奥方の許へ回るかよい」
「そして、天海に会うのは思い止まるようにと……」
「いいえ」
御前は又ゆっくりと首を振った
「いったん思い立つと奥方も又殿のお子、並みのことては思い止まるまい。そこてこう申すのしゃ」
「はい。とのように……？」
「わか家の殿は、上総介さまこ処分のことに腹を立て、公儀と一戦する気になり、鷹野から一気に国許へ走られた。そうしゃ、虎のようなお方ゆえ、千里ひと走り……むろん上総介さまとこ談合のうえの事てあろうと……」
「上総介さま、とも、ご談合？」
「そうしゃ。そなたかそう思うのしゃ。そして思うままを姫に告けてやるかよいのしゃ。上総介さまも、むろんわか殿とこ同腹と見え、これも途中て道をかえさせられて国許へ直行なされた。もはや一戦は避けられまい。それゆえ奥方にもお覚悟をと」
遠藤弥兵衛は唖然として、端麗な御前の顔に瞬きつつけた。
（何という恐ろしいことを平然と……？）

殿が鷹野の虎ならば、これはいったい何であろうか……？

弥兵衛の膝に立てた拳がカタカタ震えたした。

十一

「弥兵衛、わかりましたな」

又おだやかな御前の声であった

「上総介さまも国許へ直行なされたし、もはや一戦は避けられませぬ……そう申せば奥方も、いくぶんはびっくりなされよう。あとのことは、わらわに思案もあることゆえ、そう伝えて来るがよい」

「それは……しかし、もしも、そのようなことか、公儀のお耳に入りましては」

「大事ない」

と、御前は微笑をとり戻していた。

「よう考えてみると、殿は、わらわやそなたを欺したのじゃ」

「それは、そうでござりまするか」

「欺したうえて、万一の場合にはわらわの才覚で身を処せよと書いてある。仮に一戦の覚悟という噂が立とうと、それは殿の身から出た錆、こんどは殿がご才覚をなさる番であろうか」

再び口を封じられて、弥兵衛は又ましましと相手を見返した。

（どんな噂が立っても、それはわらわの知ったことではない）

そういいたげな唇辺の微笑が案じられる。

（いったいこのお方は、ほんとうに殿を愛しておわすのであろうか？）
双方が気性に任せて、何時も底にきびしい対立を秘めて闘って来ている夫婦……そんな夫婦だったのではあるまいか。
「弥兵衛よ。男には男の才覚がある筈じゃ」
「それは、たしかに……」
「ここで殿が、公儀相手に一戦する……そのような殿であったら、伊達家の行末ももう見えた。潔く一戦させて滅んでしまった方がよいてはないか」
「おそろしいことを……」
「ホホ……そうであろう。五十に手の届こうとするお方が、十九や二十歳の若殿はらのように、鷹野からそのまま国許へ……それで一戦の噂が立たぬと思うようては、お眼も一つご不足なら、思慮も片輪といわねばならぬ」
「…………」
「国許では、必ず片倉の隠居景綱に相談しよう。景綱は殿よりも又十歳も年上じゃ。そのよい年をしたものが、額を寄せて相談して、戦になるのならば止むを得まいぞ」
弥兵衛は、まだ合槌すらも打てなかった。
「ここではなあ弥兵衛、わらわもそなたも、意地わるく殿をいじめて見物してやろうぞ」
「あの、殿を、いじめまするので」
「そうじゃ。殿は戦をする気らしい。それでなければ、上総介さままで国許へ追いやる筈はない。これは一戦する気に違いないと、公儀へ帰国を届けたあとで、われ等の口からいいふらして

困らせるのじゃ」

「フーム」

「そのあとで、殿が何を考えるか？　これは見ていて面白い。伊達家はのう、もともと公儀にとっては眼の上の瘤、何れひと波もふた波もかぶらずには済まぬ家じゃ。それ、世間に可愛い子には旅をさせよという諺もある。虎の旅をからかいながら見ていてやろうぞ」

そういうと、三春御前は、弥兵衛の理解とは凡そ遠い世界で口をすぼめて笑っていった。

弥兵衛は、美しすぎる御前の笑顔に対して、凄じい闘志を秘めて羽つくろいする拳の上の鷹を連想させられていた。

洩る船焼ける家

一

駿府の家康の許へ、九月八日、江戸から前後して二人の使者がやって来た。

その一人の柳生宗矩は使者というより、家康の方から呼んだのだと言った方がよい。あれこれと、一門の多くの弟子たちから寄せられる全国の情報も知りたかったし、平和の世に処する武道について、宗矩の意見をしっかりと問いただしておきたいと思ったからだ。

ところがもう一人は家康の予期しない使者であった。

表向きは、大坂における旗本たちの戦功を家康に報告し、その行賞についての意見を承り

たいという用件で、小姓組番頭の水野忠元がやって来たのだ。
忠元は本多正純に会い、そのあとで家康の居間へ通されると、すぐさまお人払いを願い出た。
秀忠直々の密旨をおびて来ている時でなければこのお人払いを求めなかった。
駿府の重臣たちまではばかる話……と、なるとおだやかならざる空気が漂う。それを知っているので家康までが眉根を寄せた。
「また、何ぞ厄介なことがあったのか」
(事によると忠輝の処分を相談に来たのかも知れぬ)
家康は、そう思いながら人々を遠ざけると、渋い表情で、忠元に問いかけた。
忠元は平素よりも堅くなっている。
「はい。去る八月二十八日のことでございます」
「二十八日……と、申すと、十日ほど前にあたるの」
「仰せの通り……その二十八日に、伊達政宗との、突然江戸から姿を消してござりまする」
「忠元！　おかしなことを申すな。政宗が消えた……というのは誰ぞに殺された……という意味ではあるまい」
「はい。江戸屋敷の普請など致し、出来上がったら将軍家をご招待申し上げて猿楽をお目にかけたいと申して居りましたものが、突然に帰国致してござりまする」
「それならば何故帰国したと申さぬのだ。消えたなどとおかしなことを……」
「それが、消えたも同然……と申しまするのは、その前夜、葛西に鷹狩りすると突然言い出し、その鷹狩りの途中から、そのまま帰国なされたらしゅうござりまする」

「ほう、鷹狩りの途中からのう？」

「何でもここには獲物が居らぬ。国許の鷹場がよい。そう怒鳴り立てて、そのまま帰国と」

「留守居の者が申したのだな」

「仰せの通りにござりまする」

「届出のあったのは、その翌日か」

「当日の日暮れにござりまする」

「そうか　それならば、或いは、癇の果てかも知れぬ　案ずることはあるまい」

「ところか……実は、上総介忠輝さまも、江戸へ参る筈が、そのまま国許へ直行なされておわします」

「なに、それを、何故先に申さぬのだ！？」

「前後はお許し願いとう……実は、上総介さまを国許へ帰すよう計ろうたのも伊達とのらしゅうござりまする。そこであらぬ噂が立ちそめました。上総介との奥方さまご離別のことから伊達どのは腹を立て、双方示し合わせて挙兵の決意を固めたらしいと　」

家康はフフンと鼻を鳴らして苦笑したあとで、しかし真剣な顔になって考えこんだ。

二

「それについて、将軍家ご側近のご意見も、実は二つにわかれて居るかに伺ってござりまする」

水野忠元は、その言葉が不遜にひびかぬよう、かくへつ気を配っているらしかった。

「その一つは、許しがたい公儀の軽視、これを問責せずにはおけぬと致しまする強硬意見。もう

一つは、案ずるには及はぬ、既定の方針とおり、上総介さまご処分を先に仰せ出さるれば、間もなく火は消え失せようという」

しかし家康は眉根に皺を寄せたまま、しっと脇息にのせてある老眼鏡に視線をおとしている。

「上様の仰せては、伊達とのは、戦国以来、大御所さまかくへつご贔屓の戦友てもあることゆえ、われ等たけて事を決するは僭越、ご下問もあらは詳しく事情を奉答申し上けてご意見を仰き参れとの仰せ出されにこさりまする」

家康は何を思ったのか、またフフンと鼻を鳴らした。

「困ったものよのう」

「は……？」

「将軍家は政宗に気押されて居る。それてはならぬのたか、困ったものよ」

「と、仰せられますると、ここては公儀の重みを見せよ、とのご意見てこさりましょうか」

「そうてはない。言わいても、責めいても、相手か遠慮するようて無うてはならぬと申すことじゃ」

家康は軽く言ってから、

「上総介が女房ともは、引き取ると申したのか」

「はい。いいえ……その話に答えもせす、さっさとご帰国なされましたので」

「そうか。話の仕掛け方か軽すきたのてあろう。将軍家も、苦労か足りぬわ」

「は……」

「総して人と縁を断とうとする時は、両者の間に誤解や感情のもつれの残らぬよう、別の手当て、

別の配慮が大事なものじゃ」
「と、仰せられまするとの？」
「わしは、あれの官位をすすめた　庶長子の秀宗には宇和島十万石を遣わした　これ等はみな、その手当てなのだ。この手当てで敵意のない事をよく示し、そのあとで上総が女房を引き取っ
す……」
そこまで言ってから思い出したように、
「そうじゃ。仮に、上総が女房は引き取って貰いたい　その代わり、伊達家の後を継ぐ嫡子忠宗には、別に将軍家の娘　人を進せて両家は懇親に　そう申したとせは　相手も腹は立てられまいか」
「あの、将軍家ご息女を」
「養女でもよいわな　要は天下の泰平よ」
家康は渋い顔でそう言うと、
「よしよし。一思案してみようほどに、しばらく退って休んで居れ」
あっさりと忠元を退らせて、すぐこんどは、もう一人謁見を待っている柳生宗矩を呼び入れさせ、
「又右衛門、伊達が短気話を耳にして居るか」
と、問いかけた。
「はい。江戸ではその噂が誇大に伝えられ、中には戦にもなりかねまいなどと……」
「そうか。とうじゃ。そこ許の見透しは？」

「伊達との の酔狂も、今度はチト度が過ぎましたように存じまする」
「そうか。酔狂と見るか しかし、瓢簞から駒、のたとえもある こっちの構えは大上段かよいか、それとも正眼かよいと思うか」

三

家康の問いかけ方が兵法の構えという、いかにも軽い問いかけ方なので、柳生宗矩も軽く答えた。
「構えは、つねに正眼でなければならぬと存じまするか」
「そうか。正眼でなかったゆえに、度のすぎた酔狂を許してしもうた……そういう意味になるのたな」
「大御所さま、大御所さまは酔狂と酒乱をご区別なされましょうか、それとも同じ類いとご覧なされましょうか」
「フン、おかしな反問をして来たの。すると、伊達政宗は、酔狂ではあるが、酒乱ではないといいたいのか」
「御意にござりまする。あのお方の構えは八方破れ……相手の肝を奪おうと、時々おかしな構えは致しまするか、わが身が何をしているのかもわからぬほどの酒乱とは見えませぬ」
家康は、舌打ちしてからフフンと笑った
「又右衛門も、大坂以来、たいぶ育って参ったようしゃ とうしゃな、また、将軍家からご加俸を受ける気にはならぬかな」

「はい……それでは、落城の日にこつえんと消えていった奥原豊政に笑われまする」
「奥原ではあるまい。亡くなった石舟斎の眼が怖いのであろう」
「それも、ござりまするか」
「羨ましいわ。石舟斎はよい伜を持ったものよ」
「亡父が、地下で恐縮致して居りましょう」
「実はの、わしがそなたを呼んだのは他でもない。わしもそろそろ天命に甘えてばかりは居れぬ齢じゃ。そこで来春は早々にもう一度京へ参って来ようと思う」
「もう一度京へ……」
「そうじゃ。これで、もうこの道は通るまい。そう思うての、心の中で別れを告げて道中してから三度目じゃ」
「ご用向きは何でござりましょう？」
「それについてそなたに頼みおきたいことがある。こんどの上洛は、三代将軍たるべき、竹千代との伴うての参内が目的じゃ」
家康はそこで又、この人にしては珍しく自嘲めいた笑いを洩らした
「おかしなものよ。わしは、達人と申すものはな、或る年齢に達すると、不動の安心を摑みとれるものじゃと想像していた」
「なるほど」
柳生宗矩は、自分でもギクリとするほど、鋭い眼をして心耳を澄ました。
「ところが、仲々もってそうではなかった」

「と、仰せられますると……」
「生きれば生きるほどに迷いか深くなるはかりよ。燃え尽きようとする生命の灯を見つめなから、あれに迷い、これに泣き、あれを案し、これを気遣う……又右衛門、悟りなどという境地はわしには無い。わしは手のつけられぬ鈍根の生まれつきらしいぞ」
「恐れ入りました。われ等には、またまたそのお言葉の意味すらわかりかねまする」
「わしは考えた……これは進んで迷いに迷うてみるより他にないと。そこて竹千代とのをハノキりとわか家の跡目に決めておこうと欲したのたか、この欲をどう思うぞ。わしのいまの心境はな、焼ける家の下に臥し、傀る船に乗って大海を渡っているような気持ちなのじゃ」
そういうと家康は又、泣き出しそうな顔て笑った。

四

「あの、焼ける家の下に臥し、傀る船て大海をわたるお心……？」
柳生宗矩は、このようにまっ正直な述懐を耳にしたことかなかった。
安心は、万人ひとしく望む境地だ。しかし、時々刻々、生成してやまぬ周囲の動きが、果たして絶対の安心などを個人に許すものかとうか？　天地はそれをどの個人にも許さぬように出来ているのてはあるまいか……？
そんなことをしきりに考えたしている宗矩に、一層強く、家康の言葉が胸に突き立って来たのかも知れない。
「そうしゃ」

と、家康は、飾らぬ表情て頷いた。
「わしはの、今迄は子供の心配てたくさんたと思うていたのしゃ。将軍家のこと、上総介のこと、尾張のこと、遠江中将がこと……ところか、こんと末の伜を水戸へ遣わすことにして、これて終わりと思うたら、そうはゆかぬ。急に竹千代とのの事か気になってならなくなっての」
「それか、それか、自然なのてござりますまいか……兵法ても同しことか申せるように存じまする」
「そこてお許に頼んておくのしゃ。お許はまだ若い。とうしゃな、お許は、竹千代とのにも兵法を教えることにして、来春の上洛に同行してはくれまいかな」
宗矩は返事の代わりに、黙って家康を仰いていった。
「何事によらず、師か一代ては念かととかぬ。よいかの欲しゃそ。迷いじゃそ。そう思うて聞いてくれよ。わしの不安は底無しになって来ている。そのせいしゃと思うて聞いてくれよ」
「は……はい」
「よいか。将軍家には将軍家の師、竹千代とのには竹千代とのの師と、師が父子別々ては、やかて父子の意志は通わぬ別個の人になりそうって不安なのしゃ。言葉を変えていえは父子の対立。いや対立以上の不和もそこから生まれよう。わしと将軍家か、わすかに怒鳴り合わすに済んだのは、子供のおりには於愛がいた。於愛かわしという父の意志をようわか子の秀忠とのに伝えたから……そして、長じてからは本多正信……これか、又わしの意をよう伝えて誤らなんた。と申しても、その将軍家てさえ、実はなおわしの方に不安、不満かきさすのしゃ……」
「………」

「さて、そのわしは遠からす、この世を去る。去ったあとて、今のまま〻は将軍家と竹千代との意志を通わす筧かない。これを作っておいてやらねば、それ、洩る船、焼ける家の不安かいよいよ募るはかりじゃ。とうしゃな、お許は、双方の師としてこの筧の役を勤めてはくれまいかな」

柳生宗矩は、不意に眼頭か熱くなり、やかて涙て、わか膝か見えなくなった。

（年寄りの取り越し苦労……）

そう思おうとするのたか、感情はそれに従おうとしなかった。

（これこそ、まことの愛情、まことの用心……）

そうした感情かくいくい胸をしめつける。

「お言葉とあれば不肖宗矩……」

家康はホノと語気の力を抜いて、

「引き受けて呉れると申すか」

「そうなればもう一つしゃ。とうじゃな、将軍家に上総介の処分、出来そうに見えるかな」

家康は、すくさま次の不安に向きを変えた。

五

「洩る船に坐し、焼ける家の下に臥す……それほとの覚悟て天下にのそむ者か、わか家に争いの根を残しておいて何の泰平そやしゃ」

家康はまた軽くいった。

「争うか繁昌の道か、睦むか繁昌かは一ノ児にもわかっていよう。わかっていながら眼をはなすと争いたす……それかこの世の実相ならは、将軍家と上総介の間もまた、争う余地を無くしておくかわしの役目、となるのたか、俗に年寄りの冷水という言葉もあれは、もう一度虚心にこなたの意見を訊いてみたい。とうしゃな、上総介の処分は将軍家に任せておいて大事無いと思うかな？」
柳生宗矩は、
「されは……」
と、いって、思考をそれにふり向けた
家康の、この問いの裏には、忠輝をこのままにしておいて、伊達政宗を押えきれようかという意味がふくまれている。
（又、以前の正眼かよいか、大上段かよいかの問いに戻っている）
それかわかると、宗矩にも意見はあった
「恐れなから、大御所さまは、伊達とのを、とのようなお相手とご覧なされておわしましょうか。双方白刃て向かいあった場所の相手として」
「双方白刃て……と、問い返すのか？」
「恐れ入ってこさりまする」
「やはりこれは、恐ろしい相手てあろうな」
家康はそういってから、
「そちも申したとおり、政宗は酒乱てはないか、酔狂な男……二人たけて向かい合ったと見せか

けて、実は、四方八方へ助太刀を伏せておくやも知れぬ男だ」
「なるほと、そうかも知れませぬ」
「それゆえ、恐ろしいというよりも、油断のならぬ男というた方かよいかの」
「恐れながら、宗矩もそのように存しまする。そこでもう一度、その油断ならぬ伊達どのと、将軍家とか白刃を合わせて立ち向かった……その場面をご想像願わしゅう存じまする」
「なるほど」
「向こうか助太刀を伏せておくやも知れぬ。とすれは、将軍家の側にも、何ぞそれに対するお手当てかなければなりませぬ」
「そうか。すると、やはりわしは、将軍家に助太刀をしてやらねはならぬ事になるか」
宗矩は、相手の反応の若々しさにおどろきなから、
「大御所さまは、何時もそれをなされておわす」
と、笑いなから付け加えた。
「たた、将軍家お一方てはこさりませぬ。泰平を希う諸大名から庶民一人一人の上に、並々ならぬ助太刀をなされておわす。そこにわれ等を否応いわさぬご偉業の重みかあるのだと存じまする」
「そっか。わかった。わかったそ又右衛門」
こんとは家康か涙ぐんだ。
「そうか。わしの洩る船、焼ける家のあせりを、みなへの助太刀にあせる心と見てくれるか」
「それをせすにはおられぬお方……それゆえ、絶えず動くそのご配慮……このご配慮一途のご生

活こそ、わきから見れば、どう動かしようもない大御所さまの不動心」
「動そのまま不動と申すか」
宗矩は一礼して、
「上総介さまご処分では、将軍家へお助太刀を願わしゅう存じまする」

六

家康は、ふと、秀忠が宗矩にもその旨申しふくめて寄こしたのではあるまいかと思った。
しかし、それでもよかった。
(宗矩の言葉には道理がある。道理には従わねはなるまい)
なるほど、また泰平の世に戦国流の権力奪取の「機会——」を求める政宗と、家康の意を奉じて、泰平の基礎固めに心身をすりへらしている将軍秀忠とては、その個人的な力量に差があり過ぎた。
それを、無理に押える術はなくはない。
「——予の意に逆らうのか。予は将軍家なるぞ」
そう一喝してよい「権力——」も「実力——」もすてに将軍家の側にある。
ところが、その権力と実力を軽々に利用すればそれは直ちに「伊達討伐——」という戦乱になり、戦乱になること自体か、泰平のために中央集権をなしとげた家康父子の敗北を意味する結果になる。
(したがって、ここでは、将軍家に助太刀しても、戦乱にしてはなりませぬ)

そういう宗矩の意見なのだと、家康は受け取った。
「そこ許の意見は、ようわかった」
家康はもう一度言ってから、
「ところで政宗の方じゃが、何と思うて、わざわざあのように、喧嘩腰に出たのであろうかの」
「されば……」
宗矩は、わざと笑って首を傾けて、
「兵法で申せば、さぐりの小手振り……かと存じまするか」
「将軍の腕前を、さぐるためと申すか」
「はい。しかもそれは、将軍ご自身の腕前だけでなく、これに助太刀なさる大御所さまのお手の内も……伊達どのは、その双方合わせたものの力量を見きわめねば、わが気性を矯めかねるという……これも大きな迷いの壁につきあたって居られまするようで──」
「なるほど」
家康は大きく頷いて、改めて又宗矩を見直すのだった。
(育ちおったぞ又右衛門か……これならばもはや父石舟斎にもおとるまい)
「政宗は、果たして、政宗自身に戦意を放棄させるだけの実力か、幕府にあるかどうかを見きわめようとしている……それでわざわざ上総介を国許へ帰したり、自身も領国へ引きあげたりしてその反応を見ているのだ……そうそこ許は見るのじゃな」
「御意のとおりに存しまする」
「すると、政宗めも壁に行きあたったか」

「はい。あのご仁も人としてはとにかく達人。ここらで相手か、ほんとうに泰平の世を維持するだけの力を蓄えたと見れは、心底から従ぅ気にならねは済まぬ……そのような心て、遮二無二引きあけたものてはございますまいか」

「そう解釈すれば、政宗に戦意はない」

「戦えは負ける戦を、するほと愚かなご仁てはございますまい。それに国許には、片倉どのもこざりますれば……」

「すると結論は、政宗を攻めることてはなくて、政宗を安心させてやることか」

「それは違いまする！」

宗矩は意外なほと語気を強め、

「伊達とのは、手も足も出ぬ！　そう悟らねば爪牙をおさめぬ虎にございまする」

射抜くような眼をしてきっぱりと言い放った。

七

「そうか、虎には、安心は無かろぅからの」

家康は、宗矩の鋭い視線を浴びなから、軽く笑った。

「戦ぅ気はないか、さりとて従う気にもなれぬ。泰平の藪の中て、虎が一匹、獲物の無いのに腹を立て、ぐるぐる動きまわっているか」

「仰せの通りにございまする」

宗矩も視線の緊迫をといて笑った。

「しかしなから果たしてそれか、幕府という泰平の檻の中て、飼い馴らされたおとなしい虎になるか、それとも依然として人喰い虎てのし歩くか、諸大名という森の獣たちは、固唾をのんてそれを見ている。そこに将軍家の鞭の振りようの、むずかしさかあろうかと」
「ハハ……宗矩よ」
「はい」
「空想のついてしゃほとに訊いてみよう。よいか、仮にしゃ……この虎をそのまま藪の中に残しておいて、将軍家もお亡くなりなされた……むろん、その時にわしか生きていよう筈はない。居るのは、そなたを師とする新しい将軍竹千代とのはかりしゃ」
「は……はい」
「その時、そなたは、竹千代とのに、この虎一匹、とう扱えよと教えてやるそ。それを考えてみてくれぬか」
「これは、こ難題！」
言いなから宗矩は、しかし、楽しそってあった。鹿爪らしく首を傾けて考えて、
「その時には」と、身を乗り出した。
「老いたる虎を、諸侯とともとも御前へ召し出し、新しい将軍家にこう宣せまする」
「とう言わせるそ！」
「諸侯のうちには、わが祖父や父と共に、戦国の世を戦い通して来た者もあろう。それらの者は祖父や父にとっては朋友しゃ」
「朋友、のう」

「それゆえ、友誼からの遠慮もあったてあろうか、予はそうてはない。予は生まれなからの将軍なるを忘れまいそ」
「ほう」
「予の命に従わぬ者あらは、用捨なく、不都合の家臣として取り潰す。さよう心得おくように」
家康は思わす奇声を発して唸っていった。
「そうか。竹千代との世になれは、生まれなからの家臣ともか」
「はい。合戦なとと意味のない凶器を弄ぶ迄もなく、命令一つて片付けられる。そうなってこそ、牙も爪も無意味てあったと気か付きましょう」
「わかった。詰らぬことを訊ねたものしゃ　これは内々にの、又右衛門」
「ては退って、そちも休息せよ。わしも又とうすることが将軍家への、よい助太刀になるかを、しっくりと考えよう」
「仰せまてもこさりませぬ」
「呉々も、太刀は抜かす、血は流さすに」
「流したのてはわしの負け……そう言いたいのてあろう又右衛門は」
「恐れ入ってこさりまする」
「ようわかった。来る春の上洛、それから竹千代とののこと、頼んたそ」
そう言うと、家康は帯していた短刀一ふり、つと宗矩の前へ差し出した
「取っておけ。備前兼光しゃ」
「ははッ」

根と花実

一

柳生宗矩を退らせると、次に異国渡海の朱印状を求めて長崎からわざわざやって来ている長谷川藤正等を待たせたままで、家康は、森沈とした表情で考え込んだ。

本多上野介がやって来て、

「通しましょうか」

そう訊ねたが首を振った。

「そなた、よいように計ろうておいてくれ。済んだあとで挨拶だけを受けるとしよう」

上野介正純は、家康の苦悩が何であるかは察しているので、そのままかしこまって出ていった。この時の朱印状は、呂宋と交趾、暹羅、柬埔寨、高砂等へ、明人、西洋人なども混えて、十一人か新しく朱印状を求めてやって来ていたのだ。

大坂の役も済んだので、商人たちはまた華々しく海外へ乗り出そうとしているのだ

家康はそれ等の人々に「――慈悲は草木の根なり。人の和はその花実なり」と書いた紙片を示して、海外での日本人の心得を説くように、正純に命じてあった。

海外で騒動を起こさぬ秘訣は人の和にある。しかしその人の和は、慈悲という草木の根を培ってあってこそ花も実も着け得るのだ。その根を養う努力がなければ花実のあろう筈もない。

「――この人情に、本朝・異国の差はないゆえ、先ず慈悲の根を培うこと……これが交易成功の基と心得、つねに慈悲を心掛くべし」
そう言わしめてあった後だけに、柳生宗矩が退ってゆくと、再び、わが選んだその一条が胸によみがえって離れなかった。
「――慈悲は草木の根、人の和はその花実なり」
伊達政宗の場合も、やはりまた家康の側に慈悲の不足があったのではあるまいか？
（又右衛門は、藪の虎を、幕府という泰平の檻の中にとりこめよと申したが……）
この泰平の檻が実は、無慈悲な檻であったとしたら何うなろうか？
人と人とが対等の立場にある時は、慈悲とは言わず同情と言う。したがって慈悲はつねに上長上司として、立ちまさった権力、立ちまさった立場にある者の、下々に対して忘れてはならない心掛けでなければならない。
（わしは果たして、その気で政宗に接して来ていたろうか……？）
そう反省すると、何となく面映ゆいところがあった。
政宗の器量を充分認めているだけに、どこかで彼を恐れているところもあったらしい。この恐れは、当然警戒心ともなり、用心深く相手との間をおく冷たさにもなりかねない。
（何の政宗ごときを……）
心の底ではそう思い、それが怖れ……と、考えてみたことは曾てなかった。
（このあたりに誤りがあったのかも知れぬぞ）
家康が小半刻も、ひとりでじっと考えているうちに、窓の外へは短日のかけりがひたひたとし

たい寄って来ている。
「また、灯りはよろしゅうこさりましょうか」
侍女かやって来て小声て言った。
「またよい。もったいないそ」
家康はそう答えたあとて、
「そうた　出雲を呼んてくれ。勝隆を」
ようやく思案の道かついた様子てあった

二

小姓頭の松平出雲守勝隆は、この時、駿府の大番頭にあけられていた。
松平上総介忠輝に「永対面禁止――」を申し渡す使者を命せられ、それを無事に勤めたことから、
「――あれも、分別ある者になったそ」
そう言ってなされた、異例の抜擢てあった
言うまでもなく、忠輝の付家老、三条城の城主松平重勝の伜てある
その勝隆かやって来た時はもう薄暮てあったか、家康はまた灯火を占けよとは言わなかった。
「勝隆か、少々暗いが我慢せよ」
と、家康は言った。
「この年寄りに出来ることは節倹くらいのものしゃ。またまた日本国は貧しいからの。節倹か道

徳の第一じゃ」
　勝隆はそうした言葉になれていると見えて、
「まだお話の出来ぬほとの暗さてはこさりませぬ。こ用を仰せ聞け下さりますよう」
「おお勝隆よ。その方はまた、独身てあったな」
「は……？」
「その方に女子を一人やろう。受けてくれるか」
　勝隆はびっくりして、そろりと膝を正していった。
「そうしゃ。年の頃も恰度よい。上野との（正純）にはお梅を遣わしたか、そなたにはお牧をやろう。お牧は十六歳しゃ」
　勝隆は一層身を堅くしておし黙った　というのは、お牧はこの時側室の中の最年少者て、改めて年齢なと聞くまてもなく、始終勝隆と顔を合わせている間柄てあった。
　それたけに、無気味な気かした
「お牧はな、つねつねそなたを侍らしい侍たと申してあくかれている。そうしゃ、わしもそろそろ若い女子は片付けておかねはならぬ　二十にもならぬ者に髪を切らせるような無慈悲なことはしとうないからの」
「は……しかし」
「よいよい。こなたもお牧を嫌いてはあるまい。そうしゃお牧はこなたに遣わそう」
　この時代にはまた女性の間に、一夫にまみえすという道徳は、それほとやかましく言われている時代てはなかった。

しかし貴人が亡くなると、側近の男性のうちからは殉死者を出し、愛されていた女性たちは髪をおろして、菩提を弔う慣わしだけは根付いていた。したがって家康が亡くなると、当然、若い側室たちは、長局の隅へその青春を埋め去らなければならなくなる。

それで近ごろ家康は、若い側室たちを、あれにやり、これにやっている。

本多正純もその一人のお梅の方を頂戴して、いまでは正室にしているのだ。とんだ形見わけだが、当時はそれが名誉でこそあれ、誰もあやしむ者のない蕃習の一つであった。

「そうじゃ。お牧を嫌いてはあるまい」

「はい。それは……」

「わかった！　似合いの夫婦じゃ。お牧も喜ぶであろう。そこで早速ながら、その方に高田へ使いして貰いたい」

「は……!?」

「高田へ使いしてな、戻って来たら祝言さしょう。心ばかりの化粧料もつけての　それゆえ、無事に勤めて来るのじゃぞ」

勝隆は「しまった！」という表情で舌を噛んだ　家康の魂胆が一瞬にしてわかったからであった

三

「おそれながら、只今のお話……」

あわてて勝隆が口を開くと家康は又そらとぼけた。

「只今の話というと、お牧かことか？　それとも高田のことか？」
勝隆はカノとして、
「そ・・そ……その、双方にこさりまする」
「なに、双方……」
「おそれなから大御所さまは、それかしに高田へ使いせよと仰せられたのか、御用の本筋てこさりましょっ」
「そう受け取るかの、その方は……」
「但し、高田への使者は尋常の使者てはない。上総介さまはあのこ気性ゆえ、われ等の申すことなとお聞き入れはないかも知れぬ。そのおりにも決して短気は起こすな。無事に帰れは祝言が待っているそ……そっ仰せられたいのてこさりましょっ」
「これはおとろき入った！」
家康はけろりとした表情て、
「そこまてわかってあれは、何も申すことはない。明日、ここを出発せよ」
「いやてこさりまする！」
いってしまってハノとしたか、それは勝隆の、自制出来ない若さの反撥らしかった。
「なに、いやたと……わしの命令に従えぬと申すのか」
「いいえ、二つの話を一つにして……いや、不潔ていやてこさりまする！」
「勝隆！」
「はいノ」

「その方、わしと対等に、人生の駆け引きて、わたり合えると思うて居るのか。その方は、高田への使者は決死の覚悟てなければは勤まらぬ。それなのに、祝言を餌にして自重を強いられる。いや、祝言したさに使いした……褒美ほしさの奉公、と見られるは心外、それゆえいやたと申すのてあろう」

「仰せのとおりにこさりまする」

「小賢しいそ！」

「は……」

「その方の考えるぐらいのこと、わからぬ家康と思うて居るのか」

まず一喝しておいて、それから声をおとしていった。

「よいか。上総介はなるほと一筋縄てはゆくまい。その方との約束を破って江戸ゆきを変かえした我儘者しゃノ。しかし、それたけに、この使者はその方てなければはならぬ」

「…………」

「その方ならは、何故約束を変かえなされたかと責められる。責めれは事情も分明する道理しゃ。その上て、わか意を伝えてゆけは、相手には一分の弱味になる」

「と、仰せられまするると、こんとのこ処分は……」

「また早い！　その方の覚悟か先しゃ　よいか、相手に一分の弱味を感しさせ得る優位にあって、この位の役目か仕果たせぬよっては、その方の男もこれまてと思え」

「…………」

「わしかこなたにお牧を遣わそうと申したのは、勝降ならはやりおおせる！　そう見てとった信

頼の証拠、その証拠をそちに示したまてしゃ。それを腹黒い、汚い餌と受け取るようなケチな了見て何か出来るぞ」

勝隆は眼を白黒してため息した。

（何という奇妙な論理の展開てあろうか……）

四

「わしか、今度の使者にその方を選んだのは、以前のように、父子の情をからんだ、切ない頼みなとてはない。これは泰平を破る不都合の芽を、とう摘み除るべきかの大事な政治」

家康は言葉を続けた。

「人間の生活にはつねに二つの面かある。その一つは私情、もう一つは公の情……と、大抵の者は物事を二つにわけて考える。しかし、二つにわけると、公のためにはつねに私情は捨てねばならぬ苦しさたけか残ってくる。このあたりに人間の器量の大小を見分ける大事なケジメかあると思え」

「おそれながら」

と、また勝隆はさえぎった。

「それなればこそ、無事に帰れは祝言なとという、公私混同はいやなのてござりまする」

「それか半可通よ」

「は!?」

「それか未熟だと申すのだ。私と公とか、つねに心て格闘してある境地ては、人間の一生は犠牲

の連続……法を守り、秩序を履もっとすれはするほと苦か立ちまさる。立派な人生ほと苦の生涯になり下かるわ」

「ては……ては、とう考えるのか正しいと、仰せられまするので」

「公私一如、私において楽しむことか、そのまま公の道にも叶う……その境地に立って働いてこそ上々吉の器量」

　いいなから家康は、年少の勝隆にそれを求める無理を思って苦笑した。

しかし、駿馬はきひしく叩かれてゆかねはならない

「のう勝隆、わしはもう上総介のことては苦しんては居らぬ。あれの不幸に気をとられて、三代目竹千代とのか育て方を誤ったり、天下大乱の芽を見のかしたりしては一大事しゃ。したかってわしにとってはもはや公も私もない。公と私とか一つになった大道を、誠実に歩くまてのこと……よいか、そこて、お牧か行末のことまてこなたに頼んたのしゃ」

　勝隆は首を傾けて、またノリノリと自分の感情を扱いかねている。

「わしか、こうしたことをその方に申すのはな、もう一人、公と私の間に立って苦しむ者か、そなたの身辺に出て来るからしゃそ」

「それかしの身辺に……!?」

「そうしゃ。こなたの父の重勝しゃ　重勝は上総介か付家老、仮にわしか、その方をもって上総介に切腹を命してゆく。上総介は兵をひっさけ、伊達勢と一つになって一戦すると申して譲らぬ。そのおり、汝の父は、何とする?」

「あ!」

勝隆は思わず声をのんで居すくんだ。
（そうだ！　そうした場合もなくはない）
「気がついたか、父の立場の苦しさに」
「は……」
「気付けはよい。おそらく父の重勝は、わしからの使者と聞けは、上総介と同席して上意を聞くに違いない。そうなるとその方の口の利き方一つで、公と私の間にはさまれ、苦しさに耐えかねて、父も自害をしかねまい」
「は……はい／」
「そこしゃ。わしかこなたに心のゆとりを求めるのは．よいか　上総介を逆上させぬよう、父を殺すことのないよう、こなたも生きて戻って祝言出来るよう、その位のことが思案出来ぬようては一人前とは申されぬ。思案のメトを大きくひろけて考えてみよ」

五

勝隆の顔は蒼くなり赤くなった。
彼か不潔な餌と考えたお牧の方のことなとは、とうやらこの難しい公案を解かせるための一つの暗示に過ぎなかったらしい。
問題は「心のゆとり」を持ってのそめ、さもないと四方八方に不幸の波紋はひろかるそということらしい。
勝隆は、しっと家康を見上けたままて溜息した

(ほんとうに家康は、もう心の中て上総介を捨て切れているのたろうか……?)
そんな筈はない。子の愛おしくない親かあるものか……と、同時に、親の身を案しない子もまたありようかない。その証拠に、
(父か自害するかも知れない)
家康に、そう指摘されただけて、勝隆の胸は破れそうに高鳴りたしている……
「大御所さまに、お伺い申し上げとう……」
「何しゃ。遠慮なく言うてみよ」
「大御所さまは、上総介さまに、切腹をお命しなされまするか」
「そのことならは、また決めては居らぬぞ」
家康は又、勝隆の疑心を深めるようなことを平気て言った。
「その方の覚悟次第……よいか。わしは上総介を憎んているわけてはない。わしか、考えていることは、再ひ大坂の役のような無意味な戦をさせてはならぬということしゃ。それを繰り返させるようならは、わしも将軍家も、天下を預るほとの器量はなかったことになろう」
「大御所さまは、するうこさりまする!」
勝隆は思い切って言い放った。
「大御所さまのこ決心を聞かぬうち、この未熟な勝隆に、何の覚悟か出来ましょうや」
「勝隆よ。それはこなたの強弁しゃ。公にもせよ私にもせよ、子を殺したい親なとか、この世にあると思うて居るのか」
「それは、そのとおりなから……」

「ならば、問題をすり変えるな。根本は、再び伊達に乱をさせぬこと・・その目的か上総介を生かしたまま達し得られるや否やにかかっている。秀頼とのの場合もそうてあったの。今になって考えると、片桐市正に、もう一段の心のゆとりか望ましかった」
「すると、それかしに……この未熟なそれかしに、片桐とのの役目を果たせと仰せなさる」
「そうしゃ。そなたによい思案かあれは、いまのわしはまだ喜んて従う気よ。その意味ては白紙なのしゃ」
勝隆はまたカーッとなった。
何という狡猾な老人の責任転嫁てあろうか。それてはこっちか締木にかけられて絶息するより他にない。
「よいかの勝隆、もう一度繰り返そう。世の中の和と申す美しい果実はのう、一朝一夕に成るものてはない。その底に深い慈悲の根かなければはならぬ。戦乱はつねに怨恨の根に咲く仇花……その道路を踏みはずしては、断か断にならぬのしゃ」
「大御所さま！　ならはこの使者、われ等に仰せつけられるたけてはなく、大御所さまも、他に何そ、慈悲の根を植えつけなさるこ思案て」
急き込んてたすねると、家康はきひしい表情てうなすいた。
「言うまてもないこと。何てこなたたけに任せておこうや。大坂の役て懲り懲りしゃ」
思いかけない、強い弾か返って来た。

六

家康の言葉か、あまり強いひびきを返して来たので、勝隆は思わずたじろいだ。
（自分にはかり苦しい立場を押しつける老人の狡猾さ・・）
そう思っていただけに、大坂の役て懲り懲りしたという述懐は、いきなり一つ、思いかけない平手打ちを喰ったようなとまどいいたった。
「大坂のおりにもな、わしか骨身を惜しますに、一度出て行けはよかったのしゃ。直々秀頼母子に会うて説いたらああはならすに済んたてあろう」
「と、仰せられると、大御所さまは、伊達とのに……」
「そうしゃ。政宗か、素直に江戸へ戻るや否や……わしは江戸まて出て参る。ここて尽すべき手を尽さなんたら、大坂のおり同様、またこの年て鎧を着ねはならなくなろう。あれは一つの天罰だったわ」
「ては、あの近々、大御所さまも？」
「そうしゃ。そなたに負けすに骨は折る。わしは江戸へ、こなたは越後へ……だか、出来得れはこなたに越後の始末のことを聞いて出たいと思って居るのしゃ」
勝隆は面をふせて赤くなった。こんとは如何にも青年らしい羞らいて……
「とうしゃな。上総介か処分は決まったことしゃ。それ以上に、あちこち傷つけす、こなたも無事に戻って来て祝言する……そのおりには一段と人としての器も大きく育っていよう……わしはこなたを見るたひに大坂の冬の陣のおりに、茶磨山へ参った木村長門守を思い出す……あれも生

かしておいたら役に立つ好もしい若者たった……戦乱はあたら花を実らせもせずに散らすばかりか、又しても怨恨の根を太らす、この世のために大きな損しゃ。その事をしっかりと肚に入れて、慈悲の根を張らせてゆく。そのため、何ぞ思案か付きそうか」

「大御所さま！」

「わかってくれたらしいの」

「お願いかこさりまする」

「おお、申してみよ。遠慮はいらぬぞ」

「上総介さまに切腹の儀たけは……行末はとにかくとして、今のところは……」

「一段、二段と、間をおけと申すのか」

「はいノ！　上総介さまも、また若い花にこさりまする。迷いもあれは、落度もごさりましょう。さりなから、思い直す機会もあれは、よい実を結ふ春秋もあるお身にこさりまする」

「フーム」

「それを切腹……花のままて剪られたのては」

「待てノ勝隆。わしはまた、その事についてては白紙たと申した筈しゃぞ」

「それゆえお願い申し上けまする。公私の別ないお心て、慈悲の根を……それさえお聞き届け下されは、不肖勝隆、無事に使者の役目を果たし……はいノ、戻って祝言出来る……ような気か致しまする」

家康は、つと眼をそらして頷いた。

（勝隆にはこの情がある。この情こそか無事に役目を果たし得る、いちはん大切な条件たったの

た……）

しかし、この情を先に立てると、彼は、父を殺し、自分もまた忠輝に殉して死なねはならぬ破目になろう。

家康は、それをいちはん怖れている

と、言って、忠輝を生かしておいて、果たして伊達との縁か断てるかとっか……？

七

「お願いてこさりまするー」

と、又勝隆はしんけんな表情て頭を下けた。

「切腹はかりかこ処分てはこさりませぬ…何とそそれたけは思いととまって頂きとう」

「…………」

「それたけお聞き届け下さらは、勝隆、今夜中にも出発致して差し支えこさりませぬ」

しかし家康は、またハノキリと返事はなし得なかった。

口ては白紙……といいなから、心の底ては、

（切腹さすより他にあるまい）

そうした考えか、かなり深く根付きたしている。

いうまてもなく、忠輝の若さや気性を考え合わせてのことてあった。

若い者にとって、時に、生は死にまさる苦痛なのた。怒りに任せての切腹ならはとにかく、しっとおのれをおさえて謹慎しなから生きよとなったら、それは耐えられない苦痛の連続になる

であろう

「勝隆よ。こなた、上総介の場合には切腹を命ずる方が親の慈悲‥とは思われぬか」

「もってのほかにござりまする！」

勝隆ははげしく首を振りながら、思わず一膝身をのり出した

「大御所さまつねつねの仰せに、人の出生はこれ神仏の御手わざ、これを断つは自然に叛逆するると同様の罪‥ござりました　生きてさえおわせばご聡明なお方ゆえ、必ずわが身のお立場も、大御所さまのご苦衷も、ご理解なさる日がござりましょうほどに‥」

「そうか‥‥しかし、わしは上総介を、それほどの者とは思えぬのだ」

「おそれながら、それが大御所さまのあらぬこだわりかと存じまする」

「ほう、わしのこだわりのう‥」

「はい！、大御所さまは秀頼公を失わさせられた。それゆえわが子も犠牲にせねば済まぬ‥‥おそれながらお心の底に、いまだにそのこだわりが残っておわす　しかし勝隆はそれは逆かと存じまする」

「フーム」

「ここで若しも上総介さまに切腹をお命じなさると、あれも悔い、これも悔い、むごい悔いを重ねるだけ・それよりはここでひと先ずご助命なされて、上総介さまの出方をご覧なさるが、神仏の御意にも叶うことかと」

「しかしのう勝隆、わしは間もなく七十五じゃぞ」

「それゆえ、あとの事は将軍家にお任せ遊ばす‥‥果たして上総介さまが天下の邪魔者かどう

か。将軍家とて憎からぬご舎弟にござりますれば」
家康は、頷きながら眼を閉じた。
「よいよい。もう少し考えよう。そうじゃ。こなたは、今宵は、わしの相伴をして参れ。すっかりあたりが暗うなったわ」
家康は手を叩いて侍女を呼ぶと、
「灯をつけよ。もう勝隆の顔が見えぬ」
そういってから、何を思ってか、
「局へ参ってな。お牧に夕餉の給仕に参れといえ　よいものを見せてやろうと申してな」
かすれた声で笑っていった。
「さ、勝隆、これからが相談じゃ。虚心に聞くぞこなたの意見を……　とにかく、今夜中に決めてしもうて、明早朝、こなたに発って貰わねばならぬ」
そういえば、勝隆の顔はもう輪廓だけしか見えなかった。

越路の雁

元和元年は閏年で六月が二度あった　それだけに、冬の早い越路では十月に入らぬうちに初霜がおりていた。

松平上総介忠輝は、その日も城の中から、次第に黒さを増してゆく潮のいろに季節の足音を聴きながら、わが身のおかれている立場の不思議さに、改めて首を傾げずにいられなかった。駿府から江戸への予定を変更して、居城に戻る頃の、あやしい胸騒ぎはもうなかった。だが、こうしてこの単調な潮のうねりを見ていると、何も彼もが信じられない嘘であったような気がして来る。

(ほんとうに父は、自分を罰そうとしたのだろうか?)

そういえば彼は、まだ父の口から、はっきりそれを聞いてはいない。

最初に彼を驚かせたのは松平勝隆の思いがけぬ来訪であり、二度目は舅の伊達政宗からの密使であった。

政宗は、このまま江戸に入ると、将軍秀忠とその側近の者どもに有無をいわさず幽閉されよう。それよりは領国に帰って、将軍からの正式な使者を待つが上策と告げて来た。

領国には手兵がある。それゆえ騒擾をおそれてうかつな使者は送れまい。わざわざ相手の罠にかかるより、距離をおいて、相手に冷静な考慮の余地を与えるのが上分別だ。

「――何れ江戸の様子は、政宗よりくわしく知らそうほどに、ここはひと先ず……」

そういわれると、忠輝もその気になった。が、帰国して、さて、将軍家からの譴責は何とあろうかと、明け暮れ待つ身の焦躁は、忠輝の気性としてはたまらないものであった。

いや、当然、追いかけるようにしてやって来ると思っていた使者がいまだに来ず、逆に伊達家から、政宗もまた領国に引き上げた旨の知らせがあった。そして、すでに一ヵ月。

(いったい、江戸屋敷で、御台は何としてあろうか……?)

帰りついて、幼い徳松丸の顔を見るまでは、どこかにあやしい昂ぶりと張りがあったが、それ

も対面してみると至極平凡。
（人間に子が生まれる……）
たたそれたけのことて、生まれたはかりの嬰児は、その両親の何れに似ているかさえわからぬたよりなさて、想像して来たほと心を繋ぐ対象にはならなかった。
（このようなことなら、いっそ、あのまま江戸へ出ていた方かよかったのた……）
所領の田の面はすてに九分九厘刈りとられ、百姓たちは豊作を喜んでいるという。
しかし、その喜ひを、共に喜ふ資格はもはや奪われてしまっている。
（誰に？　何のために……？）
自分を六十万石という大名にしたのも父てあったか、今度それを取りあけようとしているのも父……いや、自分をこの世に産んたのも父てあって、今度手ひとく叱りつけ、殺そうとしているかも知れないのも又父……と、なると、松平上総介忠輝とは、いったい何ものなのてあろうか？　何のために生まれ、何のために学ひ、何のために武を励み、何のために叱られて来たのてあろうか？

二

よく晴れた日の朝なと、そうした疑問かスカッと一度に解けた気もするのたか、午後になると、北国の空や海の陰欝ないろと一緒に、混沌とした懐疑の霧に閉される……今日も忠輝はその午後の陰欝の中にあった……
「お殿さま、三条から、ご家老さまか見えられました」

徳松丸を産んだ於菊が、小声で入口に両手をつかえると、
「遠慮無う入れといえ。それからこなたは、ここへは来るな」
忠輝は吐き出すようにいった。
それは嬰児の傍に居るようにという労りではなくて、この女性とは凡そ正反対の正室、伊達御前への慕情から来る冷酷さのようであった。
「はい」
相手はいわれるままに、足音を殺して消えてゆく。それがまた陰気で息の詰まる思いなのだ。
「殿、ご機嫌よろしゅう」
背後で父からの付家老、三条城城主の松平重勝の声がした。
忠輝は黙って海の方を見ている。
「今日は、いろいろと、駿府のこと、江戸のことなどお知らせに参上しました」
「江戸から処分を申して来たのか」
重勝はそれには答えず、
「江戸ではわるい噂が立って居りますようで」
「松平忠輝の謀叛話か」
「いいえ、それとは少々違いまする」
「どう違うのじゃ。申してみよ」
「いよいよこの正月は戦になろうという噂でござります　大御所さまも、そのため近々駿府を出られて江戸城へお入りなさる」

「相手は……相手は、誰たと申すのしゃ」
「いうまてもなく伊達との。伊達とのは挙兵のために、無届同様て領国へ帰られた。もはや一戦は免れまいという流言の由にこさりまする」
「フン、そうして、その伊達の共謀者は松平忠輝か。もったくさんしゃ」
しかし、重勝は、そのまま引きさかるほと若くもなければ押しの利かない男てもなかった。
彼は、馬てやって来たらしくゆっくりと襟あしの汗を拭きなから、
「殿も、このあたりて、もう少し人生を味わい直す、余裕をお持ちなさらねはなりませぬ」
「なに、予に余裕を持てと」
「はい。人の人生は、大きな眼て見まするとまことに公平……決して、殿だけか、格別の大皮を喰うわけてはありませぬ。みなそれそれ、何度かは皮をかふって、そして見事に剥きぬく。余裕の無い者だけか溺れまするのて」
「フン、又爺の説教か。よかろう、退屈て困っていたのた聞こう」
忠輝は癇立った様子て振り返って、しかし思わす失笑した。
松平重勝の上体をかかめて額に湯気を立てている様子か、湯口に現われるカマの姿そっくりに見えたからた。
「爺、よほと急いて来たと見えるな」
「はい。後の雁に先になられては困ると思いまして」
「後の雁とは何のことた」
「伜勝隆か、いよいよ駿府から、殿の許へ使者に参るらしいのて」

「なに、駿府から勝隆が!?」
「さよう。将軍家では、殿のご処分は出来かねる……そう見てとって、大御所さま、御自からの使者てござりましょう。まことにこれは汗の出まする成行きて」
そういうと、不意に重勝はクスンと一つ鼻を鳴らして、汗と涙を一緒に拭いた。

三

「そうか。お父上が直々に乗り出されたか」
いよいよ待ったものがやって来る……そう思うと、忠輝は心のしこりが解ける気がした。
「爺が泣くほどの事はあるまい。わしは、陰気な空に一点の晴をのぞいた気がするぞ」
しかし、重勝はそれには答えず、
「噂を噂のままに終わらしそうな、もう一つの噂もなくはござりませぬ」
いよいよ前かがみに身をのり出して鼻をかんだ。
「何だと、噂を噂のままで……?」
「はい。戦にはなるまいという噂……これが出所は、市井ではなく、将軍家ご側近の間から出た噂のよしにござりまする」
「ほう、戦にならぬという噂もあるのか」
「はい……伊達家領国にある片倉景綱……本年たしか五十九歳と存しまするが、これが病篤く、再び起てまいと申すことて」
「ほう、先代の小十郎か……」

「何事によらす政宗とのは、片倉の隠居に相談なさる。景綱の再起かおほつかないとなれは、政宗とのも戦意を捨てよう……そう見たところに、この噂の根はありましょう」
「なるほと、それも考えられるか」
「ところて殿は何となさりまする？」
いきなり問いかけられて忠輝は眼を丸くした。
「殿は、何となさるとは!?」
「はい。一両日中に大御所さまの旨を受けた伜が到着致しましょう。それ以前にはっきりと心をお決め願わねはなりませぬ」
「ワノハノハ……」
忠輝は、思わす噴き出すように笑っていった。
「とほけるな爺」
「は……はい」
「わしか何うするにも、こうするにも、わしは、お父上の命を受けて監視に来ているこなたの捕虜てはないか。いや、こなたは牢番て、わしは牢屋に繋かれた囚人かも知れぬ。その囚人が、牢番や父の意にさかろうて何か出来よう。あまり空々しいことを申して笑わせまいそ」
「すると、大御所さまのご命令におとなしく従わせらるるご所存て」
「従う所存か無くは、とう出来るというのた。心にもないことを申して、わしの胸をかき乱すな」
松平重勝は、また深々と肩をおとして泣きたした。

「泣くな。もはや、忠輝に爺の同情なとは無用と思え」
「殿……」
「何事そ」
「殿にはこの重勝か、こうあわてて駆けつけたわけかおわかりない」
「では爺は、この忠輝に、父や兄に謀叛をすすめに来たとても申すのか」
「いいえ、むろんそうてはこざりませぬ。か、殿かその決心ならは、それも又止むないこと」
「な、なんだと!?」
「重勝も考えぬきました。傅役の皆川とのか殿のお側を遠さけられ、われ等が殿に付けられた。そのおりから、われ等の運命は決まってあったと」
「わからぬ！　それは愚痴か、諫言か」
「その双方にこさりまする。お父上は、忠輝に天下を紊る所業もあらは、こなたの手て刺せよと、わか身にこの短刀を下されました」
叫ふようにいい、重勝は、差し添えの短刀を忠輝の膝元に投出して、はけしく嗚咽していった。

四

「お父上か、家人に預けたお子は、殿たけてはごさりませぬ。五郎大丸（尾張義直）さまには成瀬正成、長福（紀州頼宣）さまには安藤直次。そして両人とも、この重勝と同様に、一振ずつの短刀を、委託をこめて渡されたと承りまする」
「そ、それゆえ、わしに自決せよとか」

忠輝の顔から笑いは消えうせ、額にくっきりと癇筋が浮いて来た
「そってはござりませぬ。先ずお心を静められませ」
「たわけめ。この忠輝が、もはや狼狽などするものか。鯉じゃぞ忠輝は、俎上の鯉じゃぞ」
「それゆえ、このお父上からの預けられた短刀を、改めて殿にお返し申すので」
「なに、この短刀をわしに返すと……？」
「はい……これを預けられた意味は二つある……と、重勝はようやく思い至りました。その一つは、まこと殿が、国を紊るような事を仕出かす折には刺せよというつわへの意味……しかし、その意味の裏には、もう一つ大切なご信頼がござりました」
松平重勝は、もう涙を拭こうとしなかった。
「その方ならは、わが子をそのような不心得に育てはすまい。それゆえ、生殺与奪の権とともに預けようと……」
「フーム」
「さすれば、この重勝……当然二つの責任がござりまする。いや、この責任は二つに見えて実は一つ……殿への忠義、殿へのご奉公に、まことの限りを尽してあれは、殿を刺さねは済まぬような結果は出て来る筈がないと」
「……」
「ところか、それが出て来まいた。全く思いがけぬ成行きながら、出て来ればこれは偏えに重勝が不調法……殿！　重勝は考えぬいて、この短刀、殿にお返し申すので」
忠輝は癇立った表情のまま、もう一度又、ジロリと鋭く、短刀と重勝を見比べた。

「また、受け取れぬ。腑に落ちぬ」
重勝は言葉を続けた。
「この短刀をお返し申すは、残念なから重勝に、大御所さまのご委託にこたえるほどの器量か無かったゆえ……大御所さまへの義理は果たし得なんたか、しかしそのため、殿へのご奉公まで捨て去っては武士の一分か立ちませぬ」
「なんと申す。またわからぬぞ。血迷うな」
「血迷うなとはお情けない。殿か俎上の鯉ならは、この重勝も、殿の鯉にならねはならぬと、ハノキリ心を決めて来ました。殿！　殿のご才覚てお決めなされませ。駿府からやって来るわが伜を、その場さらせす斬って捨て、兵を挙けるもよし、奥州へ走って伊達勢と合流するもよし……今日からは、この短刀をお返し申し、松平重勝、殿の家人として、命のままにご奉公……お指図通りに仕りまする」
忠輝の表情はあわたたしく変転した。
「ならは爺は……この短刀はわしに返して、付家老ては無くなると申すのか!?」
「御意、上総介忠輝さまお一人の家人、煮て喰おうと焼いて喰おっとご勝手に」
「な・…な……なんしの伜を叩っ斬ってもよいというのか」
「御意！」
「念のためもう一つ訊ねよう。よいか。心して返事をせよ。わしは駿府から来るこなたの伜勝隆を叩っ斬り、兵を引きつれて仙台めざす……それても異存は、ないと申すのか」
「くとうごさりまする！　御意のままに」

五

くといといわれて、忠輝はふっつりと黙りこんた。
父の期待には応え得なかったか、忠輝のために一分を尽す・・そういい切った松平重勝の言葉は、異様な強さて忠輝の心臓に喰い入った
(爺は、わしを憐れんている……)
いや、わしのおかれた奇妙な立場を憐れんているのかも知れない。
それにしても、駿府からやって来る伜勝隆を斬り捨てて、伊達勢に味方してよい。預けられている兵力をひっさけて、忠輝の命に従うという……何という大きな変化てあろうか……?
いや、たたの変化てはなくて、これは父への大きな叛逆なのた
弟の、義直や頼宣か、みなそれぞれ父や兄のあたたかい庇護下て繁栄の道を歩いているのに、自分の預けられた忠輝たけは、思うに任せぬことになった。それて、自分も一緒に死ぬ気になったというのたろうか……?
(それにしても解せぬところか……)
と、考えて来て、忠輝はハッとなった
人間の口を衝いて出る言葉は、必すしも胸中の思案そのままの吐露とは限らぬものた。
(爺め、考えおったのかも知れぬぞ)
爺か忠輝と一緒に、とのような汚名も犠牲もいとわぬ心と先手を打ては、忠輝はそれに感動して、却って素直に処分を受け入れよう

（そうした計算か、もしも爺の肚にあったとしたら？）
伜の勝隆も無事なら、爺の責任も果たせ、父や兄の思惑も素直に通る
忠輝の眉間て疑惑の影か明滅した。
「そうか。爺は、そう考え直したのか」
「は……はい」
「ならは、われ等も改めてもう一思案を練らねはならぬ」
さくるようにいってから、
「実はな、わしは、すてに心を決めていたのた。爺か監視してあることゆえ、もはや手も足も出ぬ囚われ人と……しかし、爺かその気ならは話は違うぞ。二度と生まれて来れぬ忠輝か生涯、とっくりと腑におちる生き方をせねは済まぬわ」
「仰せのとおり……われ等の覚悟もそれに出まいた。全く！　二度とはない大切なご生涯、うやむやにはさせられませぬ」
「そうか。ようわかった。ては、爺も城にとどまるかよい。わしはこれから思案にかかろう」
また半信半疑のまま、忠輝は席を立った。
そして、その場に居耐えぬ眩しさを心に感じて廊下へ出ると、また視力さえさたまらぬ嬰児の部屋へ足を向けていた。
何故そんなところへ行く気になったのか？　やはり重勝の前て、重勝を疑うことか苦しかったのかも知れない。
嬰児の部屋は廊下の外れの於菊の部屋てあった。そこへつかつかと入っていって、忠輝は突っ

立ったまま、無言て、乳母のふところに抱かれている赤い肉塊のようなわか子を見おろした。
「まあお殿さま！」
乳母と向かいあって子供の寝顔をのぞきこんでいた於菊か、あわててその場へ両手を突くと、
「フーン」
忠輝は冷ややかに顔をそむけた。
(この嬰児にも、これは二度ない生涯か　)

六

「於菊、その方、この子は可愛いか」
突っ立ったままて忠輝はいった。
於菊はおとろいて顔をあけた。整った顔たちなから、血色のわるい、おとおとと震えているような眸てあった。
「この子は可愛いかと叺いているのた　口はあろう、答えてみよ」
「は……はい。可愛ゆうこさりまする」
「わしか今、このみとり児を刺し殺す……と、申したら、そなたは何とするそ」
残忍な問いかけて、しかし、忠輝はそのようなことを考えているのてはなかった。
この部屋に入って、嬰児の寝顔を見た瞬間に、駿府からやって来る勝隆か、どのような命を受けて来るかか、はっきりわかった気かした。
(切腹に違いない！)

その内容かわかっているので、重勝はあわててこの城へ駆けつけて来たのに違いない。
（と、すれは、忠輝の思いのままにといいたした、老人の心のうちは……？）
或いはほんとうなのかも知れないぞ……と、思った時に、於菊の陰気な声てあった
「お殿さまに、お伺い申し上けとう存しまする」
「なにわしに……わしの方から訊いているのた。その子はわしの手て刺し殺す……そう申した
ら、そなたは何とするぞ」
「はい……」
「黙ってその子をわしに渡すか。それとも……」
といいかけて、自分て自分の言葉にしれて、
「こなたも一緒に斬られるか！」
於菊の眸は、不意にぴたりと嬰児の寝顔のうえて停った。震えている視線てはなくて、それは
不思議な感情を凍りつかせた、ゾーッとするような冷たい視線てあった。
「お願い致します。この子をお助け下さるように」
「その願い、きき届けかたいと申したら!?」
「お願い申し上けまする。何度ても……」
「ならぬ！　よいか、この忠輝まて、父の勘気を蒙って切腹を命せられるのしや。その子とて無
事に生長はのそめまい。不愍ゆえ刺すと申しているのかわからぬのか」
すると、於菊は、いきなり嬰児と忠輝の視線の間に割って入った。
こんとはその眸は忠輝に向けられている。感情のない蛇の眼に似た凝視てあった。

「なんしゃその眼は……予の心には従えぬと申すのか」

「…………」

「ここは動かぬ。刺すのならば一緒に刺せというのたな」

「……」

「よろしい。それほとその子か可愛ゆくは、共に死んてやるかよい　何の、一人刺すも二人刺すも同じこと……」

「ヒーノ」

と、乳母か悲鳴をあげて、身をすさらせた。

忠輝かほんとうに前差しを抜くと思ったものらしい。

「騒ぐなノ!」

忠輝ははげしい声て叱りつけて、それから再ひ宙を睨んていった。

「そうか。駿府ても、茶阿の局は、父に嘆願したてあろう・・たか決まった。とう動かしようもない一つの理由か、父の心の底にある・・そのために決まった」

七

乳母は再ひその場に張りつけられたように居すくみ、於菊はノーノと瞬きもせすに忠輝を見上けている。

それは無感情な嬰児の寝顔とともに、陰火の燃え立つような不思議な緊張と冷たさの対立たった。

「その理由はしかし、爺も納得出来ないほどの　わが身の故　というよりも、わが身にかかわりのない、ところに生じた理由であった」
忠輝はまたひとり言を続けた
「それなればこそ、兄もわしを処断し得ない……そこで再び父が乗り出した……忠輝さえ無くばという理由で……そこで爺は　」
虚空に刻みつけるように呟いて、忠輝ははげしく首を振った
やはりまた重勝が、兵を引きつれて仙台へ行ってもよいと、ころりと態度を変えた意味がのみ込めない。
重勝がそのような叛逆を敢てしたら、その伜たちはどうなろうか？　いや　兵を引きつれて仙台へ走るとなれば、すでにその時、使者の勝隆は斬られている道理であった。
いや、たとえ忠輝が斬らずとも、そうなれば勝隆は生きてはいまい　あの気性ゆえその場を去らずに向こうて腹を切るであろう
（爺も、ああ言いたす以上、それは覚悟のうえの筈・　）
「於菊！」
不意に呼びかけられて、於菊の肩はびくりと波打つ。
「みどり児はな」
「は・・はい！」
「こなたに預ける。よいか、わしの身に万一のこともあらば　こなたはこの子を連れてわが家へのがれよ」

「は、はい！」
「そして、死んだと申してもよし、百姓の子で育てるもよい……その才覚はそなたにあろう」
於菊は答える代わりに、はげしく二、三度頷いた。口では殆ど意志を表現出来ないこの女は、或いは、人の数倍、切ない計算を胸でくり返している女かも知れなかった。
　忠輝はそのままぷいッと廊下へ出た
　また重勝の待つ居間へは帰らず、回廊を大股に歩いて蕭条と秋風の吹き荒れている庭に出てみた。
　庭の一隅には、彼が大坂陣の始まる以前に作らせた帆船の模型が半ばこわれて朽ちかけている。
「あの上に雪が降る……」
　と、忠輝は呟いた。
「そして、何もかもまっ白な、地獄の底に埋め尽くされる冬！……そうだ。それが、わが身の冬なのだ……」
　忠輝はそこで眼を閉じて、霜の香をふくんだ空気を胸いっぱいに吸いこんだ。
泉水にはもう鯉はいない。凍死からまもるために生簀に移され、そこで冬日の食膳を賑わすため、俎に乗せられる日を待っている。
「人間もまた同じなのだ……わしを切腹させようとする父も、兄も、爺も、勝隆も……みな世の中という生簀の中で、順に死を待つ鯉にすぎない」
　忠輝は首をすくめて廊下へ戻ると、こんどはそのまままっすぐ居間に戻った。

（巨船を乗り出す大洋がある……などと思ったのは儚い夢……）

八

「爺、わしの心は決まったぞ」
忠輝が居間に戻ってみると、松平重勝はもの憂そうに瞼を開いた
疲れきって、或いは仮睡しかけていたのかも知れない。
「わしはな、父の命がとうあろうと切腹する。父に疑われ、父に責められた……事の是非は問わぬことにする」
重勝の眼がいちどに大きく見開かれた　皺にかこまれたその眼は赤く血走って、無言でひと膝すすみ出た。
「わかるてあろう。理由はこなたが考えよ　わしは、生きているのが面倒になったのたか、しかしそれたけては理由になるまい。そうた　こう申せ。父や兄に疑われるようなことになったは、偏えに忠輝が身の不徳。それを恥じて切腹したとそう申せ」
「ては、あの、大御所さまのご命令にはかかわりなく？」
「そうた。わしは生きているのか嫌になった　しかしそれては後々こなた達や、茶阿の局が困るてあろう。よいように取り繕って片付けよ　わしさえ無くは…」
いいながらその場に坐って、
「勝隆も、こなたも、かくへつ苦しむことはあるまい・　よいか、とちらも早まって死に急くまいぞ。こなた達父子は一日も永く生きてな…」

「殿！」
「案ずるな。いますぐこの場で切腹しようというわけではないわ。勝隆の到着を静かに待つ……わかるであろう。父からの口上はおとなしく聞いたうえでじゃ。そうじゃおとなしく聞いたうえで、勝隆と爺の三人で酒盛りしよう。肴に生簀の鯉がよいぞ。一人で悠々名残りを惜しんだあとで自刃する。必要あらば、首級は江戸へ送るがよいぞ。そして、死骸はなあ爺、あの庭の帆船の残骸と共にきれいさっぱり焼き捨てよ。これだけはこなたにしかと命じておくぞ」
忠輝はそれだけいうと、今まで鬱屈していた感情が見る間に雲を払ってゆくのを覚えた。
（そうだ。これでカラリと気が晴れるわ……）
考えてみると今までの混迷が声を立てて笑いたいほどおかしかった。
（先に死ぬか、後に死ぬかの差ではないか……）
たったそれだけのことにこだわって、人を迷わせ、わが身も迷う……人間というのは、なんと愚劣な、何と未熟なものであったろう。
「爺、もう泣くことはあるまい。そなたが申したとおり、二度とは生まれて来れぬ世じゃ。わが身の思うままにして逝ってよいであろうが」
「それは……しかし……」
「悲しんでいるのではない。これが忠輝の気儘なのじゃ。よしよし、退って休め。そなたが案ずることは何もないのだ。わかったな。もう何も申すなよ」
重勝ははじめ唖然とし、次には全身をふるわして泣きだした。
忠輝はその重勝を追い立てるようにして別室へ引きとらせた。そして一人になると、改めて室

内を見回しながらほんとうに声を立てて笑いだした。

これも若さなのであろう、心機一転してみると、この世は、彼がこだわり、迷い、苦しまなければならないほど魅力を持った世界ではなかった

（何のこれは、汚れた鼻紙を捨てるほどのことではないか……）

九

その翌日——

忠輝は上機嫌で、駿府からの使者を城に迎えた。

使者の松平勝隆、これも忠輝が想像しているほどに堅くなってはいなかった。

万一のために、六十人あまりの徒士(かち)と、鉄砲十六挺(ちょう)を従えて、騎乗(きじょう)で領内へ入って来たのだが、むろん何の騒動も起ころう筈(はず)はなく、勝隆は、自分よりも先に父の重勝がやって来ていることも知っているらしかった。

「勝隆か、よう来てくれた。わしはな、あのおりは江戸へ行く気であったが、嬰児(あか)の顔が見とうなっての」

忠輝がそういうと、勝隆は晴ればれした表情で手を振った。

「そのようなことは後刻ゆっくり……」

「そうか。先ず通られよ。そなたの父も来合わせている」

忠輝は自分でわざわざ大玄関から木の香(か)の新しい客間に勝隆を案内した。

父の重勝は客間の入口へ平伏(へいふく)して使者を迎えた。倅ながら大御所の使者、礼はこの城の家老と

して、みしんも崩さぬ扱いたった
（父の眼は赤いぞ……）
勝隆は、その赤さに気付くと、いよいよホノとしたようたった
客間へ通ると、忠輝はまたこたわりなく話しかけた。
「遠路ご苦労てあった。ところてお父上からの使者の口上承る前に、いささか私事にわたって差し支えはないか勝隆」
「仰せまてもないこと」
勝隆もさらりと応した。
「今度びの使者、さように堅苦しいものてはこさりませぬ。先す茶一ぷく頂戴の上て、ゆるりと申し上けたい」
「ほう……」
と、忠輝はひっくりしたように眼を見張って、
「当城ては、昨夜はこなたを迎えるために、家老共か額を寄せて深夜まて協議を続けていたようしゃか……」
と、笑って言った。
勝隆はこれも微笑を消さす、
「大御所さまは至ってこ健在、それかしか戻るとこ自身江戸へお出かけなさると申して居られましたし、茶阿の局にも、お伴のご内意かあった由にこさりまする」
「それは重畳、実はの勝隆。今宵はこなたの父も交えて雪国の鯉を賞味しなから、水入らすに

一献及むよう用意してある。異存は申すまいな」
「何の異存かござりましょうや。勝隆からも申し上げたいことが山ほとござりまする」
「そうか。それを聞いて久しぶりに心が晴れた。ては、この場へ家老共を呼び集め、使者の口上つけたまわると致そうか」
「それには及びますまいかと……父もその場にござれは、お一人にて充分」
「なに、爺とわしたけてよいと申すか」
「はい。内意はもはや知れてあること。それとも改めてお叱りの三ヵ条、坐り直して申しあけましょうか」
「ハハ……そうか。二ヵ条てあったの　大坂出陣のみきり兄の家来を斬ったこと、参内のおり川狩りに参ったは不都合のこと。第一は、奢りをきわめて不埒至極のこと」
忠輝は歌うようにいって又笑った。

十

父の松平重勝には、二人の上機嫌の会話が気かかりてならなかった
忠輝の覚悟はすてに聞いている。しかし、切腹させるか否かは、大御所の口上をたしかめたうえのこと。場合によっては伜勝隆と二人てこれを阻止しなければならないと思っている。
「三ヵ条は申し上けたことにして……」
と、勝隆は襟を正して坐り直した。
「大御所さまよりのご処分、早速お伝え申し上け、あとてゆるりと馳走に与りとう存じまする」

「おお申せ。忠輝、謹んで承ろう」
勝隆はちらりと重勝を見やって、
「父上も、よっお聞きおき下さるよう」
「ははッ」
「上総介忠輝儀、早急にこの城を立出て、武州深谷において蟄居のこと」
勝隆は、笑顔のままてそういうと、こんとは父に向き直った。
「城と家臣は当分の間松平重勝に預けおく　重勝は充分に心して留守を仕るへきこと」
忠輝はポカンとした顔になって、先す重勝の方を見やった。
重勝も双眼いっぱいに不審のいろをみなきらせて忠輝を見返している。
「腑におちぬ」
しばらくして忠輝か呟いた。
「武州深谷は、われ等か慶長七年まて過した城て、いまは廃城……予にそれへ参れと申すのか」
「御意にござりまする。廃城なから、日々の起居には事欠かぬよう、手入れはもはや済んでいる筈にござりまする」
「ふーむ」
忠輝は再ひ視線を重勝に移して、
「いったいこれはとうしたことしゃ……ッ」
それは、重勝にとも、勝隆にともない、困惑をあらわに見せた独語てあった。
「上意のおもむき、謹んて」

そのかたわらで重勝は、うやうやしく一礼した。

「武州深谷は、殿が松平源七郎家をお継ぎなされたおり、最初に入らせられたゆかりの城、その城に赴いて後命を待てとの仰せ……たしかに承ってござります」

その口上の終わらぬうちに、

「これで済んだわ、爺の申すとおりじゃ。あの城にあったおりの、わが身の領地は　万石、あれから下総佐倉の四万石……そうじゃ、佐倉へ参ったおりが十　歳であった。その深谷へ参って後命を待てか」

忠輝はすらすらといって、再び笑顔をとり戻した。

(生きてやるものか。一度捨てたこのような世の中に……)

再びその覚悟が、彼の胸に甦った。

忠輝の反撥をおそれて、父が城地の召し上げに、又一つ飛び石を置いたものと解釈したからだ。

まず城と手勢から遠ざけて、そのあとで次の処分……怒りに任せて騒動を起こされてはと、いまだにそれを案じている。

(ところがわしの方はとうに、そのような境地からは脱け出ているわ)

「勝隆、ではこれで済んだ。何ぞ書き付けもあらば請書を出そう。さ、くつろぐがよい」

あまりに上機嫌な忠輝の言葉に却って勝隆が、不審を掻き立てられたのはこの時であった。

十一

勝隆はうやうやしく書状を父に渡し、父がそれを忠輝に見せ、請書を認めるために座敷を出てゆくと、はじめて生まじめな顔に返って忠輝に向き直った。

「上総介さま、ご短慮はなりませぬぞ」

忠輝はそらとぼけた。

「短慮……短慮とは何を申すのだ勝隆」

「ご短慮に二つござりまする」

「ほう」

「その一つはご自害、その二つは、大坂の秀頼さまのなされ方」

「ハノハノハ……勝隆が又おもしろいことを申すぞ。わしが、この忠輝が、父や兄に謀叛するような者に見えるか」

勝隆はその言葉を無視して、

「お父上さまは、われ等の帰りを待って、ご自身江戸へお出でなされまする」

「その事ならば、先程も申していたの。茶阿の局も同伴されるであろうと」

「お父上さまが、大坂の疲れもまだ脱けぬお身に鞭打たれ、何のため出府なさるか、おわかりでござりましょうか」

「まさか、わしの処分を、将軍家とご相談なさるおつもりでもあるまい」

「伊達の叛心を押えるためにござりまする」

勝隆はきっぱりといい放った。
「明くれば七十五歳。そのご老齢のお身で、二度と戦乱は繰り返すまいと、日夜心魂を砕かせられる大御所さま……大御所さまの哀しい悲鳴があなたさまの枕には通いませぬか」
「ハノハノハ……いよいよ勝隆かおもしろいことをいうぞ。するとお父上は、夜な夜な泣いておわすと申すのか」
「御意！」
叩きつけるようにいってから、勝隆は、忠輝の前に両手を突いた
「勝隆、お願いかこざりまする」
「今更この忠輝に……」
「はいノ。ここはおとなしく深谷へ赴かれ、深谷において、大御所さまと将軍家のお二方にあてて訴訟下さりまするよう」
「なに、予に訴訟をせよと!?」
「はい。表向きは、ようこ存知の三ヵ条……あの三ヵ条は、何れも身に覚えのないことと将軍家のご側近に、執拗に、ご訴訟なさる……それかご孝心になりまする」
忠輝は意外なことをいい出されて、思わず身を乗り出して首を傾けた。
「すると、そなたは、予に、未練かましく……」
「はいノ。お願いてこざりまする！」
「わからぬ。わからぬそ勝隆……よいか、わか身かこのように苦しめられておるのは、あの三ヵ条のせいてはない」

「それゆえ、深谷へ赴かれ、先ずもって伊達家との縁を断たれたうえ、身に覚えのない表面の垣を取り払うのでござりまする」
「またわからぬ節がある……さすれば、どうしてそれが孝になるぞ」
「上総介さま！　わが子の憎い親がこざりましょうか。この勝隆の目には、はっきりとこたびの悲嘆の根が見えまする。その根は、あなたさまがおとなしく深谷へお出てなされば断ち切れまする」
「それは、伊達との縁であろうか」
「はい／。それが切れればあとはその一ヵ条……潔く罠にかかって果てるばかりが孝行ではこさりませぬ。未練になって……訴訟なされて……お願いてこさりまする！」

十二

続けさまに頭を下げる勝隆を忠輝はじっと見つめて首を傾けた。
（勝隆はいったい何を考えているのか……？）
未練がましく、三ヵ条の申し開きをしてゆくことか、果して孝か？　それともここで潔くわかって事件を解決し、父をこの問題から解放してやるのが孝か……？
今の忠輝はすでに父を怨んでいない。それなのに勝隆は、忠輝が苦悶しているものと決めてかかって同情し、こんなことをいい出したのではなかろうか？
「上総介さま！」
又、思い詰めた語気で勝隆はいった。

「あなた様は、ご自害なさりたいのでこさりましょう」
「な、なんと申す!?」
「お顔にハノキリと出ています。死んで大御所や将軍家を安堵させよう……その方か潔いと……」
　忠輝は狼狽して、視線をそらした。
（勝隆め、なかなかもって鋭いことを……）
「しかし、それは武将として卑怯かと存じまするる」
「なに、卑怯しゃと!?」
「はい。卑怯でなければ、そのこ自害は武士にあるまじき逃避と申し直しても宜しゅうこさりまする」
「フーム」
「闘うことをおそれて韜晦する。ゆえにこれは卑怯てもこさりましょう」
「勝隆!」
「なんてこざりまする」
「予とそなたの間じゃ。大抵のことならは言葉とかめはせぬつもりしゃ。たか、この上総介をとらえて卑怯とあっては聞き捨てならぬそ」
「ならば、おとなしく深谷へおもむき、われ等か申し上くるとおりにこ訴訟下されまするか」
「………」
「お父上の大御所さまは、間もなく七十五歳にならせられる。それても尚、老軀に鞭打たれて江戸までおいてなされ、泰平の世作りというこ悲願に身心を削らせられる……これこそ生きてある

人間のまことの勤め、まことの勇気とは思いませぬか」
「小賢しいことを……」
「その小賢しいわれ等の眼にも……さすかは大御所さまと映りまする。生あるうちは、ご悲願の前から一歩も退こうと遊はされぬ……この勇気かおわせはこそ、今日の大業も成ったのしゃと」
「…………」
「それに何そや、今の若さて、わすかな蹉跌に敗れ去り、われとわか身を死に急く……そのようなことてお父上にはすかしいとは思われませぬか……いや、猛気は人一倍の上総介さま、われ等の小賢しい差出口をお笑いあって許される。そう思えはこそのご諫言にごさりまする。大御所さまも闘っておわす。上総介さまもそのお父上に負けぬ闘いをなされてこそ、まことの孝行……勝隆はそう確信すれはこそお願い申し上くるのてこさりまする」
　そこへ父の重勝か恭しく三方に請書を載せて戻って来たので勝隆は口を噤んた。
「大御所さまへの請書にこさりまする。深谷への出発の儀は、なるへく早々に実行致しますれば、御前よしなにお取り次きを」
　重勝はわか子の前へ平伏して三方を差し出した。

十三

勝隆は請書と忠輝を等分に見くらべたまま、すくには手を出さない。
忠輝の唇か、わすかに歪んた。
「勝隆、なせそれを納めぬそ」

「おそれながら、その理由は、上総介さまの方がようご存知かと」
こんどはびっくりして父の重勝が、狼狽した視線を二人の上に往復させた。
忠輝の顔面が、再びけわしい蒼さに変わる。
「勝隆！」
「なんでござりましょうか」
「請書をおさめよ。丁重に差し出された請書、そなたに受け取れぬいわれは無い筈」
「と、仰せられまするど、この勝隆の申し上げましたること、素直にご合点下されまするか」
「それと、これとは話が違うぞ」
「いいえ！　違いませぬ」
「違う！」
到頭忠輝は浴びせるような声になった。
「こなたはお父上の使者、それを忠輝はおとなしゅう承引した……現に爺も申したであろう。深谷へ出発の儀は、なるべく早々に実行と……それでこなたの役目は済んだ。こなたこそおとなしゅうその請書をおさめて帰ればよいのじゃ」
「そうはなりませぬ」
勝隆は薄笑いをうかべて首を振った。
「世俗に、仏作って魂入れずという言葉もあれば、角をためようとして牛を殺すという愚もござりまする。それがしが、このまま戻る。すぐそのあとで、全く思い設けぬ事態が起こる……しかし、それはわれ等の関わり知らぬこと……では、この勝隆が笑われまする。いや、大御所さま

に合わせる顔がござりませぬ。再びお願い！　お聞き入れ下されとう存じまする」
一歩も退かぬ不敵な態度で三方を押し返した。父の重勝は、ようやく事情がわかったらしく、これも全身を固くして、ハラハラと二人の若者を見比べている。
不思議な沈黙が一座を占めた。息詰まるような対立だけの感じではなく、それは双方がいまにも泣き出しそうな、情意を秘めた労りあいの緊迫にも見えた。
「勝隆……」
「はい！」
「その方、予が考えを改めねば死ぬ気で参ったな」
「存じませぬ」
「いったいお父上は、江戸へ出て来て、何となさるご所存じゃ。伊達は遠く仙台城にある。仙台まで兵を発する気ではあるまい」
「存じませぬ！　大御所さまの深慮など、不束なわれ等にうかがい知れるものではござりませぬ。さりながら……上総介さまが、深谷の旧城にご謹慎下さらば、泰平のため、今生最後のご奉公が叶うであろう……とは、仰せられておわしました」
「フーム」
「大坂のおりとて同じこと……秀頼さまがあの城にあってはならぬことになった。事情はただそれだけなのだ……しかし、それだけの事を、片桐市正はついに秀頼さまに悟らせ得なんだ……しみじみとそう述懐なされておわしたこともござります。この勝隆は……」
そこまで言うと、忠輝はきびしい声でさえぎった。

「もうよい！　言うなノ」

十四

「その方は、市正より遥かに若輩、それゆえ生命を賭けてわしを説く。不退転の覚悟て来たというのてあろう」

忠輝の語気は次第にみだれて、言い終わった時には、かすかに双眼か赤くなっていた。

「恐れ入ってこさりまする」

「爺……」

「はいノ」

「わしは勝隆に負けたようしゃ。いや、負けたのてはない……やり込められたと見せて、しはらく延期をするまでしゃか……」

「延期、と仰せられますると」

「たわけめ、ここて争っていても事は済まぬわ」

「なるほと」

「お父上か、今生最後のご執念……とあっては予か譲るより他にあるまい」

忠輝はそう言うと、もう一度三方を勝隆の前へ押しもとした。

「実はな勝隆、爺は、われ等の人生の取捨は、われ等に任すと申したのた」

「はノ」

「兵をひっさげて仙台へ赴くもよし、この場において憤死もよいと」

「そう、そうなろうかと、勝隆も、ひそかに案して居りました」
「そこてわしは考えた……人間はみなこれ、この世の旅人……生まれたその日から、それぞれの寿命をひっさけて死に向かって歩むもの……遅れ先立つ差はあっても、この道からは絶対にそれられぬ。そうてあろうか」
「仰せの通り……」
「そう思うて見直すと、父や兄と争うのかハカハカしくなって参った。そこてな、このようにうるさい世なと、ひと足先におさらはしようと」
「仰せごもっともなから……しかし、それはおそろしいお間違いかと存しまする」
「それは申すな。その死までを歩く人生の旅にも、真剣な旅もあれは、苦患を遁れるための負け旅もある……その位のことのわからぬ忠輝てはない」
「恐れ入ってこさりまする」
「それゆえ、ここてはひと先すこなたの言葉に従おう……その代わり、深谷へ参ると予の訴訟はうるさいそ」
「はい」
「お父上か最後のご執念……とのようになさるかと意地わるく監視しなから、将軍家やその側近の者ともにも、事毎に喰いつく……それてもそなた、よいと思うか」
「お聞き入れ……ありかたく存しまする」
「礼はまた早い！」
「はい」

「その上で、天下を預るお二人のなされ方が腑におちなんだら、事毎に非を外に向かって打ち鳴らす……とんだ蝮を生かしておいたと、悔ゆることになっても知らぬぞ」
　不意に勝隆は、肩をふるわして泣きだした。
「それが……それが……大御所さまの、望むところにござりまする。はい／＼、大御所さまは、われ等にこうも仰せられました……」
「また、父の言葉があったのか」
「はい／＼。生死は問わぬ。が何れ相会うところは一つ、そのおり、父と子と、何れが真剣に生きたるや、それを上総と競おうほどに、そう申せと」
　こんどは忠輝が、顔をゆがめたと思うと、いきなり唖童のように身を揉んで泣きだした……

十五

　父も子もやがて相会う所がある。それは言うまでもなく死の世界だ……
　その死の世界で対面したおりに、何れが、死までの旅を真剣に歩み続けたか？　それを競おうと、家康は言ったらしい。
　忠輝は身を揉んで泣き続ける。いや、大声で笑いたいのだが、何故かそれは底無しの悲しさに堕ちてゆく。
（結局、それが人生らしい……その競いにすがって生きてゆく　そこにしか救いのないのが、まことの人生の姿らしい）
　そう思うと、それは無限の悲しさと、無限の滑稽さで胸をえぐる。

むろん忠輝も例外ではあり得ない。やがて死ぬ……その絶対の道を歩いて、そして、悔いはなかったと自信し得ることが出来たら、それはひたすらに、歩かせるだけの目標を持っていた……ということに他ならない。

（その目標が、父にはあって、自分にはないと言うのだろうか……？）

それが、このように切なく、悲しく、滑稽なのだろうか……？

小児のように、駄々ッ子のように、身を揉んで泣く忠輝を、勝隆父子はしばらく無言で見おろしていた。

（泣くだけ泣くがよい……）

勝隆はそう思った。思うと同時に、もはや請書を素直に納むべき時……そんな理性もチラリと胸をよぎって過ぎた。

「上総介さま、ではこの請書、勝隆たしかに受け取りました。大御所さまは、これをご覧なされたうえ、すぐさま江戸へお発ちなさると存じまする」

「……　……」

「大御所さまがご出府なされば、むろん乱にはなりますまい。とすれば、或いは……深谷のお城でご対面……ということもあり得るやも……」

「勝隆！」

「はいッ」

「汲んでくれたか予の胸中を……予はまた素直ではないぞ。父の生き方以外に道はあるまい……とは、思うても、あらはわが手で探してみせる」

「ご尤もな仰せ。われ等も決して腑におちぬままのご行動をすすめ参らせては居りませぬ。ご自害は腑に落ちさせられたうえて充分、死に急いて悔いを残させられぬよう、ここはひとます深谷の旧城を、考えさせられる場所になさるようお願いしているのてこさりまする」
「もう言うな。落ちついたぞ」
「はは！」
「われ等の行く場所は、深谷以外にはない……それかこなたの信念しや。わかった！　予もまたそう思う。深谷へ参って、死にとうなったら、誰の手も借りすに死んてゆくわ」
忠輝は言いなから、何度か自分に頷いて、
「爺……」と、固い重勝の凝視に対し直した。
「これてこなたも安堵てあろう。勝隆めは、見事この予を説き伏せたわ」
「恐れ入ってこさりまする」
「よいのた。これて予も救われた、かも知れぬ。用意の鯉を出すように。そうしや、そして、雪をかむらぬうちにあの庭前の船の模型を焼き払え。やはりあれか、われ等の迷いの的てあったわ」
そう言うと今度は声を盗んて泣きたした。

江戸の蛙

一

　江戸城の大奥……といっても、それは寛永年間の規模とはまた比較にならない簡素さで、将軍秀忠か表からやって来て、休息し、食事を摂り、更に寝所とする一区劃は、後の長局ほどの広さもなかった。

　将軍秀忠か、ここて面会する側近もごく限られた人々はかり……土井利勝か時おり呼はれて来ることはあったか、その他には西の丸に入っている竹千代の乳母の於福の方、水野忠元、柳生宗矩、それに近ごろは、大坂から引き揚げて来ている千姫の侍女頭、於ちょぼくらいのものであった。

　於ちょぼは今ては刑部卿の局の名は改めて、於為といっている。

　秀忠は、政務は表御座所からここへ持ち込むことは殆となく、それたけに御台所の阿江与の方も、政治向きのことは、口出しするにも何も殆と知らされていなかった。

　その日も秀忠はムノツリとした表情て奥へ戻って来ると、阿江与の方かいまたに嚇き切っている千姫の話をし、

「――いっそ、よい相手を見つけて再縁させましては……？」

　と、いいたしたか、返事もしなかった。

阿江与の方か、そういい出したのは、家康の孫にあたる本多忠刻の母からの話か内々にあったからであったが、この時にはまだ秀忠は、そうしたことに耳を傾ける余裕は無くて聞き流された。

秀忠は深く何か考えながら食事を済ますと、

「――表の詰の間に柳生か居残っている筈しゃ。呼んで参れ」

と、小姓に命じた。

柳生宗矩は、しはらく駿府の家康の許へ呼ばれて行っていて、今日帰って来たはかりであった。

むろん帰府の挨拶は昼間受けたし、その時、家康からの口上もあった。

竹千代を来年は上洛させて、徳川家の嗣子として参内、任官せしめること。

そのおりには家康も同伴するが、護衛として柳生宗矩も竹千代に随行せしめること。

その二つは秀忠だけではなく、秀忠の重臣たちもすでに予期していることとて、このほかに何ぞ密々の口上がある筈だった。

秀忠はそれを控え目に、敢て表では宗矩に訊ねなかった。その用か重大てあれは、必ず宗矩の方から密々にと拝謁を申し出ると思ったからだ。

ところか、宗矩はかくべつに拝謁も求めす、さりとて、早々に退出もせす、詰の間へ退いて何か待っている。そうなれば秀忠の方から呼んで訊すへきたと思ったのた。

そうした呼吸は近ころては、秀忠と宗矩の間へ以心伝心、水魚の通し方か自然に出来あかっていたといってよい。

しはらくして宗矩はやって来た。

「お召しの由につき、又右衛門、罷り出てまいってござりまする」
宗矩は、先ず丁重に秀忠に一礼してから、阿江与の方に向き直った。
「大御所さまは、時おり、御台さまのお便りが頂きたい……と、お洩らしでござりましたが」
と、さり気ない世間話に移ってゆく。秀忠は心得て、阿江与の方に座をはずさせた。

二

二人だけになると、秀忠は、黙って宗矩を見返している。彼の方から問いただす前に、何か言い出すであろうと思ったのだ。
しかし宗矩は逆にまた両手を支えた。
「ご用のおもむき、仰せ聞け下さりまするよう」
澄まして相手を見上げている。
秀忠は軽く舌打ちした。
「お父上は近くご出府なさると言われたのじゃな」
「はい。大番頭松平勝隆どのを越後へ遣わされ、上総介さまをご勘当……その復命を受けさせられましたうえで、曹洞宗の法問をお聴きなされ、それから更に仙波喜多院の南光坊天海上人をお召しなされて、何事か仏法についてお問いいたしのうえ鷹狩りをなされました」
「仏法聴問と鷹狩りとが、何ぞ出府に関わりありと申すのか」
「はい」
宗矩は生まじめな表情で、

「仏法は慈悲、鷹狩りは殺生……と、二つを、二つにわけて考えるのはわれ等の知恵。大御所さまには殺生も又慈悲の発露……のご心境かと心得まする」
「されば、鷹野は出府のためのお躰ならし……そう見て参ったのたな」
秀忠は首をかしげて考えて、
「御意にござりまする。もはや尋常では旅はご無理……それを敢て遊はすご用心。相変わらずきびしいもので恐れ入りました」
「フーム」
「こたひのご拝謁にて、又右衛門、又一つ眼の開けるお言葉を頂きました。それは、心に慈悲のない正直は、酷薄ぞ……というご一語にこさりまする」
「なに慈悲のない正直は……？」
「はい。正直は本来人間の宝ながら、心に慈悲の念を蔵さぬ正直さては、相手は傷つけられるばかり……親の子をさとすおりの心掛けかと、ありかたく心に刻んで参りました」
「フーム」
秀忠はもう一度首を傾げて考えて、
「それは、上総介勘当のことを申したのか」
「はい。いいえ、上総介さまのことも、伊達公のこともふくめて……上に立つ人間の、心掛けをお示しなされたものと……そうそう、それゆえ、鷹野てお躰をならし、こ出府は今月末ころ……かと、又右衛門は見て来ましたか」
「今月末ごろ……」

「如何でござりましょう。それまでに一度、土井さまなどを、旅のお打ち合わせに駿府へお遣わし遊ばされては？」
秀忠はそれには答えず、
「又右衛門」
「はいッ」
「お許の見たところ、いや、考えたところでは、お父上は、何時ごろまで江戸にご滞在の予定に、見えたぞ」
「それはわかりませぬ！」
意外なほどキッパリと宗矩は首を振った。
「なに、わからぬとは……？」
「相手のあることゆえ相手次第、伊達公が、何時あらぬ妄想をお捨てなさるか。お捨てなさるまではお戻りなさらぬご決心……と、又右衛門は推察」
当然ではないかと言わぬばかりの返事であった。

三

秀忠の頬に、ポーッと紅が浮いたのは、
（なるほど、それで出府なさるのか）
それに気付かぬ、わが身のうかつさを恥じろうた狼狽だった。
「すると、お父上は、伊達の出方によってはお取り潰しも辞さぬお覚悟で参られるか」

「それも違いまする！」
又宗矩は、あさ笑うように首を振った
「ほう、それも違うか」
「恐れながら大御所さまは、大坂のおりのご説得に、ご自身て赴かれなんだことを、神仏に恥しておわしまする」
「なに、大坂のことを……」
「はい。家康一代の不覚……怠けたのた。わか年齢に負け、地位に慢し、もう一歩の努力を怠った。その神罰かあの戦……戦を無くそうと思うほとの者か、怠けてはならぬ……と仰せられてこざりまする」
秀忠は眼を丸くし、しはらく呼吸を止めて宗矩を見つめていった。
「お父上か……そのようなことを……」
「はい。そして、お躰ならしのお鷹狩り……すてにその日程も、ご自身て記しておいて遊はします……それゆえ、伊達公かつまらぬ野心を捨てたと見るまては、駿府へお戻りはなさるまいかと」
秀忠は、大きなため息とともに頷いた
「そうか……それならば、なるほと、利勝を遣わさすは相成るまい」
「大御所さまは、こうも仰せられました　江戸の蛙とともに、もう少々、わか身の生き方を示さすは、まこと井戸の蛙になろうと」
秀忠の顔の紅が濃くなった。

「そうか江戸の蛙か……では、早速西の丸をあけさせておかねばならぬの」
「は……？　何と仰せられました」
「竹千代とのはまだ子供じゃ。お父上が暫くご滞在とあれば、西の丸をあけさせて、ご不自由ないようせねばなるまい」
「上様！」
「なんじゃ。それも、そなたの意見に違うか」
「そのようなことを遊ばしますると、親の心子知らずと、強いお叱りを受けましょう」
「ほう……」
「大御所さまはご自身、伊達の問題を片付けさせられ、それから竹千代さまを伴って京へのぼらせられる。この二つを生ある間に、わが身の果たさなければならぬ仕事とお考えのようでござりまする」
「ありがたいご配慮じゃ」
「それゆえ、ご出府なされても決して西の丸へお入り遊ばされますまい。西の丸は、大御所さまや上様のご悲願を継がせられる三代さまの居館にござりまする」
「ならば、本丸へご滞在と申すのか」
「これはしたり、本丸は征夷大将軍におわす上様のおやかた……大御所のためにご用意遊ばすならば二の丸……二の丸ならば喜んでお叱りは無かろうかと存じまする」
「宗矩！」
「はい！」

「その方、何も彼も知っているてはないか。お父上のこ日程から宿所のことまて……意地のわるい男だ。こちらから訊かねは、何も言わすに済ます気たったのか」
秀忠が気色はんて詰め寄ると、宗矩はケロリとした表情て一礼した。
「御意にごさりまする」

四

宗矩にあっさりと受流されて、秀忠はムノとした。几帳面な彼の気性からすれは、これはかなり礼を失した揶揄と取れる。
「そうか。宗矩は、何も彼も知っては居るか、予に報告致す所存はない……と申すのたな？」
「御意のとおりにこざりまする」
宗矩は又さらりと答えた。
「これはどこまでも上様と大御所さまの間て、阿吽の呼吸の合致せねばならぬところ……その間にわれ等ごときか介入して機微をみたすは以てのほか。されば、大御所さまか、こう申し上けよ、と、仰せられた事のほかは、上様からかくへつお訊ねのない限り、決して申し上けは致しませぬ」
秀忠は渋い表情て、また軽く舌打ちした。
「理屈じゃのう」
「そうお気付き下されは、又右衛門も立つ瀬かごさりまする」
「又右衛門、大御所こ在府中のこ滞在は二の丸と致そう。したか、お父上ももはやこ老齢、それ

にまた大坂のおりのご疲労も残っておわそう。したがって、子としてなるべく早く事をおさめて駿府へお戻り願いたい」
「それかご孝心かと心得まする」
「そこてそこ許に訊ねるのしゃか、伊達を江戸へ呼び出し、二心のないことを誓わせる……それて事は済むと思うかとうしゃ？」
「さあ、それは……」
「いったんは済もうか、あとて再び乱になる……というのては腫物の根は絶てぬ。その辺の、お父上のご思案は何とあったやら？　又、何と仰せられすとも、何とお考え……と、そこ許は見て参ったか、わが身の師として、そこ許の思案、予に教示してはくれまいか」
こんとは宗矩か少なからす狼狽した。怒りはしても、これほと慇懃に問い返されようとは思ってもみなかった。
「もったいない……」
といおうとして、しかしあわてて宗矩はそれをこらえた。下に諍臣なくは上の慢心はおさえかたい。われこそはほんとうの諫諍の臣てあろうとして、宗矩はいまたに任官も加封も一切拒んて側近に仕えているのた。
「そうお訊ね下されは申し上げます」
わさと尊大に構え直した。
「実は大御所さまは、われ等に意地のわるいご質問を遊はされました」
「ほう、とのような質問をなされたそ」

「これは空想のついてしゃか……そう仰せられて、この世にまた一匹、藪から出て、新しい世の秩序の檻に入ろうとしない人喰い虎か残っている……」
「人喰い虎かのう……」
「はい。その人喰い虎を残したままて、若しも将軍家かお亡くなりなさるようなことかあったら、その方は竹千代とのを擁して何とするそ……といっ、思いかけない、意地のわるい質問でこさりました」
「ふーむ。なるほと」
「将軍家かお亡くなりなさるほとゆえ、予もとうに死んている。そこて再び人喰い虎か、暴れたすやも知れぬ。何とするそと」
宗矩は家康のいった以上に意味を強めて、ノーノと秀忠の表情の変化を見詰めた。
秀忠は眼を閉した。
新しい秩序の檻に入らぬ人喰い虎……それから秀忠はいま一人の人物を瞼に思い浮かへている。その一人は伊達政宗。そしてもう一人は舎弟忠輝……

五

「このまま捨ておくと、この人喰い虎、必す良民の住まっ市井に飛び込み、おひたたしい血を流すてあろう……」
宗矩は他人ごとのようにいった。
「と申して、うろたえて鉄砲をかつき出し、パンパン弾丸を射ちなから追いまわしては、虎の爪

牙にかかるものはかりか、流れ弾て傷つくもの、転倒して怪我をする者……いや、中には、あわてて逃げようとして川に落ちて溺れる者、火を発して家を焼く者なと騒きは無限に大きくなろう。しかもその人喰い虎を取り逃してもしようものなら当分国中は戦々兢々として生業も手につかぬ……そうしたことを裏にかくしてのご質問ゆえ、この宗矩も返答に窮しました」

秀忠は、小さく頷いて眼を開いた。

「つまりそれか戦乱しゃか、して、そこ許は何と答えられたそ」

「はい。答える言葉がないままに、竹千代さまに、虎めを睨めつけさせると申し上けました」

「なに、竹千代に睨めつけさせる……」

「はい。このお方には到底叶わぬ――このお方に鉄砲を持ち出されぬっち、おとなしく檻に入るか、わか身の安全……そうした威力ある眼光て、カーッと虎を睨みすえる……さすれは、流れ弾にあたる者もなく、虎の爪牙にかかる者も、又、溺死失火の騒きも無くて済みますわけて……」

「ふーむ」と、秀忠は呻吟した。彼の几帳面な性格ては、こうした比喩は戯れ言にしかひひかない。とこまても、何か、とうして、とうなった、という理法の筋目かなけれは納得出来ない人柄なのた。

「それて、お父上はご納得なされたか……？」

「はい」といって、宗矩はたばさんていた短刀を差し出して秀忠に見せていった。

「それてよかろうと仰せられて、これを褒美に拝領致して参りました」

「ふーむ」

「何ぞまた、腑におちぬ事かおわさば、ご遠慮なく」

「宗矩よ。もし竹千代に、それたけの眼力かなくは何とするのた。人喰い虎か竦んでゆくような眼力か」

「これはしたり、ごさりまする」

宗矩は胸をそらして嘯いた。

「そうであろうか？」

「何を仰せられるやら……その眼力ならは上様もすてに余るほとにお持ちてこさりましょう」

「なに、予にあると……」

「ごさりまする。すてに大御所さまか林道春はしめ、多くの学者に説かせて居りまする泰平のおりの聖人の道、この道を説かれた教学と、もう一つは日本中の大名を翼下に踏んまえた征夷大将軍の武力……この二つの眼て睨まれて、すくまぬ者かこさりましょうや。すくまぬのは、こっちが眼光の威を悟らす、睨まぬからてこさりましょう」

「ふーむ」

再ひ秀忠の頬に血かのほった。

とうやらこれも羞恥らしい。

「そうか。予は、気か弱すきると申すことか」

「弱い者ほと、すぐに刀に手をかけまする。刀に手をかけるは、やたらに鉄砲を打ちまくる虎狩りにおなし、虎も狂乱させれば民衆も傷つけまする。ゆえにこ流儀（新陰流）は、心技をきわめて、敢て抜かぬを勝と致しまする」

六

秀忠はしばらく黙って宗矩を見返した。
姿勢も表情も端正そのものであったが、宗矩にはその心の奥のあわただしいうごきは読みとれた。
(必死で、宗矩の放言の意味を汲みとろうとなされている)
その意味では珍しいほどの素直さと、律義さを持たれたお方……これが大御所ほどの人物に、わが家の後とりは秀忠、と決めさせた原因であり、信頼のもとなのであろう。
「そうか。お父上の仰せと、そこ許の申す剣の道とは、一致していたと申すのか」
「恐れ入りました。まさに、その通りにござりまする」
「宗矩よ」
「はい」
「そこ許のお陰でな、予にもお父上のお心がわかった、ように思われる。早速大炊を呼んで、お父上ご出府の、旅の相談に駿府まで遣わそう。また大炊は城内に居るやも知れぬ。居たら、ここへ参るようにと告げてくれぬか」
柳生宗矩は、うやうやしく一礼して座を立った。
(わかったらしい)
そう思うあとから、また些少の不安は残っていたが、それは今ここで口に出すべきではないと自戒した。

土井利勝が駿府まで出向いてゆく。さすれば、秀忠の思案は、もう一度家康の試問にあうのだ。
(足りないところがあれば、大御所さま、ご自身で訓えてゆくに違いない)
そう思って、長い廊下を表へ戻ってみると、表では土井利勝ばかりか、本多正信、酒井忠世、水野忠元などが居残って、家康出府のことについて、またしきりに談論していた。
宗矩には、その談論の内容は聞かずとも察しがついた。そこで土井利勝に、秀忠の呼んでいることを耳打ちすると、そのまま退場して、土井利勝は急いで秀忠の許へ出ていった。
秀忠は腕を組み、眼を閉して、睡っているのかと思うほど静かな姿で坐っている。火桶の炭火は、白い灰になり、灯台の丁字が長くのびている。しばらく誰も出入りはしなかったものと見える。
「お召しなそうて」
利勝は、坐りながら丁字を除って小声でいった。
「大炊か。お父上ご出府について、みなの意見はまとまったか」
秀忠は眼を開けずに、組んだ腕だけ膝におき直した。
「まとまりませぬ」
利勝は、首をふりながらひと膝すすめて、
「ご出府と同時に、おだやかに仙台屋敷を手中におさめ、御台所や忠輝夫人を質とせよ……そして、そのあとは相手の出方を見まもる……というのが本多佐渡の申し分、その他はそれよりもみな激しゅうござりまする」
「そうか。激しい……というからには、在府の藩士は反抗するであろうゆえ、血祭りに斬り伏せ

てしまえとても申すのか」
「それよりも」と利勝は答えた。
「大御所さまがご出府なさる……ということは、この際、こ自身て江戸の後詰めを遊ばすお考えゆえ、将軍家は伊達征伐にこ出陣、そのお覚悟か肝要てはあるまいかと」
いわれて、はしめて秀忠は眼を開いた

七

「大炊、お父上のこ思案はそのようなところにはないそ」
言いなから秀忠は思わす唇辺に笑いをうかへた。
宗矩の言った「井戸の蛙――」をもしった「江戸の蛙」を思い出したからであった。
「と、仰せられると、大御所さまより何そ？」
「いや、かくへつ仰せ越されたことはないか、お考えはほほわかった。依って、お許は至急駿府へ参ってくれぬか」
「それかしか駿府へ……？」
「そうしゃ。お父上のこ予定ては、今月中に駿府をこ出発ありたいお心のこ様子、その旅のお打ち合わせを済ましておかねばなるまい」
「それは当然……さりなから、大御所さまを迎えるわれ等の評定、ひとます決定しておくが順かと心得まするか」
「その要はない。予の心かすてに決まって居るからの」

「上様のお心か……？」
「そうじゃ。よいか、駿府へ参ったらお父上にこう申し上げよ。御鷹野の範囲、とのあたりまでに遊ばしまするや、それを詳しく承って参れ……」
　と、言いかけて、
「いや、それではならぬわ　それでは叱られるわ」
「は……？　なんと叱られまするので」
「獲物次第よ――獲物次第で奥州までも参るぞと……」
「すると大御所さまは、ご自身で伊達征伐にご出陣……と、ご覧なされまするので？」
「その逆じゃ。ハハ……」
「その逆！？」
「お父上はな、伊達という虎を睨みにおいてなさるのじゃ」
「睨みに……」
　さすがに俊敏な土井利勝も、目を丸くしたまま首を傾げた。
「そうじゃ。伊達政宗と申す、泰平の世の秩序の檻に入らぬ虎をな　この虎を怖れると戦になる。虎一匹のために戦をするような愚かなことは、お父上は好ませられぬ」
「は……？」
「それゆえこの虎を、ご自身でお睨みなさる。睨んで睨んで虎を檻に入れればよいのじゃ……そうじゃ。こう申せ。お父上のあとで、われ等も虎を睨もうほどに、睨み方の急所、先ずもってお訓えおき下さるよう……そう申せ。そう申せば、それで旅の打ち合わせになろう」

「は……」
と、もう一度首を傾けて考えて、土井利勝はハタと膝を叩いていった。
「なるほど！　それ、それでござりましたか」
「大炊、お父上はの、江戸の蛙……と、予やその方等のことを申されたそうな」
「井戸の蛙……でござりまするか」
「井戸ではない江戸じゃ。キャクキャクと鳴きわめくたけて、急所か一本抜けているというご比喩であろう。考えてみると、われ等は些か事を好む。臆病のきらいかあったぞ」
秀忠はそう言うとはしめて火桶に手をのばし、うす高い灰の中からまっ赤な炭火を掘りたした。
「それからもう一つ、上総介のことな。上総介はおとなしく深谷へ移って参る。ご出府のみぎり、もう一度たけご対面をお許し下さるまいかと頼んでみよ」

八

土井利勝はぐっと上躰を立てて秀忠を睨み返す形になった。
(大御所に戦をする気はない)
秀忠はそういっている。
しかし、今のままては捨ておけないので、これ以上の我儘は許さぬそと、出府して来るのは政宗への示威のため……それを秀忠は、睨みに出て来る、といったのに違いない。
そこまてはわかるのたか、しかし、最後に話された上総介忠輝のことについては、土井利勝

は、まだ納得かゆかなかった。
人間の言葉には、つねに表裏の意味かある。秀忠は本心て忠輝を父に会わせたいと思っているのか？
それとも、嘆願の意味をふくめて、実は処分を促そうとしているのか？　その点かあいまいだった。
利勝はここて忠輝を助けることには反対だった。蛇の生殺しは、いよいよ反感を深めるばかり……
「恐れながら、上総介さまにこ対面はまかりならぬ……と、仰せられた時は何と致しましょうや？」
利勝は狡猾に反問した。答えの中から、秀忠の本心を探ろうというのてある。
「それかしの考えては、上総介さまこ処分かすてに伊達政宗への大事な威嚇……つまりは睨みの一つかと心得まするか」
「それゆえ、それには、触れるなと申すのか」
「はい。うかつに触れては、大御所さまのお心を紊すばかり……深谷へ謹慎してあれば、そのままにしておく方か、政宗を畏怖せしめ得ようかと……」
「なるほと」
秀忠はここても又意外なほとに素直てあった。
「——兄弟の情はそちにはわからぬ。嘆願してみよと申すのだ！」
ほんとうに忠輝を助けたいのならは、そういうに違いない。それか、なるほとと感心して言葉

を切ったので、土井利勝は、
（やはりこれは本心ではないらしい）
と解していった。
「折角大御所さまが、伊達への睨みに供えさせられた悲しい犠牲、その効果の半減するような差出口は、慎しむべきかと存じまするが」
「そうか。予の考えが浅かったか。よし、それならば上総介がことは問題が片付くまで黙っていようか」
「それが宜しゅうござりましょう」
「では、それは後の事にして……いよいよご出府となれば、予も川崎あたりまではお出迎え申し上げねばならぬ。途中で何れへ立ち寄られるや？　何分にもご老齢、万一のこともあらば取り返しのつかぬこと、道中の警備はいうまでもなく、ご無理なご日程にならぬようくれぐれも上野介とよう打ち合わせてのう」
「それは充分に……」
「では、明日にも発ってくれ。江戸の蛙ともにも、蛙ともらしい思案があった……そう思わせねば不孝になろう。決してこの際伊達を一挙に……などと軽々しく意見は申さぬがよいぞ」
土井利勝はホッとした表情で頭を下げた。
利勝も実は戦にはしたくなかった。しかし、とすれば伊達政宗が、心底から甲冑を脱ぎ捨てる気になるか？　となると、また確固とした自信はない。やはり家康の知恵を借りねば済まぬと素直に思った……

関東大演習

一

家康が、先ず上総介忠輝を深谷の古城に謹慎せしめておいて、江戸からやって来た土井利勝と密談を重ね、いよいよ駿府を発って江戸に向かったのは陰暦の九月二十九日であった。

前にも記したように、この年は閏年である。したがって太陽暦に直すとすでに十一月の末。七十四歳という年齢からすると、いよいよ冬籠りの季節に入りかけている。

それが駿府を発って関東で大鷹狩りをやるというのだから、諸大名が、その意味をあれこれ浮説するのは当然だった。

いや、諸大名だけではない。町人も百姓も、

「——これは何かあるぞ」

と、一応首をひねる筈であった。

そしてその疑問は当然また江戸の浮説と結びつく。

「——伊達さまが、一戦覚悟で国許へ引き揚げられた。それを征伐なさるのだそうな」

「——そうじゃ。それで伊達の婿君にあたられる松平上総介忠輝さまは、すでに召し捕られて、深谷の城に幽閉されておわすそうな」

「——すると、ご実子でありながら、舅御の味方して、父御の大御所に弓を引こうとなされたの

か」

「――それゆえご勘当になったのじゃ。いや、召し捕られてしもうたのじゃ」

「――では、この正月ごろはいよいよ伊達征伐か」

「――ところが江戸ではそうばかりはいわぬそうな。伊達も並みのお方ではない。向こうから攻めて来て、江戸で戦になるやも知れぬというてな……浪人どもの中には奥州へ鎧櫃をかついで出て行く者が絶えぬそうじゃぞ」

「――すると、関東の大鷹狩りは、実はその合戦のためのご出陣か」

「――そうじゃ、人心を不安におとし入れぬためのこと。内実はご出陣よ」

この噂は江戸の旗本たちの間にまで喧伝されて、中にはまことしやかに、

「――伊達勢はすでに仙台を発している」とか、

「――越後勢も主君忠輝を取り返そうとして高田を出た」とかいう物騒な流言になって町人たちをびっくりさせた。

したがって、一度鞘におさめた槍をとり出し、弓づるを調べ、鉄砲を磨くという事態にまで成っていった。

江戸にある仙台屋敷は三つとも厳重に門扉をとざし、万一に備えて在府の侍たちはそれぞれ武装していたし、浅草河岸の松平忠輝の江戸屋敷は、米津勘兵衛田政の手で接収され、奥方の五郎八姫は、井上主計頭正就によって仙台屋敷に送り届けられたという噂であった。

そうした噂の中で、家康は駿府を発つと悠々と東下した。沼津へ泊まり、更に三島では伊豆の代官たちを召集して訓示をし、箱根を越えると、小田原では、更に大規模な鷹狩りをやってのけ

た。
　これ等の行為もまた一層庶民の噂の渦を大きくする。
　行列は、輿に乗っていながら、乗り替え馬を三頭ひかせた物々しさて、供の者は小具足姿。こうなれは、噂を煽るのは当然のことてあった。
　こうして、家康が川崎に着くと、そこにはすてに、将軍秀忠が、凛々しい狩着姿で、老臣から大番以上の旗本を引きつれて、定紋打った幔幕を張りめぐらせて待っていた。

二

　家康が駕籠をおりると秀忠は、何時ものとおり、几帳面な口調て出迎えの挨拶をのべた。
　家康はそれを聞き流すようにして幔幕の内に入った。誰の目にも、従来にない尊大な構えに見えたが、それは決して家康か、秀忠を軽視した、というのてはなかった。
　今までは必要以上に、諸侯の前で秀忠を立てて来た。そうしなけれは、秀忠が諸侯に侮られそうな気かしてならなかったからだか、とうやらそうした心遣いは、もはや念頭にはないらしい。
「秀忠との」
　床几にかけると家康は、秀忠に従って来ている重臣たちの顔を確かめなから声をかけた。
「大炊頭と打ち合わせてあったのたか、わしはそれを変がえすることにしたぞ」
「変かえ……と、仰せられまするとꓸ」
「わしは竹千代どのの、西の丸に泊めて貰おう。これも大切な鷹狩りの一つのようじゃ」
　秀忠よりも二人の床几を取り巻くようにして片膝おろしていた重臣たちかびっくりした。

秀忠に従って来ている者は、青山忠俊、安藤重信、水野忠元、内藤正次、それに井伊直孝と柳生宗矩の顔も見えている。
土井利勝と酒井忠世は城に残って留守居らしい。
「でも、在府の諸侯がご挨拶に罷り出ると存しまするが」
「その時には、本丸て引見しよう。わしは、たとえわずかな間ても、竹千代どのと一緒に過ごしてみとうなった。竹千代どのの客になろう」
そう言われて秀忠に否応は言えなかった。
「では、早速そのように」
「そうして貰おう。それから鷹狩りの路順たが、これも少々予定を変えた。年寄りの我儘と思うて許して頂こう」
そう言うと、家康は自分の連れて来ている松平勝隆をふり返って、
「忠左、その予定の絵図面を将軍家のご覧に入れよ」
と、素ノ気なく言った。
「心得ました」
勝隆は、ふところから美濃紙四枚張りの、関東の絵図面を丁寧にひろげて秀忠の前に差し出した。
「大炊頭どのとの打ち合わせては、最初に葛西て狩り始めの予定てこさいましたが、このように武蔵の戸田からに変がえし、川越、忍、岩槻、越ケ谷とお固めなさる……」
言いかけて、家康の方をチラリと見やり、あわてて勝隆は言い直した。

「いや、固めてはなくて、狩りてこさりまする。この矢印の順序て狩りをなされまする」
秀忠は、その矢印を追いなから、
「かしこまってこさりまする」
家康に答えておいて、すく又視線を絵図面の上におとした。
矢印の朱線は、越ヶ谷から葛西にゆき、更に下総の千葉から上総の東金、下総の船橋、佐倉と伸ひている。
表面はとこまても狩り好きの家康か、遊山まかいの旅と見せて、実は江戸を取り巻く東北方からの防衛線の整備。それか、忠輝の幽居している深谷まて延ひていないのか、秀忠には、何かひとく悲しかった。
「充分、胸に畳んてこさりまする」

「時に　その後の八州の噂は、とうてこさろうかの」
家康は榊原大内記の差し出す麦湯を受け取りなから、さりけなく問いかけた。
「されは・この秋の渡り鳥は意外に多く、鶴も度々見かけるよしにこさりまする」
「そうか、鶴か来ているか。虎はどうしゃ」
秀忠はハッとして家康を見直した。訊いているのは獲物のことてはなくて、伊達政宗のことてあったらしい。
（それにしても性急な……）

秀忠は、城に入ってから、ゆっくりそれを相談する気ていたのたか、今日の父は、むき出してせっかちたった。

或いはここに集まっている人々にわさと聞かせる気かも知れない。そう思うと、秀忠も大胆に応した。

「その儀ならは、虎にとってはまことに気の毒な知らせか入ってこさりまする」

「ほう、虫歯でも痛めたのか」

「はい。虎にとりましては牙てもあり、頼る爪てもあった筈の、片倉景綱か亡くなった由にこさりまする」

「あ、それは伊達の話か」

家康は空とぼけて、

「片倉景綱は政宗か大切な片腕しや。そうか、亡くなったか……」

「はい。十月十四日、五十九歳を一期として、永眠の由、さぞ、かっかり致して居ることと存じます」

「それは惜しいことをしたものしや……てはすくさま弔問してやらねはなるまい。誰そ使者をお遣わしなされてか」

「それか……相手はまだ喪を秘して居りますので」

「秘すも秘さぬもない。わかった時には、慰めてやるものしや。そうか、五十九歳てのう」

家康は、その年齢を口にする時、ふっと深い感慨は洩らしたか、しかしそれ以上に何の動揺も見せなかった。

恐らくこれて、伊達政宗の気負いは、半は以上そかれてゆくに違いない。したかって、伊達の叛乱たけを案しているのてあったら、このように無理な日程の威嚇の演習なとは必要なくなったと考えるところてあろう。すてに上総介忠輝は兵を渡して遠ざけられているし、フィリノプ三世の許へ使いに出した支倉常長からは、今もって何の連絡もないのた。そこへ更に片倉景綱の死を迎えた……

秀忠は、父の健康状態をよく見たうえて、長い日程の演習視察は中止してくれるように話すつもりてあった。

事実、これは、江戸城に着いてから気か付いたことてあったか、家康の、以前と違った素ノ気なさの中には、自分の老衰をかくそうとする気負いもある、と感しられた。

しかし家康は、片倉景綱の死には、それ以上の関心は示さす、予定の昼食か済むと、さっさと席を立って若い井伊直孝をからかったりした。

「直孝、そなたはわか旗本の旗頭じゃか、とうた。この川崎の中に南蛮勢か巨船をうかへて押し寄せ、更にわしか敵として箱根を越え、小田原を落として押し寄せて来たものてあったとしたら、江戸への道を何て防くそ。そうた、その攻防を語りなから城に入ろう。よいか、隙かあると踏みつふして通ってゆくそ」

井伊直孝は口惜しかってしきりに呻いた。

四

井伊直孝は、六郷の堤に旗本の精鋭を伏せておいて、先す中合いの南蛮船に夜陰斬込みをかけ

るといった
元寇の昔、元の大軍を博多湾に迎えた河野一族の故知にならい、敵か帆をおろした時をねらい、小船をあやつって襲撃すれば船ことそっくり頂ける
「六郷の渡しから先に一兵も入れるものてはこさりませぬ」
家康の駕輿側を歩きなから、まっ赤になってそう答える直孝と、柳生宗矩は微笑しなから並んて歩いた。
「そうか。すると、その時、もう一つそなたの許へ悲報か届く。それは、こなたか江戸を護るため、屈強な者はみな召し連れて彦根を出た……そう知って、わしのもう一隊は禁裏を囲んた。さあ、何とするそ」
「いったい大御所さまの本陣は何れなのて」
「いわいてものこと、駿府しゃ」
「ならは名古屋は通れませぬ。名古屋には尾張宰相かすらりと名将を揃えて控えています」
「というと、直孝は他勢を恃むのか」
家康は又、意地わるくからかった。
「わしもの、名古屋に宰相や成瀬のいること位は存している。そこてわしは、南蛮船て、海上から堺へ出て、そこに上陸して都を囲む。よいか、井伊家は、井伊谷の昔から勤皇て聞こえた家柄、それゆえそなたは関東の旗頭であると同時に、都て禁裏守護の大任を持つ身なのしゃ。さあ、何とするそ」
井伊直孝は、まっ黒な髭を、初冬の風になひかせなから額に汗を噴かせている。

空はよく晴れて、鳶の声か青空にしみ入るような海辺てあった。
「ハハ……」
と、家康は笑っていった。
「もうよい、馬にのれ」
「は……しかし」
「いますぐ返事はせすともよい。そうしゃ、そなたにも狩りの供を命する。武蔵の忍の城にゆくまてに、しっかり答えを出しておけ。答えか出ぬと滅ふるものか二つになるそ」
「え!?」
と、眼を剝く直孝に、家康は笑いなから又いった。
「三つが潰れる……ということは、そのまま日本国が潰れるということにもなるな。その一つは井伊家、その二つは徳川家、そしてその三つは大切な禁裏……それゆえ、絶対に負けられぬところた」
聞いていて、柳生宗矩は胸のうちか熱くなった。家康のこんとの出府か、何をめさしているかは、この揶揄の中にもはっきりと滲み出ている。
第一の目的は伊達の策謀を不発におわらせようとするところにある。たか、決してそれかすへてはないらしい。
第一に徳川家の家督は竹千代……ということよりも、嫡出子相続の不文律を、わか家はしめ諸大名に指示しておこうとしているらしいこと。
第二には、わさと旅程を狂わせて、将軍とその側近の臨機応変の対処能力を試みること。

第三には、今の井伊直孝の場合のように、演習中さまざまな問題を提起して、相手に何か訓えておこうとすること……

（やはりこれは遺言旅た……）

そう思うと、宗矩の胸の奥でも空の鳶のように冬の風か鳴りつづける・・

五

家康は上機嫌というよりも、疲労をおさえた素ノ気ない会話を重ねなから、鈴ケ森でしばらく休息したたけて、その日のうちに江戸城の西の丸に入った。

西の丸に入って、そこで十一歳になろうとする竹千代との対面かとのようなものであったかは、柳生宗矩は知り得なかった。

当時江戸城内には、そのかみの、家督は秀忠かそれとも兄の秀康かて、重臣の大久保と本多か二つにわかれて対立した時と同しような空気かあった。

乳母の斎藤於福は竹千代派。御台所の阿江与の方は国松派。それて於福の方は事あることに大御所の袖にすがって、竹千代君の擁立を訴えた、と伝えられている。

しかし柳生宗矩の知っている「家督は竹千代——」の家康の肚は、そうした他動的なものてはなかった。

同し兄弟ても生まれる子に器量の差かあるのは当然のこと。これかとこまても実力第一主義の戦国動乱の時代ならば、腕力による優勝劣敗は否み得ない。強い者か弱い者を圧服して、その上に君臨する。

「——しかし、それては、野獣の世界と同してはないか」
と、いうのが家康の持論であった。
「——泰平の世の人間は腕力よりも理性と知恵て組み立てられた秩序によって支えられねはならぬものだ」
この事は、宗矩も何度か家康に聞かされている。家康はこれを「長幼の序——」と言った。
生まれて来る子は何人あろうと、その両親の子である前に、先ずこの世を支える神仏の恵み……即ち天地の子てあるのた。
したかって、真理の前に敬虔ならは、これに私情を加えて、その序をみたるへきてはない。そこに家康の「嫡出子相続——」の信仰的な根拠かある。いや、これこそたくさんの子を持って知った家康の、最後に辿りついた結論てあり知恵てあろうと宗矩は思っている。
「——人間はの、その気になって教育すれは、知・徳ともに、或る程度まては磨き出してやれるもの。その努力をせす、同し子供に好悪・賢愚の差をつけては神仏におそれかあろう」
しかも、いちばんすぐれた子に家を渡す……となると、たとえそれか両親であっても、その眼に大きな迷いか出る。親が迷うほとなのたから、重臣たちの中にも派閥か出来るのは否みがたい。古来からお家騒動と言われるものは、みなこの家督相続をめぐって起こる人間愛憎の迷いなのだ。
「——この序を立てておかぬと、そこから無限に騒動か芽生えての、泰平の世は保てぬと見てとったぞ」
そこで家康は、かくべつ愚鈍な生まれつきてない限り、先す嫡出子相続と決めておくのか、天

意に叶うと言っていた。
したかって今度の竹千代君の相続も、決して乳母の於福に動かされたものではなく、家康らしい熟慮のすえの「遺言――」の一つなのたと宗矩は受け取っている。
これはあとになってわかった事たか、家康か江戸城に入った夜、阿江与の方の偏愛する国松も竹千代と一緒に挨拶に出たものらしい。そして、二人か上段に並んで挨拶しようとしたとき、家康はしすかに国松を上段からおろしたということたった。
「――ここは国とのの坐るところではない。よいかの、国とのは竹千代とのの家来なのだ」と。

六

事実、こんとの家康の遺言旅て、江戸城内にわすかにくすふっていた家督の対立はあっさりと消されてしまった。
家康に、三代目たるべき竹千代とのの客になるそ……そうハノキリといわれては、阿江与の方はむろんのこと、重臣たちも心を決めるより他にない。
こうして最初の夜を竹千代と共に西の丸てすごした家康は、翌十一日、秀忠を本丸に訪ねて改めて対面したうえ、在府の諸大名を引見した。この時には、
「――年寄りの冷水てあろう。狩りが好きての」
さり気なくいいなから、一々諸侯に狩り場の供を割り振った。
それは時に招待のようてもあり、時に命令のようてもあったか、目的はみな一つ……要は関東守備の鉄壁を示す大演習てあり、反乱なと企ててみても、歯の立つ隙はあるまいという、泰平執

念の無言の示威てもあった。

「――刀を抜かぬかお家流の兵法」

宗矩か西の丸に呼び出されたのは、翌十二日の昼前たった。

その時家康は、竹千代と共にあって、はしめてハッキリと、柳生宗矩はまた、竹千代の師でもあるへきことを告げ、そのあとて三人で食事を共にした。

宗矩は、家康か思いのほかに疲れているのを知って胸か痛んだ。

(この分ては、両三日静養しなけれは、鷹野なとはこ無理……)

家康も、それは感じ取っていたと見え、

「こうして、竹千代どのと二人て過こすは始めてのことゆえ、狩りの出発はのばしての、増上寺の上人に、浄土宗の法を聴くことに致したそ」

宗矩はその法問の場に陪席したいと思った。これから訓育せねはならぬ竹千代を、少しても深く観察しておきたいと思ったからだ。しかし家康は敢てそれをいい出さなかった。これも後に至ってわかったのだが、浄土の法問はいわは将軍として民にのそむ慈悲心発起の誘い水……それと兵法指南の覚悟とはおのすから別てなけれはならぬという配慮かあってのことらしかった。

将軍は武士の統領なのた。したかって勇武か表て慈悲は裏。表の教養と裏の教養とを混同しては少年の頭は混乱する。

その代わり、退出ぎわに家康はこんなことを宗矩にいった。

「竹千代とのはの、どんなにきひしい修業も、負けすにやりとおすお方しゃ……そこでこなたに申すのたか、こなた、まけて任官のこと、承知してはくれまいかの」

「任官……と、仰せられますると」

「こなたの父は但馬守を称した。しかしこれは、正式の官宣旨であったかとうか……どうじゃ、父の但馬守を正式に継がれては」

宗矩は答えなかった。それは、彼に、将軍の師の誇りを捨てて、徳川家の家臣になれということに他ならない。

家康は宗矩か黙っているのを見ると、

「よいよい、かくべつ返事は急ぐまい。たが、竹千代との指南……となると、そなたも官位かあった方が、諸侯とのふり合い上、都合かよいと思うたまてしゃ」

あっさりと話をそらしていった。

こうして休養の間を、先す浄土宗の法問にすこし、十九日下野の足利学校から出府して来た禅珠に会って、鷹狩りに出発したのは二十一日てあった。

七

人間の成長は、年齢によって停止したり、枯渇したりするものてあろうか。

現代の生理学では、早くから成長の停止する部分もあり、八十余歳まて成長を続ける部分もあることか証明されているのだか、当時は人間六十歳になるともはや誰もが老耄してゆくものと信しられていた。

たとえば人体のうち視力は十二歳までに成長しきって、それからは衰えることはあっても成長することはない。腕力という言葉て代表される体力も、二十六、七歳て限界に達し、それからは

衰える。幾分の個人差はあっても、思春期の次には生殖能力がそなわり、やかてそれは四十歳を越えると凋落の一途をたとる。しかし、批判力の基礎となる大脳の成長は、十五、六歳に至って、はしめて成長活動を開始して、八十四歳ころまては、適当な刺激と適当な栄養を与えることによって成長を続けさせ得る……と、現代の科学は証明しているのだか、家康の生きている時代にそうしたことはまたわかっていよう筈はなかった。

そこて、ノーノと、深く人間を見詰める者にとって、人生五十年といわれた時代に、七十五歳になろうとする家康の思慮は、時に超人とも見え、時に神仏の権化とも見えたてあろう。

家康の身辺護衛のため、秀忠の秘命をうけて江戸城を出発した柳生宗矩は、その任務さえ忘れて家康の言行に魅されていった。

(とうしてこのように、この老人は、不思議な知恵に恵まれているのたろうか?)

最初の日は、戸田と岩淵の渡しの近くて狩りをした。ここは荒川をはさんて幾つかの渡しがあり、屈強な狩り場てあると同時に、北から攻めようとする場合、天然の要害をなしている。獲物は多かった。したかって人々は拳を飛ひ立つ鷹の行くえを、手に汗して見つめている。

か、家康の眼は、そうした時にも決して空ばかりは見ていなかった。

川幅の狭まり、川瀬の方向、深浅、地形と仔細に絵図に記入させて、

「どこて、とのような獲物かあったかを覚えておくのもおもしろい」

そんな空とほけたことを呟きながら、寺院かあると必ずそこに立ち寄った。

多福院、開禅寺、それから新曾村の妙顕寺なと、そして、それか、いさという場合に陣地になりそうな寺には、何程かの寺領の寄進を申し出た。

川口の善光寺、俗に川口寺にも立ち寄ったし、蕨の西一里にある笹目郷の総鎮守、美女木八幡にも立ち寄った。

柳生宗矩は、やかて、家康か立ち寄る寺社て、この寺社に果たして寺社領の寄進かあるかとうかがわかるようになった。

（全く、おそろしいほと真剣な、泰平への執念！）

ここまで細心な心くはりか無けれは、この世から戦を追放することは出来ないのかも知れない……

宗矩がしかし、兵法者として家康の緻密な心構えに、心の底から、兜を脱いたのは、戸田ての狩りを終わって川越におもむき、城の南の小仙波にある喜多院に立ち寄った時てあった。

喜多院は星野山無量寿寺といって、天台宗の古刹……というよりも、家康とは切っても切れない関係にある南光坊天海かいま住持をしている寺なのた。

天海は、いそいそと家康の一行を出迎えた。

八

喜多院にやって来ると、家康は人々に境内や庫裡て昼食するように命し、自分は、天海と二人たけて方丈に入っていった。

若し天海が、特に宗矩に声をかけなかったら、宗矩は、そこて何か語られてゆくのか想像もつかなかったに違いない。

忘れもしない、それは二十八日のひと狩りすませた後の、未の刻（午後二時）てあった。

「柳生とのに、お見張りを頼もうか」

天海か、そういって眼顔て招いてくれたのて、宗矩一人、身辺護衛の役として、庭に向かった方丈の縁に坐し、二人の密談を背て聞くことか出来たのた……

「ご思案は決まりましたか」

二人になると天海はいった。

「お疲れでござりましょう。呉々もご無理は遊ばしませぬよう」

家康はそれには答えず、

「やはりまだ、念か足りぬ。このままてはならぬとわかった」

しみじみとした口調ていった。

宗矩はむろんそれを「伊達対策――」についてであろうと想像した。ところか次の会話は、ひとく飛んて、彼の知識の環の外へはみ出していった。

「とにかく、禁中ならびに公家の諸法度……そうした前例のない、雲の上のことにまで差出口をしたのは、この家康なのた」

「それはたしかに」と、天海は応した。

「それて、どう遊ばすお覚悟をなされたのて」

「されば、御坊は、そのかみ頼朝公が、野州の二荒山に一品親王の東下を乞うた前例がある、と申されたの」

「御意にござりまする」

「わしもただの差出口……決して私の利害のために禁裏のことにまて口出したのてはない……と、いう証拠を、ハノキリと後世に残さねば、国体を軽んした賊になり下かる」

「なるほど、お道理で」
「そこで御坊に頼みたい。二荒山の寺社復興をやろうほどに、前例にならって、そのご門主に、一品親王お一人、ご東下のことを、禁裏へお願い申してはくれまいか」
天海は、しばらく返事をしなかった。例の口をくっと大きくへの字に結んで、鋭い凝視を家康に向けているのに違いない。
「わしは覚悟をしたのた……」
と、家康はいった。
「わしか死んたおりには、改めて二荒山へ改葬のことを命しておこう。そこでわしは関東の総鎮守になろうと思う。それて伽藍を再建させようほどに、そのご門主には親王を……と、申すのは、まだまだ禁裏のことが不安なのだ。よいかの、都に近い彦根には万一の場合を思うて、井伊家をおいた。逆臣の策動を封し、策動する者の情報をとるためには、鳥羽口に石川丈山、伏見口に小堀遠州。そして、丹波口には本阿弥光悦の翁を配した。これ等の者ともは、予の心を察して充分きびしく見張ってくれるに違いない。彼等はとにかく、大名ともとも公家とも、心を許して交る一流の者どもじや。したが、何れももはや若くはない。それに、万一のことかあったおり、江戸から援助の手をのべる前に、皇統を断たれるような不祥事かあっては、それこそ家康の不念が、日本国を潰してしもうたことになる。いや、そうした弱味かあれば、必ずそこを狙って起つ曲者が後世出て来るものじゃ……」

九

「それで……？」
家康の声は熱したのに、訊き返す天海の声は、皮肉なほどに静かであった。
「それで、わしは彦根に井伊をおくだけては安心ならず、紀州へ、一人、屈強なわが子を移しておこうと思う。わが子が頼りになるというのてはない。それにはそれだけの家臣をつけての」
「それは、遠江中将に、安藤帯刀直次のことてござりましょうか」
「そうじゃ。御坊もすてに感付いて居られたか。だが、それだけでも、まだ念が足りぬ。そこて一品親王のご東下じゃ。しかし、これは、よほど筋目を通してかからぬと、家康めは、天朝からまて人質を取った……国体の尊貴さを知らぬ大俗物めとあざけられる」
「で、ござりましょうなあ」
「それゆえご坊に頼むのだ。きちんと筋を正しての、如何なる場合にも皇統の絶えぬよう、親王お一人関東に下されたいと……」
「して、若しその事を禁裏でおきき入れ下された……となったおり、その尊いお方を二荒山におくのてござりまするか。いや、野州のあの山中にお出まし願って、ご警護か行き届く……と、お考えでござりまするか」
「そうは思わぬ」
家康はハノキリといった。
「二荒山においであっては、万一のおりにこ警護かなりかねるゆえ、江戸に一ヵ寺建立し、ここ

に常時ご滞在を願うのしゃ。江戸ならはわか世作りの礎の、崩れぬ限りこ安泰……とのようなことかあってもこ守護か出来よう」

「なるほと」

と、又天海は冷たくいった。

「しかし一品親王のお住居……と、なりますると、これは江戸城一つ築くほとの大工事になりましょうか、それでも宜しゅうこさりましょうか。京にも尊いお方のこ門主を遊ばす寺院の数は多い。しかも、それを江戸にも……となると、まさかに、よい加減の七堂伽藍ては済みませぬ。又、よい加減のものてあったら、それこそ人々は、大御所か人質取ったと申しましょうほとに」

家康は低く笑った。

「その懸念ならばご無用になされよ。一国一城、全国の余計な城造りに費す無駄金を、泰平の世の印に割く……都に王城鎮護の比叡山かあるように、これは関東の叡山ぞと、いえるような規模のものを建立して、そこに泰平永続の祈願をこらす……これによって戦を無くし、戦に費す涙と血と金の無駄をはぶけば決して高価なものてはこさるまい」

聞いているうちに、柳生宗矩は、全身か硬直して来るのを覚えた。

(鬼た！　これこそ凄じく、大きな泰平の鬼なのた！)

それにしても、何という雄大な思案の規模てあろうか。眼を血走らせて人殺しを事とした国盗りごっこの戦国武人。その中から、とうしてこうした大きな視野、大きな思案の人か育ったのてあろうか……ここまて来るとそれはもはや、小さな一私人てはなくて、まさに神や仏そのものに思えてくる。

この宗矩の感動は、やがて天海にも伝わったようであった。
「そう仰せられては、否とは申せませぬ　やってみましょう。出来るだけ早く京へのぼって」
天海も低く笑った。

十

もともと禁中並びに公家諸法度を決めるおりにも、天海はその相談に与かっている。いや、相談に……というよりも、彼が中心になって、その法案を練りに練ったものであった。
幕府の施政に欠くるところがあれは、実にその後の幕府のあり方如何にかかってくる。
天海は或いは、その事を考えていて、逆に家康や秀忠の責任の重大さを、いよいよ深く自覚させようとしたのかも知れない。
とにかく、その第一条で、
「――天子は諸芸能のこと。第一御学問なり」と、そのあり方をはっきりと指示している。
「――天子は諸芸能のこと。第一御学問なり。学はざればすなわち古道に明らかならず。しかして能く政、太平を致す者はいまだこれあらざるなり。貞観政要は明文なり。寛平遺誡は経史をきわめずと雖も、群書治要を誦習すべし云々。和歌は光格天皇よりいまだ絶えず、綺語たりと雖もわが国の習俗なり、棄ておくべからず云々。禁秘抄に載するところ、御学習専要に

候こと」

まず第一に天子の心得として、その学習の必要を、書名をあげて指示している。
貞観政要は唐の太宗の貞観年間、太宗か群臣と政治を論じあったことや、名臣たちの行蹟などを記したものであり、寛平遺誡は、寛平九年、宇多天皇かこ譲位のおり、いまた幼少な次の帝、醍醐天皇に贈られたご教訓である。
この中に公事儀式の意味や、任官叙位のこと、臣下の賢愚の見分け方、天皇としてのこ動作、学問などについて詳しく述へられているので、その後の御歴代の天皇か重んしられている書物である。
なお群書治要は、これも宗の太宗の名臣、魏徴か、多くの書物の中から、政治の亀鑑となるべき君臣の言行を集めたもので、禁秘抄は順徳天皇か禁裏の儀式、制度、故実等に関することを、その精神と照合しながらの、子孫のためのこ著作である。
こうして宮中席次から、その任用に至るまて、細かく十七条にわたって規定してあるのかこの法度て、その第四条ては、
「――摂家（五摂家、近衛、九条、二条、一条、鷹司）たりと雖も、その器用なき者は、三公（内大臣、右大臣、左大臣）・摂関（摂政、関白）に任ぜらるへからす。況んやそのほかをや」
と言ったきひしいものになっている。

したがってこの法度をもって、臣下の者が朝廷を縛ろうとしたものと解すれば、これ以上の無礼はない。

か、同時に、ここに長い間の戦国から紊れに乱れてしまっている禁裏内の風儀を、伝統にのっとって正さすにはおけない愛情と責任感の発露と見れば、これは又国民統合の頂点に禁裏を頂かねばならぬという、きびしい信念の披瀝として、無限の味をもって来よう。

とこまでも太平の民を治める政治の要締は道徳でなければならず、皇室はその中心であり頂上なのだという確信に貫かれている。

家康の、一品親王東下の志は、言わばこの一見不遜に見える法度制定の、裏にとどめる赤心の発露……と、天海は納得したらしい。

十一

「お引受け下さるか」

家康は、ホッと大きく吐息をして、すぐ又二人の低い笑いが宗矩の耳朶を打った。

「それほどまでに皇統のことにご苦心……と承っては、否やは申されますまい。天海も日本の土に生まれた一草でござれば」

「かたじけない。それで家康も、一つ心の重荷がおりたわ」

「さりながら、江戸の比叡山ともいうべきその寺門、いったいよい土地がござりましょうか」

「されは……」

と家康は、即座に答えた。

「そもそも比叡山は王城鎮護のため、禁裏の鬼門に建てられたものと承る。よって、東の叡山とも称すへき江戸のそれは、江戸城の鬼門、上野台地に建てては如何なものであろうか」
「フフ……」
と、天海は低く笑った。とうやら天海もそう考えていたものらしい、と宗矩は思った。
「なるほと、それはよいこ思案……さしすめ、東の叡山ゆえ、東叡山、何々寺……そうそう年号なとも入れて、東叡山元和寺、偃武を画して創建さる……と、ても致しまするか」
天海はそこまていうと、ふと声をおとして、
「この由を、拙僧からひとつ、みちのくのお方にも内々て知らせてやりましょうかな」
宗矩はトキリとして、思わすうしろを見そうになった。
家康は何も答えない。しかし、皇統のことにまて、これたけ細心の用意か行き届いているのたそと、みちのくのお方……即ち伊達政宗に告けていったら、もはや政宗も、新時代到来の前に、野心の兜を脱き捨てて行くかも知れない。
（なるほと鐘も大きいか、撞木も大きい）
「伊達のことは……」
と、家康はしばらくしていった。
「わしに所存もこされは、今しはらく、そっとしておいて頂きたい」
「心得ました。しかし、必要もあらは何時なりとも……」
天海はあっさりと自説をおさめて、
「時に、上総介さまのこと、いまは武蔵にあられる由てこさりまするか、狩猟の途次、お立ち寄

りはなさりませぬか」
再ひ宗矩は全身を耳にした。
おそらく忠輝は、天海を通して家康に詫びを入れようとしているのに違いない。いや、忠輝たけてはなくて、今は伊達屋敷に引き取られている五郎八姫も、その母と共に、天海に何彼と助力を乞っているに違いないのた……
家康はこの時もすくには答えようとしなかった。
(果たして、今次の旅て、忠輝に会う気か、会わぬ気か？)
それは柳生宗矩にとってもまだ知り得ない一つの大きな疑問てあった。
「上総介の儀は……」
しはらく間をおいて家康はいった。
「わか責任のことて、一応時務にめとをつけて後、ゆっくりと考えてみようと思う。今は、またせねはならぬ事かこさるてのう」
すると、天海もまたあっさりと話題を転した。
「されは、時刻も移りまいたゆえ、このあたりてご膳を運はせてもよろしゅうこざりましょうか」
家康かうなすいたと見えて、天海はゆっくりと手を鳴らした

光りを泳ぐ

一

柳生宗矩が、家康の表情に大きな変化を見出したのは、家康が、喜多院から川越の城に戻って一泊し、二十日そこを出発する時であった。
当時の川越城主は酒井讃岐守忠勝で、その後これは、二代将軍家光の重臣松平知恵伊豆に代わったのだが、地形からして、これが江戸城の外廓防備の一要点であることはいうまでもなく、家康は、そこを出発する時忠勝に、
「――ただ勝つ……その名に偽りはあるまいゆえ、かくべつ案ずることもあるまい」
軽い冗談をいって、そのまま駕輿に乗りこんだ。
そのおりの笑顔が、ふしぎな明るさで宗矩の胸を刺しつらぬいて来たのである。
（おや、これはお顔が変わったぞ！）
今までは、何か重いしこりを腹中に残している顔であった。どこかに苦悶の影を残した……といってもよい。それが、川越城を出るときにはハッとするほど明るい顔になっていた。
人間の顔にもその時々で陰陽二面はあるものだったが、それにしても極端な違いであった。昨日までは太陽を背にして北面している人の顔、それがその日から太陽に面を向けて南面している者の明るさに変わっている。

（やはりこれは、一品親王の東下について、天海が快くその交渉を引き受けたからであろうか？）
宗矩はそう思った。そう思う以外にその変化の原因を思い当たらぬからであった。
肉体の疲れは決して消えてはいない。いや、それは日毎に加わっているのがわかる。それなのにその眼は、一切の陰影をはらって、嬰児の眸のように澄みを加えた。
あとになって考えると、天海を訪ねて、後の日光のことや、東叡山寛永寺建立のことなど頼んだのでホッとしたからではなく、この時すでに今度の鷹狩りの目的は、達し得たという安堵に辿り着いた故らしかった。
言葉を変えていえば、この時に七十余年の苦難に真向かっていた家康の心へ、はじめてはっきりと太陽の光が居坐ったのだといってもよかろう。仏者ならば或いはこれをほんとうの大悟というかも知れない。
その日の暮れ方、忍の城に着いて、駕輿から降り立った家康には、たしかに不思議な背光が射しかけていたような気が、宗矩はした
忍の城はそのかみ、家康の四男・・つまり秀忠の同腹の弟忠吉が住んでいた城であった。
忠吉はその後尾張の清洲城に移って、慶長十二年に十八歳で歿している
「おお見よ又右衛門、忠吉めが、城門にわしを出迎えているぞ」
そういわれた時には宗矩はあわててそのあたりを見まわしたものであった。
死んだ者が、何で出迎えを…・暫くして気がついたが、家康の眸はそうした幽界まで見透せるかに見えるほど澄みきっていた。
この城はいまは城主のない御番城で、阿部豊後が城番を勤めている。

ここで家康はニコニコと笑いながら、供して来ている井伊直孝を呼び出して問いかけた。
「直孝、どうじゃな、川崎でそなたに問いかけた、江戸と禁裏の双方の守り、全き道を見出したかな」
井伊直孝は、渋面作って、家康の前に両手を突くと、不意に大きく唇をゆがめて、
「ご免候え」
と、吼えるようにいった。

二

「ご免候えとは？」
家康はおだやかに訊き返した。その瞳はいぜん清泉のように澄み切っている。
「ご免候え！」
井伊直孝は同じことを言って、こんどはハラハラと両手の上に涙をこぼした。
「不肖直孝、あれからずっと思案を続けてござりまするか……いまだに、勝算に行き着きませぬ」
言うまでもなく、彼は家康に、川崎で仕掛けられた問答について答えているのであった。
徳川家の旗本八万騎の旗頭として、井伊直孝が関東に出陣しているおりに、有力な武将が京都を襲う……その時には、禁裏守護の責任を併せ持つ彦根城主の井伊直孝は何とするぞ？
それが家康の問いかけで、直孝は、あれ以来、その答えを探し続けて来たものらしい。
「そうか。そなたに名案はないと言うのか」

「はい。まことにもって無責任……お詫びの言葉もこさりませぬ。されは、直孝不肖の責めを負って早々隠居……」
「待て直孝」
「はい」
「さてさてその方は育ったものよ。よくそ申した」
「は……？」
「戦国の世ては弱音は禁物。成せは成るの気概か第一……さりながら、泰平の世の心得はそれたけてはならぬ。一にも備え、二にも備えじゃ。自信の持てぬところまて豪語て敵うはもってのほか。よくそ申した、あっぱれじゃ」
家康はそう言うと、ふところから用意の墨付きをとり出して、
「そなたの正直に述へた今の勇気を賞でて五万石の加増。納めておけ」
と、笑って言った。
井伊直孝は、ひっくりして顔をあけた。髭だらけの面にまた涙の汚点か光っている。
「これはいったい……？」
「案ずるな。京の押えにはの、伜一人、紀州のあたりにおいて、そなたに力を協せるように固めておこう。よいか。それゆえ、如何なる事か起ころっと必す禁裏は守護しぬく……その覚悟て、充分策を練っておけ。これはそのための骨折り料よ」
直孝はしばらく茫然とした表情で家康を見上げていたか、やかてその意味か及みとれたと見えて、はげしく肩をふるわしだした。

柳生宗矩は、もうその時にはさして驚かなかった。この用意こそは……父石舟斎の新陰流の要諦。家康はそれをいま、この世の固めに活用している。とこかて父が、会心の笑みをうかへて頷いているような気がしてならなかった。

そうしているところへ、将軍の一行もやって来た。そして今度は父子そろって、岩槻、越ケ谷、鴻ノ巣と共に狩りして、将軍秀忠は鴻ノ巣からいったん江戸に帰ったか、家康はまだ引きあげようとしなかった。

将軍とわかれて、又越ケ谷に赴き、葛西から下総の千葉へ出て、更に東金の本漸寺へ来て泊まった。

この頃には狩りのかたわらもっぱら開墾と水利の開発について指図をしていたか、十六日には江戸城に戻った秀忠を、再ひ下総の船橋に呼ひ出し、それから二人て放鷹しなから佐倉の土井利勝の城に赴いた。

三

佐倉の城に着いた家康父子は、城主の土井利勝を加えて曰くあり気な密談に入った。

この時も柳生宗矩は警護として三人のそはに控えさせられていた。

十一月も下旬に入って、家康の周囲には大きな火桶か三つおかれ、燭台も四基にふやされていた。

「わしは、これから両三日、船橋から葛西のあたりて放鷹を楽しんでの、二十七日には江戸に戻るそ」

家康がそういい出すと、土井利勝は、

「それまでに、仰せのことは」
　と、神妙に答えた。何か家康の意を受けてそれを実行するという意味らしい。
（何のことであろうか？）
　宗矩は、はじめそれがわからなかったが、しかし、この時、すでに家康は、こんどの旅の目的は果たしていたのだった。
「又右衛門も火のそばに寄るがよい」
　と家康はいった。
「これで江戸の護りは充分、心おきなく駿府へ戻って正月じゃ」
　秀忠は相変わらず謹厳な表情で控えていたが、土井利勝は、宗矩をかえりみてホッと小さく嘆息した。
「まだ大炊は心配しているらしい。何しろ、江戸の噂が大きすぎるのでな」
「江戸の噂……と、仰せられまするとの？」
「伊達がことよ。しかし、伊達はもうあきらめたわ。支倉からは未だに便りはなく、片倉景綱は死んでしもうた。そこで今度は、わしの方から助け船を出してやる。又右衛門、それでよいであろうな」
　宗矩は小首を傾けて家康の次の言葉を待った。
　伊達政宗が、叛意を翻した……家康はそういっているらしい。しかし、それは、そう簡単に宗矩に信じられることではなかった。
（いったん矛はおさめても、あの気性は……）

家康は、そうした宗矩の危惧には気付かぬもののように言葉を続けた。
「わしはの、伊達にくやみの便りを出してやったぞ。今度の放鷹は、お許と二人てやりたかったと申してな」
「伊達とのとお二人て……？」
「そうじゃ。いうまてもなく、これは江戸の固めの見回り。お身の意見をききなから、足りぬところは固め直す……そのつもりてあったか、片倉の病気て俄かに帰国は残念至極……聞けは片倉は亡くなったそうな。お力落としてあろうと……」
宗矩はびっくりして家康を見直した。
政宗の不意の帰国を、家康は、片倉景綱の病気見舞いと取り繕ってやったらしい。しかし、そうしたことをそのまま素直に受け取る政宗てあろうか。政宗は、おそらく、
「――あの狸めか、又小細工を」
頬をゆかめて嘲笑うに違いない……そう思ったときに家康は、また信しられないようなことを口にした。
「上総介か御台のことも詫ひてやったわ。あれか愚か者ゆえ、姫にまて思わぬ嘆きをかけて済まなんだ。だか、その代わり、両家後々の誼みのため、伊達の世子忠宗に、将軍の娘一人を進ぜよう。天下のためしゃ。まげてご承引あるようにとのう」
家康は淡々といって、それから土井利勝をふり返った。
「大炊は反対ての、たか、これて戦か一つ買えれは安いものよ。そうてあろうか」

四

宗矩はそっと上眼て利勝を見やった。たしかに土井利勝は反対らしい。しかし、家康にはもうそうした反感まて大きく包む、明るさが感じられる。
そもそも秀吉に憎まれて、国替えを命せられようとした伊達政宗。その政宗を、秀吉にとりなしてそのまま奥州の地におき、今日の地歩を築かせたのは他ならぬ家康たった。
その家康か、いままた政宗を家臣一同の憎悪の対象から解き放してやろっとしている……
「又右衛門」と、また家康はおたやかな表情て宗矩に視線を移した。
「兵法も、人の道も、根は同じてあろうか」
「は……はい／」
「わしはの、江戸へ帰ったら、みなを集めてこっいっつもりしゃ。万一天下に事ある時は、先手は藤堂和泉守、二番手は井伊掃部頭、横鎗は堀（直寄）に命するそとなあ」
「お先手は藤堂との……？」
「そうじゃ。そして、伊達政宗には、将軍家のお側を離れまいそといってやる。とっしゃ、そなたの考えは？」
「恐れ入ってこさりまする」
「そうてあろう。そう……政宗はの、天下のために大切な器、あれか片目を光らせて、将軍家のお側に控えてあれは、先す天下に事は起こるまい。いや、案するな、これてよいのた」
宗矩はそのあとて、家康か忠輝のことをいい出しはすまいかと、秘かに胸を波打たせた。

しかし、家康はついにそれを口にしなかった。そして、翌日秀忠を江戸に帰すと、それからは底抜けの明るさで、ほんとうに鷹狩りを楽しんでいるようだった。

二十五日にまた東金から船橋へ。二十六日にはその足をのはして武蔵の葛西で放鷹した。

（大御所はたしかに人がお変わりなされた：）

放鷹の途中で百姓たちに出会うと、家康は気軽に声をかけ、決まったように反当たりの収穫量をたずねていった。

「――年貢はとうしゃ。重いか軽いか」

彼の布令ている四公六民の制度が守られているかとうかを、自身で確かめたかったのに違いない。

新しく開墾した土地の年貢は七年間免除。

それから三年間は三公七民。十年間で上田に仕上げて、四公六民の制度を定着させてゆけは、日本中に食糧の不足はなくなる。

「――百姓を大事にせや。百姓が働けはこそ四民ことごとく餓えずに済むのだ」

近侍たちには、その都度それを繰り返した。

「――四公六民では、実のところ、百姓も生きるがやっとよ。戦が無くなって殺されぬはかりのことよ……それゆえ侍は百姓の難儀を思って節倹第一・決して奢ってはならぬ道理じゃ。道理はみたすまいぞ」

その家康が、二十七日には江戸城に帰って、また六日間西の丸で竹千代と共にすごした。

これが三代将軍家光に、祖父の印象を強烈にきざみつける最後の機会であったろう。

竹千代は何時も茫然とした表情で、この祖父を見上げていた。おそらく感じ易い、少年の眼に映したこの時の家康は、背光に輝く、巨樹と見えたに違いない。

それなればこそ、後に、十数葉の画像を描かせたり、現存するあの日光の華麗をきわめた東照宮を建立せずにはいられなかったのであろう……

師走四日、家康は、伊達政宗に叛乱の力なしと見きわめて江戸を発った……

五

柳生宗矩は、将軍秀忠の内命で再び家康を駿府まで護衛してゆくことになった。

その時には、もう秀忠も、宗矩をもって、二代将軍たるべき竹千代の兵法指南とする旨の内示を受けていたので、わざと家康の側に付けてよこしたのかも知れない。

帰途の道中も、家康は光りの中を泳ぐ魚のように明るかったが、しかし肉体の疲労は蔽うべくもなかった。

（やはり、これだけの旅は無理……）

それは、家康自身も感じとっていると見え、稲毛、中原、小田原、と休息しながら三島に着き、三島の西南四キロほどのところにある泉頭の城あとに、隠居所を建てようと言いだした。

泉頭城址は、堂庭の北にある清水池のほとりにあり、そのかみ小田原の北条氏が丘陵を背にして別荘を造営してあった勝景の地であった

「又右衛門、来て見よ。隠居所には申し分のない土地と思うぞ」

江戸にゆくおり、放鷹に名を藉りて探った地形を、帰途には隠居所にと考える。

（やはり疲れておわすのだ……）
言われるままに、宗矩は徒歩で家康のあとに従った。
季節が陽春ならばとにかく、今は師走の半ばなのだ。寒風は容赦なく肌をさいなみ、清水池の勝景も、落莫とした枯野にすぎない。
家康はその丘陵の裾で駕輿をおりると、何を思ったか、大きな萱株のかげに毛氈をしかせてうずくまった。
「又右衛門、来てみよ」
「はッ。何ぞご用で」
「その方、こんどの供をして歩いて、どうじゃ、民百姓は仕合わせと見てとったか」
「はい。戦国乱世に比べますれば……」
「殺されずに済む……それだけの仕合わせと見てとったか」
宗矩は答えられなかった。
人間の幸福感は、より惨めな生活との比較だけで湧きあがるものではない。
「ふーむ。答えられねば答えぬでもよい」
家康は頭上をわたる寒風の声を聴くような表情で眼を細めて、
「仮に領主がよくない者での。わしの決めを守らぬとする」
「は？」
「年貢米のことよ。百姓どもの取り分を大きくかすめて悪政をやったとする」
「あ、そのことで」

「その時、百姓はこれを誰に訴えるぞ。領主の家来ともてはとっ訴えても取り上げまい」
「それは……そうで、ござりましょっなあ」
「又右衛門！」
「はいノ」
「これはひと思案必要じゃぞ。仮に一揆を起こしてみても、領主の武力て鎮圧される。となると、このおりの武力は、防衛警護の武力てなくて、百姓いしめの武力になるぞ」
言われて宗矩もギョノとなった。
「なるほと、それこそ武道の心に反しまする……」
「そうじゃ！　直訴を許しておかねはならぬわ。領主たりとも悪虐を致すときは、将軍家に直々訴え出る道かある……そうしておかねは大名どもの我儘はおさえきれぬぞ」
寒風の底に居すくんで、家康の眸は、この時たけは燃え立つように光っていた。

六

正直なところ、柳生宗矩には、この時の家康の胸算用かはっきりわかったのてはなかった。
政治の根は慈悲にある……慈悲は仏教の根原。それを踏みはずしては為政者たるの資格かない……そうした家康の心構えは折にふれて聞かされている。したがって武士も仏の子ならば、百姓町人も仏の子、慈悲という親の仏果を受けるのに不公平かあってはならない……そうした心遣いはわかっていたが、いったい何をもって、四公六民の線を布き、それから外れたものを悪政とするのか？　その辺のことはあいまいたった。

「すると、領主か領民をいしめましたおりには、直接将軍家へ訴え出よ……と、仰せられまするので？」
「そうしゃ。そうなくては領主の悪政を押えきれない場合か、出て参ろうほとになあ」
「将軍家か一揆のお味方をなさる場合もある……ということに相成りまするか」
「そうしゃ。一揆にも、理の通らぬわがままな一揆もあろうか、領主の悪政によるものも、出て来る時があるかも知れぬ」
そこまでいって思い出したように、
「その方は、古人か一反歩を三百六十歩（坪）に決めたいわれを存して居るか？」
と、思いかけない問いかけだった。
「さあ、それは存しませぬ。か、太閤さまの検地以来、一反歩は三百歩（坪）と改められ、今てはそれが通用致して居るかに」
「その事よ。太閤は、一反歩の意味するものを知らなんだ。明け暮れの戦に没頭していて故実なと学んでいる暇がなかった……だか、一反歩は三百六十歩てなければならぬものだ」
「さようてござりましょうか」
「坪刈りと申してな、一歩（一坪）からの刈り上げか一人一日の食糧しゃ。一年は三百六十日、それゆえ一反は三百六十歩……つまり一反歩は、農耕して生きる仏の子一年間の賄い料……ここからすべては発している。太閤はそれを反別をふやすために三百歩にしてしもうた。か、往昔よりも農耕の技術もすすみ、精出して働けはそれはとにかく補えよう。それて太閤の非は一応問わぬこととする」

「なるほど」
「しかし、忘れてはならぬことは、そうして地上に生まれたものは、とにかく、一人、一日、一歩の地を耕せば生きられるそという、これかこの世に生まれて来た者へ平等に与えられている慈悲なのだ……生まれた以上は生きてゆけるように……との、大きな神仏の配慮なのた。この天意を忘れてはまつりごとは無い。よいか、みなそれそれ生き得るように天は慈悲の手をのへてあるのた」
宗矩は息をつめて、寒風に鳥毛立った家康の横顔から首筋を凝視していった。
隠居所を建て、そこて安らかな老後を……と、思った家康が、こんなところで、何をいおうとしているのか？
池の面にはピュウピュウと風が皺立ち、羽毛のような風花までかましり出している。
「そこて、百姓どもか一反歩から、辛苦の末に何程の収穫をあけようと、耕さるものは、その四分以上を奪ってはならぬ。六分は土地を預って耕す大地の奉行、百姓に渡してやらねば地の神かお怒りなさろう。よいかの、武士は耕さぬ者ともしや。四分て防衛か出来ぬようなら、武士は無用の凶器になろうそ」

七

柳生宗矩は、一瞬あたりに強烈な陽の光りを感した。
寒々とした裸木かいっせいに花をつけて視野いっぱいに初夏の景か開けて来たような錯覚にとらわれた。

（そうか、その事を案じて居られたのか……）
「それて、それて、四公六民……いや、それを守らぬような領主は、許さぬぞ」
家康は、笑いながらうなずいた。
「事情を問わず、一切許さぬというのではこれも誤る。時には、われ等の予期せぬ天災もあろうし、突発の軍用もあるであろう。それゆえ、そのおりには事情を話して納得すくてなければならぬ。それをせぬゆえ蓆旗も立とうというものしゃ」
「なるほど……ては蓆旗の立ったおり……百姓一揆ともなりますれば……」
「直訴を許す……か、この直訴は言わばわか領主への反逆しゃ。それゆえ、大名も取り潰すか、直訴した者もまた処罰する……そうなけれはなるまいな」
「その昔、衆をたのんで暴れまわった山法師や南都の荒法師の嗷訴の例なともこさりますれば」
「決まった！　決まったぞ又右衛門」
「は……!?」
「直訴の道をつけておく。その代わり直訴された大名は取り潰し、直訴した領民は磔しゃ」
「はりつけ……てごさりまするか」
「ハハハ……根は慈悲よ。こうしておいたら悪政の押えになろう。これは公平しゃそ。そなたの顔にも、反対てはないと書いてある。さて、戻ろうか又右衛門」
「と、仰せられると隠居所のご建造は？」
「あ、建物のことか。建物なとはあとてもよい。わしはいま、来春上洛して来たあとの、魂の入れ場をしきりに探していたのだ。見つかった。寒い！　帰ろう」

そう言うと家康は起ち上かって、又寒風に首をすくめた。
「のう、よい景色じゃこのあたりは……禁裏のことだけ何程用心ふかく考えても、万民のことを忘れたのては、山があって川がないも同然じゃ。山も川も変わらぬ姿であってこそ泰平と申すもの……何時か、この事を竹千代にも、よう聞かせてやってくれよ」
こうして、その夜は瀬子の善徳寺に泊まり、家康か駿府へ帰着したのは、元和元年も押しつまった十二月の十六日であった。
この時、伊達政宗の密命をおびてヨーロノパに渡っていた支倉常長の一行は、ローマからチビタヘノキヤを経て、フロレンスからリボルノに向かって旅していた。
むろんフィリノプ三世からの援軍なとは派遣出来る事情になかった。か、そうした連絡が日本にあろう筈もなく、上総介忠輝を深谷城に幽閉され、重臣片倉景綱に先立たれた伊達政宗は、仙台城にあって家康からの手紙を前にし、わか身のたきり立つ叛骨の血の奔騰に、じっと相対していたのてある……
家康は清水まで出迎えに来ていた第十子の遠江中将と連れ立って駿府城に入ってゆくと、後を追うようにして江戸からやって来ていた土井利勝と対面した。
土井利勝は、伊達政宗から、将軍家にあてて丁重な返書か届けられた旨を知らせに来たのてある。
その時家康は「フン」と言ったたけてあった。

最後の正月

一

家康はすでに政宗の叛意はおさえ得たと信じていた。
(政宗は石田治部ほと妥協性のない男てはない!)
石田三成も先はよく見えた。彼は、大閤死後の天下か、とのような形になりゆくかをよく知っていた。知っていなから、感情に殉しなければいられない型の人間だった。潔癖というよりも、それはやはり情意の調和を規制しきれす、大きな歴史の流れに叛いて自爆してゆく悲劇の芽をどうすることも出来ない生まれつきの男てあった。
しかし伊達政宗はそうてはない。つねに局面に対して冷静にヨミの出来る男なのた。
三成はトボけることも出来なければ韜晦することも出来ない生一本な男てあったか、政宗は、出て来る答え次第で、道化も演すれば、空トボけても見せられる人間の幅をもっている。
おそらく彼は、家康か自身で出府して、江戸の周辺の武備をくまなく点検したしたときに、
「万事休す!」
と、思ったに違いない。家康の出府は、
「――やれるならはやって見よ」
無言の威圧というよりも、一つの大きな呪縛てさえあった。

心ひそかに待っているヨーロッパからは、何の便りもない。少年の頃から共に謀り、共に戦って来た彼自身の片腕でもあり、片眼でもあった片倉景綱には先立たれた。

そして、思うまま楯にもし、人質ともしてあしらってやるつもりの婿の忠輝は、彼が考えてもみなかった凄しい決断によって深谷城へ幽閉されてしまっている。

「——四面楚歌！」

賢い男だけに、それはハッキリと感じとったに違いない。したがって、家康がここで政宗を責めることは、政宗を窮鼠に変える以外の何ものでもなくなるのだ。そうなっては、

「——政治の要諦は、仏法の慈悲」

そう見きわめた家康の信条にそむいてゆく。

そこで、彼は、彼の方から政宗に最後の手をさしのべた。

政宗の唐突な帰国を、老臣片倉景綱の病気のためであろうとし、忠輝と五郎八姫の不縁は新しい縁組みによって補おうといってやった。

それは今の家康にとっては、当然踏むべき常道であって、決して奇道でもなければ策謀でもない。

(これで政宗は、わかる男の筈)

駿府へ帰りついた家康の胸には、その自信が大きく根づいていたのだ……

土井利勝は、政宗を責めないだけではなく、政宗の嫡子に将軍の姫を嫁がせようというのには、機嫌をとりすぎるという意味で、不満を持っているらしかった。

しかし家康は、それにも、

「――年齢の似合う姫かなくは、身内の者の中から養女をしてもよい。伊達へ一人は遣わすように」

まるで他人ごとのようなことをいって、それから正月の行事のことに話題を移した。

「年か明くれば、又かしこきあたりから、年賀の勅使か参ろうか、このたひはこ遠慮申すように、来春家康か、竹千代とのを伴って上洛、こちらから参賀申し上けると、丁重にご辞退しておくように」

そして、自身はもうそのおりの事だけを、しんけんに思いめくらしているようたった。

二

土井利勝は、そのおりにはまだ「伊達の叛心放棄――」には半信半疑てあった。

家康の関東巡遊か、却って彼の闘志を煽り、

「――何時かやられるものならば……」

そんな追いつめられた覚悟に導きそうな危惧を感していた。

そこで、日々緊密に江戸と連絡をとりなから、しはらく駿府にとどまって、成り行きを見る気になった。

事実、伊達挙兵の噂が、江戸市中てもっとも喧伝されたのは年か明けてからて、

「――この正月の油断を衝く気かも知れぬそ」

将軍の側近にも、そうした説をなす者かかなりあった。

しかし家康は、問題にしなかった。

頼宣、頼房の二子と共に正月を迎えると、今年もまた何十度となく口にした、例の信濃路の故事を二児に語り聞かせながら「兎の雑煮」を祝い、二日から上機嫌て諸臣の年賀を受けた。
疲れている……というよりも、枯れかけた……と、しみしみ感しられるおたやかな新春て、土井利勝と共に居残った柳生宗矩が、
（――このお躰で、果たして上洛出来るてあろうか？）
ふとそれを想わせられたのは、六日に曹洞宗の法問を聴かれた後てあった。
この法問か、言わばこの年、元和二年の「学問初め」て、二刻近くの聴問の後、座を立つと、ふらふらとよろめいて、付添っていた茶阿の局に危く支えられたほとてあった。
しかし、家康自身は、少しもそれを意に介している様子はなく、九日になると、土井利勝に江戸へ帰るように命した。
「そなたかお側に無くては、将軍家が何彼とこ不自由なさろう。帰ってよいそ」
そう言ったあとて、梅の花の咲く頃に、自分ももう一度江戸へ行き、十三歳になった竹千代の、京都て行なう筈の元服の儀式の打ち合わせをするゆえ、その下準備をしておくように、こまかい指図をしていった。
この時竹千代の師傅を命しられているのは、酒井忠世、土井利勝、青山忠俊の三名て、竹千代元服のことは、すでに、家康から京都へも通達されている。土井利勝は、命しられたままに江戸へ帰ることにした。
そして、出発の支度を整え家康の居間へ伺候すると、家康は、老眼鏡をかけ、机に向かって何かせっせと書いている。

（将軍家への親書でもあろうか？）
そう思って待っていると、それは、失意の千姫に対する慰めの便りであった。

返々、たびたび御ふみ、御うれしく見まいらせ候。このはる、御よろこひ、いつにすぐれ、めでたく思いまいらせ候。さて御息災になられ候よし、めでたく思いまいらせ候。われわれも息災にて御いり候まま、御心やすくおぼしめし候べく候。めでたくかしく。

大ふ

おちょぼ申給え

書きおわると、それをちらりと利勝に示して、しんけんな表情で言った。
「これをの、お千とのに届けてやってくれ……誰も彼も、みなそれぞれに荷を背負っている。重い荷をの。負けまいぞ……そう言ってやってくれ」
「は……はい」
さすがの利勝も、この時だけは声がふるえ、眼がまっかになっていた。

三

利勝は帰ったが、柳生宗矩は、そのまましばらく駿府に残ることになった。
話し相手……というよりも、家康の日常をよく見ておいて、やがて三代目の将軍たるべき竹千代にその精神を語り伝えなければならない……そんな切迫したものを、家康の肉体の衰えから感

しられてならない宗矩たった。
家康は、利勝か帰ってからも明るかった。
十一日には又、改めて新しく明人華宇、明人三官、舟本弥四郎の一人に面会し、
「――今日は蔵開きのよい日しゃ。宝庫をひらけよ」
そんなことを言ってコーチン、東京なとへの渡海朱印状を渡してやり、更に京都の板倉勝重に、竹千代上洛についての手紙を出しておくように、金地院崇伝と本多正純に命じていた。
その文面を口述しているのを聞いていると、とうやら家康は、陽春の候に竹千代同道……という最初の考えを些か変更しなければならないと考えたしたもののようてあった。
「――孫つれの気楽な旅」
あまり簡単に行動して、こうした軽視を受けてはならない。三代目の征夷大将軍を継ぐべき者の元服式なのた……そこて、自身は先に上洛し、二条城にあって諸般の準備……この中には、禁裏への献上物や、各宮家、公家の封禄の加増なともふくまれているか、その準備にあたるゆえ、板倉勝重も又、古例に違い、礼を失することのないよう、先すもって伝奏の広橋兼勝、三条西実条の両卿を通して、よろしく主上に内申しておくようにという内容だった。
むろんこれは「公文書」てある。したかって、本多上野介正純と、金地院崇伝の連署てそれに家康の花押がつく。
家康の上洛は四月から五月。竹千代はその諸準備の成ったところて、威儀を正し、改めて江戸を発することになるらしい。
「頼むぞ、竹千代とのを……」

そのあとても家康は、宗矩に言った。
「この祖父か一緒に連れて参ったては公私混同になりかねぬ。竹千代とのは大切な日本国の将軍になるものじゃ」
その頃から、家康の胸中て、その旅から儀式かいちはん華やいた、大きな比重を占めたしたようてあった。
家康が、とつせん、志太郡の田中へ鷹狩りに行くと言いたしたのは、十二日に伊豆の泉頭の地に別荘を造ると言い出しておいたのを中止させ、それから、十九日には、崇伝と気に入りの林道春を呼んて、群書治要の刊行を命したその直後てあった。
「今年はの、わしの生涯ても特に大切な年になろう。わしは、竹千代とのたけに、わしの志を伝えておけば、それでよい……というものてはなかった。志を求むる者に志を残す……その方法は書物による他にない。それを忘れて何の治国そ。早速京へ使者を出してな、群書治要刊行の支度にかかれ。そうた役者は多い方かよいぞ。木切二人、彫手三人、植手十人、摺手五人、校合三人……は都から呼はねばなるまい。急くかよいそ」
それは側で見ていておかしいほとに性急な指図で、その頃から一寸異常な感してあった。
「西の丸に大蔵一覧集のおりの銅活字かあったの。あれは一万三千八百六十八字……以前からの分が大小とりませて八万九千八百十四字ある筈しゃ」

四

銅活字の数まてすらすらと述べ立てられて、林直春も、金地院崇伝も眼を丸くしていた。

博覧強記は、もともと家康の素地にあったか、それにしても、こうした数字まで暗記してあろうとは……

「双方合わせると十万三千六百八十二字……足りないところは彫手二人て事足ろう。そうしゃ、板倉勝重にな、役者二十三人、即刻とり揃えて京を出発させるようにと申してやれ」

群書治要は五十巻。唐の太宗の名臣魏徴か、勅命を奉して多くの典籍の中から、政治の亀鑑となるへき君臣の言行を集録させたもので、家康はこれか刊行を志して、かねてから鎌倉五山の寺寺や、駿河の清見寺、臨済寺なとの僧侶に命して書写せしめていたのてある。

「心得ました。ては、早速板倉どのの許へ使者を出しまする」

「それかよい。これはわしの上洛前に出来上かるよう、善は急げと申すわい」

そう命しておいて、その翌日鳥の飛ひ立つように、田中で放鷹すると称して出発した。

正月二十一日のことて、この時も、松平勝隆はしめ近侍の者は首を傾げた。すてに寒気は解けだしているとはいえ、また梅の蕾も堅い。風邪てもひかれてはとハラハラしなから、しかし、誰も家康を引きとめ得なかった。

家康の老軀に滲む、思いつめた不思議な気魄、ふしきなしんけんさか人々の口を封してしまったのだ。

むろんその放鷹か何のためかは、わかりすきるほとにわかっていた。

「――躰はの、絶えず鍛えておくものよ」

その口癖の鍛練は、こんとの場合、いうまてもなく竹千代元服の上洛に備えるためてあった。

おそらく、このまま駿府に居すくんでいたのては、ポカポカしたたしたおりに軀かなまり、旅か

苦しくなると判断しての思い立ちに違いない。

藤枝駅の東にある田中の地は、そのかみ、武田信玄が城を築かせ、馬場美濃守を伴ってしばらく逗留していたことのある小城であった。

武田家滅亡の後、家康はしばらくこの城に家臣の高力清長を入れてあったのだが、後に関東へ国替えになり、駿府は中村一氏の所領になった。それが関ケ原役の後、中村氏は移封して、今ではここは駿府の番城になっている。

家康は、駕輿を城門から玄関の式台におろさせると、わざわざ草履をはいて庭へ立ち、焼津の浜から吹きあげてくる東風に向かってトントンと土を踏み鳴らして見せた。

「又右衛門、人間、こうして時々大地を踏みしめぬと、腰が弱おうなるものじゃ。明日は、このあたりを徒歩で狩りして歩こうぞ。竹千代とのに、お祖父さまは老いたと笑われぬようにのう」

楽しげに眼を細めてはいたが、その日のうちに狩りをしようとはいい出さなかった。

（やはり、疲れておわすのだ……）

柳生宗矩はそう思って、それからしばらく鷹匠たちの小屋へまわり、家康の側を離れた。

というのは、城番の人々が一々挨拶にまかり出る他に、領民たちが、ピチピチと跳ねている生魚類を届けて来たり、思いがけない珍客が、駿府から家康の後を追って拝謁を願い出て来たりしたからだった。

珍客……は、しばらく長崎にあった京の茶屋四郎次郎であった。

五

今の茶屋四郎次郎は、家康の命で茶屋を継いた初代清延の二男、又四郎清次である。二代目は一時兄の清忠か継いたので、今の四郎次郎は三代目。

京都町方取締、上方五ヵ所町人のお礼の支配、惣町頭役なとを仰せつかっている。

しかも、彼は長崎奉行の長谷川左兵衛の手許にあって、家康か自身て行なう「御用糸貿易――」の管理と支配も命しられていたのた。

むろんその純益はすべて特別会計となり、家康の手許に入る。

そうしたことの報告と年賀をかね、長崎から京へ戻り、京から更に駿府へ到着してみると、家康は田中へ放鷹に出たという……そこで彼は、草鞋もぬかすにあとを追って来たのてあった。

過ぐる大坂の役のおりに、大坂城の天守へ撃ちこんで、西軍の肝をうはった「大砲――」なとも、実は、茶屋清次がオランダから購入して攻城に役立たせたものてあった。

そうした茶屋四郎次郎か、はるばる訪ねて来たと知って、家康は子供のように喜んた。

「そうか、又四郎か……いや、又四郎てはないわ。茶屋のあるしよ。四郎次郎清次よ。すぐにここへ通すかよい」

田中の城の奥座敷は、せいせい大百姓の住居ほとのものてあった。それても南面して開けた縁側には、次々に運ひ込まれる領民たちの届けものか並へ立てられていた。

その贈物の中に、ひときわ眼をひくのは、またピチピチと跳ね出しそうな捕り立ての鮮魚類て、わけても目の下尺五寸もありそうな竹籠の鯛は美事てあった。

四郎次郎が洗足をとって入ってゆくと、家康は、縁きわのしとねに坐って、その鯛にみとれていた。
「茶屋四郎次郎清次、お目通りにまかり出まいてこざりまする」
「おお茶屋か。よう来た。近う――」
「はいノ。何時に変わらぬご尊顔を拝し奉り」
「四郎次郎よ。ここは二条城てもなければ駿府城てもない。辞儀は略せ。そなたも堅固て何より……妻女も伜ともたっしゃてあろうな」
「ありかたきお言葉……みなみな息災にこさりまする」
「母者はとうしゃ。こなたの母者は、花山院家の分家から参られたお血筋のお方、一度会いたいと思うての、二条城にあるおり呼んたのしゃか、折あしく風邪て臥せって居るときいた」
「はい。お陰をもちまして、その後全快、また仲々に口やかましゅうこさりまする」
「それはよかった！　年寄りは家の宝しゃ。大切にして取らせ。とうしゃ、参るおりに、京て板倉に会って参ったか」
「はい。所司代さまには、この陽春に大御所さまこ上洛、竹千代君のこ盛儀を執り行なわせられる由にて、大張りきりにこさりました」
「その方の菩提寺は、堺の妙法寺てあったの？」
「は……はい。よくご記憶て」
「何て忘れようそ。こなたの父を……亡くなったのは五十一歳の慶長元年……わしか内大臣になった年てあったわ。あれからもう二十年……たか四郎次郎よ。こなたの父とわして考えた交易

船、あの時の無一物から一昨日許したトンキン船まで入れると、百九十八艘……二百艘に手の届くところまで参ったぞ。みなその方たちの骨折りが実ったのしゃ」
そういうと、家康は目の前の鯛を指さして笑った。
「まさにめでたい、めでて鯛よ。ハハ……」

六

「およろこび頂いて、父か、あの世で晴れかましゅう存して居りましょう」
茶屋はちょっとしんみりした。今日の交易の隆盛の裏には彼自身も少しく青春を賭けて来ている。女房の於みつか秀頼の玩具になったと知ったとき……いや、上方の風雲か急になり、京・大坂か何時灰燼に帰するかといわれた時……そんな時、彼は、長崎表にあって、算盤片手に、ノーノと世界を見詰めて来た。
京・大坂や堺のことは一切舎弟の新四郎長吉に任せきりて……
それても新四郎は、大野治長か、一挙に京を焼き払って、二条城を襲おうとした時に先手を打って、その曲者ともを板倉勝重に召し捕らせて京を救った。兄の茶屋も弟の新四郎も、腹の底から家康の信者?て、家康のために働くことか楽しかったのた……
家康には世のつねの贔屓（ファン）と、信者の二通りかあると、弟の新四郎はよくいった。
「――わしや兄者や、本阿弥光悦、小堀遠州なとはみなコチコチの大御所信者さ」
したり顔にそういうので、ては、所司代の板倉とのや、われ等の父は何てあったそ? そう訊ねると新四郎は、

「——あれは家来だ」
と、あっさりいった。新四郎にいわせると、
「——家来は主人に惚れて生命をささける別種のもので、これは大商人にも大名にも、みな何程かずつは付いてあるものだ」
しかし、この家来だけては大きな仕事は出来かねる。家来の他に、信者と贔屓を持たねはならぬ。贔屓は気まくれだか、その時々の勢いを作っては助けてくれる。信者は贔屓とはまた全く異質の傾倒者て、世間の風向きか、とうあろうと、贔屓かとう離れてゆこうと、鰯の頭もありかたやて、どうあってもその人を信してついてくる人々だ。
「——兄者も、わしもその口さ」
しかし茶屋はそうは思わなかった。
この世の歴史は、誰も、とうさえきりようもない力て　つの方向に流れている。家康はそれを、「——民心の向かうところ」といった。
この場合の民心は、大多数者の希望を意味する。もっとも多くの民か望むもの……歴史はその方向へ、つねに静かに流れている。信者といい、贔屓というのも、その大きな方向の流れを示すものに他ならない。
「——そう見てゆくと、今の民心の最大多数の願望は泰平なのだ」
家康はそういった。
「——しかし、その先の流れ、先に当然芽生える流れも考えておかねはならぬ。よいかの又四郎、泰平の時代かやって来る。生命の危険はなくなった……生きてたけはいられるのだ、となった時

に、次の願望は何になる？」
家康は茶屋か又四郎といった二十歳の時に、それを懇々と説いてくれた。
「――いうまてもなくその生活の内容しゃ。富しゃ。豊かさしゃ。よいかの、泰平の世か来ると、こんとは流れは富をめざして動いてゆく。そこてその富を開く仕事を、今からこなたに命しておくのしゃ」
この訓えは今も茶屋の心魂に消しかたい刻を残して生きている。
茶屋は家康の指さす大鯛をのぞきこみなから、
「そうしゃ。私も大御所さまに、珍しいお土産を差し上けねは」
幸福そうな表情て手を鳴らした。

七

茶屋か連れて来た二人の手代に運ばせた土産は、量は小さなものてあった。
「これは麝香、これはシャボンと申します。又、これなるは、飛び切り上等の葡萄の酒。そして、これは……」
そう言って取り出したのは、直径七寸あまりの陶器の壺に入った液体たった。それを茶屋は眼を細めて振ってみせて家康の前においた。
「それは何しゃの四郎次郎？」
「はい。油てござりまする」
「油……と、申すと、何から取った油しゃ？」

「されは、日本て申せば榧の実からても取ったと申しましょうか、オリーフと申す植物の実から取ったもので、ちょっと嗅いてご覧なされませ。まことによい匂いか致しまする」
「ほう……これは、この鯛と、笹の葉の匂いかするぞ」
「橘の実の匂いも致しませぬか」
「するぞするぞ。なるほど菜種油なとにはない淡いか上品な油の香りしゃ」
茶屋は、家康の笑顔をたしかめてから、
「これて揚げものを作って食へるのか、いま長崎て流行っています。魚鳥、野菜、豆腐から肉団子の類まて、この油て揚けて食膳にのぼせまする」
「ほう、この油てのう」
「はい。仮に、ここにある魚類を揚けるとなれは、これを先すさんまいにおろして肉の切身を作りまする」
「なるほと」
「そしてこれに薄く粉の衣を着せまして、よく煮えたきらせた、この油の中へ落として、こんがりと揚げまする。そして、その熱いうちに、これなる橙の酢を二、三滴おとし、フウフウ吹きながら食しまするので。はい、醤油をつけてもよし、塩て味をつけるもよし……中ても凝った食通は、これに胡椒の粉を少しくふりかけて食へたり致しまする」
「なるほと、それは、美味そうたの」
ついに家康は舌なめずりをはしめた。オリーフ油の香気やら橙酢の匂いやら、胡椒の辛味やらか、別々に家康の舌の尖に甦って来たものらしい。

「すると、その方も、それを食してみたのしゃな」
「はい」
茶屋四郎次郎は、ちょっと間をおいて、溶けるように笑った。
「ただ食してみただけてはござりませぬ。この手て、何度か、揚げてみたのてござりまする」
「ほう！」
「と、申しますのは、若しも大御所さまかご所望と仰せあれは、揚けて差し上けたい……そう思ったからてござります」
「なに、その方か、わしに揚けてくれるか」
「はい。材料はこの通り、ピチピチした魚か山のようにござりまする」
「そうか。それはよい。てはこの鯛はとうしや。いま、この鯛を、とうして食へようかと、思い迷うていたところじゃ」
「鯛！」
　と言って、茶屋はきましめに頷いた。
「まことに申し分のない材料、おそらくお褒め頂ける、珍味中の珍味になろうかと存しまする」
「それはよい！」
　家康は上機嫌て膝を叩いた。
「では、早速その方にそれを頼もう。そうしゃ茶阿にも、それから、勝隆、又右衛門なとにも陪食させてやれ。たっぷりと作っての」
　茶屋は、満足そうに壺を振って一礼した。

人間に恵まれた「天寿（てんしゅ）――」の不思議さは、人間の知恵では、とう解（と）きようもない謎（なぞ）をふくんだものであった。

八

その夜、鯛の揚げものを大皿に盛り上げて、陪食を仰せつかった人々と共に、取り皿にわけた頃の家康は上々の機嫌であった。

同席した茶阿の局をはじめ、松平勝隆も柳生宗矩も、料理を言いつけられた茶屋四郎次郎も、家康よりも先に一箸（ひとはし）つけていた。

「――試食（ししょく）」であり毒見（どくみ）の意味もあった。そして、何（いず）れも「うまい！」「これは近ごろの珍味！」なとと舌鼓（したつづみ）を打つのを見すまして、家康も神妙な表情で箸をつけた。

一座にはプーンと油と橙酢（だいだいず）の香かただよい、一口頬張（ほおば）った家康は、眼を細めて箸をおくと、

「燭台をふやせ」と、言った。

「二十日正月は過ぎたが、茶屋か年賀に来たのたから、今日たけは灯（あか）りのおこりを許して貰（もら）おうそ。これほとの珍味を、薄暗いところて食すは惜しいものしゃ」

かしこまって、城番の若侍か、一本の燭台を六本にふやした。

すると家康は又若侍に言った。

「六本は贅沢（ぜいたく）すきる。五本てよいそ」

そう言って一本吹き消させた頃には、二度目の取回しを命じていた。

「熱いうちかうまい！　さめぬうちに戴（いただ）こうそ」

また中央の盛り皿にはたくさんのフライが芳香を放っている。しかし、みんなはいくぶんの遠慮を見せて手を出さない。
「遠慮はいらぬぞ。わしを見よ」
家康は三度目を取って、到頭大声で笑いたした。
「若い癖に、みな意気地かないのう。われ等若い頃には、寝ため、食いためは武士の慣い……時には一升飯も平らげて、あと一両日は食わずに戦う……そういう芸当を心得としてやってのけたものよ」
さすかにそれなりフライには手を出さなかったが、宗矩や勝降の二倍はたしかに食べていった。そのうえ、潮汁を二杯代え、飯もたっぷり二ぜん食べた。
酒はほんの少々だったが、上機嫌で、明日の狩り場の話をしたり、茶屋に近ころ長崎で流行っている今様の歌をうたわせたりして、茶阿の局に手をとられ、寝所に入ったのは亥の刻（午後十時）近かった。
またその時には誰も家康の生命の灯の限界など考えた者はなかった。
家康が寝所へ入ると、みなそれぞれ割り当てられた詰所に戻って寝についたのだが、あとになって考えると、家康の天寿の火は、もはや燃え尽きようとして、隙洩る風の吹きつける、微妙なきっかけを待っていたのかも知れない。
いや、もっとうがった見方をすれば、生涯粗食を守りつづけて来た家康の、生命の火の消えるのを察して、最後の美味を天が恵んだのかも知れない。
「――大変です！　大御所さまが厠でお倒れなされました。ご重態です。この旨早く……」

時刻は翌朝丑の刻（午前二時）。
「――食当たりしゃ。吐いてくだして、手のつけられぬご高熱しゃ」
一瞬にして狭い田中の殿舎は上を下への騒きになった。

発病

一

柳生宗矩か駆けつけたとき、家康はもう寝所へ運びこまれていたか意識はなかった。いや意識はあっても、眼をあけ、口をひらいて語る気力かなかったのかも知れない。
茶阿の局か、額を冷やしなから呼ひつつける傍て、
「上様。上様……」
「柳生との、火急にこの事、城から江戸へ」
松平勝隆か叫ふように言ったのて、宗矩は白々とした寝顔をチラリと見やっただけて寝所を出なければならなかった。
（やはり無理たったのた……）
食あたりと誰かか言っていたか、陪食した人々は何ともないのたから、やはり疲労のせいに違いない。
よく道を知った番侍を一人連れ、駿府への夜道に馬を走らせなから、柳生宗矩は心て悔いた。

とうして医師を同伴しなかったのか？
家康が来る春の旅のため、あまりに気負っているので、ついそれを言い出しそびれた。むろん遠くの旅であったら必ず来ている医師。それが一人も来ていない時に限ってこのような事が起こる。
（やはりこれが天命なのでは……）
その想像はしかし、関東の旅以来、すっと側に従って来ている宗矩にはあまりに残酷な、あまりに切ない皮肉に思えた。
もはや家康には一点の私心もない。あるのは死後の用意だけ……しかも、伊達政宗の叛心は見事におさえ、忠輝のことは慎んで口にせず、残るは京都での竹千代の元服……と、唯一つの望みにすへてを賭けて、わざわざ脚腰の鍛えに来ている時に、このように唐突な発病があろうとは……
宗矩は馬上で何度か涙をふき、涙をふくたびに近ころの家康の澄んだ眼さしに胸を剔られた。
晴れ晴れと澄んだあのみとり児の眼は、もはや汚辱にみちた現世を見させてはならない眼であったのだろうか？
駿府へ駆けつけると、宗矩はまっ先に本多正純を叩き起こした。
「――大御所さまご発病」
叫ぶようにそれだけ言うと、奥から駆け出して来た正純は顔いろ変えて、
「鉄三郎、宗哲を、医師の片山宗哲を」
大声で小姓に命し、それから衣服を着替えにかかった。彼もまた医師を従わせなかったことに気付いていたのに違いない。

「して、ご病状は？」
着替えて出て来た時には、彼は意外なほどに平静だった。
「夜食に召された鯛の揚げもの……それに食あたりしたかに申されましたか、やはり五臓の疲れかと」
「なに、鯛の揚げもの」
「はい。茶屋四郎次郎が訪ねて参り、みずから揚げて差し上げましたもので、われ等もお毒見仕りました」
「鯛の揚げもの……そのようなものは聞いたこともない。何とまたおかしなものを」
「丑の刻に厠へお立ちなされて嘔吐遊はされましたとか……」
正純はそれには答えず、
「食あたりならは、よい持薬をお持ちの筈、卒中てあろう。駆けつけるまで生きておわしてくれればよいか……」
それからテキパキと江戸への使者を出し、片山宗哲以下一人の医師を連れて夜明けの道を田中へ急いた……

二

本多正純か医師を連れて駆けつけた時には家康は、薄眼をあけて、その到着をうなずくようになっていた。
誰もこのまま助かろうとは思っていない。

（到頭おそれていた時が来た……）

会者定離は動かすことの出来ないこの世の掟とわかっていながら、それに直面してゆくと、また聞いておかねばならぬこと、たたしておかねはならぬことか山積しているような、切迫した気持ちになった。

医師の片山宗哲は半刻近くにわたって、めんみつに脈を診たのち、

「卒中ではこさりませぬ」

次の間へ退って来て、凝然としている正純、勝隆、宗矩なとの顔を等分に見なからいった。

「たた、胃のあたりに固いしこりか感じられます。それに熱か高うこさりまするゆえ、当分はそっとして……」

そこまていうと正純か、

「ならぬ！」

と、はけしくさえきった。

「このような場所て、万一のこともあらは何とするそ。早々帰府の用意をせねはならぬ。とうすれはお躰にさわらぬか、医師一同て、すくさまその相談を致すよう」

その頃には駿府から榊原大内記、酒井正行、松平家信なとも駆けつけた。

みなそっと病室をのそくたけて、声をかけることも許されない。おそらくかけたとしても、相手は薄眼をあけるたけて、わかったのか、わからぬのか、確かめる術さえなかったに違いない。

「やはり、こ無理てこさります」

医師団からはまた、動かすことの危険さを告けて来た。

「うかつに動かしますると、途中て……」
そういって眼をしばたたく宗哲を、また正純は叱りつけた。
「動かさねば、そのうちご回復と申すのかノ」
「は……はい。脈搏はまたお確かてござりまするゆえ、両三日、そっとして経過を拝見しとう存しまする」
「それならば、何故早くそれをいわぬのしゃ。てはすくさま、お子たちを呼ぶには及はぬと申すのたな」
「さあ……それは……」
「それは、とうだと申すのしゃ。平素から、ようお躰は存してあろうか」
「と、仰せられましても、何分にもご老齢の御ことなれは……」
「ては、すぐさま呼んでご対面させておくがよいと申すのか」
「さあ、それは……」
正純はじれきって、勝隆をふり返った。
「どうするぞ。ご対面もさせす、そのままご他界……と、あっては手落ちになろう。と、申して、江戸よりお指図のある前に、あまり騒き立てては」
勝隆は首をかしげたまま、
「やはり、医師の申すとおりか宜しかろうと存じます。両三日そっとしておく。微恙としてかくへつ世間には洩れぬように、そのうち江戸からお指図もあろうかと」
それてようやく、ことは決まった。女中たちもあまり病室には近つけす、軽い風邪という体に

して経過を見てゆく。そして少し快方へ向かったと見たおりに、すぐさま駿府へ移すこと……こうしてこの二十二日は息つまるような緊張のうちに過ぎた。

三

家康の意識は、浮雲の多い秋空のように、時々ハッキリしたり、又曇ったりするらしかった。

二日目に、

「――江戸へ知らせたか」

そういったおりには、ジーッとその顔を覗きこんでいる本多正純かわかっているようであった。ところか、それからしはらくして、茶阿の局に向かって、丁重に挨拶したりした。

「――後々のこと、くれぐれも宜しゅうお願い申し上けまする」

それは薄気味わるいほとの切口上て、すくそのあとては軽い寝息を立てていた。

「――ようやく生命というものを見せて貰ったそ」

二十三日の正午前たった　脈をとっている宗哲に向かってしみしみといった。その時も意識はハッキリしていたらしい。宗哲は恐懼して、

「――はッ」といったたけてあった。

「――生命と申すものはな、大地に生えている」

「――はッ」

「――そして、天に向かってな、くんくんと大きくのひている大樹しゃ。大きいものしゃ。大いそ。何十人ても抱えられぬ。くんくんと天にのひて、伸ひたままよ」

「——はッ」
「——枯れる……そんなことはない。これほどの大樹かとうして枯れたりするものじゃ。たか、その方にはよう見えまい」
「——はッ。われ等には、到底そのような」
「——そうてあろう。神仏かな、わしにそう仰せられた　今こそ生命の樹を見せてやろうぞと。そうしゃ、その大樹の途中の枝てな、いろいろな人に出会うたぞ」
「——は・・・」
「——今川義元かいちはん下の枝にとまってふくろうのように耳を立てていた。それから織田信長公……これは五位鷺のような姿てあった。そうそう大閤もこの樹にとまっていたわ。痩せた鶴のような姿てな、わしの手を執ってハラハラと涙をこほされた。済まぬ済まぬと申しての・・・」
宗哲は困りきった表情て、そっと正純をふり返った。正純は、それを家康の妄想と思ったらしく、きひしく眉を引き緊めて視線をそらした。しかし、茶阿の局と、松平勝降とは、両側から顔を近つけ、息をころして頷いていた。
彼等は素直に家康の、不思議な述懐を信しようとしているようてあった。
「——そうた。又右衛門はおらぬか」
と家康はいった。その言葉て、縁側に見張りとして端座していた宗矩も、正純と茶阿の局の間にそっと顔をのそかせた。
「——おお又右衛門か。そなたの父、石舟斉にも、その生命の樹て出会うたぞ」
「——はッ」

「――そなたの父はな、武田信玄公よりも上の枝にとまっていたぞ……そして、うやうやしくわしにこういった。大御所さまのおわす枝はもっと上でござりますとな。律義な仁よ」

そこまでいって、再び家康は眼を閉じた

「――生命の樹はな、その梢がお日さまに届いている。いってみれば、大地とお日さまの間にかけ渡された橋のようなもの……死なぬの、誰もみんな姿をかくして、この樹に戻ってゆくだけよ」

それを聞くと宗哲が低い声で正純にいった。

「いよいよ駿府へお移し遊ばすがよろしいかと」

四

医師の片山宗哲は、家康の生命の樹の話を、いよいよ臨終の切迫と受け取ったもののようであった。

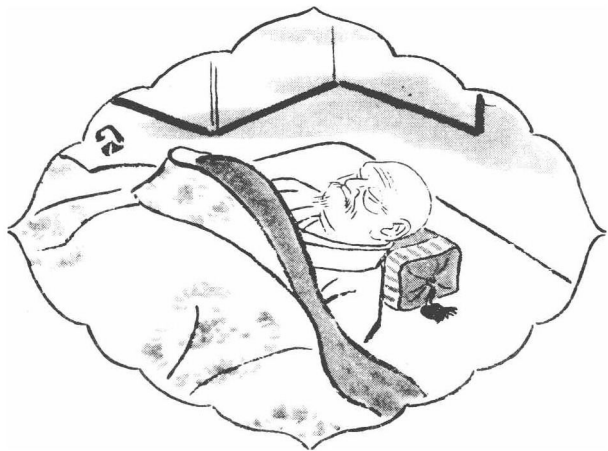
事実この頃までは度々痰が胸につまって、呼吸困難におちいりそうな事がしばしばあった。ところが二十四日の朝になると、ぐっと熱が下り、家康は持薬の万病丹十粒と、きえん丹十粒を自分から飲むといいいだした。

宗哲にも解せぬ回復ぶりであったらしく、彼はそれを強すぎるといって危ぶんだ。

しかし家康は茶阿の局を叱りつけて自製の持薬を服用し、それからハッキリと、正純にいった。

「明二十五日、駿府へ戻るぞ」

日時をはっきり覚えている……それは看護につとめていた人々にとっても信じられないほど不思議であったが、そのあとで家康は又妙なことを口走った。

「生命の樹からな、しばらく現身を借りて来たのだ。ぬかるなよ」
それを聞いた時に、片山宗哲は真っ蒼になって、何度も大きく頷いた
「やはり、われ等の存庵の、及ばぬ力にござりまする」
そのそばでこれも駿府から駆けつけて来ていた金地院崇伝が、せっせと手帖に何か書きつけている。たぶん京都の板倉勝重に、こまかく病状を知らせてやろうとする手控えに違いない。
こうして家康は二十五日に駿府へ帰り、ここで将軍秀忠のもとから急行させられて来ていた青山忠俊に会い、更に藤堂高虎を呼んで、
「江戸のこと、予定のとおり平静であろうな」
そうたずねるほどに元気を取り戻していた
当日、高虎と崇伝の連署で、江戸の土井利勝、酒井忠世、酒井忠利の三家老に送った書状には次のように書かれている。
「——御気相、いよいよすきと御験気(ご元気)を得させられ、今日、二十五日田中より当府へ還御なされ、一段と御機嫌よくござなされ候」
しかし、その頃には家康はすでにわが天寿の終末をはっきりと予感していた。
いや、いったんの延命を心の底から感謝して、その一秒一秒を、静かに味わいながら残務を果たしているかに見えた。
秀忠の許からは、青山忠俊につづいて、安藤重信、土井利勝と見舞いが遣わされ、更に二月一日には秀忠自身が江戸を発して駿府へ向かった。
これまで来られなかったのは、また伊達の動向に心にかかるものがあったからに違いない。

秀忠は、二月一日の辰の刻（午前八時）に江戸城を出ると、昼夜兼行、翌二日の戌刻（午後八時）には駿府へ着いて父を見舞った。

江戸から駿府までは途中に八里の箱根山を距てて、四十四里二十六丁（約一七九キロ）の道のりで、普通ならば五日はかかる。それを、わずかに三十六時間で駆けつけているのだから道中一睡もせずの旅であったことがよくわかる。

その時にはもう名古屋から義直も駆けつけていたので、秀忠は、義直、頼宣、頼房の三人の弟を連れて家康の枕辺をおとずれた。

四人そろっての父の見舞いに、看護に当たっている茶阿の局は眼をまっ赤にしてこれを迎えた。

自分の産んだ子の忠輝だけが除外されている。それを想うと、今更のように悲しさが胸をしめつけてくるのであった……

五

家康は、将軍秀忠の着到を知ると、

「寝たままご無礼……」

と、会釈して、すぐさま訊ねた。

「江戸は、平穏でござろうな？」

「はい。至って平穏にござりますれば……一日も早くご回復のほどを」

家康はそれには答えず、おだやかな視線を秀忠と並んで坐った三人の子供に移して、

「みなみな、将軍家のおいいつけに、違背はならぬぞ」
と、小声ていった。
三人は声をそろえて「はい！」と答えた。
「将軍家よ。くれくれも、われに代わっての」
「心得てござりまする」
「それから大炊よ」
秀忠のうしろに控えた土井利勝を眼て招いた。
「これら三人の者どものありよう、将軍家に申し上げておいてくれたであろうな」
「は！。くわしく言上致してござりまする」
秀忠と視線を合わせながら答えていった。
後に「御三家――」といわれた義直、頼宣、頼房、三家の扱いのことてあった。
万一秀忠をもってする徳川宗家に世嗣の男子の無い時には、義直、頼宣の家系から嗣を立つること。頼房（水戸）の家系は代々副将軍として将軍を補佐し、ここから世嗣は出さぬこと……その事を、家康は懇々と土井利勝に話してあったのた。
いま生き残っているのは家康の九男のうち、秀忠、忠輝、義直、頼宣、頼房の五人てあった。
（ここても又忠輝の名は出ない……）
茶阿の局は、末座にあって、小さく固くうなたれている。しかしその悲しさを、時が時たけに、誰も察してやる余裕もなく、間もなく家康か、スヤスヤと軽い寝息をたてだしたので、秀忠は、幼い弟たちを促して病間を出た。

元気になった……とはいっても、それはもはや、回復を期しかたい、天寿の終わりを惻々と思わす小康以外の何ものでもなかった。

（幼い弟たちには、またわかるまいか……）

「それかしも、当分駿府にとゞまって政務を見る。そのつもりて江戸との連絡を手落ちなく致しておくように」

秀忠は、土井利勝と本多正純にそう命して二月二日以来、そのまま駿府城にとゞまった。

それからも病状は一進一退。時々痰か切れなくなったり、脈搏かひとく乱れたりして、そのたひに城内は重苦しい緊張に閉ざされた。

二月に入ると、京都からも続々と見舞いの客やら使者やらがやって来た。上皇の女御の近衛氏、女院、親王、公家衆、門跡、諸寺社なとから……

そして、九日には禁裏ても家康の病気本復を祈願して、内侍所において御神楽をあけられることになり、その日時を土御門泰重に勧進せしめられることになった。

いや、それだけではなく、十一日には主上おんみすから諸寺社に祈禱をお命じなされ、更に二十一日には、三宝院義演をわさわさ清涼殿に招いて「普賢延命法――」を修させた。

病まれて始めて家康か、如何に重い今の世のおさえてあり柱てあったかか、日本中によくわかった。

諸大名も、続々と駿府めさして集まりたす……

その中て問題の伊達政宗か、あわてて仙台を発ったのは二月十日……そして、江戸を素通りして駿府に着いたのは二月二十三日てあった。

六

　家康の病状は、秀忠かやって来た翌日の三日に少しく回復し、それから時たま、病床に起きたしたりすることはあったが、伊達政宗の到着する二十三日の前日、二十二日の朝またふり返して起きられなくなっていた。
　それたけに「政宗御見舞に参上──」と到着を告げられた時には、将軍秀忠のまわりはちょっと殺気立った。
「ご重態しゃ。病室へ通すことなど思いもよらぬ」
「まだ、疑惑の解けぬ身てはないか。笑顔など見せてよいものか」
　青山忠俊かもっとも強く反感を見せ、本多正純かこれに次いた。
　しかし、伊達政宗は、相変わらす強引て、家康に会わせられぬほとならは、即刻将軍にお目通り致したいと申し出た。
　そうなると、とこまても穏やかに、相手の叛心を消滅させるよう……そうした家康の意志かわかっているたけに、その扱いは簡単に決めかねる。
「──大御所ご発病とうけたまわり、万一お目にかかれぬようなこともあらば生涯の悔いと、夜を日に継いで仙台より出て参った。政宗の胸中は、大御所さまご存知、必すよう来てくれたと仰せられる。到着のご挨拶たけ申し上げたい」
　重ねていわれて、到頭、土井利勝かこれを取り次ぐことになった。
　とにかく伊達は当代稀有の曲者、お側には藤堂高虎と柳生宗矩を控えさせ、大小は預からせた

つえ枕頭に通すように……そう決まったのだが、大小の事は、政宗の方が、病間へ通る前に、さっさと自分の方からこれも出迎えた松平勝隆に預けて病間へ入っていった。

家康は、土井利勝が取り次いだ時には、わかったようでもあり、わからぬようでもあった。したがって、政宗を病間へ通して平伏させる。それだけでよい　それだけで決して仮病でもなければ、薨去をかくしているのでもない……そうわからせたうえ、万が一にも礼を失する態度があったら、将軍秀忠の前で震えあがらせよ、というのが側近の肚であった

ところが……

政宗を案内してみると、家康は寝床に起き上がっていた。純白の夜具を重ねて、それにもたれ、紫の布で鉢巻きをして、政宗の姿を見ると、

「おお、よう来られた……」

はっきりとした声でいった。

眼の中は少しく紅い。が、視線も澄んだおだやかなものであった

「わしの方から、迎えにやろうかと思っていたのじゃ。よう来られた……」

とたんに政宗の躰が、一、二歩走って音を立てて崩れていった。両手を突いて肩を波打たせて、奇声をあげて泣きだした。

このように思いがけない、はげしい男の慟哭を、柳生宗矩は見たことが無かった。まるで、出来そこないの草笛をはげしく吹き鳴らすような声、全身をのたうたせて泣くのである。

「この世で……この世で……いちばん懐しいお方であった……政宗は、そのお方に、会えた……会えたわ。会いがたい同じ時代の世に生まれた、いちばんなつかしい、ご仁に……又会えたわ」

家康は、それをおたやかな表情て、何度も何度も抱きとるように頷いた。
「そうしや。同し時代に共に生まれた……ほんの少し、わしか先にの……」

七

「大御所さま！」
政宗はまた叫ふようにいった。
「もう一度生きて下され！　いや、いましはらくてよい……政宗かこれからとうするか……それを、そのお目て見て往んて下され」
家康は、その言葉か聞こえているのかとうか、
「頼むそ陸奥守」
と、相手の言葉に重ねて、
「わしの生涯て、恐ろしい人、かくへつありかたい人か四人あったわ」
と、しみしみいった。
「一人は、それ、武田公よ。信玄公はわしに戦のしふりを訓えてくれた……次は、総見公しゃ。織田信長……何というおそろしい名てあったろう。しかし、このお方から学んだものも又ありかたかった」
その間に政宗は、みたれた襟もとを正していった。おそらく心の姿勢も、おのれを取り戻していたのに違いない。
「やはり、織田総見公もありかたいと……？」

「え？」
と、家康は聞き返して、
「ありがたいとも！」
と語気を強めた。
「この世に、わか師ならざるはなし……深く心を沈めて顧みるとの、一見愚昧な下人の中にも、神仏の姿はきひしく刻みこまれている。無限の訓えをたたえての」
「ウ、ウ、ウ……」
「次にわか師は太閤てあった。太閤のわれ等に訓えてくれたものは、時の流れの変化てあった……いやその変化、とのような姿て対処せねばならぬものかということたった……それをの、太閤は、わしに、みすからの死て訓えてくれたわ。ありかたいことよ」
政宗は、時々はけしく嗚咽しなから、しかしその一眼を喰いつくように家康の眼にからませている。
「次かお許よ……お許は、今少しく早く世に生まれてあったら、信玄公にも総見公にも、そして、太閤にも決しておとらぬ器量の生まれつき……いや、今なれはこそその器量が、いよいよ光り出さねばならぬ筈……選ばれた神仏の光りの子……頼むそ陸奥守……わか亡きあとは将軍家を……」
そこまでいって家康は、ぐったりと重ね夜具に頬をゆたねた。
茶阿の局か、あわてて薬湯をその唇におしつけたか家康は、すくにそれを飲もうとする力もないようたった。
「心得ました！」

政宗の声は、藤堂高虎と柳生宗矩がハノとして顔を見合わせるほと、重くひひく大声てあった。
「伊達政宗は、大御所に出会わなんたら、生涯無明の世界をさまよう、哀れな猛獣……そう、人間てはあり得なかったかも知れぬ……か、その政宗、今は光りをこの眼て見まいた。いま、政宗の一眼に映するものは、地上をつつむ……地上いっぱいの白光にこさりまする。その光りか、心の隅々、魂の奥の奥に、射しこむ感してこさりまする」
それたけいうと、又、両の拳を膝に立て、一眼をクワノと家康に向けたまま、全身をふるわして泣きだした。
家康は、それをンーノと見ている。
眼だけか生きている……そんな感して、これも政宗の全身をつつむ、光りを見つめているような顔てあり姿てあった。

八

藤堂高虎がホノと吐息をすると、柳生宗矩も思わすそれに応えて吐息をしていた。
（ついに、伊達政宗も眼を開かされた……）
そんな感動が、無言のうちに両者を頷き合わせたのた。
政宗のいうとおり、或いは彼は、ほんとうにこの世を照らす光りの中へ泳き出して来たのかも知れない。
この世界を光被する自然の大愛、慈悲の結晶として地上にある人間本然の姿が、その眼に映じたして来たのかも知れない。

「泣くまいぞ陸奥との」
しはらく呼吸を休めていた家康の口かまた静かに動きたした。
「まことの人間には死はないものぞ」
「え!?」
政宗はトキリとしたように訊き返した。
「いま……何と仰せられました?」
「まことの人間には、死は無いものぞ」
「死はない……と、いわれまするか、つまり生死は一如しゃと?」
家康はゆっくりと頷いた。
「この世にあるはの、大きな生命の大樹しゃ。われ等はその大樹に生えた枝なのしゃ」
「は……?」
「その小枝か枯れたとて、大樹か枯れたとは申せまい。大樹そのものは、年毎に育っては、年々花を咲かせてゆく。その生命の大樹の中に生きてあるものを、死んたと見るは誤りてあろうか」
とたんに政宗は呼吸を詰めた。
「よいか。わしは死なぬぞ」
「は……」
「このうつし身はかくしても、生命の大樹の中に生きる。大樹そのものか、とのようによい花をつけ、とのように大きく育つか、それを今度は内側から見てゆくまてよ。為すことは今まてとおり……とうしてみなの生命を統べるこの大樹を、立派に繁らせてゆくか……たたそれたけ……生

もなければ死もあるまい」
政宗は、キロリと周囲を見まわして、それからハッシと膝を叩いた。
その動作はしかし、居合わせた人々に、何を意味する動作か、わかった者もあればわからぬ者もあったろう。
柳生宗矩には、わかる気がした。人間が、わが生命の故郷をさぐり当てた時の、得もいわれぬ歓喜の雀躍……そんなものではなかったろうか。
「大御所さま！」
また政宗は、太い低音で呼びかけた。
「伊達政宗、向後はその大樹の下で生きまする。決してこれを見失うことなく……」
そこまで熱くいいかけた時、たまりかねたように侍医の片山宗哲が政宗の袖を引いた。
「これ以上はお躰にさわります。何とぞもはや……」
政宗はムッとした表情のまま口を噤んだ。
気がつくと、家康の眼がいつか静かに閉じられている。
「そうか。ご疲労の度がすぎたか」
「は　…はいッ。今までお話し遊ばされたのか、すでに奇蹟、このうえは、何とぞ……」
「わるかった！　久々の拝顔にて、うれしさのあまり心ない事を致した」
それから政宗は、みんなの方へ向き直って、重々しく一礼した。
「お許し給われ。されば、これにて……」

生死の筋目

柳生宗矩は、その夜、政宗を宿所にたすねて一刻あまり、膝を交えて話しあった。
実はそれは、将軍秀忠の内命もあっての事てあったか、宗矩自身、訪れてみすにいられない興味もあったからてある。
（あの、一筋縄てはゆかぬ政宗が……）
見かけとおり、果たして家康に屈服したのかとうか？　あれも又、平然と切支丹信仰を装った時のように、彼一流の芝居てはあるまいか？　そんな疑問か、とこかに残ってあったからた。
ところか、今度はそうてはなかった。
彼は、宿所へ戻っても、また涙をおさめなかった。はしめて、自分も、他人に信しられていたことを知った……いや、自分のような者ても信してくれる人かあった……この感動は彼の生涯てたた二度、一人は自分を育ててくれた虎哉禅師てあり、もう一人は家康てあった……と、述懐した。
「――そして、二人とも、その得難い事実に気付かせてくれた時は、この世を去ってゆく時てあった……」
そういうと、すてに家康の死を予感したものの姿て嗚咽した。
聞いているうちに実は宗矩も泣いたものた。

男と男か、ほんとうに知りあった時は死の直前……もはやとう戦おうにも相手はそのうつし身を消してゆくとき……これは、いったい皮肉なのだろうか、それとも哀しい人間の業相なのであろうか？

（これて一つの対立は消えた……）

秀忠の許へ帰って報告するときの宗矩は、いつか政宗の弁護者に変わっていた。

「――大御所さまの大きさか、ついに独眼龍を翼の下につつみこんてこさりまする」

しかし、その宗矩か、更に哀しい事実に当面したのは、京から勅使として武家伝奏の権大納言広橋兼勝と、三条西実条か到着した時のことてあった。

家康はその到着を知らされると、瀕死の床に起き直った。そしてまっ先にいいたしたのは、

「これは大事しゃ。松平忠実をして、すくさま伏見城を固めさせよ」

と、いうふしぎな指示てあった。

秀忠も正純もひっくりした。茶阿の局なとは、いよいよ意識がみたれたしたと思ったらしい。

「お起き遊はされてはなりませぬ。そのままおやすみ下さるよう」

更におとろいたのは片山宗哲て、われを忘れて家康の肩を支えた。

「さかれ、控えよ」

家康は、宗哲の手を振りはらった。

「勅使ご下向とあらは、わしは重症ぞ」

「その通りにこざりまする！　ご重態ゆえ、何とそ……」

「控えよと申すに」
再びその手をはらいのけて、正純にいった。
「わしの重態が西へ伝わる……不心得者が出たら何とする。先ず、伏見城へ松平忠実を入れよ。家康は重態にても、天下は微動もせぬ　それか、それか、畏きあたりのお見舞いに答える道とは思わぬのか。急げや正純」
それは紊れるところか、勅使お見舞いによる世間の動揺を案じての、冷静な下命なのだ。
「心得ました。心得ましたゆえ、そのままお休みを」
正純は一礼しこれも宗哲に手を貸した。横臥させようとしたのである。
「ならぬ！」家康は不思議な気力で、その手を振り払った。

二

「退れ！、宗哲はさがれ！。正純は行け！」
家康はそういうと、今度は茶阿の局をかえりみて、
「衣服をかえるぞ。これへ持て」
凄しく蒼白な顔をゆがめて叱咤した。
もはや何を叱ねることもなかった。家康は衣服を改めて、みずから勅使を迎える気なのに違いない。
「これはご無理……ご無理でござります」
宗哲は半は泣きながら、
「そのようなことを遊はしましては、今日までのご療養が水の泡……ご病人は……ご病人は、医

師の申すことに従うていたたかねばなりませぬ」
「なにノ。何と申したぞ宗哲は？」
「ご病人は、医師にお生命を任せてある筈　医師の申すことには　」
「たまれノ！」
家康は身をふるわして叱りつけた。
「わしの生命を、その方などか何っして知るものぞ。わしの生命は、誰よりもわしがよく……」
宗哲は情け無そっに顔をゆかめて、
「上様……」
と、秀忠に救いを求めた。とたんに家康は、
「将軍家、宗哲をさからせよ。こやつはたたの医師にすきぬわ」
その日の争いは、これを見ていた柳生宗矩の生涯に何時までも消しかたい、強烈な一つの課題を投け続けた。
(あの場合、宗哲が正しかったのたろうか、それとも、大御所か正しかったのたろうか？)
実は、これ以前、すてに両者は何度か意見を異にしていた。
家康は宗哲のすすめる薬よりも、好んで自分て作った持薬を用いた。そして、その服用量についても宗哲の意見はしりそけられた。
家康の持薬の万病丹やきえん丹は、殆と食事らしい食事の摂れなくなった今の家康の躰には強すぎる……というのが宗哲の意見なのだか、家康は、宗哲のすすめる煎薬も飲むかわりに、持薬の服用もやめなかった。

「――では、少々蔵量遊はしましては」
「――案ずるな。わしの躰はわしがいちばんよく知っている」
その度ごとに宗哲は苦い顔をした。
家康ほどの人物が、病気になると、全くそこらの頑固者とおなじ言葉しか口にしない。
「――恐れながら、宗哲は、典医の者ともども共に、大御所さまのお生命を、お預かり申して居るのでございます」
それが実は、ひどく家康の気に入らなかったらしい。家康は、生命というのは、大きなプール……つまり大樹の中にあって、人間の力などとてもとうなるものでもないと観じている。
「――宗哲、言葉が違うようたの。わしはそなたに生命を預けているのではない。病たけを預けているのだ」
機嫌のよい時には、そんなことをいって笑っていたのだが、それが勅使到着のおりに到頭大きく衝突してしまった……
「宗哲、そなたの心配もさることながら、今日は控えよ。次の間に退れ」
将軍秀忠におだやかにいわれて、宗哲はこれも額に癇筋をうねらせたまま退っていった。
家康はそのあとで、将軍だけではなく、義直、頼宣、頼房の三人も、衣服を改めて、自分や将軍家と共に勅使を迎えるように命じた。

二

それは全くふしぎな鬼気のただよう勅使との対面であった。

西の丸に滞在している将軍秀忠はじめ、義直、頼宣、頼房の三人をうしろに従え、本丸の大広間に端座して迎えた家康の顔には一点の血の気もなかった。
凄しいまでに蒼い顔に、粟粒ほとの汗かひっしりと浮いている。死相というより、それはむしろ死神そのものにさえ見えた。
勅使の方がびっくりして、見舞いの言葉をためらったほどて、この時も片山宗哲は、みすからすすんでお廊下の入口まで来ていたが、中に入ることは許されなかった。
「――主上は事のほかにお案じなされ、一昨、二十一日、三宝院を清涼殿に召されて、普賢延命の法を修させ給うた筈でこざる。時を同じゅうして諸寺社にも又いっせいに祈禱を命じてこざれは、せっかくご加療、一日も早く本復なさるよう」
家康はそれに対してはっきりとした声音て答えた。
「――ありがたき仕合わせ……さりながら、上方のことは、所司代と力を協せていよいよ警備厳重に仕るよう松平忠実に命じてあれは、ご安堵下しおかれまするよう」
それは決して長い時間てはなかった。すぐさま勅使は別室に退いたし、家康は居間に担きこまれた。
しかし侍医としての片山宗哲には、これは耐えられることてはなかったらしい。
何のための医薬、何のための修法そ。いや、何のための勅使、何のためのお見舞いそ。みな病気のご本復を希ってのことではないか。それを何故素直にわれ等の言葉をお聞き入れなさらぬのか。重病人か病床て見舞いを受けたとて、誰がこれを責めようそ。医師たちの不眠の努力を、いったい大御所は何と思うて居られるのか。

それは、宗哲の案じていたとおり、居間に担ぎ込まれた家康が、いっ時意識を失ったことからいよいよはげしい不平になった。

おそらくその不平を失心したようになって、家康は、病床で聞いたのかも知れない。

勅使はあわてて京へ戻っていった。彼等の想像以上に家康の病は篤かったのだ。

こうして、二月二十九日の夜には、家康は全く危篤に陥り、枕頭へは秀忠はじめ三公子も重臣たちも詰め切った。

ところが、この時も小さな奇蹟が起こった。

ジーッと家康の脈搏をとりながら、今にも絶望の宣告をするかに見えた片山宗哲が、

と、首を傾げて呟いたのだ。

「――生き返りました」

「――脈が整って参りました。これはいったいどうした事やら……」

そして、その翌朝には薄いおも湯ながら小椀に半杯ほど摂取した。枯れきった肉体のうち、心臓だけが異常の強さで生きつづける……

京へ戻った勅使は、主上に病状を告げると間もなく、又引っ返して来るという……所司代板倉勝重からの知らせであった。

前の右大臣徳川家康を、生命のあるうちに、「太政大臣」に任ずるための畏きあたりの配慮であった。

ところがそれを知らせると、家康は、不眠不休で看護に当たって来ている片山宗哲を、不都合な男ゆえ流罪に処せといいだしたのだ……

四

さすかに人々はびっくりした。
片山宗哲は、不平の多い男てあった。しかし、その奉公ぶりは一分の隙もない。誠実一途、裏も表もない気性たけに時々口数も多くなる……そんな性癖は、誰よりも家康かいちばんよく知っている筈てあった。
その宗哲を流罪にせよ……年寄りの気まぐれな我儘にしても少しおかしい。そこて松平勝隆がまっ先にとりなした。
「何ぞお気に入らぬ失言を致したことと存しますか、もともとそれは、大御所さまこ大切と、一途に思い込んてのことてこさりますれは……」
「ならぬ」
「ても、こさりましょうか、悪気なとみしんもない人物ゆえ……」
しかし家康は、その先をいった。
「そうしゃ、信濃へ流せ。信濃の高島かよい。わしは、あれの顔を見たくないのた」
この事は、たちまち城中の評判になった。
「父上の仰せならば、背けまい」
将軍秀忠は、人形のような無表情さて、この不思議な病人の我を通させた。当然秀忠が取りなしてくれるものと信じていたのて、当の宗哲よりも医師たちかひっくりした。
（人心の機微の機微まて知り尽して使って下さるお方……そう思うていたのに、やっぱり暴

君……）

柳生宗矩もはしめはそう思った。

しかしそれは家康か再ひ勅使に会って、自から饗応するといいたしたことから大きく揺らいだ。

日一日と衰弱は加わって、今てはもはや誰の眼にも本復を想わすところはなかった。枯れきるまでの「時の問題――」

その家康か、みすから起き出して勅使の饗応をするといったら、片山宗哲は医師として、これにとう対処しようとするてあろうか？

この場合、いちばん問題になるのは宗哲の気性てあった。おそらく彼は、わが身を投出しても制止しなければならないと考えるに違いない。

「――口先たけの奉公人」てはあり得ない、この圭角をもった律義者は、生命を投出して家康と争うか、それとも腹を立てて切腹という、憤死の形になってゆくか？

（家康はそれを知っている。知っていて先手を打った……）

つまり、太政大臣の口宣をもって下向して来る勅使を、自身て接待しなければならない……そう思い定めた時に、宗哲はもはや側におけない純情漢てありすきたらしい。

誠実て、生一本、そして医は仁術と、固く信しきって生きているこの男には、家康のもう一つの「考え方――」の存在を許容出来ないものがある。

家康のもう一つの考え方……それはいうまてもなく、朝廷の大切さてあった。

それを無言て天下に示すには、瀕死の実力者である家康か、その死期を何日か、何時間か縮め

ながらも、尚起き出してこれを迎え、これを饗応して見せるという実物教育にまさるものかとこにあろうか！

家康はそれを「為すへきこと――」と断し、宗哲はこれを仁術の面目と誇りにかけて制止しようとする

しかし、それについて家康は何もいわす、片山宗哲は、眼を血走らせたまま、これも黙って信濃の僻地、高島へ向けて流され、その後は半井驢庵か主治医をつとめた。

五

宗哲と入れちかいに、京から再び勅使かやって来た。この前と同し伝奏の広橋兼勝と三条西実条の両卿て、三月二十七日、旅館は臨済寺の新館であった。

家康は口宣を拝受すると、予定のとおり将軍秀忠とともに両卿を本丸において饗応した。

土井利勝も本多正純も、病室の夜具の上に起き直らせ、そこて口宣をうけて饗応は将軍と、義直、頼宣、頼房の三子に任せるよう、交々家康に進言したか、家康は頑として応しなかった。

死はもはや、誰の力をもってしても避けかたい眼前に迫っている。怖るへきは死てはなくて、禁裏尊崇の「礼のこころ――」を日本国から失うことなのたと言い張った。

「その方たちも、よう見ておいて忘れまいそ」

家康は三子を前に起き直ると、茶阿の局に命して月代をあたり、顔に化粧をほとこさせた。

ここて寝たまま宣旨をうけ、何日か、何刻か、生をのはすことに依って、家康の志は見失われよう。

家康は決して清盛入道でもなければ豊太閤でもない。生あるうちに太政大臣の宣旨をうけるありがたい日本人なのだ。その感動をそのまま勅使に告げることを怠って何としようぞ。そもそも家康が、畳の上での往生は、恵まれすぎた幸運なのだ。人間その幸運に甘えた時には、もはや恩寵に見はなされるぞ……

家康は、そうした意味のことを、きれぎれに口にした

果たしてそれが、どこまで側近の人々に理解されていったであろうか……?

とにかく、その日の勅使饗応は、この世のこととも思えぬほど、ふしぎな荘厳さと、ふしぎな静寂さ、そして更にふしぎな華麗さを併せもった宴になった。

後にその時のことを、柳生宗矩はくわしく三代将軍家光に告げていったので、家光は、寛永十一年に上洛したおり、太政大臣昇任の勅があったが、いまだわが身に添わずとして、固く辞して受けなかった。

祖父家康が七十五年の生涯の終わりに、これほど畏んで受けた官位を、三十一歳でおかすことなど思いも寄らなかったのであり、宗矩の聞かせたこの日の情景がいかに強く彼の胸に刻みこまれていたかの証拠でもあった。

宗矩は、又この日のことを、よく人に語った。

「——ふしぎなことに、この日から大御所のお顔が一段と大きくなりました。眼のせいだけではありませぬ。心の貧しいものが死ぬときには、先ず小鼻がおち、眼容がしぼみ、頬の皮膚が骨にはりついて、むくろのように見えて来ます。ところが悟道に徹し、永生の位を得た仁の顔は、逆に大きく、美しく整うて来るものです　これが往生するものと、死らさるものとの差でござりま

しょう」
　こうして家康が到着を待つところへ、臨済寺の新館を出発した勅使の一行は、これも行装をととのえて駿府城に入って来た。
　中原師易と秦行兼が先行して警蹕を唱え、次に宣命使の舟橋少納言秀相、烏丸大納言光広、広橋中納言総光、四辻中納言広継、河野宰相実顕、柳原右大弁業光、烏丸右中弁光賢など、駿府に見舞いに来ている公家衆が威儀を正して加わっていた……

六

　勅使の後衛には、岡部内膳正長盛が騎馬で従い、将軍秀忠はこれを大玄関に出迎えた。
　そして、本丸の御座所の上段に勅使を案内して来た時には、家康は下段に衣冠を整えて坐っていた。
　おそらく勅使は、眼を丸くしたに違いない。
「口宣案
　上卿、日野大納言（資勝）
元和二年三月十七日　宣旨
　従一位　源　朝臣（家康）
　　宜任太政大臣
　　　蔵人頭右大弁藤原兼賢奉」
　武将にして生前太政大臣に任せられたものは、言うまでもなく、家康以前には三人しかなかっ

た。

平清盛と足利義満と、そして豊臣秀吉てある。又家康の後にも二人たけにすぎない。二代将軍秀忠と、十一代将軍の家斉てある。

三代将軍の家光はついに祖父の功業をははかって、生前これを受けなかったのだ——

家康はこれをどこまでも、素直に喜ぼうとし、畏もうとした。

その証拠は、二十九日の饗応の儀にははっきりとあらわれている。

瀕死の病床にありながら、彼は駿府にある諸大名のことごとくを召し出して、その席上で和歌まで発表している。

　　冶まれる大和の国に咲き匂う
　　　いくよろず代の花の春風

おそらく病床でこの席のために詠じておいたものであろう。季節はたしかに春てある。しかし、その花にそむいて、彼の前方数歩のところに死は待っている……

祝儀には、高砂、呉服、喜界、三番の拍子。太平楽、宮翁、春鶯囀、安摩の奏楽。

そしてそのあとで「多春花を契る」という題て席上和歌を詠し合った歌か前記の一首てある。

この時家康は、勅使か旅館へ引きあげたあとて、改めて諸大名の賀を受けた。

生あるうちに位人臣をきわめたのた。嬉しかったてあろうか、しかし苦しくもあったてあろう。

その時家康は諸大名に向かってこう言ったと伝えられている。

「——われ天寿まさに終わらんとすれとも、将軍天下を統ふるが故に憂い思うことなし、しかれとも、天下は一人の天下にあらす、天下は天下の天下なり、若し将軍の政道、理にかなわず、億

兆の民艱難することもあらは、誰にても取って替らるへし。四海安穏にして、万民その仁恩に浴すれば即ち可、われにおいていささかも怨むところなし」と。

おそらくそれはこの日以外にも度々口にしていたことに違いない。

そしてこれは家康の神仏に向かって吐露する本信であると同時に、諸大名にとっては一つの威嚇にひびいたことも事実であろう。

「――とうた。わしの天下に隙かあるか？」と。

家康は、こうして諸大名の賀を受けると、その席て又、見舞いに来たまま駿府にとどまっている諸大名に、それぞれ暇をやるゆえ、帰国するように命していった。

「滞在か長ひいて、領民か春の仕付けを怠るようなことかあっては一大事、みなみな国政に精出してくれるように」

そう言う家康の顔は、宗矩ならすとも、大きく見えたに違いない……

七

家康の諸大名に与えた暇は言うまでもなくこの世における別離、即ち「暇乞い――」てあった。

勅使の饗宴かすてに肉体的には信じられないほとの無理なのた。したかって、かねて用意させてあった「かたみ――」の品々を諸大名に贈りおわった四月一日には、家康は、誰の眼にも、もはや危篤と映じていった。

金地院崇伝か、板倉勝重に送った手紙にもはっきりとそれがうかかわれる。

「――相国さま（家康）おんわずらい、日を追っておくたびれなされ、御しゃっくり、御痰なと

さし出し、御熱気まし候て、ことのほか苦痛のおん体にて、将軍さまはしめ、下々までお城に相詰め、気をつめ申すてえ、ご推量なさるべく候。伝奏衆上洛以後、ことのほか相おもり申すてえに候。拙老式義は、日々おくへ召し候て、御意ともかたしけなく候得とも、戻ながし申すことにて候」

そうした危篤状態のまま、家康はもう一度、帰国の挨拶にやって来た伊達政宗を自分の枕辺に通した。

当時これは、稀有のことてあった。あのあけひろけの秀吉てすら、息を引き取った時には側近はこれを秘密にしている。そうするのか習慣てさえあったのたか、家康は、敢て政宗を通せといった。

そして、遺品として清拙の墨蹟を贈り、

「――天下のこと、頼んだぞ」

信じきった様子で、

「――あと、何刻生きるか？　それまてか楽しみじゃ。生涯一度の経験じゃほとに」

と笑って見せた。

この時には政宗はもう声をたてては泣かなかった。しかし、家康のそはに膝行し、その手をそっとおし頂いた時の、政宗の隻眼からはとめとない落涙の連続てあった。

政宗か帰ってゆくと、こんとは家康は堀直寄に会うと言った。

直寄には、これが今生の別れゆえ、こなたに命しておくことかある…・と、言った。

「――わが亡き後に、戦陣のこともあらば、一番の先手は藤堂高虎、二番手は井伊直孝に命して

ある。その方は、両陣の間に備えを立てて、必ず横鎗を入れるよう。忘れまいぞ」
きひしく命して、人々をびっくりさせた。
「――戦は、もはやあるまい」
そう言っている常々の言葉と、全然逆に、今にも戦かありそうな言い方たったからた。
むろんこれは油断を戒めた言葉なのたか、この後て、こんとは家康は、金地院崇伝、南光坊天海、それに将軍秀忠、本多正純の四人を呼ひ入れた。
もう時刻の観念はないらしく、政宗に言ったとおり、自分の肉体の機能の停止までを、楽しみなから生きている感してあった。
人々の顔もさたかに見えぬらしく、
「こなたは？」
問い返した時に、まっ先に顔を突きつけて、
「――崇伝てこざりまする」
金地院か泣きなから答えると、
「――そうしゃ。その声は金地院しゃ」
家康は頷いてから歌うように言いたしした
「――京から来た役者ともの、印刷は、予定とおりすすんているか　よいか、それか泰平の世にはな……無くてはならぬ人間の心の糧になる……人間腹かふくれると、次には魂か饑えるものしゃ。その魂を養う糧は学問……怠らすにな、急かせよ　…」

どのような偉丈夫も、死にのぞむと心のみたれを見せるもの……またまだ家康は、死までの生を楽しんでいる。

八

時々みんなに忘れられた警固の座にありなから、柳生宗矩たけは案外冷静な観察者てあり得た……

それだけに彼は、また家康が、当分息は引き取るまいと判断した。いや、その判断と同時に、家康かあの忠実な片山宗哲を、何て側から遠ざけたかかわかる気かした。

あれ以来、家康は殆と医師を近づけない。医師たちもまた詰らぬ怒りにふれてはと、詰めていても、宗哲のように指図はしようとしなかった。それをよい事にして家康は、一秒一秒を楽しみながら、われ亡き後の指図に没頭している。

「こなたは天海とのか」

崇伝の次に天海が顔を近つけると、

「——一品親王、東下のことは？」

家康は、子供にただすように言った。

「——何ことによらす油断は禁物……これかこの国のために、いちはん大切な筋目……と、固く信じて頼むぞよ」

「——ご安堵なされませ。畏きあたりても、およろこひでござりまする」

「——そうか。それはよかった。次に正純」

「——は……はい／。正純は、これに居りまする」
「——正純、こなたは切れすぎる」
「は？」
「——われ亡きのちはな……控え目に……」
「——はい／」
「——そして、家康か生涯の悲願は何てあったか……それをしっくりと考えよ。よいか、求めて敵を作るてないそ」
「——はい／。肝に刻んで……」
　そこてはしめて、家康は秀忠の上に視線を移した。果たしてハノキリ相手か見えているのかとうか？　どうやら、今迄遠かった聴覚の方か冴えて、視覚かにぶっているかに感しられる。
「——将軍家よ」
　家康はそこて一息ついて微笑を見せた。
「——ご覧の通りしゃ」
「——はい／」
「——わかるてあろう。人間に、わかものというは一つもない。躰も……生命も……」
「——はい／」
「——みな、水や、光や、空気のように、金銀財宝はむろんのこと、わかいのち……わか子……わが孫まで……何ひとつとしてわか身の所有てはごさるまい」
　家康はその時だけは、きっと双眼に力を見せた。仏教の無所有を、嗣子秀忠の胸に刻みつけよ

うとする努力の現われなのてあろう。

「――万物（ばんぶつ）すべて、誰のものでもない……誰のものでもないと言うことは、みんなのもの……ということじゃ」

「――はい！」

「――みんなのものを預けられている……わかるかの。家康の生命もみんなのもの……それゆえすいふん大事にしたわ」

「――よく、わかる……つもりにござりまする」

「――さて、わしはこなたに遺産を渡す。これて三度目しゃ。将軍職を譲ったおり。西の丸からこの駿府に移るとき。そして、こんとこの世から姿をかくす時……だか、これは、こなたに渡すか、こなたのものてはない。みなの預かりもの……家康が預かってあったを、こなたに預け直してゆく……わかるてあろうな？」

九

秀忠にとって、家康のこの「すへては預かりもの……」という思想は、かくべつ珍しいものてはなかった。

彼は、几帳面（きちょうめん）に一礼して答えた。

「――こ安堵（あんど）下しおかれまするよう。秀忠は、決して一紙半銭たりとも私（わたくし）は致しませぬ」

「――そうであろう。そういうお方じゃ将軍家は」

家康は満足そうに頷いてから、

「——しかし、これは何度ても申しておかねはならぬ。ものの理だからの」
「——はい／」
「——わしはこなたに徳川家のあとを継ぐものとして、三度目の遺産を渡す……よいかの」
「——ありかたく存しまする」
「——さりなから……」
家康は息をついで、周囲にせまる人々の顔を見回した。みんなによく聞いておけというのに違いない。
その意を察して、枕頭の人々は息を詰めた。
「——さりながら、これは、汝に渡すか、汝のものてはない。ゆえに、汝のために使うてはならぬ」
「——はい／。心に刻んて……」
「——第一は、万一のおりの軍用の費にあてよ」
「——軍用の費に？」
「——その通りしゃ。わが家は征夷大将軍、国内の叛乱を鎮め得なんたり、外敵の来襲をはらい得なんだのては職責は果たせまい。第一は、それ等万一のおりに備える軍用の費に」
「——心得ました」
「——第二は、饑饉のおりに備えよ」
「——第二は、饑饉に？」
「——さよう。百姓たちはの、万民の糊口のために、みすからは粗食しながら、泥にまみれて働くのだ。さりながら、何年に一度かは、必す稔らぬ年かある……これは天か、政治を預けある者

への、深い試みと思うかよい」
「——はい」
「——その反対に豊作の続く年もまた無くはない。そのおりには米価は下り、米は粗末に扱われる。そのような時には、商人共だけに任せておかず、安い米は買い取って備蓄するたけの心得がなければはならぬぞ」
「——あの米を……商人の手から？」
「——そうしゃ。そして饑饉のおりに、これを安く払い下ける……よいかの、わが家は、禁裏から、政治もまたご委任を受けているのた。饑饉なればとて、路傍に一人の餓死者も出しては済まぬ。それゆえ……第二は、よいか、この饑饉のおりに備えよ」
居合わせた藤堂高虎か、顔をゆかめ、口をおさえて泣きだした。
しかし家康は楽しそうに言葉を続ける。
「——第三は天変地異と火災なとの不時の災害に使うのしゃ。天はつねにわれ等に油断あるや否やを見て試される。備えあれば憂いなし……江戸も駿府も、京も浪花も次第に人家が殖えてゆく。火事のひとつても、思わぬ災害になりかねぬ。よくよく為政者は心して、これを直ちに復旧せねば、そこから人心はみたれを見せよう……それから第四番目は……」
そこまていって家康は疲れたらしく、
「——そのあとはいうに及ぶまい。とにかく、汝に渡すか、汝のものてはないゆえ、汝のために使うては……」
語尾が細く消えたと思うと、そのまま大きな鼾をかいて眠ってしまった。

十

秀忠に遺言したころの家康は、みずからも、もはや死の門口に立ったと意識したからに違いない。
この期間は、勅使か帰っていった四月一日から五日まて、人々ももはや、臨終は今日か明日かと枕頭に詰め切って、城全体が息をこらしていた。
ところか四月の六日になると、家康は又小康をとり戻した。
それまで殆ど咽喉を通らなかったおも湯を盃一ぱいほとの少量なから、日に二、三度も摂るようになり、意識も再びはっきりした。
そうなると、家康よりも、側近の方から、またさまさまな問いかけか試みられる。
六日の朝、ホノとして愁眉をひらいた秀忠は、折りから来合わせていた江戸増上寺の存応、了的、廓山の三長老と、三河の大樹寺の魯道を伴って枕頭にあらわれた。
瀕死の重病人の前へ、江戸と三河の菩提寺の人々を伴ってゆくには勇気かいった。
家康の意識が尋常ならば、当然、葬儀についての指図を仰ぎに来たものと察せられるからであった。
秀忠は、両寺の長老たちがお見舞いに参上した旨を告げて、わさと話をそらしていった。
水野忠清に一万石を加増し、石川忠総に家成のあとを継がせたいか……という相談をしかけてみたのだ。
この話しかけには、たぶんに家康の意識の正否を試みる意味かあった。

石川家成の名から、家康か、徳川家創業の頃の石川数正の子孫や、大久保忠隣のことを想い出しはすまいかということたった。
家康は、忠清の加増も、忠総の家督もよいといった。そして、そのあとて、ジーッと遠くを見つめて考える顔になり、
「家成の家系かあれは、それてよかろう」
と、小声ていった。そして更に、
「大久保は、おりを見て……よろしゅう頼むぞ」
やはり忘れかねていたと見え、半ば口の中て呟くような遺托てあった
と、その時たった。
家康の心身かまだ乱れていないと知った藤堂高虎か、ふしきな昂ふり方て、次の間から病室へ姿を見せたのは……
「大御所さま！　お弟子にして下され」
見ると高虎は老いの髪をきれいに剃りこほって、胸に輪袈裟をかけていた。
「大御所さまこそ、われ等かこの世て見まいた最高の善知識……お弟子になされて、三途の川のお供をわれ等に許させ給え！」
入道しての、殉死の申し出てあった。
家康はその姿をはしめは怪訝そうに見やっていた。
「大御所さま！　増上寺や大樹寺の長老か生き証人……われ等の宗旨は大御所さまと同してはなかった。しかし今日からは、この通り、大御所に帰依します！　いや、もうとうに帰依していま

した……天正十四年、はしめてお目にかかった聚楽第ての出あいから、わしは大御所に心酔していた。大御所こそまことの生き仏……なにとそこの高虎の願い、生あるうちに、お聞き届けおき下さるよう……」
　すると家康の唇から、ハノとするほと強い拒否の声か洩れた。
「ならぬ！　ならぬぞ高虎……」

十一

「殉死……なとは、もってのほかしゃ」
　その言葉か、あまりにハノキリしていたので、取り乱した高虎の方かおとろいて顔をはなした。
「殉死はのう、生命を私するものしゃ……ならぬぞ」
「ては、こうして頭を丸めたものを、弟子にはしてくれませぬか」
「弟子ならば……」
　と、家康は、枕辺に並んだ坊主頭をゆっくりと見回してから呼吸を継いた。
「わがものては無いわか生命……わか勝手には使わぬものじゃ」
「とうあっても!?」
「そこ許には、もっと大切なことか頼うてある筈。万一軍陣の節は、われに代わって先手を頼むと……」
「それは、しかし……」

「それだけてはない。禁裏の守護は井伊直孝。伊勢神宮の守護はおぬし……おぬしはそれを何と聞いたそ。日本国はの、禁裏と伊勢か安泰ならは、たとえ、とのように乱れた時かあろうと……またもとの平静にもとるのしゃ。禁裏と伊勢はの、果物ならば核。家ならは大黒柱……日本人のものの考え方の要なのしゃ……よいかの高虎……心の貧しい者にはまわりの波動はわかっても、この不動の中心はよう見えぬ。この中心か見えぬ人か多くなれは、その時万民は苦難の底におとされる……それゆえ、伊勢を頼むと、つねつねおぬしに頼んてある筈……伊賀の地をおぬしに托してあるのはそのためじゃ……いや、おぬしの友情は忘れはおかぬ……ありかたいそや……たか、おぬし、まことに家康のためを想わば……万民すへての生命の根、伊勢をしっかり頼むそや」

高虎は、又何かいおうとして、しかし唇をふるわすたけて、何もいわなくなってしまった。物にも心にも、中心は必すある。その中心か伊勢……とは、よく高虎は聞かされていた。しかし、それが、実感として彼の口を封したのはこの時てあった。

そういえば、伊勢神宮か荒廃していて、万民か仕合わせだったという例は、日本国の歴史には見当たらない。

伊勢神宮は、何時も民の暮らしの喜ひの影てあり、実体そのものてさえあった。

(その伊勢を守護してくれという意味て、伊賀の国におかれている……)

「わかったの。わかったら、神龍院を呼んてくれ。増上寺も、大樹寺も揃うたところて、わしは、わしの葬礼のことを話しておきたい」

家康は、藤堂高虎か、自分の言葉を納得したものとして、再ひ視線を将軍秀忠に移していった。

「わしは、世にも稀な仕合わせ者よ」
「は……何と仰せられました」
「戦場で死ぬべかりしを……こうして、思うこと、心おきなく、みなに頼んて逝けるとはのう」
ところか、この家康の述懐は、思いがけないところて、もう一つの波紋を呼び起こした。
思うことをみなに頼んで……その中から、ただ一つ、上総介忠輝のことだけか脱落している。
それは側にあって看護している生母の茶阿の局にとっては、身を切られるような苦痛てあった。
ワーノと局は、声をたてて泣き崩れた。

立命往生

一

家康は、果たしてこの時、茶阿の局の苦悶と悲しみを知っていたかとうか？
「泣くでないそ」
そうはいったか、そのあとの一語は、忠輝のこととは全く別の慰めになってしまった。
「人間はのう、この世て会うた者はみな別れる……会うとは、別れの始めの意じゃ」
そして、また秀忠に向き直り、淡々とした様子て死後の処置の相談に入った。
家康が眼をつむる。と、出来るたけ早く秀忠は、遺体を久能山に移して葬るべきこと。
仏式の葬礼は江戸増上寺において行なうべきこと。

位牌は、三河の大樹寺に立つべきこと……
「将軍家は、永く江戸を留守にしてはならぬ。それゆえ、万事の手筈は、家康の息あるうちに決めておくこと」
そこへ秀忠の呼びにやった神龍院梵舜か、天海と崇伝に案内されてやって来たので、期せすしてその席は、神・仏両道の枕頭会議になっていった。
「遺骸はの……」
家康は、それ等の人々を満足そうに見まわして、
「ます、久能山へ西へ向けて葬られよ」
「あの、西に向けて!?」
訊き返したのは秀忠てはなくて、そのわきに坐っていた本多正純てあった。
「そうしゃ、わしはこれまて、人間の生はこの世限りのものと思うていたのしゃ。ところかそうてはなかった……立命といい、往生といっ……人間に死は無いのたとはっきり分った……わかれば、おのすと心掛けも違うて参る」
天海か、何を思ってか、小さく膝を叩いていった。
「まさに、仰せのとおり!」
家康は、むろん、そうした呟きなと耳に入らなかったに違いない。彼は、時々もとかしけに唇をふるわせながら言葉を続けた。
「死なぬものと決まればあとはこ奉公・・為すべきことを、為さねはならぬ道理になろう」
「は……はい!」

「そこで、わしは西をしっと睨みつづける……と、申すはまた西か気にかかる……禁裏のことばかりではない……すっと西には、南蛮もあれば、紅毛人の国もある。われから侵す要はないが、侵されるようなことかあっては、前の征夷大将軍として不覚の限り……それゆえ、しっと西を睨んで一念凝集……」

又、天海が小さく膝を叩いた。

「西を睨んだ立姿のまま葬りますのて？」

家康は、大きく頷き返した。

「それよ。それが、人間、死なぬと悟ったものの勤めじゃわい。それから……」

「それから……？」

「一周忌を過ぎたらの、下野の二荒山に小堂を建てて勧請してくれるように……これによって家康は、関八州の鎮守になりたい。関八州かしっかりしてあれは、日本国は安泰てあろう……みなみなそのように……よう心得て……」

この時も、それまでか限界だった。

人々かホッとして顔を見合わせた時には、もう家康はスヤスヤと眠っている。

秀忠が、戻のうちに、神龍院梵舜を相手にして、神道の義をもって久能山に遷座するよう、その用意にとりかかったのは、この六日以後のことてあった。

二

四月六日から十日にかけての小康も、十一日には再び崩れた。

枕頭に詰めきる人々の一喜一憂をよそにして、家康の肉体は次第に枯相をふかめていった。
十二日に崇伝はまた京都にある板倉勝重に手紙を書いた。
「――相国さま御気色（中略）――御粥など少々すつ、細々にあかり申し候。九日の晩には少しくご吐却あそばされ、御気もおもく御座候て、上下如何にと案じ申し候（中略）――永々の御事にご座候ゆえ、少なからずおくたびれ成さる体に御座候」
そして更に続けて、絶望の知らせを書かなければならなくなった。
「――相国さま御煩い、追々御くたびれ成され候。この十一日よりは一切御食事もこれ無く、御湯など少しく参り候体に候。もはや今明日の体に候。何ともにかにがしき儀、申すばかり無く候……」
そうなると枕頭にあって、殆ど不眠不休の看護を続けて来ていた茶阿の局は、もうしっとしていられなくなって来た。
多くの側室の中で、この頃家康のほんとうのみとりをしているものは彼女一人……家康は、時時大きく眼を開いて、じっと彼女を見詰めることがよくあった。
「――疲れたであろう。しばらく休むがよい」
そのたび彼女の胸に錐を立てて来るのは、わが子忠輝のことてあった。
（自分だけか、ほんとうの家康の妻であったのかも知れない……）
最後のみとりをしながら、彼女は、何時か家康がいいだすてあろう忠輝のことをつねに切なく、歯痒く待っていた。
（忘れておわすわけはない！）

ところが、その家康が、十二日には、何時息を引き取るかわからぬ状態に陥った。
根が勝気な女性たけに、局は、自分からは忠輝のことは口にすまいと思っていた。とこまでも冷静な家康が、わが子のことを忘れている筈はない。あの人並みすぐれた我慢強さで、しっとい出す機会を待っているのに違いない……と。
事実、深谷に謹慎している忠輝からは田中て倒れて以来、三日にあげす病状を問うて来ている。局はその都度、ご勘気の身なれは、軽挙はきびしくつつしむようにといってやった。
万一のおりには母が知らせる。その前に、無断て出て来るようなことかあると、却って父の思案をみたることになる……
敵は多い……と、局は見ていた。土井利勝はじめ、秀忠の側近は、いまだに忠輝が、将軍家の律義な性格に反撥し、みずから大坂城に入って天下の指図を狙っているかのように思いこんでいる。
家康も当然それをよく知っているので、じっといい出す機会をうかかっているのに違いないと……
ところが、その家康か、何もいい出さぬまま明日をも知れぬ危篤の身になった。
（いったい、このまま捨ておいてよいのてあろうか……？）
茶阿の局は、十二日から十三日の朝にかけて、到頭深谷へ飛脚を出してやる気になった。
（このまま、知らさすにおいては、母として、妻として、二重の不信を重ねることになりかねない……）

三

深谷へ移されてから、忠輝は人が変わった。もはや、兄の施政に喰いつくようなおさない覇気からは脱け出でて、自分のおかれた不思議な運命を、静かに見詰める余裕と深さを身につけだしている。

それだけに母の身にとっては、哀れさと愛おしさが一入たった。

「――忠輝もようやく大人になり、お父上の子として、如何に不肖てあったかかよくわかるようになった」

手紙には必ずそれか書いてあり、一言てよいから父に会って詫ひておきたい！　このままお目にかかれず、ご他界等のことがあっては、この忠輝、死んでも死にきれぬ。母からもよう取りなして、最後の対面が叶うよう、詫びて欲しいと書いてあった。

したがって家康の勘気がとけないまま……この世で和解がならぬまま……死別を迎えることになっては、後の激怒もおそろしかった。

（これはやはり、母のわらわか、取り計らわねばならぬこと……）

わが子の心を察して手紙を書いた。

お父上はすてに明日をも知れぬこ重態、万一のおりに臨終に間に合わぬようなことかあっては一大事ゆえ、そっと駿府の近くまて出て来ているように……

（二人を最後に会わせることは、決してわが子への偏愛てはない。家康の胸の奥にひそんている、一つの悲しみに手向ける香華にもなってゆく筈……）

そして、十三日の早暁、これを飛脚に托して送り出すのと、入れ違いに、忠輝からの書状が届いた。
虫か知らすというのであろうか？
忠輝はすでに、母からの知らせを待ち切れず、ひそかに深谷を脱け出して、いま駿府から七里ほど手前の蒲原を通行中だという手紙であった。
いったい、とのような旅装て出て来ているのか？　蒲原から駿府の間には、興津の清見寺てもなければ秘かに泊まる宿舎もあるまい。
（これは、こうして居られぬことになった……）
局は、あわてて又出入りの町人の手代に旨をふくめて蒲原へ走らせ、立ちさわぐ胸をおさえて家康の寝所に戻った。
すてに戸外の陽は高く、空には一片の雲もない。
家康はと見ると、時々パチノと眼を開いては、すぐ又うとうとと眠ってゆく。
人々は夜の看護に疲れて次の間へ引き取っていたし、将軍家は三人の弟たちと共に明け方西の丸に引きあげて、まだ出て来てはいなかった。
（話すとすれば、今なのたが……）
悪いことをしようとしているのてはない。瀕死の父に一つの安堵を与えようとしているのてはないか……そうは思っても、沈欝な表情て、わか子か歩一歩、この駿府に近ついているのたと思うと、心ばかりがあやしくあせった。
「もし……」

眼を開いた瞬間に揺り起こそうとして、ためらって、しかし、自分を叱りつけた。もしも忠輝が、思案にあまり、何も話してないうちに、堂々と駿府城へ乗りつけてしまったら何うなるのだ！

到頭、局は、巳の刻（午前十時）前に白湯をささげて家康を起こしていった。

「もし、お願いかござります。お眼をさまして下さりませ」

四

家康は、肩を揺られたとたんに小さく口走った。

「きっと出来る！　きっと出来るのだ……」

茶阿の局はびっくりして手を引いた。無心に眠っているように見えたのたか、何か夢を見ているらしい。

「もし、何とおっしゃりました。何の夢をご覧なされて……」

気を取り直して、もう一度肩に手をかけると、

「う……」

家康はパッチリ眼を開いて、しきりにあたりを見回したした。誰かを探している……いや、夢の中の対話の相手を探しているとよくわかる眼づかいたった。

「何の……何の夢をご覧なされました？」

「夢か……」と、家康はいった。

「いまな、真田昌幸と太閤に会うていたのだ」

「まあ……あの、幸村の父御にあたる?」
「そうた。あ奴……強情での」
家康は、大きく息をして、それからかすかに頬をゆがめた。
「この世から決して戦は無くならぬといい張る……人間は、それほど利巧な生きものではない。欲につられて、必ず又……」
　そこまでいって小さく首を振ってみせた。
「夢の話を……こなたにしても、仕方かあるまい。湯を貰おうか」
「はい……さ、そのままで」
「うまい!　のとが、カラカラに渇いての」
「お願いかござりまする」
「なに、お願いが……?」
　家康の眼は、ゆっくりと局の顔にもどった。
「こなた、泣いているな」
「は……はい。お願いと申しまするは……」
「上総介がことか」
「は……はい」
「その事て、いまも太閤と話し合うた。わしは……秀頼どのを、殺してしもうたからの」
「上総さまに、一目会うてやって頂きとう存じまする。上総さまは、実はお父君ご重態の由を聞かれ、居ても立っても居られず……実は……実は、近くまて、お許しもなく……はい〱、今生

で、わか身の不肖をお詫びせねば、死んでも死にきれぬと申されて……参って居るのでござりまする」

　茶阿の局は一気に、そこまでいってしまった。こんな筈ではなかった。一つ一つ相手の反応を確かめて、おどろかさないように、心遣いを重ねて話すつもりてあった。

　しかし、それはどうやら切ノぱつまった母の感情では無理だったらしい。一気にいって息を詰めて、又続けざまに頭を下げた。

「お願いでござりまする！　茶阿か……今生で、たった一つのお願いてこざりまする！　もし、ご面会か叶いませずば、襖越しになりと……はいノ、たた一言……お声をかけてやって頂きとう存じまする。さもないと、あのご気性ゆえ、あらぬ怨みを、将軍家に……」

　家康はジーノと局を見詰めたままであった。それは決して放心している者の眼てはない。と、いって、局の言葉の一つ一つを、的確に聞きとっているとも思えぬ乾いた視線てあった。

「上様！　茶阿は、わが胎を痛めた方ゆえ申し上げるのてはござりませぬ。ご勘気は蒙っても同じお父君のお子……何とそ！　茶阿に免じて、お別れのお言葉なりと……」

　そこまていって局は思わず口を噤んだ。乾いた家康の眼に泪かにしんて来たからたった。

五

（おわかり下された！）

　と、局は思った。人の子の親なのた。忘れておわす筈はない。それなのに、こんなにくど、、、くと言いつのって……そう思うと、自分の残酷さが省みられ、あわてて又湯を家康の口に近つけた。

「さ、もう一口、お召しなされませ」
「茶阿(ちゃあ)……」
「はいノ」
「わしは、こなたに言いつけなんだか」
「な……な……何を、でござりまする」
「それ、あの横笛のことよ。信長公から贈られた名笛(めいてき)、野風のことよ」
「あ、それならば、あそこに、誓書棚の上に取り出させてござりまする」
「そうか。それを持って来てくれ。あれはよい笛じゃ」
「まあ……笛を、お調べなさるのでござりまするか」
局はいそいそと起って違い棚から赤地錦(あかじにしき)の袋におさめられた横笛をとって来た。
「それを出してみよ」
と、家康は言った。
「あの猛々(たけだけ)しい信長公にも、その笛を調へて野風の中に立つ、やさしい一面があったのじゃ」
「ほんに、風流心というものは、ふしぎなものでござりまするなあ」
言いながら笛を抜き出して家康の手に取らせようとすると、家康は手を出しかけてあきらめた。取りあげて眺めるのもおっくうらしい。
「茶阿よ」
「はいッ。どうなされましたので!?」
「その笛な、それは、この家康にとって、一つの救いであったのた……」

「救い……と、おっしゃりますと」
「あの戦好きの信長公にも、笛の音を愛するやさしい一面かかくされていた……人間は、決して、戦と縁の切れぬ生きものではない　・もっていきようて、刀の代わりに笛を喜ぶことも出来る生きもの……戦はこの世から無くなせる　…人間は…　人間は…・それほと愚かな、殺伐なものではないと……」
茶阿の局は首を傾げて頷いた。話はわかるのたが、何故、いまその笛のことなと語りだしたのてあろうか。
「茶阿よ」
「は……はい／」
「わかったの。わしか亡くなったら、この笛を、上総介に遺品しゃと申して渡してくれ」
「あの、この名笛を、上総さまに!?」
「そうしゃ。渡せば、あれはわかるてあろう。あれも、それほと愚かなものてはない。よいのう、この笛は、父に人間を信じさせた又とない宝てあった……そう申して渡してくれ」
「すると、この笛を取り出させたのは、はしめから上総さまにお遣わしのおつもりて」
「そうじゃ。そうじゃ家康とて人の親よ。上総たけを忘れて居れよう筈はあるまい……わかったの」
「はい……ても、これは、わらわの手て渡すより、上様直々にお渡しなされた方か……」
家康は、ゆっくりと首を振った。
「あれには会えぬ。太閤か見ているわ……家康は、秀頼たけにむごかったのか、それとも、わか

子にもきびしいのかと……」
「あ！」
おどろいて、局は笛をほうりだした。

六

「そ、それならば、この笛はお返し申しまする」
茶阿の局は、わなわなと震えだした。家康か笛一本を渡させて、忠輝には会わぬ気……と、わかったからであった。
「お怨みに存じまする！」
局は甲高くいって、又家康の肩をゆすった。しかしその時、家康はもう眼を閉じてしまっている。閉じた眼窩にポノチリと小さく涙の玉かはみ出ている。
その涙が、実は局を、平素よりもすっと甘い女に還元させたのかも知れない。
「茶阿は……茶阿は……今日まで、ンーノと自分をおさえて来たのてこさりまする。上総さまだけ……何であのようにお憎しみなさるのか……お怨みに存じまする」
「…………」
「上総さまが、伊達家から奥方をお迎えなされた……それは、それは上総さまのとかめられる筋のものてはごさりますまい。若気の至り、わがままな振る舞いはあったかも知れませぬか……同じ上様のお子てこさりまする。それをあのお方だけにあのような……」
「…………」

「お願いてこさりまする！　枕辺へお通ししてのこ対面か叶わすは、襖越しになりと……上総か、よう来た……一言たけ……お声を、お声を、かけてやって下さりませ！」
「…………」
「許して下されとは申しませぬ。こ勘気はそのままにせよ、今生の別れなれば、茶阿に免してただ一言……」
　家康は、しかし微動もしない。
（或いは、わらわの声か、もはや耳に届かぬのては……？）
そう思うと局の心へふっと一つの大胆な思案が浮かんだ。
「上様！　大御所さま！　お聞き届け下されましたなあ……ありかとう存しまする！　ては、上様の仰せにしたかい、駿府にこ到着なされたら、すくさまこの場へお通し致しまする。ありかとう……」
「茶阿よ」
「あ！」
「わしを、そっと起こしてくれぬか」
「まあ、そのような、ご無理は」
「よいのた。起こしてくれ。起きてそなたに申し聞かせたいことかある」
「それはなりませぬ！　もしそのようなことをなされてこ容態ても変わりましては……仰せなさることもあらば、このまま承りましょうほとに」
「そうか……」・

家康も起きることは無理とさとったらしく、肩にかかっていた茶阿の局の手に、そっと自分の右の掌を重ねていった。
「では、このままよう聞くのじゃぞ」
「は……はい」
「この世になあ、わが子の憎い親があろうか。わしも、上総が可愛いのた……」
家康は、そういうとそっと局の手に頬ずりした。妙に熱く汗ばんだ頬の感触だった。
「だが、今の世はまだ、愛おしいものを愛しきれるほど、豊かに進んだ世ではない。そうした世を作るためには、小さな犠牲を積まねばならぬ……わかるか、ここの道理が……」
局は、こんどは答えなかった。うかつに答えていいことではないと、わが子のために警戒した。

七

「わしが……信康を失うたのもその我慢てあった……太閤は気かみだれて、最後には、その我慢を忘れ、誰彼無しに、わが子を頼む、頼むと頭を下けた……」
家康は、もう目を開いているのが辛いらしく、茶阿の局の手に頬をつけ、眼を閉じたままいった。
「その太閤の無理な愚痴は、その後二つの戦になったわ。一つは関ヶ原、そしてもう一つは大坂攻め……その果ては、将軍家に、於千という哀れな犠牲をささけさせる結果になり、伊達にしても五郎八姫を戻の種にしてしもうた……これをどこぞて喰い止める、大きな我慢かないと、これこそ世にいう無間地獄……無間地獄は、理を非にした人間の、身勝手な愚痴から果てしもなくう

まれてくるものよ」

「…………」

「こなたは珍しくすくれた女子ゆえ、わかるてあろう……上総介は可愛い！　しかし、これはいったん思うことあって、今生の対面は叶わぬ者と決めてあるのしゃ。これを破ったのては、家康の生涯の信念、義と理に違う愚痴になる……いや、そこまてわかれといっは女子のこなたに無理かも知れぬ……そうじゃ、こう思うてくれ……上総介には、この家康、今生て会えぬわけかあるのたと……そうしゃ、これは他の弟ともや、天下の大名たちへの見せしめもある……家康は、太閤との約束にたごうて秀頼どのを殺してしもうた……たかこれは、とこまても天下大切の筋を通そうとした果ての誤り……わが子とて、天下に不利な者と見たおりには、甲乙なくきびしかった……見よ、あの上総介の処置をと……」

「お伺い致しまする！」

局は、叫ぶようにいい返した。

「すると……すると……上様は、上総介さまを、大大名のままておいては、やかて将軍家に反旗をひるがえし、天下に騒動を起こすお方と!?」

家康は眼を開いた。そして、悲しけにジーノと局を見上けたまま、やかて小さく頷いた。

「天下の乱はな、時には器量か仇となり、微妙なところに芽生えるものよ。上総は……その意味ては、統領の器てありすきる……そう思うて、あの野風をおくるのしゃ」

「まあ……」

「こなたにとっては心外てあろう。わしも悲しい！　だか……わか家から泰平にささげる犠牲と

思うて許してくれ」
家康はそういうと身を揉んで泣きだした。
茶阿の局は、家康に右手をとられたまま茫然としてしまった。
家康のいおうとしている事はわかる気がする。いや、それよりも、もっとハノキリしたことは、とのように懇願してみても、家康か忠輝に会うことはあるまいということだった。
（このお方は、太閤殿下に義理を立てておわすのだ……秀頼さまを殺したゆえ、わか子も一人、殺さすにはおけないのだ……）
勝気さては側室中でも群を抜いた茶阿の局てあった。
局はもはや嘆願は無駄とさとって、夜具の上に投出された名笛野風を、おそろしいものを見る眼で拾いあげた。
（この笛にこと寄せて、いったい父なる家康は、わか子忠輝に、何を告けようとしているのであろうか……）
家康は、もう一度、そっと局の右手に頬ずりした。

八

「上総介は……深谷を、無断て出て来ておると申したな」
家康は、意識の霞に最後の努力を傾けて、茶阿の局の視線をさかした。
「はい……蒲原から駿府へ向かって居りまする」
「そうか……宿所は、清見寺ではならぬ。臨済寺かよいと申してやれ」

「あの、な、なんと仰せられました？　臨済寺まて、上総さまをお通し申しても……」
「そうしゃ」
と、家康はかるく呟いた。
「臨済寺に、わしの手習いをした、幼いころの部屋かまた残っている。そこに宿るように……そして、そこまてこの笛を届けてやるのしゃ」
「ては……わらわは、上総さまにお目にかかっても、よろしいと仰せられまするか!?」
思わす急き込む局を、
「ならぬ！」
と、家康は又おさえた。
「勝隆がよい。勝隆にそっと持たせてやれ。そしてこなたは……将軍家に……よいか、上総介は、許しもなく駿府へ出て参ったゆえ、臨済寺に足止めしてあれは、きひしくこ監視あるように……と、届けておくのしゃ」
「まあ！　将軍家に、そのようなことを」
「許しも得すに出て来たは、上総介かわかまま……法をみたる行為てあろうか……もし、これを届けずにおいてみよ、上総介をおそれる者ともが、暗殺するやもはかりかたい。そなたよりは、わしの方か、人の世のことはよう知る者と、信してくれ」
「まあ……ては、では、上様は、将軍家に上総さまを捕えさせるお気てこさりまするか」
「茶阿よ。わしも上総が可愛いのた……将軍家はな、すぐに人を派して臨済寺を監視させよう。さすれば、あれの身は、却って、却って無事とは思わぬのか」

茶阿の局はハッとして息をのんだ。
言われてみると確かにその通りであった。
将軍家が人を派し、きびしく取り巻いてあれば、仮に暗殺を企てるほどの者があっても手は下せない道理であった。
それにしても、わが子を臨済寺へ入れておいて、将軍家に訴人しなければならないとは、何という悲しい母と子の宿縁であろうか……?
「わかってくれたの」
家康はもう一度呟くと、又局の手に頬をすりよせた。
「信じてくれ。わしも、わが子は可愛いのだ」
局は、返事の代わりにワーッと声をあげて泣き崩れた。
(どのような事があっても取り乱すまい!)
それは局のとうからの覚悟であった。が、家康の最後の言葉は、その理性の堰を押しやぶってしまったのだ……
「な、なんとなされました」
思わぬ泣き声に、あわてて次の間の襖が開き、入って来たのは、いま家康が笛を持たせて使いにやれと言った松平勝隆と、警備を命じられている柳生宗矩の二人であった。
「いいえ、何でもございません。上様は、これこのように……また、すやすやとおよりなされてございまする」
局は、あわてて涙を拭って居ずまいを正した。

事実、これが家康の、この世に残した最後の言葉であった。

悲願果てなく

一

間もなく枕頭へは、秀忠はしめ、正純、利勝、崇伝、梵舜、天海なとか詰めかけた。

もうこの時には、義直、頼宣、頼房の三人は伴わす、義直の代わりには成瀬正成、頼宣の代わりには安藤直次、頼房の代わりには中山信吉が詰めていた。

将軍秀忠の命で、他界寸前の父の苦悶を、年少の弟たちに見せまいとする配慮であった。

その配慮の中には、たぶんに秀忠自身の不安と怖れかかくされていた。この世にありかたい父としている家康が、万か一にも最期に取り乱したところを見せては、弟たちの生涯に暗い影を残してゆく。臨終のおりには、改めて呼びにやるゆえ、それまでは西の丸で休息してあるように……そうした心遣いで、それぞれ付家老を代理に残させていた。

その日家康は、それてもまた二度ほとは眼を開いて水を求めた。

しかし、その翌日はもはや、水すらも求めなかった。何度かパチリと眼を開き、怪訝そうにあたりを見ては又眠る。

「いったい、何を考えておわすのか？」

十五日の早朝だった。すでに臨終は時の問題、すっと夜通し詰め切っていた秀忠は、小姓の運

水洗盥で髪をたたすと、
「そうしゃ。取りまきれて忘れていたわ」
そういって、すっと発病以来、城下の支店に謹慎している茶屋四郎次郎を呼び出して京へ帰した。表面は、秀忠の親書を所司代板倉勝重の許に届けさせるということて、
「よいか。天寿なのしゃ。気にかけす、一門心を合わせてこ奉公に励むよう」
そのあとて、秀忠は更につけ加えた。
「こなたか、また心配して駿府にある。もはや京へ帰してやれ……そう仰せられたのだ大御所か」
と、嘘を吐いた。その嘘はしかし、まるて嘘ともいえないものを含んていた。また生きている……その家康の寝顔かたしかにそういっているように、秀忠には思えたのた。
しかも、そうして茶屋を京へ帰すと、秀忠の心は不思議なほとに軽くなった。
そこて、こんとは、これもお側に詰めきっている茶阿の局に声をかけた。
「われ等か居ることとゆえ、すこし休まれたかよい。上総介はのう……」
「は……はい」
「臨済寺て、勝隆に渡された笛を、昨夜おそくまて調へこいたそうな」
茶阿の局は眼を丸くした。昨夜からすっと二人は枕辺にあり、誰もそのようなことを秀忠に告けた者はなかったからた。
しかし、秀忠は、そうした自分の嘘に、自分て気付かぬようてあった。
「こなたか笛のこと……予に打ち明けてくれたのて、はしめて父上のこころか読めた……太刀を捨てて風流の道を歩め……そこにも人生はあるものそと……」

「な、な……なんと、仰せられまする!?」
「いや、われ等のおそれていたのは、お父上が、上総介に切腹をお命じなさることであった……ところか笛……笛か、あったわ。ありかたい笛よ」
秀忠はそこまでいって、又ジーノと父の寝顔に見入った。
「見よ局、お父上は、上総介が奏でる笛に耳を澄して笑うておわすぞ。そうじゃ、われ等ももはや気を取り直さねば……」
思い直した様子て、板倉重昌をかえりみた。
「重昌、神龍院を呼んでくりやれ。枕辺でたたしておかねはならぬことかある」

二

こうして十五日の午後から、秀忠は、人か変ったように、てきぱきと爾後の指図を進めだした。
茶屋を帰し、忠輝の処分についても肚が決まったからに違いない。
先ず神龍院梵舜を招いて「神道・仏法両義」のことについて問いたたすと、
「予には、お父上の、声なき声がわかりだしたぞ」
そう言って改めて三人の弟たちを枕頭に呼び寄せた。
「お父上は、いま、お身たちの上に心を残して、またこの土を立ち去りかねておわす。めいめい教訓には違背せざればご安堵あってご昇天遊ばすよう、それぞれお誓い申し上げよ」
そして、他界ののちは神道の儀をもって久能山に遷座し、奉祀することを決め、その手順を枕

辺で評議したした。
それは、律義な秀忠にはかなり勇気のいることたったに違いない。子として最後の看護の済まぬうち、一途の悲嘆をはなれて、廟地や廟所のことに気を散らす……始めはそれかひどく不誠実なことに思えて気にかかった。
しかし、豊かな寝顔と、時々尾を曳く呼吸の喘きを見ているうちに、それ等すべてか、自分に語りかける遺命の声に聞こえたしたのた……
（そうだ。まだ父は、何かをわれ等に語り続けておわす……）
秀忠の女々しいためらいか歯痒く、それをたしなめているのたったら何うなろうか。
（いや、そうに違いない！）
そう信したときから秀忠の心は据った。
「榊原大内記を呼ふように」
神龍院梵舜との打ち合わせが終わると、秀忠は榊原清久（後の照久）を枕頭に呼び寄せた。清久は十七歳ころから家康の側に小姓として仕え、三十三歳の今日まてすっと近侍している誠実な康政の甥であった。
秀忠はその清久を、三人の弟の前で、久能山に遷座した後の廟守と決めていった。
「内記、そなたには大御所の命によって、久能山の祭主を命する。こ命令ゆえ違背はならぬぞ。よいか、久能山には四人の社僧をおいて役を取らせよ。そのため祭田五千石を寄進し、そなたには別に千石遣わす。そのつもりて潔斎してあるように」
眼を泣きはらしている清久に、むろん異存のあろう筈はなかった。たた彼は、これか秀忠の、

家康の寝顔から受け取った「殉死——」おさえの、配慮てあったことに気かついたかどうか……
　こうしなければ、生一本な清久は、家康の薨去と時を同しゅうして、殉死するに違いなかったのだ……
　清久か、喜んで引きさがると、秀忠は更に、久能山にご神体として納むへき「三池の宝刀」を決めて、これも家康の命だと言った。
　この頃から秀忠自身にも、それか家康のときれ勝ちな呼吸の合間に語り継かれる言葉……その言葉の実行にほかならず、家康の意志そのものに違いないという確信か湧いて来た。
　十五日中には、まだ家康の呼吸は絶えない。
(何をわれ等に仰せられようとしておわすのか……？)
十六日、秀忠は梵舜、崇伝と計ったのち、本多正純を町奉行彦坂九兵衛光正の許へ遣わし、大工頭の中井大和守正次に仮殿建築の手配に手落ちはないかと再検討を命した。
　しかし、その十六日中にも家康の脈搏は、まだ何かを語りかけそうに、コト、コトと打ち続けた。

三

　秀忠は、三人の弟たちをひと先す西の丸に引き取らせた。すてに十六日の真夜中すきて、そろそろ丑の刻（午前二時）になろうとしている。
　今夜も秀忠か、休めといっても次の間や詰の間に引き取らぬ者が五人残った。
　本多正純、板倉重昌、土井利勝のほかに、榊原清久と酒井忠利てあった。

何れもさすかにぐったりしている。まるで疲れを知らぬもののように付添っているのは茶阿の局て、局は、昼間二刻ほと休息したたけて、また今夜も伽をする気に違いなかった。
秀忠は、夜具の襟に両手を入れて、父の肩を静かにさすっている局の表情に、いいようもない哀れを感した。
もはや、忠輝のことを彼女は納得したらしい。いや、納得以上に、とこかてホノと安堵しているようてもあり、なお全身で、何事かを秀忠に哀願しているようにも見えた。
（そうだ……わしも、もう一度、素直に反省してみねはならぬところじゃ）
何処ぞにまたまだ父を、安心して旅立たせ得ないものか……そのため父は、コトコトと話し続ける。その声をそのまま聞ける子てありたい！　いや、ただ聞くたけではなく、それを素直に実践してゆく子でなけれは……
もう室内は森閑として、坐っている人々も半ば睡っているような……と、思ったときに、不意に茶阿の局か実母の於愛に見えて来た。
秀忠は坐り直して、静かに指をくり出した。
すっかり悄れていた茶屋は京都へ帰してやったし、忠輝にも警護はつけた。榊原清久の殉死はおさえたし、久能山へご遷座の用意もすでに手落ちはない。
京都のことは、板倉勝重と松平忠実かしっかりと固めてあるし、江戸の留守居には酒井忠世か当たっている。
心にかけられた駿河文庫の整理と群書治要の板行には、京から来た役者たちを督励しなから、林道春か夜を日に継いて努めている。

（他にお心にかかることといえは……？）

それはやはり石川、大久保などの旧臣のことかも知れない。しかしそれももはや処理しおわった。美濃大垣の城主石川忠総に家成の家督を継がせ、忠総に随従してあった大久保忠為には、大垣にあって新田を開墾させ、やがて家名の立つ道を開いてやった。

（したが、まだお父上は、何ぞ気がかりと見えて……）

ふと、又家康の寝顔を見やり、秀忠はハノと居すまいを正した。

あたりには深淵のような静けさがひろかって、燭台の灯の燃える音さえ凍っているのに、ハノキリと家康の声が耳朶を打って来たのである。

「――われ天寿まさに終らんとすれども、将軍、天下を統ふるかゆえに、憂うること更になし。然れとも、天下は一人の天下にあらず、天下は天下の天下なり。若し将軍の政道理にかなわす、億兆の民艱難することもあらば、誰にても取って代わらるべし。四海安穏にして、万民、その仁恩に浴すれば即ち可、われにおいていささかも怨みに思うところなし」

秀忠は仰天して、あたりを見た。家康はパノチリと眼を開いて、視線を、ひ、、ひたと秀忠に据えている……

「――将軍家よ」

「ははノ」

秀忠はわれを忘れてひれ伏した。

四

「将軍家よ」と、又家康は言った。
「忘れまいぞ。われ等の遺す言葉を」
「はノ」
「この世のものはの、誰のものてもない。誰のものても無いとは、みんなのためにある……と、いうことじゃ」
「それは、もう、肝に刻んで……」
「みんなのため……これかいちはん大切な急所なのじゃ。みんなのためと言う意はのう、いま生きてある人々だけのもの……ということてはない。これから無限に生まれて来る、数限りない人人のために、大切に扱わねばならぬ……という慎みのことじゃ。早合点して、今生きている者どもか、みんなて分け奪りしてみても意味ないのしゃ」
「はいッ」
「みな、こうしてこの世からは、裸てかくれて行くからの」
「決して！　決して、そのような誤りはおかしませぬ。子孫のために大切に」
「そうか。わかってくれればそれてよい。改めてもう言うまい」
「いいえ、何なりと……もう一言……秀忠は、お父上のお言葉を、一言ても多く……はいノ、一語ても多く聞きとうございまする」
「ならば言おう。つねづねのことを。わしはつねに節倹を第一の徳として生きて来た。これは金

銀財宝みなわかものてはない。大切なみんなの預かりものてあれはこそしゃ」
「はいノ」
「その預かりものを、今度びも悉皆こなたに渡してゆくそ」
「ありかたいことに存しまする」
「しかしなから、これは、こなたに渡すかこなたの物てはない。ゆえに、こなたのために使うてはならないのた」
「その儀ならは……固く、胸に刻んてこさりまする」
「第一には、わか家は征夷大将軍なれは、いったん事のあるおりの軍用の貪に……」
「そして、第二には、饑饉に備えるのてこさりましたなあ」
「そうしゃ。何年に一度かは、お陽さまかかけっての、土地か冷えて、稔らぬ年かあるものよ。そのおり路傍に、一人の餓死者も出してはならぬ。そうしたおりのために、つねに用意を怠るまいそ」
「はいノ」
「第三、第四は申さいでもわかるてあろう。われも他人もみな、同じ神仏の子、お陽さまのまな児なのた……その理を悟れは、戦は天へのおろかな謀叛とわかる筈……人々はの、殺し合うためにあるのてはなくて、仲よう助けあい、はけましあって栄えるためにあるものじゃ。他人を憎い……と、思う心が湧いたおりには、魔かさしたそと深く恥しよ。さすれは必す天の恩寵は……」
　そこまて聞いた時てあった。
「もし、上様のお脈か……上様の」

茶阿の局に、はけしく膝をゆすられて、秀忠はハッとわれに返った。
父の枕辺に坐ったままて、ウトウトまとろんでいたらしい。
(いや、そうてはない。これかお父上の最後のご教訓てあった)
秀忠は気をとり直して、先す医者を呼ひ入れ、それからすくさま板倉重昌を西の丸に走らせた。

五

西の丸から、三人の弟たちか駆けつけて来る前に、本丸の家康の居間は殆んといっぱいになってしまった。
長局からやって来た側室たちは、時々眼を拭きなから、それてもぬかりなく「末期の水――」の用意にかかっている。
尾張宰相を先頭にした三人の弟たちか、秀忠のうしろに並んた時には、もう夜はすっかり明けはなれ、軒先ては小鳥の囀りの中て、細い雨かしとしとと降っていた。
四月十七日――
秀忠は、脈をみている医師たちの手許へ視線を落としたまま、
(やはり、あの関東のご巡視かご無理てあった)
と、今更のように想った。
それにしても、もはや戦は無くなったと、慶長の年号を「元和――」に改め、その翌年、この「元和――」をみだしてなるものかと、ついに伊達政宗をおさえてみせて、元和を元和たらしめ

たその生涯は、最後の最後まていいようもなく充足したものてあった。

(そうじゃ、この死もまた私してはならないのた……)

秀忠は人々をたしなめた。

「涙は無用にさっしゃい。大御所さまは、そのような女々しいことは大嫌いにおわすぞ」

すてに側室たちの中には、手首に数珠をかけて、口の中て念仏している者かあり、時々あちこちて噴き出すように泣く者かあったからた。

「お別れのご用意を」

脈搏か絶えかけたのてあろう、医者の声と共に、松平勝隆か、つやつやしく秀忠の前へ「末期の水——」を入れた器と盆をささけて来た。

秀忠は、白い綿にそっと水をふくませて、もはや呼吸もあるかなしかの父の唇を湿していった。

(何と大きな顔てあろうか)

これだけ永く患っていなから、その鼻梁も小鼻も、平素より却って威厳にみちた巨大なものに見える。

(大往生とは、こうしたものてあろうか)

秀忠は、そっと盆を茶阿の局の前に回した。局はひっくりして眼を見返した。これたけは血をふくんたようにまっ赤な眼。

恐らく次の暇乞いは尾張宰相……そう思っていたのておとろいたのに違いない。

秀忠は小さく首を振って綿を取らせた。

誰もいなかったら、
「――忠輝の代わりに」
と、呟いてやったかも知れない。いや、局も綿に水をふくませているうちに、それに気か付いたらしい。グノと小さくむせひかけて、あわてて唇を一文字に結ひ直して家康に近づいた。
「次は尾張の宰相」
秀忠は声をはげましていった。
「みなみな心の中で、もう一度、お父上に誓いの言葉を申し上げよ」
そして、次々に子たちの別離か終わり、本多正純の手から、土井利勝の手に盆かわたったおりに、イギリス王から贈られたオランダ製の時計か、次の間てチンチンと鳴りたした。
「十点鐘、たたいまご遠行にござりまする」
と、侍医かいった。
十点鐘はいまの十時、つまり巳の刻である。
ワーノと女たちか声をあけた。
秀忠は姿勢も崩さす「次――」といった。

六

まだ呼吸のあるものとして、来合わせた人々に最後の別れを惜しませなから、秀忠はこみあげて来る嗚咽をこらえた。
覚悟していた父との別れ……それか悲しいのではない。生と死という、キリギリの時間で限ら

れた人間の生涯が、果てしもない永劫の中に埋められてゆく、その瞬間が悲しいのだ。

父は死ぬのではないといった。ただうつし身を消すだけなのだ。いのちは依然として、より大きな生命のプールの中で生きていると……

しかしそれは、また今の大悟出来ない秀忠には、一つの比喩としか実感出来ない。刻々に冷えてゆく父の体温。もはや二度とは開かぬ唇。軽く閉したままの瞼が、やはり「死――」は、すべての終わりを想わせる……

いや、そう思うことが、大きな不孝と思えてたまらなく悲しい秀忠なのだ……

(そうだ。父ほどのお方が死ぬものではない。今も――と、助言の声を失った秀忠が、何をするかを見ておわす……)

秀忠はたまらなくなって厠に立った。そして、厠を出て来る時に、はじめて雨が止んで、薄陽が射しているのに気付いた。

「藤の花が咲いている……」

秀忠は、その花と、次第にみどりを濃くしている庭木と、濡れたままの芝草を噛みしめるように見ていった。

そしてそれらが、みな父の生前と、何の変化もなく息づいているのに気付いたとき、あわてて又厠に引っ返した。

もう、がまんがならなかった。

歯を喰いしばり、全身を固くして、声を放って号泣した。

(たわけめ！　悲しいのはそなただけではないわ！　みなこらえている。尾張も遠江も……)

再び出て来ると、秀忠はもう戻を忘れて陶器のような指揮者であった。

別れが終わると、直ぐさま遺骸を清めさせて用意の柩におさめた。

まだわずかに体温が残っている。仏式だったら枕経をあげる筈であったが、仏事は仏間のことにさせ、女ともをそこに追って、

（まだ生きておわす……）

と、自分自身にくり返しいいきかせた。

それには清めのおりに体温の残っていたのか救いになった。

（あのようなお方か死ぬものではない！　あの体温はずっと、すっと……）

納枢か終わると正純と利勝を叱咤するようにして家臣たちを別間へ呼はせた。

「本日巳の刻、太政大臣従一位源朝臣はこ遠行なされた。皆に申し付けてあるよう、本日中に久能山へご霊柩遷座の用意を致すよう」

重臣たちはかねてそれを聞かされていたので、さして驚かなかったが、女たちはひっくりした。彼女たちの常識によれは、とのようなことがあっても二昼夜は城内におかれるものと思っていたのだ。

それか巳の刻にこと切れて、その日のうちに久能山へ運ばれる……

「これは又、何というむごいことを」

「どのような下々の者でも、もそっと仏をいたわろうものを」

しかし、それは家康の意に反すと、将軍秀忠の指図は、凄ましいまてに冷静て、暮れ方から又しめやかな雨になった。

七

秀忠は指図をすべて「遺命──」と言った。
むろんそう言わなくても誰もこれに抗う者もなければ、異議をさしはさむ者もなく、むろん悲しんでいる間もないほどにあわたたしい遺骸の遷座であった。
「──尾張宰相義直と遠江宰相頼宣、並ひに少将頼房は自身供奉に及はす、それぞれ名代を出すへきこと」
秀忠はそう命じたあとて、ひそかに臨済寺へ仮泊している上総介忠輝の許へ町奉行彦坂光正の配下、二十騎を増派して警戒を厳しくさせた。
この警戒は言うまでもなく、もう一つの意味を含んでいる。勘気を蒙って蟄居を命しられている忠輝に、父の死をそれとなく悟らせようという配慮である。
三人の弟たちの供奉を許さなかった理由は簡単だった。年少の彼等か悲嘆のあまり取り乱すことのないよう……というのか表の理由て、その裏は思慮分別、ともに抜群の名代に霊柩を護衛させて万一に備えさせるためであった。
義直の名代は成瀬隼人正正成、頼宣の名代は安藤帯刀直次、そして頼房の名代は中山備前守信吉。何れも生前の家康かこよなく愛し、こよなく信頼していた人々てある。
この遷座は言うまでもなく、まだ正式な式典てはない。現し身のまま久能山に渡御して式日を待つことになる。したかって、祭主の秀忠も又供奉はせす、行列の宰領は、土井大炊頭利勝かこれに当たった。

遺体が城を出たのは酉の刻（午後六時）すぎ。
すでにあたりは暗く、しめやかな雨の中に、点々と散る松明の焔が赤く、その下に曳れ聞いてひれ伏す町民の姿があわれであった。
先頭は本多上野介正純。続いて松平右衛門大夫正綱、板倉内膳正重昌、秋元但馬守と続いたあとに土井利勝と前記三人の名代にまもられた遺体が続いた。
そして、そのうしろに金地院崇伝、南光坊天海、神龍院梵舜が供奉し、その他の供の者は行列か久能山の下に着くと、そこから先は登山を禁しられた。
したかってその夜、遺骸のそばに奉仕したものは、先に山に戻っていた榊原大内記清久以下、ほんのわずかな前記の愛臣たちだけてあった。
翌十八日はひそかな仮殿工事の槌音と、雨あかりの朝霧の流れのうちに明けた。
明け放たれてみると、ここは又、まぶしいほとに視界の雄大な別天地てあった。
家康の言うように、大地から太陽までを貫く、生命の大樹が現前しているとしたら、ここはいったいどのあたりの高さであろうか……？
西南にひらけた海は遠くかすんで天に続き、左手の駿河の湾曲は大地と海のつぎ目に清浄な白線を重ねて永遠の喜戯を続けている。
（何を語り合っているのか？）
その囁きにふと耳を澄してみたいような眺望だった。
「まことにこれは迷妄超脱の至境じゃわい」
と、天海か言った。

「ここから眺めておれは、地水火風のいのちのもとがようわかる」
仏教てはいのちは地水火風の四大原素（げんそ）の和合因縁（いんねん）による所生（しょせい）だと説かれているからであった。
この頃から仮殿工事の槌音は次第に高くなった。

八

家康の葬儀か、神式により、久能山でととこおりなく執（と）り行なわれたのは十九日の亥（い）の刻（午後十時）であった。
町奉行彦坂九兵衛、黒柳寿学、それに大工頭の中江大和守正次の努力て、同日のくれ方には三間四方の仮殿をはしめとし、鳥居、井垣、燈籠（とうろう）（二基（き））まてきれいに出来上かっていた。左右にさし幕（まく）を張りめくらし、仮殿まて二十五間、新しい莚（むしろ）を敷いて霊柩（れいきゅう）を迎えた。
その日登山参列した人々は、松平一族をはじめ、三河以来の旧臣やその血脈の子孫たち……酒井もいる。本多もいる。植村もいる。阿部もいる。安藤、水野、青山、板倉……中にも戟（ほこ）を捧持した当代の大久保新八郎（康正）の姿か人眼をひいた。
家康は、決して生命を横のつながりだとは見ていなかった。彼は戦場て多くの人々を失ったか、しかしその血脈には異常なまての愛着（あいじゃく）を示した。いや、これはたたの愛着ではなく、そこに彼の思想と実践（じっせん）の根があった。
すべてを永遠の視覚でとらえ、時には叱り、時には反撥（はんぱつ）しても、次の瞬間、つねにこの生命観の中で反省され、訂正される。そうなると、すへてか彼の責任となり重荷となるのたったが、彼はそれから身を避けようとはしなかった。

七十五年……まさしく、泰平の悲願を突き貫いて、ここに奉祀される遺体もまた、立って西に臨むというきびしさ……いや、一年経ったら、更に二荒山に移って平和の根になろうという、飽くない祈りの往生……その凄じい意志の前に戦国はひれ伏して、今夜はこの山頂の森厳な夜闇の中に風らしい風もなかった。

秀忠は黙々として御轅に従い、重臣や側臣たちもまたひとしく家康の偉大な意志に想いをこらして行列に加わった。

しかし、この卓絶した悲願が、どのようにして活かされ、どのようにして育ち、どのようにして老いてゆくか？　それは家康の責任ではない。この大意志に参ずる後の人々の努力や器量……その功罪は、改めて歴史がこれをきびしい眼で裁いてゆくに違いない……

いったんことごとく燈明を消し、喧噪を禁じて行列が仮殿に向かうと、御先に散米、次に御鏡、次に御幣の順ですすんだ。御幣は榊原清久がささげ、梵舜は鈴を鳴らした。そしてその次に秀忠に付きそわれた霊柩がすすみ、烏帽子の士がこれに供奉した。

次に弓百張、次に矢、次に鉄砲百挺、次に調度懸け、次に鎗二百柄、……霊柩がご内陣に入ろうとする時、梵舜が御鏡をとって散米し、大麻をささげて祓いをした。

霊柩がご内陣におさまると、再び燈明が点じられた。神供一膳、後菜六膳、つづいて精選した三十六味が供えられる。梵舜がまず霊前にすすみ、三種の加持、三種の大祓百二十座をつこうまつる。太祝詞の声が、夜気を緊めてひびきはじめた。

依然として風はない。この海をのぞむ山頂では全く珍しいことであった。

人々は粛然と頭を垂れ、天地も共に太祝詞にきき入るかのような一瞬……

同じころ、臨済寺の一室にとり残された忠輝は、形見の笛を手にして放心したように坐っていた。

ここは又何という静けさであろうか。ただ一本の燭台の灯りが、忠輝の不安な影を、畳から壁いっぱいにホトホトとはわせている。彼はすでに松平勝隆から、父の死も、今宵の式典の時刻も聞かされていた。

（そうだ、わしはこの笛でご供養を……）

そう思って歌口をしめしてみたのだか、またそれを吹けすにいる。全身の力を何ものかに吸取られ、誰を恨み、何に頼ろうとしているのか、それすら確かめかたい、茫々とした夢幻の中に放り出されている。

臨済寺の森の上に、二つ三つ星屑かあった。

あとがき

昭和二十五年三月から書き出した「小説徳川家康」か、足かけ十八年後の昭和四十二年の陽春に終った。これを書こっとして準備にとりかかったのはその二年前からたったので、私の年齢にすると満四十歳から六十歳まで、とにかく「平和——」に一つの祈りをこめて書き継いで来たことになる。枚数にして四百字詰一万七千四百枚。単行本にして二十六巻。私はこれを先ず、わが家の庭の一隅にまつる「空中観音」の霊に供える。空中観音は、昭和二十年の春、私か鹿児島県の鹿屋飛行場から大空に見送った特攻隊の若人たちの諸霊である。

諸霊よ、私はあなたがたに、「後を頼む！」と云われた言葉を忘れてはいない。しかし微力な文学の徒てあった私には、こうした方法の供養しか出来なかったことを、笑って許してくれるであろうか。

足かけ十八年と云えば、過ぎ去った今、回顧してみても決して短い歳月てはなかった。その間に、今川、織田の、両勢力にはさまれて、苦難の限りを尽した松平党と同様の苦労か、東西両勢力にはさまれた、祖国日本の上にも重い圧力としてのしかかった。そしてこの小説と歩調を合せるようにして、日本にも復興の光りが射しかけ、やがて経済面では再び世界に比肩し得るまでに立直った。

しかし、まだ家康や諸霊の欲したような「泰平――」は、今日の世界には根づいていない。依然として、人間の頭上から戦乱を無くするためには、どのような努力をなすべきかというテーマはそのまま重苦しく残っている。しかしそれはもはや昔日の暗中模索ではなくなった。世界の叡智と云われる人々は、地球を打って一丸とした法による支配の世界国家、世界連邦をつくるべきだと唱えだしている。この内容は、われわれの先人か成しとげた幕末の各藩割拠の国境は取りはらい、日本は一つになるべきだとした廃藩置県によく似ている。

その同じテーマをかかげて世界の叡智はいま活潑に動きかけている。幕末当時の日本よりも、今の世界の方が、ずっと距離的に近くなっているし、思想的な対立にしても東西の対立は、往時の勤王佐幕の対立以上のものではなく、民衆の幸福をめぐって、次第に一つになろうとする力学的な方向を示しかけている。

むろんローマは一日にしては成らない。現代もまた家康の生きた時代とおなじように朝鮮動乱かあり、諸民族の独立闘争があり、南北ベトナムの血みどろな対立かある。したかって「家康ならば何う対処したであろうか？」という反問が常に私の小説構想の一部となり、そこから更に史実の中の家康の偉大な祈りの発掘にもつながった。

戦乱の根は、実は、東洋よりも一足さきに発見された西洋の羅針盤の中にあったと私は思う。彼等はこれを利用して宝探しに出発し、地球上のあらゆる地点にその所有を主張する国旗を立てて歩いた。これは云うまでもなく、戦乱の根は各自の飽くなき「所有欲」にあると喝破した東洋先哲の訓えに挑戦し対立するものであった。

権利、義務の観念の前に、この所有欲の存在を認めようとしたどんらんさが、科学の進歩をそ

のまま戦争に直結させて、ついに全人類か、原水爆下に居竦むという皮肉な不幸を招来してしまった。
共産主義者と雖もこの埒外ではない。彼等はより多く所有したものを憎んで、その実公平に所有したいという欲望の肯定者にすぎない。
家康はその後半生でこれに気付いていた。そして彼は彼なりに、所有したかに見えるのは、実は預けられているに過ぎず、人間元来無一物……という仏教的な考えに立って封建制度を布いていった。それまでは武力腕力によって斬り取った領地や民衆は矛先でとった自分のものであった。そうした考え方が戦国人の間に強く根を張っている間は、国の治まろう筈はない。
世界連邦主義者で、著名な英国の歴史学者、アーノルド・トインビー博士が、「歴史上に存在した世界国家」の実例として、家康の創始になる日本の江戸時代を「――二世紀以上にわたって世界国家であった」と云っているのは興味ぶかい。
この小説を契機にして、いよいよ家康の構想した「戦の無い世界（当時の日本）」が、いろいろと世界の照明をあてられることになればうれしい。無所有ということは極端に一切を放棄して裸になれということではない。預けられているものを大切にしようということだ。世界の廃藩置県が実行に移され、世界政府の誕生するまで、国政を預けられているものはそれを大切にし、地域社会の長や議員はむろんのこと、事業を預かる株式会社の社長も、労働組合の幹部も、家庭の父も母も教育者も、みな、身辺にあるものと身辺にある人々とを、物心両面、ほんとうに大切な預かりものとして扱うことになったら、無所有の世界こそまことに幸福な道義の世界に変転してゆくのではなかろうか。

家康は、それを最後には尤も(もっと)きびしく実践(しっせん)してみせようとしたと私は思っている。したがって、やがて彼の神霊の鎮座(ちんざ)している日光の地は、トインビー博士の指摘のように、平和の聖地として世界中から見直される日か来るのではなかろうか。

何れ(いず)にせよ、私は足かけ十八年ていったんこの小説の筆を擱く(おく)。擱くにあたってこの長い小説をずっと連載してくれた北海道新聞、中日新聞、神戸新聞のご好意に、更にこれを未完のうちから次々に出版してくれた講談社に、心から感謝の意を表したい。いや、それ等のこ好意も、実はこの小説の熱心な愛読者諸氏のご支援か背後にあってのこと、私は決してそれを忘れることはあるまい。

ほんとうに長い間のご愛読ありがとうございました。

昭和四十二年三月二十九日　空中観音小堂において

山岡荘八

徳川家康 26
山岡荘八
定価480円

や 1 26

豊臣家滅亡の後、家康は徳川幕府永続のための方策を着々と実行に移し、鷹狩りに名を借りて奥州の梟雄伊達政宗に無言の威圧を加え、心からの臣従を誓わせる。が、元和二年正月、病を得た家康は、四月十七日駿府城内で波瀾にみちた生涯を終えた。時代を越え万人の胸に深い感銘を与える壮大なロマンの完結編。

ISBN4-06-131226-X C0193 ¥480E (2)